
クロスオーバー学園

白銀の戦士

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クロスオーバー学園

【Nコード】

N8202U

【作者名】

白銀の戦士

【あらすじ】

ここは私立クロスオーバー学園。様々な作品の個性豊かなキャラ達が通う学園だ。個性豊かなキャラ達が織り成す学園物語が今始まる！！ただ今アンケートをしています詳しくは、十九話の後書きで！

第一話 転校生登場！（前書き）

注意！！

まず最初に作者は小説初心者で駄文です
またこの作品はクロスオーバーモノです

第一話 転校生登場！

ここは私立クロスオーバー学園。個性豊かなキャラ達が通う学園だ。

その学園の高等部1年Z組の窓際の席ので後ろから2番目の席で一人の男子生徒が頬杖をつきながら窓の外を見ていた。

肩までの黒髪で鋭い眼。右目には眼帯をしている男子生徒。

彼の名は伊達政宗。クロスオーバー学園高等部の生徒だ。

「よっおはよう政宗」

突然声をかけられ、政宗は声の主の方へ首を動かした。

「ユーリか。おはよう」

政宗の目の前には、腰まで届く黒い長髪で、紫の目の男子生徒、ユーリがいた。

「今日の教室何かいつもより騒がしいな」

「確かに」

つと政宗は呟く。確かに、いつも騒がしい教室が今日は一段と騒がしい。

「おっ。竜の旦那とローウエルの旦那。知らないの？」

突然二人の会話に乱入する第三者の声。

その声の主は、オレンジ色の髪で、黒いヘアバンドを頭につけ、顔には緑色のペイントをしてある男子生徒だった。

「テメエか猿飛」

「よっ。おはようさん」

二人に軽く挨拶をする男子生徒の名は猿飛佐助。政宗とユーリと同じZ組の生徒だ。

「何か情報があるのか？」

ユーリは尋ねる。佐助は学園では凄腕の情報屋なのだ

「何でもさ、このクラスに転校生が二人も来るらしいんだと」

「転校生ね。どんな奴だ？」

つと政宗は聞く

「いや。そこまでは俺様でも分からないね。分かるのはそいつらが寮暮らしという事だけ。」

そう言つて、佐助は立ち去つていった。そして佐助とすれ違つように一人の男子生徒と一人の女子生徒が政宗達に近づく。

「おはようでござる！政宗殿！ユーリ殿！」

「ユーリ。政宗。おはようございます」

男子生徒の方の容姿は、茶色の髪で、頭には赤い鉢巻が巻かれており、首には六文銭が掛けられている。

一方女子生徒の方は、桃色の髪で緑の瞳。どこか気品がある女子生徒だ。

男子生徒の名は真田幸村。政宗の中学時代からのライバルで佐助の幼馴染だ。

女子生徒の名はエステリーゼ。皆からはエステルと言われている。

「よう。真田幸村。エステル」

「おはようさん。二人とも」

「政宗殿。知っているでござるか？このクラスに転校生が来ると」

「ああ。さつき猿飛が言つてたぜ」

「転校生つて確か寮に住むと言つていましたが、ユーリ達は知らないんですか？」

ユーリ達3人は寮暮らしなのだ。

「そついや昨日空き部屋に段ボール積んであつたな」

ユーリが呟く

「まっ。昨日はあんな事があつたしな」

「そつで・・・ござるな」

政宗と幸村は少し暗くなった。

「昨日何が会つたんです？」

「実は・・・」

政宗が説明する。

政宗達が暮らす寮で、昨日ある事件が起こつたのだ。寮に住む生徒

の約9割が食あたりで倒れたのだ。

原因は、寮にある食堂の朝食が原因なのだ。

その食堂で普段料理を作っている人達が風邪を引き、料理は女子生徒数人が作った。

しかしそれが大きなミスとなったのだ。その女子生徒達が作った料理で生徒達は倒れたのだ。

幸い全部食べていなかったため一日休むだけで済んだ。何とか無事だった生徒もいたが、その日学園の理科の教師の実験動物が脱走し、無事だった生徒はそれにかり出されたのだ。

その騒動は日が暮れるまで続いた。

「佐助はその時倒れていたので、その転校生の情報は無いのででざる。」

「そうだったんですか。」

「まっ転校生の方も、今日は朝早く学校に行ったから、俺達はそいつらと会ってねえんだ」

そう政宗が言った直後

キンコンカンコン

ガラッ

「うるせえなテメェら。朝のホームルーム始めんぞ。」

気だるげな声と共に入って来たのは、銀色の天然パーマで死んだ魚のような目。一見教師とは思えないような容姿だが、彼がこの1 - Zの担任坂田銀時だ。

あれほど騒いでいた教室もすぐに静まった。

「ホームルーム始める前に言っておく事がある。知ってる奴もいると思うがこのクラスに転校生が二人も来ている。さっさと入って来い」

ガラッ

教室に二人の男子生徒が入っていた。

一人は、赤い短髪で緑色の目の男子生徒で

もう一人は、前の一人と同じ赤い髪だが、腰まで届く長髪で緑の目

は鋭い。

「とりあえず、軽い自己紹介をしろ」

「ルーク・フォン・ファブレといいます。よろしく」

「アッシュ・フォン・ファブレだ」

「まっ、名前で気づいてると思うが、この二人は双子でアッシュが兄で、ルークが弟だ」

双子かそういやあいつらも・・・、っと政宗は思う。

「じゃっ、ルークは窓際の空いてる席、アッシュは左から3列目の一番後ろの席だ」

ルークの席は政宗の隣の席だった。ルークはすぐに指定された席に向かう

「よろしくな」

「ああ」

ホームルームが終わり、ルークの席には数人の生徒が、集まってくる。ちなみに次の授業は1 - Zで行うため、次の授業が始めるまで話せるのだ。

「よろしくな。ルーク！」

そうルークに声をかけたのは、麦わら帽子を被り、顔に傷がついた男子生徒だ。

「ああ。よろしく。・・・えっと」

「俺は、モンキー・D・ルフィ！んでこっちが」

「ロイド・アーヴィングだ！よろしく！」

「俺は瀬田総司。よろしく」

次に声をかけたのは、茶髪の男子生徒ロイドと、銀髪の男子生徒瀬田総司（ペルソナ4の主人公）だ。

「えっと。僕は・・・」

「こいつは、ダ眼鏡ネ」

「オイイイ！誰がダ眼鏡だ！」

黒髪で眼鏡をかけた男子生徒、ダ眼鏡は、自分の言葉を遮ったピン

ク色の髪の毛の女子生徒につっこむ。

「だから誰がダ眼鏡だ！えっと僕は志村新八って言います」

「私は神楽アル。」

「ああ。よろしくな」

一通り、クラスメイトとの自己紹介が終わった。

「そっぴやさ。ルークって部活何にするか決まってるのか？」

ふいにロイドが、ルークに尋ねる。

「ああ。サッカー部に入ろうかなって思ってる」

「サッカー部って政宗も入ってますね」

とエステルが政宗に言う

「ああそうだな」

「じゃあよ。政宗が放課後学園を案内したらどうだ？」

「はあ！？」

突然のルフィの提案に驚く政宗。

「だってよ同じ部活に入るんだし、ルークにもこの学園の事教えなきゃならねえし」

「まあ。確かにそうだが」

「いや、いいよ。学園の案内は幼馴染に頼んであるから」

「幼馴染？誰だ？」

ロイドが尋ねる。

「ガイって言う。2年の先輩だ」

「あああの人か」

新八が呟く。

「ガイを知ってるのか？」

「前に佐助君から聞いた事があるんだ。女性が苦手な先輩だって」

「私は、あった事があるアル。近づいただけで逃げられたネ」

「あいつそういう所も変わってないのか。まああいつ自身は女性は好きだから・・・んっ？」

ふとルークは廊下に目を向ける。そこには茶髪の長髪で物静かな女子生徒が歩いていた。

「悪い。ちょっと」

ルークはすぐに席を立ち。廊下へと向かった。

「どうしたんでござるか？ルーク殿」

幸村は首をかしげる。

「知るか」

そう政宗は答える。

その後授業が全て終わり、放課後になりルークとアッシュはガイに学園を案内された。

「まっこれで学園は一通り回ったな」

「ありがとうな。ガイ」

ルークは、ガイに礼を言う。普通なら当たり前のことだが、ガイは驚いた。

「本当に、変わったんだなお前。前なら礼なんて言わないで、さっさと寮に行くのにな」

「お前俺をどんな目で見てたんだ？」

「フン。お前の日頃の行いが悪い」

そうアッシュは答える。しかしアッシュはどこか苛立っているようだ。

「どうしたんだ？アッシュ」

「うるせえ！あのうるせえ奴が、俺にしつこく話しかけて来たんだ」

「ああ。慶次か。でもあいつ悪い奴じゃないだろ？明るくていい奴だ。大体しつこく話しかけたのは、アッシュがちゃんと返事をしなかったからだろ」

慶次というのは、アッシュの隣の席の男子生徒だ。容姿は茶色の長髪を高く括り髪を留めているところに羽をつけた男だ。肩には相棒の小猿の夢吉が座っている。慶次のことは佐助から教えられたのだ。「お前は相変わらずだな。じゃっさっさと寮に戻るか。もう準備終

わってるかな」

「準備？」

「あつ、いや何でもない。じゃっさっさど行くぞ」

「さつき。ガイから連絡が入ったぞ。ルーク達こっちに来ているらしい」

ここはクロスオーバー学園の学生寮。ロイドが携帯を片手に皆に伝えた。

「皆、準備はもう出来てる？」

新八は皆に尋ねる

「HA！いつでもOKだ」

「せっかくアッシュに私の料理を食べて欲しかったのに」

金髪の気品のある女子生徒、ナタリアがため息をつく。ちなみにアッシュとは恋人同士だ。

「いや昨日のこと思い出せよ」

ユーリがナタリアにつっこむ。

「おっ来たぞ。」

窓から外を見張っていたルフィが皆に伝える。

「よし。皆行くぞ」

ロイドが皆に言う。

「さっ。どうぞ中へ」

「どうしたんだガイ？」

「まっいいからさ。さっさとドアを開けろよ」

ガイにすすめられて、ルークは学生寮のドアを開ける」
パンパン

中から突然クラッカーの音が響き渡る。

「うわっ！何だ」

ルークは戸惑っている。

「ルーク！アッシュ！ようこそクロスオーバー学園へ！」

大勢の声が学生寮に響き渡った。

「えっ。えっ？」

ルークはいまだ戸惑っており、アッシュも茫然としている。

「実はさ昨日の夜にお前達の歓迎会したかったんだけど。色々と事情があつて、昨日は出来なかったんだ。だから今日お前達が帰ったときやろうつてことにしたんだ」

「そっ、そうなのか？」

「ほらほら。二人ともそこで突っ立ってないで、さっさとこっちに来いよ」

と慶次に言われ、二人は中に入る

「驚きました？」

「「ナタリア！」」

ナタリアに声をかけられ、ルークとアッシュは同時に言う。

「皆さん。二人のこと歓迎しておりますわよ」

「そ、そうか？何だか嬉しいな」

ルークは照れくさそうに言う。

「よし！主役の二人が来たことだし、始めんぞー！」

オオオ！ガイの言葉に、その場所にいるほとんどの者が答える。

「たくよお。うるせえぞお前ら」

「いや先生こは、オオオて言いましようよ」

マイペースな銀時の言葉に、新八がつっこむ。

「先生も来てたんですか？」

ルークが銀時に尋ねる

「まあな。」

そっけなく銀時が答える。

「アッシュ！もしよろしかったら、私の料理食べて下さいませ」

ナタリアの言葉にルークは凍りついた、ナタリアは昨日の食あたり事件で朝食を作った女子生徒の一人なのだ。

「え、えっと」

アッシュも返答に困る。

「そうですね。私の料理など」

「い、いや。食べるぞお前の作った料理」

ナタリアが暗い顔を見ると、アツシユは慌てて答える。

「そうですか！さっこちらに来てください」

「あ、ああ」

ナタリアに案内されるアツシユを見てルークは一言

「アツシユ。頑張れ」

それしか言えなかった。

「まあそれしかいえないよな」

突然聞こえた声のする方を見ると、少し長い金髪を下に括った、赤い目の男子生徒がルークの後ろにいた。

「あつすまない。驚かせたか」

「い、いや。お前は、確か同じクラスにいた」

「ああ。ベルゼブモンだ。ベルゼブでいい。っであそこにいるのが」
ベルゼブモンの視線の先には、金髪で青いターバンを巻いた、赤い目の男子生徒が壁に背中をついて立っていた。どこかベルゼブモンに似ている。

「……バアルモン」

「あ、よろしく」

「すまないな。バアルは無口で、人と話すのが苦手なんだ。ちなみに俺の双子の弟だ」

政宗が思ったもう一組の双子は二人のことなのだ。

「でも、モンってことは」

「ああ俺達はデジモンだ」

この話ではデジモン達は擬人化が出来て、普段の学園生活では擬人化をしているのだ。

「おい！ルーク早くこっちに来いよ！」

そう呼ばれルークは皆のもとに行く。

その後は皆と話したりなど、楽しい時間を送った。

「おゝいお前ら。もう時間もおせえし、そろそろお開きにするか？」
つと銀時が言う。確かにもう遅い時刻だ。自宅から通う生徒や、女子寮に暮らす生徒は帰り支度をしている。この寮に暮らす生徒は後片付けをしている。

「あの私達も手伝いましょうか？」

とエステルが手伝おうとしたが

「いやここは、この寮の奴がやらねえとな」
つとユーリに言われる。

「そうですか。ではおやすみなさい」

「おやすみ」

そういつて、エステルが帰っていった。

「あの、アッシュ顔色悪いですわよ？やっぱり食べ過ぎて」

「い、いや大丈夫だ」

ナタリアの料理を食べさせられたアッシュは具合が悪いためナタリアが帰った後寮生がすぐに部屋へ連れて行った。

「気の毒だな」

と政宗は呟くが、すぐにルークがいない事に気がついた。

「あいつどこ言ったんだ？」

ふと窓の外を見ていると、ルークが誰かと話しているのを見た、ルークがホームルーム前に見つけた、茶髪の長髪の女子生徒だ。

「あいつは、同じクラスの」

確か名前は、ティア・グランツ。ティアは普段は一人でいるため政宗は名前ぐらいしか知らない。

政宗はドアを開け、ルーク達の元へと行く。

「私はあなたの事を見ている。でもあなたがまた同じ失敗をしたら私は見限る可能性がある事も忘れないで」

「ああ、分かった」

どうやらそこで話は終わったのかティアはすぐに帰路へとついた。

「あっ、政宗」

ようやく政宗の存在に気づいたルーク

「あいつと知り合いなのか？」

「うん。中学の時にちよつとな。話聞いてたか？」

「いや全く聞いてねえよ」

聞いたのは最後の部分だけだった。

「そうか」

つとルークは安堵している。聞いてはいけない話をしたのか

「さっさと寮に戻れよ。後片付けは俺達がするから」

「あ、いや俺もするからさ。あつその前に」

とルークは右腕を差し出す。

「朝も言っただけど、これからよろしくな」

そう言われ政宗は少し間を置いて

「ああ。よろしくな」

そう言つて二人は握手をした。

第一話 転校生登場！（後書き）

作者「どうも！作者の白銀の戦士です！」

銀時「どうも！銀さんこと坂田銀時だ」

作者「いよいよ始まったねクロスオーバー学園！」

銀時「つかネーミングセンス悪いなそのまんまだろ」

作者「そ、そこは自覚しているよ。それ以外あんまり浮かばなかったんだ」

銀時「まっいいけど。ちなみにこの話の主人公はやっぱ政宗とルークか？」

作者「基本的なところはね。でも話によっては別のキャラが主人公になることもあるんだ」

銀時「てことは俺が主役の話もあるのか？」

作者「・・・考えとく」

銀時「オイ！何だよその間は！」

作者「こんな作者が書いた話ですが、感想、質問の方もよろしくお願ひします！！」

銀時「無視すんな！！」

第二話 対決！Z組対W組！

ルークとアッシュが来て一週間が経った。今はもう慣れている二人だが、最初はかなり戸惑っていた。まっ無理もねえと政宗は思う。俺も入学したときはかなり驚いていたしな。そう思っていたら

「待てゴラッ！！あたしのDVDにヒビを入れて！！」

「いやだから事故なんだって！！」

「問答無用！！」

ドゴッ！！

「オゴォ！！」

今キレて男子生徒を蹴っている緑のジャージを着た女子生徒は里中千枝。少々男勝りだ。そしてその蹴られているイヤホンを首にかけた男子生徒は花村陽介。かなり運が悪いのだ。

そんな二人を見守っているのは瀬田総司だ。

『いいのか。放っておいて』

突然総司から聞こえた声だがそれは総司の声ではない。声が聞こえてから少し経ち、総司の背後に、黒い服で、白いマフラーのような物を巻き、長い刀を持っている。名はイザナギ。総司のペルソナの一体だ。

「まあ。今は放っておこう」

見慣れているからか、落ち着いている。そっいや俺も最初の頃はイザナギ達を見たときは、かなり驚いたな。

そう思っていると

「七花くん。おはよう」

「ああおは・・・」

「七花！そんなやつに構うな！」

廊下側の席で3人の生徒が揉めている。ボサボサの髪でかなりの長身の男子生徒は、鑢七花。虚刀流という剣術の後継者だ。その七花に 怒鳴っている、白い髪的女子生徒はとがめ。七花とは恋人同

士だ。

そしてその七花に話しかけた。金髪で青い目の女子生徒は否定姫。彼女はこのクラスではなく、1-Wだ。そしてとがめとは犬猿の仲。「いやただ挨拶しただけだろとがめ。」

「こいつに挨拶など必要ないわ!」

「ひよとしてあんた七花君をとられるかもって恐れてる?」

「なに!? ムムムツ」

とがめは顔をさらにしかめ

「ちえりお!」

否定姫に向かつて放たれたパンチだが、パンチは避けられ

「はうつ!」

近くを通っていた鉢巻きをした女子生徒、皿場工舎に当たる。彼女はクラス1運が悪いのだ。ちなみに「ちえりお」という言葉は「チエスト」を間違えたらしい。その事を入学したばかりの頃政宗は指摘したが、何故か殴られたという苦い思い出がある。

「相変わらずこっちゃん運が悪いね。まさっち」

「ああ。てかその呼び方やめろって言っただろ。」

政宗に話しかけた女子生徒はノーマ・ビュアレTTY。人に妙なあだ名をつけるのが特徴だ。ルークは「ルール」アッシュは「シュツくん」ユーリは「ユツち」幸村は「ゆきっち」などなど。

「えー可愛いじゃん」

「COOLじゃねえ」

そう話していると

ドゴツ!! ドガツ!!

突然廊下から物凄い音が聞こえる。

「あいつらか」

政宗がそう呟くと

「ユースタス屋お前腕落ちたか?」

「何だと!? 黙れ!!」

廊下で攻撃しながらある男子生徒を追っているのは、赤い髪で、ゴ

ーグルを頭につけた男子生徒は否定姬と同じ1ーWのユースタス・キッド。そのキッドに挑発しながらキッドの攻撃を避けているのは、黒い短髪で目にはくまが出来ている男子生徒は同じく1ーWのトラファルガー・ロー。二人はよくこういう風に喧嘩をする

「相変わらずあの二人仲いいな」

「いやどこがだ!？」

そうのんきな事を言うルフィにつっこむルーク。ルフィとキッドとローは仲がいいのだ。

ああいう風に喧嘩してても仲がいいのだ。まあ喧嘩するほど仲がいいと言っし。

一方Z組の教室内でも

「死ねー!!!土方!!!」

「デメエが死ね!!!総悟!!!」

そう言って刀を抜いているのは、黒髪で鋭い目の風紀委員、土方十四朗と茶髪で甘いルックスの裏にはDSな本性がある風紀委員沖田総悟だ。二人はキッド達のように仲が良いから喧嘩すると言っようなものではなく、マジで殺すといったようなもんだ。

そう思っていると

「ギャー!!!」

そう言って現在キッドとローが喧嘩している廊下から、丸々とした体型で頭にはトナカイの角がついてピンク色でバツテン印がついた帽子を頭に被った何者かが教室に入ってというか逃げて来た。

彼は、トニートニー・チョッパー。もちろんこのクラスの生徒だ。

「待ってくれないかね。ちょっと君の体調べさせて」

「何やってんだデメエ!!!」

ドゴツ チョッパーを追った人物を思いっきり殴る男子生徒。オレンジ色の髪で黒い鋭い目の男子生徒ドルモンだ。

「痛いナドルモン。僕はただチョッパーの体をかいば・・・調べたいだけなんだ」

「解剖って言いかけたよな今!」

チョッパーを追っていた人物は、茶髪で黄色の眼で頭にローブを被っている男子生徒ワイズモンだ。

名前で分かる通りドルルモンとワイズモンはデジモンだ。

千枝が花村をフルボッコしたり、とがめと否定姫が女の戦いをしたり、土方と沖田がマジで殺しあったり、ワイズモンがチョッパーを解剖しようとして、ドルルモンが止めようとしたりとカオスな雰囲気な教室だが

「うるせえぞデメエら。俺今日二日酔いで頭ガンガンするんだけど」担任の銀時が入ってきて、収束し、W組の担任のクラトスに呼ばれ、キッド達はW組に帰っていった。

「特に伝えることはねえが、今日の体育は体育館でW組と合同で行う。連絡はそれぐらいだ」

その後、6時間目の体育の授業となった。

「では、これよりZ組対W組のドッチボール対決を行う!!」

そう言うのは、かなりの巨漢の、なんというか漢の中の漢という感じの体育教師武田信玄先生だ。

「まず外野を一人決めてもらおう」

というわけで外野を決める事に

「七花。お前が外野に行ってもらえるか？」

そうとがめは七花に言った。

「どういう意味だよ。とがめ俺がいなくて」

「大丈夫だ。策はある。それに・・・お前が参加するとボールが何個犠牲になることか」

まあ確かに、と政宗は思う。以前バスケットボールをした時、ボールがとがめに当たりそうになった時七花がボールを斬ったのだ。今回はドッチボール運動神経が悪いとがめが狙われる確率が高いため、その分とがめを守るために何個ボールが斬られるか。そういう事で外野は七花になる事に

一方W組の外野はローの幼馴染のシャチが引き受ける事になった。

「にしても残念ですね」

「何がだ？」

「Z組内で分かれてやれば、土方さんを殺れるチャンスがあったのに」

「総悟！！」

また喧嘩が始まった二人

「ちょっと！二人とももうすぐで始まるよ」

新八の言葉で二人は睨み合いながら、コートに入って行った。

その様子を見ていたルークだが、突然背後から視線を感じる。しかもこれは・・・殺気？

振り向くとW組のコートから、一人の男子生徒が睨みつけている。

銀色の髪で鋭い眼背中からは何か黒いオーラが出ているような。

「あの、佐助。あの人誰だ」

近くにいた佐助に話を聞くルーク。

「ああ。生徒会の石田三成だな。安心しろ狙いはルークじゃない」

「えっ？」

「あんたの後ろにいる人だ」

ルークが振り向くと、茶髪で親しみやすい笑顔をしている男子生徒、徳川家康がロイドと話している

「石田の旦那。徳川の旦那のこと嫌ってるからね」

そうか、とルークは最初納得したが、すぐになぜ嫌われているのか疑問に思った。家康は誰にでも親しくするからだ。一体どこが嫌いなのか。そう思っていると

「では、これよりドッチボール対決を始める！！」

武田先生の言葉でルークはすぐに体制を整える。ボールはじゃんけんの結果W組が持つことに、

ピー 笛の音が体育館に響く。

「ハアアア！！」

バシユ 最初は三成が投げた。狙いはもちろん家康だ。

「うおっ！！」

ギリギリのところでは避けた。

「うわっ！！」

そして家康の後ろにいた新八も何とか避けれたが、風圧で新八の眼鏡は外れレンズが割れた。

「し、新八！！」

「お前！！いきなりやられたアルか！！」

「俺が避けたばかりに」

「家康は何も悪くねえよ」

「オメエラがタチが悪いワアア！！」

新八は慶次と神楽と家康を床に叩きつける

「アンタら僕のこと眼鏡だと思ってたんすか！！？ってか家康さんまで、何やってんだ！」

「え、ワシはただ、新八の眼鏡割ってしまったて申し訳ないと」

「お前はただのフックで本体はこつちじゃないアルか？」

そういつて新八の眼鏡（本体）を持つ神楽

「違うわ！！ってか何だ（本体）って！！」

「おい。今試合中だし」

「あ、そ、そうだね。そーいやボールは」

そういつて新八とルークは外野の方に目をやったが、そこには壁にボールが突き刺さっていた。

「・・・犠牲が眼鏡だけでよかったな」

「そうですね」

本当に殺す気だったのか？というより何をしたんだ家康は、そう思うルークだった。

一方外野では、シャチが壁からボールを抜き（狙うなら、運動神経の悪い奴。もちろん！）

そう思い、とがめに向かつてボールを投げる。

するととがめはにやりと笑い。ある生徒を掴みそして自分の前に差し出した

バツ

「え、はう!!」

運悪く、身代わりとなつたのは工舎だ。ボールは顔面に当たった
「皿場!!」

思わず叫ぶルーク

「先生。今のはアウトに入りますか？」

「いや、顔面セーフじゃ」

「いや先生それ以前に身代わりつてありが!!」

武田先生に抗議をするシャチ。ところが

「おい」

「えっ？」

シャチが振り向くとそこには、七花が目の前にいた。

「『鏡花水月』!!」

ドゴツ

「グフオ!!」

ドサツ 倒れたシャチを七花は見下げて

「俺の女に手を出すな」

「シャチイイ!!」

向かいのコートで同じくローの幼馴染のペンギンが叫ぶ。

「虚刀屋に攻撃されなくなければ、とがめ屋にボールを当てるなど
いう事か」

「いつの間に」

「それ以前に、あいつあの女に当ててないしな」

シャチに同情するルークと政宗。ボールはドS王子沖田と持っている。
る。

「じゃ、俺は、こいつで!!」

沖田がボールを投げた先には、否定姫がいた。

「.....」

否定姫はとがめと同じく身代わりをした。それは
「のこっ!!」

政宗の部下というか舎弟の一人孫兵衛だった

「孫兵衛！！！」

叫ぶのは、同じく政宗の舎弟の、Z組の良直と文一朗W組の弥三郎だ。政宗も困惑しているようだ。

「おいテメエ！！なに孫兵衛を」

「こいつ。これぐらいしか役に立ちそうにないから」

「何だと」

弥三郎が詰め寄ろうとした時。

ドン 弥三郎の足元に弾痕が出来ている。真上つまり天井から打ち込まれている。しばらく硬直する弥三郎。

「あいつか」

政宗が思い浮かべるのは、否定姫の付き人のあの男左右田右衛門左衛門だ。

そしてボールは

「イエヤスウウウ！！」

バシユ また三成が投げ、また家康が避け。

「ノゴオ！！」

風紀委員の山崎に当たった。

「山崎アウト！！」

「そついや。何で三成は家康のこと嫌いなんだ？」

ルークは佐助に聞く

「ああ何でも。入学した時。何だか誰も寄せ付けないような雰囲気だったのを徳川の旦那が気づいて、接したんだ。でも石田の旦那は相手にしなかったんだが、徳川の旦那は絆とか友になろうとか言って接したんすよ。石田の旦那、気に食わなくなって、一度決闘してんで、両者共引き分けになって。さらに徳川の旦那の事嫌いになったんだ」

「えっどういう事だ？」

「もしかして、勝負が引き分けで納得がいけないというよりも、本当は自分に接してくれている徳川の旦那の事が嬉しくて照れ隠しと

いうつわさも」

「何か言ったか貴様!!」

三成は佐助を睨む。

「いえ何でも」

その後

「里中アウト!!」

「えっ何で!」

「お前投げられたボールキャッチしないで、そのまま蹴り返すなよ!」

千枝がボールを蹴り返してアウトになったり

「なかなかやるな。幸村!!」

「貴殿こそ。メルヴァモン殿!!」

ボールの投げあい、W組のメルヴァモンと幸村が意気投合したり

「死ね!土方」

どさくさに紛れて沖田が土方を殺そうとしたり

「いったあ」

「否定姫アウト!!」

「やべえ!!すぐに逃げ」

「不生不殺」

ドゴオ あやまって否定姫に当ててしまい、攻撃された花村や

「あ、」

ビシュッ

「スゴッ!!」

三成の超剛速球をこけてよけたコレットなどがあり
数十分後

コートにはZ組には政宗とルーク。W組には三成と三成の数少ない
とも大谷吉継だけだった。

ちなみに今数人の姿が見えないが、それはとがめと否定姫を当てた
または当てようとした者や三成の超剛速球の巻き添えをくらった者

だった。

それにしても、とルークは思う。三成は最初家康ばかり狙っていた。しかしキッドが家康をアウトにした後は、なぜか政宗ばかりを狙っていた。偶然かと思うが、政宗に対する三成の殺気も家康の対するものと同じいや、政宗に対するものの方が上なきがする。

「私は・・・お前を許さない。伊達政宗！！」

政宗に向かって叫ぶ三成

「なあ。何でお前は家康だけじゃなく政宗まで憎んでるんだ？」
そうルークは質問した。

「・・・私は、家康が私に接することはどうしてもよかった。少し気に食わなかったが、その程度だ」

三成はぼつりぼつりと言う

「だが、家康は、私が秀吉様のためにいることをそれは間違っていると否定した！！」

秀吉とは誰かと思ったルークだが、すぐにそういえば生徒会長の名前だったなと思い出した。

「私は、私のやり方を否定されたと思った・・・だがそれ以上に憎いの！！」

三成は政宗を睨みつける。

「伊達政宗！！お前は、秀吉様の考えそのものを真つ向から否定した！！私はそれを許さぬ！！」

えつ、とルークは政宗の方を見る。

「『強き者でなければいけない』『弱い奴はいらねえ』それが生徒会長さんの考えだ」

と政宗は言う。その目はいつもより鋭い。

「俺は、そんなの絶対に認めねえ。例えどんな奴の考えでもだ」

「黙れえええ！！」

三成はボールを投げる。それはさっきまでのより威力はありそうだ。
「筆頭！！！！」

叫ぶ良直達。しかし

「く、おりやああー!!」

ルークが政宗の前に出てボールを受け止めるが、ボールは弾く。

「ルークー!!」

叫ぶティア。政宗はすぐにボールをキャッチしようとするが、間に合わずボールは床に落ちる。

「ルークアウトー!!」

「テメエー!!何無茶な真似をー!!」

「へへゴメン。でもボールは俺達のコートにあるぜ。・・・行つてくれ」

「・・・THANKS」

政宗はそう、眩きボールを持つそして

「YEARHAー!!」

ボールを投げる。そのボールには青い稲妻が纏つてあるように見える。

ドゴッ

「グッ」

「刑部ー!!」

「大谷アウトー!!」

「おのれええええー!!伊達政宗ー!!」

三成はさらに殺気を出しそして

「ハアアアアアアー!!」

ボールを投げる。しかも黒い何かが纏つてある。しかしボールはガシヤアアアー!! 政宗よりもさらに上の方にいきガラスを割った。

「HA!どこ投げてやる!!」

しかしボールの勢いは止まらず、体育館の隣の校舎に当たる。

ドゴオオオオ

「確かあそこつて職員室だったようなで、あの近くつてあの先生の席」

佐助は呟く。その直後

ドン ガラスの割れた窓から一人の男が現れた。青い髪で褐色の肌

手には斧を持っている。

それは、ナマハゲことバルバトス先生だ。

「ぶるわああああ！！！！」

「ちよっそれ違う人でしょおおお！！」

新八のつつこみの直後

「ぎゃあああああ！！」

キーン コーンカーンコーン

生徒達の叫びとチャイムが体育館に響いた

第二話 対決！Z組対W組！（後書き）

作者「どうも！作者の白銀の戦士です！」

銀時「銀さんです。ってその前に」

作者「どうしたん？」

銀時「つつこみいれたいんだが、何でペルソナが普通に出てきて会話をしてんだ！」

作者「まあこの話では、ペルソナ達も普通に話したりします。今回はイザナギだけだったけど、他のペルソナも出します！」

銀時「どんだけ出すんだペルソナ！」

作者「それはまだ決まってるじゃないけど。あ、あと今回出てきたメルヴァモンの擬人化姿だけど、見た目は普通のメルヴァモンだけど腕が蛇のところは普通の腕です。さて次回は何と政宗達の身に何かが起こります」

銀時「何かって何だ？」

作者「それは次回をお楽しみに。あつ銀さんの身にも何かが起こります」

銀時「おいお前なんかさっさとやばい事言ってたか今！」

第三話 チビ&アニマルパニック！

それはある日突然起きた。ここはクロスオーバー学園学生寮。今日は休みの日だ。

「くうー。よく寝たぜ・・・てっ」

そしてここは、政宗の部屋だ。政宗は起きてすぐある異変に気づく。「何か周りがデケエような気がする。」

そう。部屋の机も椅子も時計も、部屋のもの全てが大きい。それがどういうことかすぐに 理解出来ないのは寝起きで頭が働いていないからだ。

「気のせいかな？・・・ん？」

頭をかこうとしたが、頭の上、いや頭に何か生えている。何かそう、動物の・・・

「いやいや嘘だろ」

政宗は頭の中にあつたある推測を消そうとする。

そこまで考えたのがよかったのか、起きてすぐ疑問に思ったあのことの一つ答えが出る周りがデカインじゃない俺が

「いやいや。何考えているんだ俺。COOLになれ」

そう、自分に言い聞かせるふと政宗は近くにあつた窓を見る。そこに写つてあるのは・・・

「NOー！！」

手のひらに乗るくらい大きさで、頭には黒い猫の耳が生えてある自分だった。ドンドン

「政宗様！どうかなされましたか！」

「筆頭！どうしたんですか！」

政宗の部屋のドアを叩くのは、政宗が最も信頼する人物片倉小十郎と政宗の舎弟の四人だ。

「政宗様！先程大声を出されましたが」

一応声を抑えていたが隣の部屋に住む小十郎には聞こえていた。

「あ、いや何でもねえぜ！」

「それでしたら中に入れてください！」

「えっ！それは」

今こんな状態見られたら

「片倉様！合鍵借りて来ました！」

「何やってんだ文一朗！」「政宗様！今開けますよ！」

「ちよっ、STOP！！」

ガチャッ

「政宗様！」

「筆頭！」

政宗の部屋に突入する小十朗達。ちなみに小十朗の容姿は黒髪のお
イルバックで、左の頬には刀傷がついて、何かやのつく職業の人
じゃねというくらいの強面だ。

「なっ・・・」

5人は、チビ&猫耳になった政宗を見た。

「あ、こ、これは」

「政宗様あああ！！！」

一方 ここはルークの部屋「う、うう」

ルークも起きたばかりだ。

「ご主人様。おはようございますですの」

ルークに話しかけるのは、ルークのペットのチーグルのミュウだ。

「おはよ・・・ええ！！！」

ルークが驚くのは無理もない。肩に乗るくらいの大きさのミュウが
自分よりも少し大きいなんて。

「えっ・・・嘘だろ」

頭が少し混乱したが、周りもいつもより大きく感じるいや、違う。

「俺が・・・小さく？・・・ええええええ！！！」

「ミュッ？みゅうううう！！！」

ミウも少し寝ぼけていたが、ルークの声で目を覚ましたようだ。
ドンドン ガチャツ

「どうした！ルーク！ってうおっ！？」

入って来たのはガイだった。

「オイ！何で鍵持ってたんだよ！？」

「つまり。政宗様もどうしてこうなったか分からない訳ですか。」

「ああそうだ」

ここは政宗の部屋。少し混乱したが少ししたら落ち着いた。

政宗は今小十郎の手のひらに乗っている。良直達は小十郎を羨ましそうに見ている

「お前もか」

突然開きっぱなしのドアから声が聞こえた。そこには黒い鳥がいた。

「鳥が喋った！？」

「悪いが鳥に知り合いはいねえよ」

良直達は驚くが政宗は冷静に言うもその愛らしい姿で、少し生意気な感じしかない

「いや俺だって」

そう鳥は言う。その声は誰かに似ている。・・・そう

「ユーリか？」

「そうだ」

「ユーリの兄さん！？何でそんな姿に」

「いや朝起きたら、こんな事になってたんだ」

「政宗様だけでなくユーリまでもか」

小十郎がそう呟いた直後

「うわっ政宗！？どうしたんだその格好！」

声のする方を見ると、手のひらに乗るくらいの大きさになったルークがガイの肩に乗っている。

「それお前が言えたことか」

「お前もかよ」

「うわっ！鳥が喋った！？」

それから数分後

「まさか俺達以外でもいたとはな」

そう政宗は呟く。あの後政宗達のほかにも、ルフィとバアルモンの二人が同じ現象にあったのだ。

ルフィは赤色の猫になり、バアルモンはチビ&背中に羽がついている。

話をきりだしたのは政宗からだ。

「本当にどうなっているんだこれ？」

「ただでさえアッシュより背が低いのに」

「これではろくに戦えないな」

「いいなユーリ鳥だから飛べて。でも猫になるのもいいな！」

「いや少しは嘆けよ」

四人が考えこんでいると

「ああ。あんたらもか」

突然の声。その正体は佐助だった

「佐助何か知ってるのか？」

「あんたらもかつて事は」

「そつ。実は」

そういつて、佐助の後ろにいた何かが姿を見せた。それは茶色の毛色の犬だ。

「政宗殿！」

「デメエもか。真田」

「幸村は犬か。まっ確かに犬っぽいけどな」

「俺様もどうしてこうなったか調べているけれど、ある情報がある」

「何だそれは？」

ルークがたずねる。

「実は昨日の夕飯前に何者かが調理場に忍び込んだらしいんだ」

「調理場？」「そつ。おそらくそこで誰かが何か仕掛けでもしたん

じゃないかと」

佐助がそうだった直後

ビュウ 突然風が吹き佐助の背後には 一人の男子生徒がいた。赤い髪で黒い帽子のようなものを被り、目は見えない。

『戻ったぞ』

男子生徒はホワイトボードに文字を書く。

「ごころうさん。どうだった？風魔」

男子生徒の名は風魔小太郎佐助と同じ情報屋だ。理由は分からないが声が出ないためこうして ホワイトボードで会話をしているのだ。『目撃者の話ではどうやら調理場に忍び込んだのはジェイド先生らしい』

「ジェイドだと？」

政宗は眉を潜める。

「誰だ？ジェイド先生って？」

「そっぴゃルークはまだ会ってないな」

ユーリが説明する。ジェイドとはガイと小十朗のクラス2-Jの担任だ。時々妙な薬を作りそれを誰かに飲ませることがある。

「今回の犯人はジェイドってことか」

「ジェイド先生は今日学校にいるらしい」

「じゃあ。行くか」

政宗の言葉にルーク達 姿を変えられたもの達は頷く

「あら？ガイ先輩どうしたんですか？」

学園に向かう途中でティアと出会った。

「あ、ああちよつと学園に用があつて」

「そうです・・・！！」

ティアはガイの肩に乗っているルークを見た。

「あつティア」

「ルークなの？」

ティアは見た目では冷静さを保っているが、心の中では
(可愛い・・・)

実は可愛いものが好きなティアである。

「どうしたティア？」

「ティア殿？」

「・・・ん？」

「よお」

次々と姿を現す姿を変えられたもの達。そしてとどめに

「ティアさんこんにちはですよ！」

ミユウもでてきて。

(はうふうう)

可愛い姿大集合で

ドサッ

「ティア！？」

幸せのあまり気絶してしまった。

「一体どうしたんだ？ティアの奴」

ルークは首を傾げる。ティアの事はガイに任せた。

ここはクロスオーバー学園の校門前。

「さあな」

「お、お前らじゃねえか」後ろから銀時の声が聞こえた

「あつ銀時先生」

政宗達が振り向くと

「「「「「！？」「「「「「」

そこには、チビ&背中に羽&猫耳の銀時がいた。

「どうしたんですか先生！！」

「いやこつちが聞きてえよ朝起きたらこうなってた」

「なあまさか先生昨日の晩餐の食堂で飯食ったか？」

ユーリが質問する

「ああ。行っただけ」

やっぱりと政宗達は思った

「それがどうかしたのか？」

「ああ実は」

ルークが説明しようとする

「おや、皆さんどうしたんですか？今日は休みの日ですよ？」

校舎側から茶色の長髪で赤い目眼鏡をかけている教師が来た。そう彼こそがジェイド先生だ

「おやあなた達は」

「ジェイドオオオオオ！！」政宗達は一斉に襲いかかった

数十秒後

「心外ですね。私が生徒達の食事に薬を入れるなんてそんな人間に見えますか？」

「そういう風に見えるんだよあんたは！！」

政宗達はジェイドにより倒された

「強っ」

「すごいでござる」

「何で俺も」

巻き込まれた銀時先生。

「だったら調理場に忍び込んだのは？」

「つまみ食いか？」

「それはお前か神楽だろ」

「忍び込んでませんよ。少しある薬を作るための材料を少し分けてもらっただけです」

「やっぱ薬かよ！ってか何の薬を作ろうとしたんだ！」

「そういえば、動物になる薬は知りませんが、小さくなる薬なら私も持ってますよ。ですが今日学校へ来てそれを見てみたら、薬の量が減ってたんです。小さくなって動物の体の一部がある方は、昨日の食事で、それぞれの薬が入った料理を二つ食べたんでしょう」

「誰かが盗み、そして入れたか」

バアルモンが呟く

「かだよ俺は三つも飯食ってねえぜ。食ったのあの寮限定のジャンボパフェだけだったし」

「おそらくそのジャンボパフェには小さくなる薬、猫になる薬、鳥になる薬が入っていたんでしょう」

「では、一体誰が薬を」

幸村がそう呟くと

ビュウ

「旦那。どうやら調理場に忍び込んだのはジェイド先生だけじゃないようだ」

「何だと？」

「一応。この事ベルゼブモンの旦那に話したらそいつのこと捜しに行ってくる」と

「兄貴が？」

「風魔にも協力させたし、後ベルゼブモンの旦那他にも協力者を呼んだらしい」

一方、ここはクロスオーバー学園理科準備室前の廊下ここに一人の教師が歩いている白い長髪で、何かヤバイ人じゃねという風なニヤケ笑いをしている。

「さてさてどうなっているでしょうか？」

その教師が呟いた直後

「ハアッ！！」

「どおりや！！」

「おりや！！」

ドコッ その教師の頭に、マイクと二つの拳が降りさげられる。

「あなたなんですね。明智先生。皆に薬を飲ませたのは」

そう言うのは、茶髪で頭にゴーグルを着けた男子生徒、中等部3-

Dの生徒工藤タイキだ

「お前か！バアルをあんなめにあわせたのは！！」

「それに政宗とルーク達もだ！！」

「皆を元に戻せ！！」

最初の声は、バアルの兄ベルゼブモン。

次の声は、茶色の長髪で髪は括つてある男子生徒、政宗達と同じクラスの生徒大門大。最後の声は赤い髪で黒い目耳にはイヤホンをつけている男子生徒、タイキと同じクラスで自称タイキの相棒の生徒シャウトモンだ。

「ありがとな風魔。見つけてくれてよ」

『別に』

窓の外に立っている風魔と会話する大。

「おやおや。酷い事をしますね」

全く反省の色がない教師、クロスオーバー学園の保険医明智光秀先生はまだにやけている。

「お前が言っな！！」

駆けつけて来た政宗達。

「さあさつさと、元に戻して貰おうか」

「おやおやもつたいない。その薬作るためにどれだけ苦労した事か」

「まあ猫になるのもいいよな」

「空気読めルフィ」

「それよりも、元に戻すための薬ありませんし」

「ハア！！？」

突然の告白に戸惑う政宗達。

「ああそれなら問題ありませんよ」

突然かけられた声。それはジェイド先生だ。

「小さくなる薬は私が持つてるので元に戻す薬を作れますし、動物になる薬は分析すれば薬を作れます」

「なんか初めてあんたが頼りに見えたよ」

「それはどういう意味ですか政宗？ですが分析にも時間がかかります。今日中なら出来ませんが」

「どのくらいかかる？」

「最低でも今日の夜までです。夜になったら寮に届けますので」
「OK。分かったぜ」

そして夜

「はい。これが薬です」

「そうですか」

そういうルークと後ろにいるルフィと幸村は何故か疲れている。

「どうしたんですか？そんなに疲れて」

「寮に帰ったらティアがいて『写真を撮らせて』って言われて、何枚も写真を撮られた」

「キッド達に見つかって、キッドは別に気にしなかったんだけど、

ローは『触らせてくれ』って言われてんで何十分か触られた」

「そういうアイツモフモフしているもの好きなんだよな」

ユーリは呟く

「でも、それだけなら良かったけど、今度はプレセアとリーガルに見つかって」

プレセアとはタイキ達と同じ中等部3-Dの生徒だ。一方リーガルはクロスオーバー学園中等部の国語の教師だ。

「あの二人に『肉球を触らせてくれ』って言われて、何時間も肉球を触られて」

「実は某もでござる。」

そして二人共肉球好きなのだ。

「そうだったんですか。まあいいでしょう。さっどうぞ。後一つ伝えなければいけない事があるんです」

「何だ？」

「一回薬を飲んだだけで、すぐに元に戻る訳ではありません。明日にはほぼ治ってますが、どこか後遺症が出る場合があります。まあそれから数日たてば完全に戻れますよ」

「例えば？」

ルークは質問する。

「例えば、小さくなるのは、元の体より数センチ縮んでいるかもしれないし、動物になるのは動物の体の一部少し出てくるかもしれない」

「まっそれは数日で終わるんだろ？」

「そうですね。」

「そういえば銀時先生は？」

「あの人には既に薬を渡しました。ではおやすみなさい」

そう言つて去つて行くジェイドの目が少し輝いていたのは政宗達は気が付かなかった。

翌日 高等部1-Zの教室

「やっぱ。ちよつと背が低いな。いいな政宗とバルは後遺症なくて」

ルークは元の大きさに戻れたが薬の後遺症からか、少し縮んだらしい。一方政宗は後遺症はなかった。

「ただでさえアッシュより背が低いのに」

「まっ数日で戻るんだろう。そういやルフィとユースにも後遺症あったらしいぜ」

ルフィは頭に猫耳、ユースは背中に黒い羽が生えているらしい。ルフィは麦わら帽子を被っているため見えないし、ユースは別に服を着ていればれないからいいが

「それも数日で戻るんだろう。にしてもアイツ遅いな」

アイツと言つのは銀時だ。チャームが鳴つたのに何故が入つてこない。

ふと耳をすませると、言い争う声が聞こえる。

「いやだから副担のお前だけ入れればいいじゃねえか！」

「アンタはこのクラスの担任だろ！いいから入るぞ！」

銀時と話しているのは、副担のマリクだろ。

ガラッ やつと開いたドアから入って来たのはマリクと「誰アンタ！！？」

新八がつっこむのも無理はない。マリクと一緒に入ってきたのはサラサラヘアの銀髪で赤い目の女性だ。

「坂田先生だ」

「ウソー!!?」

クラス中騒然した。

「実はジェイド先生が女体化の薬を飲ませたらしくこういう事にまさかと政宗は思う。ジェイドが銀時に飲ませたのは・・・」

「あの・・・鬼畜眼鏡!!!!」

それはこの日一番の銀時の叫びだった。

第三話 チビ&アニマルパニック！（後書き）

銀時「おい！作者どういう事だ！」

作者「あつ銀子どうしたの？」

銀子「銀子じゃねえ！って名前が銀子になってるじゃねえか！何で俺だけさらに悪化しているんだ！」

作者「まあ、次に出てくる時は元に戻ってるから。じゃあそういう事で」

銀子「いやまだ何も解決してないだろ！」

作者「あ、後この後書きの絡み次回は銀さん以外の人にしようかな」

銀子「オイ！今なんて言った！後戻れ名前！」

第四話 逃走中（前書き）

作者「今回は小十郎達のクラス2ーJ組が中心のため政宗達はあまりでませ・・・ちよっ！お前らストップ！ストップ！次回ちゃんと出すか」

ギャアアア！！

第四話 逃走中

ここはクロスオーバー学園高等部2-J。

「ルークの奴薬の後遺症で背が縮んで、かなり落ち込んでたぜ」
ガイと小十郎が会話している。

「だがそれは数日たてば元の身長に戻るのだから？」

「そうだけだよ。そういや政宗はどうだ？」

「政宗様には後遺症はなかった。ルフィとユースにはあつたが、ほとんど治っている」

「まあ。全員一応元の姿に戻ったからよしとしよう」

実は約一名別の薬を飲まれた事を二人は知らない。

「それにしてもガイお前はどれだけルークが心配なんだ。合鍵まで作っているとは」

「だってよ。中学の頃のルークを見てれば、本当に大丈夫か心配だったんだ。」

「一体どんな奴だったんだ。中学時代のルークは」

小十郎はあきれている。

二人は普通に話しているが、実はこの2-Jも1-Zに負けず劣らずの力オスつぶりだ。

窓際の端の方では

「はい犬千代様」

「まつご飯はいつでもうまいな」

「まあ犬千代様たら」

前田利家とまつはラブラブっぷりは初めて見る人は引くが、このクラスでは日常茶飯事でこのクラスの者はすでに慣れている。また

「お妙さん。今日も一段とお美しいです」

「黙れやこのクソゴリラ!!」

ドゴッ

「ノゴッ!!」

1-2の志村新八の姉志村妙が妙のストーカーであり風紀委員長である近藤勲をフルボッコするのも日常茶飯事だ。

「まあ妙様。せっかく妙様の事を思ってくださいる殿方がおりますのに、いつもそんな事をすれば離れていきますよ」

「あらまつさん。それだったらこの人をもう何発も殴りますよ」

そういつて、近藤の顔を殴りまくる妙。すると

「志村妙！貴様風紀委員長への暴力行為とは悪であるぞ！そして風紀委員長！風紀委員長ともある貴様がストーカー行為とは悪！」

「長政様が怒っている。これも市のせい」

妙に注意をする黒髪の男子生徒は風紀委員副委員長浅井長政。そして長政の後ろでぼそと呟いている黒髪の長髪の女子生徒は風紀委員のお市だ。

「何を言ってる長政！俺はストーカーじゃない！しいて言うならハスターだ！愛の！」

「黙ってくださいこのストーカーゴリラ」

「まったく風紀委員長がストーカーか。風紀委員もここまで堕ちたとは」

「うむ・・・」

少し離れた場所で見ているのは、白い髪でアイマスクをしている男子生徒と、茶色の髪で筋肉隆々で、何かゴリ・・・霸王って感じじやねという印象を持つ男子生徒だ。

白い髪の男子生徒は生徒会副会長竹中半兵衛、そして茶色の髪の男子生徒は 生徒会会長豊臣秀吉だ。

一方こんなに大きな騒ぎなのに（まあ日常茶飯事だしな）一人の世界にいる者もいる。机の上にカードを並べて占いをしている、金色の長髪の男子生徒は、バジル・ホーキンス。彼の占いはよく当たると言われている。ボソツとホーキンスは呟く

「近藤の死亡率・・・%」

なっ何か今やバイことを言ったような・・・

また別の所では黒の長髪の男子生徒、桂小太郎が一人自分のペット

のエリザベスの絵を描いている。

桂を見ていたら真ん中の列から言い争う声が聞こえる

「しつこい！！石にされたいか！」

「そんな事言わないでよハンコックちゃ」

ドゴッ

「グフッ！」

赤い長髪の男子生徒ゼロスの腹に蹴りを入れたのは、黒い長髪で気の強そうな女子生徒ハンコックだ。

ゼロスはよくハンコックにアタックするが、蹴られたり石にされたりなどをされるのだ。

二人を眺めていると

「近藤！！」

何だと思い近藤達のいる方を向く。

見ると、さっきまでまつ特製の弁当を早弁していた利家が立ち上がって近藤を睨んでいる。

「よくも。まつの飯を！！」

どうやら、妙の攻撃を避けた時に利家の腕に当たってたまたま箸に挟んでいた玉子焼きが落ちたようだ。

「あ、いやこれ事故だから」

「問答無用！！」

利家は自分の武器の槍を投げる。

「あぶっ！！」

寸での所で避けた近藤。そして槍は後ろの教室の扉に向かっている。

一方 2-J 教室近くの廊下

「大丈夫か？官兵衛」

「うう。朝から酷い目にあった。」

廊下を歩いているのは、悪い黒い髪で前髪を垂らして目が見えないしかも手には何故か鉄球付きの錠がかけられている男子生徒。彼の名は黒田官兵衛。2-Jの生徒だ。何故か顔色が悪い

そして官兵衛に声をかけたのは、オレンジの髪で顎には十字傷がついた男子生徒。彼の名はディエス・ドレーク。官兵衛と同じクラスで官兵衛とは仲が言い。

「全く朝から痺れ薬を飲ませるなど何を考えているんだハロルド先生は」

「確かに」

ハロルドと言うのはクロスオーバー学園中等部の理科の教師でかなりの変人だ。二人が登校した時偶然ハロルドに捕まり官兵衛は痺れ薬を飲まされたのだ。顔色が悪いのはそれが原因だ。ちなみにルーク達が転校した前日におきた魔物の脱走事件で脱走した魔物ハロルドのものだ。

2・Jの教室はどこか騒がしい。

「あいつら何をやってるんだ？」

「また近藤が妙に殴られているんじゃないか？」
とドレークはため息をする。

ガラッ 官兵衛は教室の扉を開ける。その直後

ズゴッ 投げられた利家の槍が官兵衛に当たった

「何故じゃああああ！！」

そう言っただけ官兵衛は倒れる。

「官兵衛！！」

官兵衛は運が悪い。それこそ1・Zの皿場工舎の何倍も運が悪いのだ。

「利家！お前何やってるんだ！」

「あ、すまぬ」利家が謝った直後。

ガラッ

「はい皆さんそこまでですよ。それとドレーク廊下で倒れている人を連れてきて下さい。」

入って来たのはこのクラスの担任ジェイド・カーティスだ。

官兵衛が教室に入ってきてホームルームが始まる。

「今日伝える事は実は五限の体育ですが武田先生が出張なので、臨

時の先生が担当です」

その言葉にクラス中が騒然とした。

「あの・・・まさか」

「はい。バルバトス先生です。」

やっぱりとガイは思った。バルバトス先生の授業はとんでもないのだ。

例えばサッカーでも鉄球を蹴る事になったり、フールでも、あの斧の餌食にされるのだ。

ふと見るとドレークとホーキンスが身震いをしている。

二人は泳げない体質なのに1年の頃の水泳の時間バルバトス先生に無理やりプールの中に入れられ、二人は溺れかけたのだ。

バルバトス先生の授業では怪我人無しはありえないのだ。

ホームルームが終わりジェイドは教室を去っていった。

ジェイドが去った後、ガイはホーキンスの席へと行く。

「あのさホーキンス体育の授業で全員無事な確率ってどのくらいだ？」

「ふむ」

そう言つてホーキンスは机に並べたカードをめくる

「5%だ」

その言葉に生徒全員は凍りついた。

「おら！さつさと始めるぞ！」

体育の時間となり、目の前にはバルバトスがいる。

「今日の授業はバスケットだったが、予定を変更して」

「ちょっと待って下さい！何で予定を変更したんですか！」

「1-Zと1-Wのバカ達のせいで体育館の床が壊れたんだ！」

いや、それはお前の攻撃のせいだとガイは思った。

「とにかくだ。今回は予定を変更して逃走中を行う！」

逃走中・・・ってあのハンターが逃走者を追うあの？

「ハンターは俺一人だ。制限時間内にハンターである俺から逃げら

れたらお前らの勝利だ。ただし逃げられる範囲はクロスオーバー学園の屋外だけだ。もし校舎に入ったり学園から出れば、即刻負けだ」

「ただの負けではないきつとあの斧の・・・とクラス中思った。制限時間はチャームが鳴った時だ。じゃあ始めるぞ！」

よしとにかくはや

「ジェノサイド・ブレイバー!!」

ドゴツ 突然バルバトスに攻撃される。当たったのは

「何故じゃああああ!!」

「嘘だろ!!」

官兵衛とゼロスだ。運悪く技を直撃した。

「ちよつ。カウントダウン無しですか！」

「何だそれは？さつさと始めるぞ」

そう言いまた攻撃する。

「皆！とにかく逃げるぞ！」

ガイの声で全員一目散に逃げる。しかしバルバトスの攻撃はまだ続いている。

「まつの事は某が守る！」「まあ犬千代様ったら」

ラブラブな状態で上手く逃げる利家達。

「近藤さんもし危なくなったら助けてくれませんか？」

「もちろんですとも！」

身代わりになるなとガイは思った。

数分後

中庭へと逃げた小十郎とガイとドレーク。

「な、何とか逃げれたな」

「だがハンターはあの男だ油断するな」

「とにかく、なるべく見つからないようにしよう」そう相談していると、

グルルルどこからか唸り声が聞こえる。

「何だ？」

小十郎達が辺りを見渡すと

グルルル 狼の様な魔物が数体現れた。

「魔物！なんでここに！？」

「今はこいつらを倒すぞ。理由は後で考えろ！」

小十郎はそう言うつと刀を構える。ガイとドレークも自分の武器を構える。

ガサツ 突然三人の後ろの方にある植え込みから三人の前にいる間桃と同じ種類の魔物が現れ、ガイに襲い掛かる。

「ガイ！後ろ！」

「はっ！」

「MAGNAM！」

バリッ

「双牙斬！」

ドガッ

ガイに襲い掛かろうとした魔物は青い雷と刃に倒れた。

「政宗様！」

「HA！無事に決まってるよな小十郎！」

「ルーク！」

「ガイ！大丈夫か！」

倒したのは政宗とルークだ。

バツ 三人の前にいた数体の魔物が襲い掛かる。

「穿月！」「断空剣！」「はぁ！」

小十郎は雷を纏わせ突進し、ガイは空中に回転しながら攻撃し、ドレークはサーベルとメイスで攻撃し倒した。

「政宗様何故こんな所に？」

「さっき理科の授業を受けてたらハロルドが入って来てよ。何でも自分が飼育していた魔物がまた逃げ出したらしい」

「またあの先生は」そう言いドレークは頭を抱える。

「それで、来たのはお前達だけか？」

ガイが質問する。

「いや。数人来ている。『私の生徒が負けることは無いと思います
が、念のためです』って」

その頃 中庭からおおよそ100メートルほど離れた場所

「魔人剣・双牙!」

「ゴムゴムのピストル!」

ドゴツ ロイドとルフィは魔物を倒している

「ふうー通り終わったな」

「おう!」

そう言いルフィは伸ばした手を元に戻す。

「あら、あなた達は新ちゃんと同じクラスの」

ロイド達が振り向くとそこには妙と妙の幼馴染の九兵衛がいる

「あ、志村先輩」

「二人ともなぜここに?」

「あ、そうだ実はよハロルドの奴がまーた魔物を逃がして」

「まあそうだったの」

「とにかく先生にすぐに授業を中止にさせるようお願いして」

「いや、それは・・・無理だと思う?」

「何でだ?」

ルフィがそう言った直後

「おらよおおお!!」

姿を現したのはバルバトスだ

「あん?何か二人増えているようだがまあいい」

「マジかよ。でもいい!先生!授業を中止させてください!魔物が
いるんです!」

「んな事関係あるか!制限時間が過ぎるか、お前ら全員捕まえるか
それ以外終了させねえ!」

「そんな。」

「デメエら全員捕まえてやるよ！」

そう言つて バルバトスは突進してくる その時

「お妙さん！ご無事ですか！」

バルバトスとは反対方向から近藤が来た

「あら近藤さん丁度いい所に」

「えっ？」

そう言つと、妙は近藤を投げた。狙いはもちろんバルバトスだ

「じゃっ近藤さん私達が逃げる間時間を稼いで下さいね。さっ行き
ましよ九ちゃん」

「えっちよっ。お妙さん！」

近藤の言葉を見無視して、妙と九兵衛は去って行つた。

「お前が相手か！」

「く、これもお妙さんのため！いく」

「ジェノサイド・ブレイバー！」

ドゴッ

「ゴフッ！」

近藤は壁にめり込んだ。

「近藤先輩！」

「次はお前達か！」

バルバトスは目の前にいるルフィとロイドを狙う。

「くっ！」

その時

「バルバトス先生」

突然バルバトスの背後から声が聞こえる。

「あん？」

バルバトスは振り返ると、一瞬動きが止まつた。

「メロメロメロウ！」

ガキン その瞬間バルバトスは石となつた。

「わらわのルフィに手を出すとは無礼者め！」

「ハンコック！」

そこにいたのはハンコックだった。

「ありがとうハンコック！」

「はっ！今愛していると」

「いや言ってない言ってない。でもこのままチャイムが鳴るまで」

「それが、何故かこの男は数分ぐらいしか石にできない」

「そうなのか。じゃあ今は逃げよう。行くぞルフィ！」

「ああ行くぞハンコック！」

「はい」

ロイド達も去っていった。近藤を置き去りにして

「ちよつと・・・俺は？」

一方 グラウンドでは

「エアスラスト！」

「火口の連弾！」

「飛べ！太郎丸！」

「おりやつ！」

既にバルバトス先生に捕まったゼロス、利家、まつ、官兵衛、が魔物と戦っていた。

「お前ら！」

グラウンドに小十郎達とルフィ達がついた。

「他の者は？」

「一度このグラウンドに集まることになった」

そう言った直後、中庭の方から

ブンッ 大きな力二の様な魔物が飛んできた。しかも硬い甲羅のいたる所に傷がある。

「どうやら君達も無事のようなね」

「・・・」

そこには、半兵衛と秀吉がいた。魔物を飛ばしたのは、秀吉だろう。
「相変わらず凄いな秀吉は」

「我が手に掴めぬものは無し」そして他の所からも、生徒達が集ま

ってきた。

「全員無事か？」

小十郎がたずねる。

「私は大丈夫だ。」

「市も大丈夫です。」

しかし無事ではない者もいた。桂は腕に怪我を負っている。

「おい！どうしたんだその怪我！」

「ふっしくじったな」

「こいつはバルバトス先生から隠れようとして、木に上ったら滑って落ちた時についたのよ」

そう言うのは赤い短髪的女子生徒、風紀委員の藤枝ヨシノだ。

「貴様！何故知っている！」

「その時アンタと合流したでしょ」

どうやら大丈夫そうだなと小十郎は思った。

「官兵衛！どうしたんだその傷は！」

ドレークの声を聞き振り向くと、官兵衛は足に傷を負っていた。

「それが何故か知らないが、突然怪我を負った」

「ああそれなら、俺がああ狼の様な魔物に噛まれた時の傷をお前に受け流したからだろう」

そう言ったのはホーキンスだ。

「お前か！！」官兵衛はホーキンスに掴みかかる。
その時

キンコンカーンコンコンチャイムが鳴る。

「これで、終わったな」

「ああ」

小十郎とガイは頷き合う。しかし

「オラアアア！！」

突然中庭からバルバトスが来た。

「ボア・ハンコック！よくも俺を石にしたな！！」

「何の事だ？」

「バルバトス先生を止めるために石にしたんです」

ロイドの説明に納得する小十郎。

「許せねえ！罰として制限時間を6限まで伸ばす！」

「ええええ！」

「！」

「当然だ！それにテメエら全く捕まらないしな」

その勝手な言葉に

プチン

全員の何かの緒がキレた。

「先生俺達からも言いたい事があります」

「あん？」

ガイの言葉を合図に全員武器を構える。

『調子に乗るな！！』

その時バルバトスは全治二週間の重傷を負った。

第五話 園芸部廃部の危機！？

「ルークお花に興味ない？」

それは昼休みの事。自分の机と政宗とユーリの机を合わせて昼食を食べ終えたところだった。

「えっ？」

突然の質問にルークは戸惑っていた。自分に質問したのは紫色の長い髪をツインテールした女子生徒同じクラスのソフィだ。

「花？」「うん」

ユーリも意味が分からないと言いたそうな顔をしているが、政宗は何か分かったようだ。

「ひよっとして部活の勧誘か？」

「そうだよ」

「部活？」

「ああこいつ園芸部に入っているんだ」

「花に興味あるかってそういうことか」

ユーリも納得した。

「そっか。でもごめん。俺もうサッカー部に入っているから」

ちなみに政宗も同じくサッカー部に入っているのだ。

「ユーリは？」

確かにユーリは帰宅部だ。

「悪い俺花とか興味ないし部活入る気もないんだ」

「そっか。ごめんね」

「あついた。ソフィ！」

廊下からソフィを呼ぶ声がする。

「アスベル！」

ソフィは嬉しそうに駆け出す。廊下にいたのは赤い髪の男子生徒、風紀委員でソフィの幼馴染みのアスベル・ラントだ。

「どうだった？」

「風紀委員の人達に聞いてみたけどダメだった」

「そっか」

そういつてソフィはどこかへと行った。

「どうしたんだ？」

ルークは首を傾げる。

「まあこんな時だったらな」

「こんな時？」

政宗はルーク達に説明する。

ソフィの入っている園芸部は花や野菜など植物の世話をする部活だ。今園芸部にはソフィと小十郎とエステル三人だ。園芸部の評判は中々良く小十郎の育てた野菜は家庭科部の調理や調理実習に使われ、ソフィとエステルが育てた花は学園祭の飾りや疲れた者の癒しにもなっている。

「長谷川もあの花壇見て『もう少し頑張ってみよう』って思ったらしいぜ」

「あいつが言ったらシャレにならねえな」

長谷川とはクロスオーバー学園の用務員だ。（これは噂だが、一度ハロルドが園芸部植物を使って実験をしようとした所園芸部全員で止めた事があったらしい）

「よく知っているな」

「小十郎と猿飛に聞いた。」

「でその園芸部に何が？」「ああそれが」

その園芸部に廃部の危機が訪れているのだ。原因は 部員が定員より少ないからだ。この学園での部員の定員は最低でも四人園芸部は後一人少ないのだ。もし期限までに揃わなかった場合即廃部ということだ。

「そっいや校門前で何か紙配ってたな。」

あれは勧誘活動だったか。小十郎も配っていたがそこは他の奴ら避けてたな。とユーリは思った

「それでその期間っていつまで？」

「明日だ」

「明日!？」

それであんなに必死だったのか。

「俺も協力して風紀委員の帰宅部の人に聞いてみたけどダメだった。」

「

「小十郎の奴も二年で帰宅部をあたっていたがダメだったらしい」

「そついやエステルも何か思い詰めた顔をしてたな。」

「何とかならないのか？」

「それはさすがに、園芸部やりたい奴がいればそれだけだ。それだけだがそついう奴がいなければもう・・・」

その時政宗達は気がつかなかった。教室の後ろの方の扉の前で政宗達の話聞いていた者がいた事を

(本当なら入りたいけど・・・)

その者は少し考えていた。

その日の放課後。園芸部の活動場所の花壇

「どうだ？」

園芸部の部長である小十郎がソフィ達に言う。

「私の所は駄目。ルークはもう部活に入ってるし。エステルは？」

「私の方も。兼部で入りたいって言う人もいませんでした。」

「期限はもう明日か。」

「片倉先輩。お花さんどうなっちゃうのかな」

「別に部活が廃部したからと言って花壇が壊される訳じゃない。だが」

「部活が無くなるって思うと・・・」

三人はお互いの気持ちを分かっている。この部活が好きだから。だからこの部活を守りたい。

たった一人。でもそのたった一人が見つからない。

ザッザッ 自分達の所へと向かう足音が聞こえる

「誰？」

三人が足音の方をむくと

「あなたは」

「バアル」

そこにはバアルモンがいた。

「どうしたんだ？」

小十郎が、たずねるとバアルモンは一枚の紙を出す。

「それは」

それは入部届けだ。しかも入部するのは『園芸部』と書いてある。既に顧問の先生の判子が押してある。

「この部活に入れて欲しい。」

バアルモンはそう言う。

「えっ？」

とエステルは言う。一応バアルモンにも勧誘をしようとしたが、休み時間はいつもどこかに行ってるため中々見つからなかったのだ。

「入部理由は？」

そう小十郎は質問する。

「植物に興味があったから・・・それだけ。」

しばしの沈黙が続く。

「・・・あまり不真面目だったら顧問に言って辞めさせるぞ」

そう小十郎は言う。その言葉にソフィとエステルは喜んだ。

「じゃあ！」

「ああ。ようこそ園芸部へ」

「よろしくね。バアル」

「ああ」

こうして園芸部の廃部の危機は免れ、新たにバアルモンが園芸部に入った。

その翌日

「えっ！？バアルモンが？」

政宗からバアルモンが園芸部に入った事を聞かされるルーク。

「そついや。アイツの部屋に花が飾つてあつたよな」

「小十郎から聞いたがアイツ植物の知識かなりいいらしいぜ」

「アイツ小さい頃から植物の世話が好きだったからな」

そつ言うのはベルゼブモンだ。

「でも何かちよつと意外だな。廃部するつて聞いて、だつたらつて思つたのか？」

「アイツがそんな奴に見えるか？」

政宗達と話しながらベルゼブモンは思つた。

（少しは自分に素直になれたな。）

その日の放課後

部活が終わりバアルモンは一人で帰っていた。小十郎と同じ寮暮らしだが、あえて一人で帰っている。

「お疲れ様」

突然バアルモンにかける声。それは

「兄貴」

ベルゼブモンはバアルモンの隣を歩く。

「やつと素直になれたな」

「何の事だ？」

「部活だ。お前入学した時から入りたかつたんだろ？」

「何を言っている？」

「知つてるぞ仮入部期間の時よく園芸部を見ていた事」

「・・・」

「ひよつとして。まだ思つてるのか」

「何の」

「『自分のせいで大切な人が傷つく』」

「！！」

バアルモンはその言葉に目を見開く。

「『あの日』からお前はそう思っている。違うか？」

「何年前の話だ」

「まだ思ってるだろ。タイキ達と出会った時もそう思ってた。だから最初は避けてただろ？」

「・・・」

「前に言っただけだ。俺はお前といつも一緒にいる。でも傷ついた事は」

「あるじゃないか！」

珍しくバアルモンが感情的に話す。

「『あの日』兄貴だって傷ついたはずだ！兄貴は悪くない悪いのは俺だけなのに」

「バアル」

「タイキと出会ってその思いは少しは和らいだ。でもまだ」

「そこまで言っただけバアルモンはどこかへ行ってしまっ」

「・・・」

ベルゼブモンは後を追う事が出来なかった。

「お前だけのせいじゃないさ。俺の方が」

ベルゼブモンは小さくそう呟いた。

第五話 園芸部廃部の危機！？（後書き）

作者「どうも！作者です。今回銀さんとは別の人が来ました。それは」

ユーリ「ユーリだ。よろしくな」

作者「さて今回は園芸部の話だったね。」

ユーリ「ああ。けど後半はバルモンとベルゼブモンの話だったな。ってか何だ？『あの日』って」

作者「それは、話が進んだら分かる事だよ。」

ユーリ「まあいいけど。それより次回は？」

作者「今回はW組のあの人が出ます」

ユーリ「あの人って誰だ？」

作者「それは、次回までのお楽しみ。それでは！」

第六話 頭と風紀委員とあみぐるみ

ある日の昼休みの事。政宗とルークとルフィは総司達に誘われて、一緒に屋上で昼食をとることになった。

「にしても美味えな。瀬田の料理は」

「確かに」

「センセイの料理は絶品クマ！」

政宗達の次に言ったのは金髪で青い目の男子生徒。名前はクマ中等部3ーFの生徒だ。

「そうかな」

『そうだヒホ。総司の料理とっても美味しいヒホ。』

そう言うのは、雪だるまのような姿で頭には二本の角がついた青い帽子を被り、足には青い靴をはいたものだ。イザナギと同じく総司のペルソナのジャックフロストだ。

「へえー。ペルソナにも味が分かるのか」

『ああ。五感を感じられる』

ルークの言葉に総司の代わりにイザナギが答える。

「そういえば完二。さっき渡したあれ。直るのにどれくらいかかるんだ？」

総司は隣にいる金髪で頭に傷がある男子生徒に聞く。彼は巽完二。クマと同じクラスだ。

「あれっスか。あれぐらいなら、半日で直せるっスよ」

「そうか」

「あつあと先輩に、というかジャックフロストに渡したいものがあるっスよ」

「ヒホ？」

そういつて完二はポケットからあるものを取り出す。

「これって。」

それはジャックフロストのあみぐるみだ。

「お前スゲエよな縫い物とか。顔に似合わず」

「何だと・・・あつ。」

からかった陽介を睨もつとしたが、自分達以外に政宗達がいることに気がついた。

「HA！気にすんなよ。総司からきいているから」

「すげー。ジャックフロストそっくりだ。」

「ありがとうヒホ！」

そいつってジャックフロストはあみぐるみを持ち上げる。

「うつ・・・」

完二は恥ずかしさのあまり顔を赤くする。

「他にも編めるよな。動物とか。」

「そついうのロー好きそうだな。もふもふしてるの好きだし」

「麦わら屋あんま人前で言うなそんな事」

ルフィに誘われてきたローが言う

「以外だな。」

総司の言葉にローは総司を睨んだ。

「ローって言ったらお前キッドとローと仲が良いよな」

ふと陽介はルフィに言う。

「おう！それがどうかしたのか？」

「ユースタス屋はからかうと面白いからな」

「おい」

「よくお前らダチになれたな。性格似てねえし。まっ天城と里中も性格似てねえけど」

「確かにそうだね」

黒い長髪の女子生徒、天城雪子も頷く。

「そついや俺も聞いたことねえな。テメエらの出会い」

政宗達も興味があるようだ。

「ああ。キッド達とは中3の時に同じクラスで・・・」

ルフィがそこまで言った時。

「貴様の悪ここで削除する！」

突然の声。現在政宗達がいるのは屋上の出入り口がある場所の裏側。声は出入り口近くの場所だ。

「何の事だ？」

「貴様授業をさぼっておいてその態度か！」

政宗達が入口近くにいるのは四人。風紀委員副委員長の長政と同じく風紀委員のお市だ。

もう一人はさっきの話しに出てきた男キッド。そのキッドの近くにいるのは、金髪で長髪顔は青色と白色の布に覆われ、目が見えない男子生徒、キラーだ。キッドの友でもある。

「うわっ」

「どうしたんだ？さぼったって」

ルークは首を傾げる。

「そっぴゃさつきローから聞いたけど、今日の4限キッドサボったって言ってたな」

「ちなみにその時は古典の授業だったけど北条のじじいがぎっくり腰で倒れて、代わりにタクティモンがやる事になったって」

ルフィと政宗がそう言つと、全員沈黙した。

「あの先公か。ちょっとでも間違えたらタネガシマするし」

「アタシなんてちょっと眠っただけで、ひどい目にあつたし」

ルークも一度タクティモンの授業を受けているためその気持ちは分かる。

「さらには貴様には様々な悪行がある！今こそここで肅清する！」

浅井長政は正義感が強いと聞いていたし、俺も注意された事があるもんなと政宗は思う。

「そして！」

長政はキラーの方を見る。

「その悪行をここまで放置してきた貴様も悪！」

その言葉が癪に障ったのか、今にも襲い掛かりそうな目をしていたキッドは立ち上がり

「おい」

そういつた直後、政宗達がいる所の近くに置いてあった鉄パイプ（何故鉄パイプがあったかは聞かないで下さい）が、突然浮きそして飛んでいく。すると

バシッ その鉄パイプはジャックフロストの手に持つてあるあみぐるみに当たってしまった。

「ヒホ!?」

ジャックフロストの手には当たらなかったが、あみぐるみを手放してしまい。

ヒュー あみぐるみはその衝撃で、屋上から落ちた。

「ヒホー!!」「ギャー!!」

ジャックフロストと完二は同時に叫んだ。

パシッ そしてあの鉄パイプはキッドの手の中に入った。

さっきの叫び声にキッドはちらつと横の方を見ると、何かが落ちていくのを見たが、すぐに前にいる長政に視線を戻した。

「勝手な事言つてんじゃねえよ。副風紀委員長さんよお。俺が悪ならそれでいい。だがこいつもか。」

「そうだ！貴様の傍にいたにも関わらず貴様の悪を止めようとしなかった者も悪だ！」

そう言つて、長政は刀を構える。

「・・・のせい」

ボソッとお市が何かを呟いた。

「むなくそ悪い野郎だぜ！」

そう言つてキッドも鉄パイプを構える。すると

「落ち着け！ジャックフロスト！完二！」

「BECOOOL！BECOOOL！」

「ぼ、僕なあみぐるみを！氷付けにするヒホ！」

「デメエ！」

ジャックフロストと完二を抑える政宗達。

「やかましい奴らだ」

キッドそう呟いた直後。

「市のせい」

すつごく暗くお市は呟く。

「長政様が怒るのも、あの子達が怒るのも、全部市のせい、市のせい・・・」

「い、市？」

長政は市の方を見る。すると

ガクン 突然お市が膝をつく。その直後

ブワッ お市の周りから黒い手が出て、政宗達を襲う

『ええええええええええ！！！！』

突然の出来事に戸惑いを隠せない政宗達。

「どうする！？」

「逃げるしかねえだろ！」

「キラー！今は逃げるぞ！」

「違うない」

政宗達は屋上の入り口へと行き

「市！！」

長政はお市を起こそうとする。

その時

ビシュ 完二のポケットに黒い手がかすり、ポケットが切れ、中にあったあるものが外へと出て行く。

それは手すりの隙間から屋上の外へと落ちていく。その時ある者はそれが落ちていくのを見た。

その日の放課後

「本当にすみません！！」

高等部1ーZ近くの廊下で完二が総司に謝っている。

「いや謝らなくていいって。昼休みの事で落としたんだろっ。」

実は完二が総司に 預かった物を無くしてしまったのだ。

「HEY！総司どうだ？」

「いやまだ見つかってない。ごめん政宗達も探させて。」

「別にいいぜ。」

そういつて政宗は別の所を探しに行く。

「じゃあ俺達はあっちを探そう」

「はい！」

総司達も去っていく。そして先程の総司達のやり取りを見ていた者が一人いた。その者はある場所へと向かう。

数十分後

「改めてここに来たけどやっぱりないか」

総司達は再び屋上にいた。

すると突然「お前達は」

声のする方を見るとそこにはキラーがいた。

「テメエは」

昼休みの事が原因なのか完二はキラーを睨む。

「落ち着け。どうしたんだキラー」

「屋上に忘れ物をしたからとりにきた」

「おっ。キラーじゃねえか！キッドはどうしたんだ？」

政宗とルフィと陽介も屋上に来た。

「用事があると言つてまだ学園の」

キラーがそこまで言った時下の方から言い争う声が聞こえる総司達が下を見るとキッドと長政が言い争っていた。

「貴様！私の正義を侮辱する気か！許さん！」

「テメエは前から気に入らねえ奴だと思つてたぜ。」

二人は今にも戦闘が始まりそうな勢いだ。

「うわっ。やばくねえか！？」

「あいつは中等部の時から問題を起こしているからな。風紀委員副委員長とやりあったなんて大騒ぎになったら、停学悪ければ・・・」

キラーの脳裏に一瞬最悪の事態が浮かび上がった。

「すぐにやめさせる！」

ルフィはそう決断した。

「だが、どうやって？」

「俺にいい考えがある」

総司の質問に、政宗はにやりと笑って答える

「総司ジャックフロスト出してくれ」

「別にいいが」

すぐにジャックフロストを出す。

「ジャックフロスト、あんときの恨みここで晴らすか？」

『ヒホ？』

「こんくらいでいいか？」

ルフィは手前の手すりに手をかけ腕を伸ばし今は屋上の出入り口の場所の上にいる。ルフィの頭にはジャックフロストが乗っている。

「OK。いいか？キラー」

「別にいい」

現在キッドと長政は激突直前といった状況だ。

「いまだ！」

政宗の声を合図にルフィは足を地面から離し、屋上からキッド達がいる方に飛ぶ。

「ゴムゴムの〜フロストパチンコー！」

ジャックフロストは手を離しその勢いのままキッド達がいる方に突っ込む。一方ルフィは伸びた腕を話さなかったため、屋上に戻ってきた。

「行くぞ。マハブフ！」

ジャックフロストは冷気を吐き出す。突然の冷気にキッドと長政そして長政の近くにいたお市は気絶した。ジャックフロストは茂みに突っ込んだ。

政宗達は屋上からすぐに、キッド達がいる場所に着いた。

「大丈夫かジャックフロスト？」

『大丈夫だヒホ。ペルソナは怪我をしないヒホ！ジャックフロスト人形の仇ヒホ！』

「浅井先輩とお市先輩には悪いことをしたな」

「にしてもこの二人なんで戦おうとしたんだ？」

「多分昼休みの事の続きだろう」

陽介の疑問に総司は答える。

「だが、何でこんな所で、ここで出会って戦おうとしたっていう雰囲気だったしな」

政宗はそう呟く。するとルフィはキッドのポケットに何かが入っているのを見つけた。

「何だ？」

見てみるとそれは

『ジャックフロスト人形だヒホ！』

「それにこれは」

もう一つ出てきたのは、見た目は凛々しい白い白馬しかし頭には角が生えているユニコーンのあみぐるみだ。

「これ先輩に直してくれて言われた」

落としたのはこのあみぐるみだったのだ。

「多分屋上から落ちて、茂みの中に入ったんだろう。何枚か葉っぱついてるし」

「だが、何でこいつがそれを」

政宗が呟くと

「探してたんじゃないのか？」

「えっ？」

ルフィの答えにキラー以外呆氣にとられた。

「理由がどうあれ、自分のせいで落としてしまったもんだしきつと探したんじゃないのか？こいついい奴だし。だろ？」

「違うない」

キラーも同意する。

「こいつは短気でキレルとすぐに手をだす奴だが、根はいい奴だ」

「ああ。つまりちよいツンデぐほあ！」

キッドが無意識にやったのか陽介の顔にバケツが当たる。

「それ探しているユースタス屋にはちよつと吹きかけたぜ」

どこから来たのかローが言う。

「あのままやりあつてたら面白そうだったんだが、まあいい」

「見てたのかテメエ」

政宗がつっこむ。

『総司このままここに置いておくヒホ?』

ジャックフロストの質問に総司は

「とりあえずキッドは寮に置いて、浅井先輩達は家に送ろう」

総司は微笑みながらそう言った。

後日キッド、長政、お市には誰が作ったか分からないキーホルダーが贈られたと政宗は佐助から聞いた。

第六話 頭と風紀委員とあみぐるみ（後書き）

銀時「おい作者。最近俺の出番ないんじゃないかねえのか？もう三話連続だぞ」

作者「だって出すタイミングが無いし」

ウソップ「おい！作者！何でキッド達は出して俺達が出さない！つてか出してくれ！」

作者「・・・機会が会ったら出すよ」

ウソップ「何だ！その間は！」

銀時「て言うかマジで出せ！出番くれ！」

作者「・・・マハジオダイン」

銀時・ウソップ「ぐはああ！！！」

第七話 プールでの戦い

ここは1・2の教室。ホームルーム前の今の時間いつもは騒がしいが今日は大人しい。その原因は
ジリジリ

「あゝっ」

ルークが言う。今日は猛暑で、暑さのせいでほとんどの者は騒ぐ余裕が無いのだ。

「はん！このくらいでへばっているとはなバカ弟」

アッシュはへばっているルークに向かって言う。額や腕に熱冷。シートをはって。

「いやあんたが言うなよ！」

最近出番が無かった新八がつっこむ。

「でも確かに暑いな」

「ああ」

ユーリと政宗は会話をしている。ちなみにユーリは暑さのため長い髪を一纏めに括っている。

「政宗殿！」

政宗の席に行くのは幸村だ。

「テメエはこんなにHOTでも平気か。いやこいつが元々だしな」

「うむ！心頭滅却すれば火もまたすずしでござる！」

「とりあえず。今日はあんま近寄るなよ。お前元々暑いし」

さらっと酷い事を言うユーリ。また別の所では

「大丈夫か？二人とも」

「ヒホ」

「暑い」

総司のペルソナジャックフロストとマフラーを巻いたペルソナセタ
ンタもこの暑さには参っているようだ。ジャックフロストは溶けか
けている。

また別の所では

「うう」

チョップパーが机にもたれている。

「大丈夫かチョップパー？」

長い鼻の男子生徒ウソップが心配そうに見つめる。

「大丈夫。でもちよつとそこにデッケエカキ氷あるからちよつと」

そういつて、何も無い窓の方へと行くチョップパー。

「おい！どこへ行くこうとしているんだ！」

「お前見えてないアルか。目の前にデツカイカキ氷しかも酢昆布ツきの」

「テメエの目は節穴か？あれはマヨネーズつきだ」

「オメエらも何見てるんだ！」

「ウソップさん」

「はい？」

ビシユ ウソップの顔の近くに木刀が突き刺さる。それは新八の物だ
「そんなにつっこみをして、僕の居場所を無くす気ですか？」

「新八？」

「ツツコミ役はそんなにいりませんよ。だから消す」

「おい！新八が新八が壊れた！暑さで壊れた！ツツコミ役が壊れたらヤバイって」

その時

ガラッ

「あつちいなこのヤローホームルーム始めんぞ。って新八テメエ何してるんだ！？」

教室に入ってきた銀時先生が新八のつつこむ。

「先生まで・・・ツツコミ役の座は渡しませんよ」

「おい！しかもお前らまでどこ目指してんの神楽達！こいつらに水ぶっ掛けてこい！」

何とか少しは頭が冷えた新八達。

「今日のホームルームだが、6限に英語やるはずだったんだが英語

の教師が熱さでぶっ倒れた。5限に水泳やるつつたる？あれ6限もやることになったと」ヨツシャアアア！！

その連絡に全員が喜んだ。

「後元々6限は2Jの奴等がやる予定だったので、6限からは2Jと合同だ。」そこまで言った後銀時は教室を出た。

「にしてもいいなお前らプール入れて」

水泳の授業直前のプールの側でルフィはルークに言う。

「そっぴいやるルフィ達って泳げないんだっけ」

「ああ」

ちなみに5限は1Wと合同なので、1Wの生徒がいる。

「おい」

総司に声をかけたのはキッドだ。

「次にあんないらねえ事したらぶっ飛ばすぞ」

おそらくあの仲裁だろう。

「文句ならルフィがジャックフロストに言ったらどうだ？」

「あいつはテメエのペルソナだろ」

そんなやり取りを見ていた政宗だがふとあることに気がついた。沖田がプールサイドに座り込んで何かをしている。何かの瓶を持っている

「なにしてん・・・うおっ！！」

突然沖田が斬りかかったが寸での所で避ける。

「何だ政宗か。てつきり土方さんかと思った。」

確かに自分と土方の声が似ているのは分かるが、勘違いで斬りかけられたらまったもんじゃない。

「でっ何しようとしたんだ？」

「たいしたもんじゃねえっすよ。土方さんを殺すためにちよっとプールに毒薬を」

「俺らも道連れか！」

「大丈夫っすよ。俺休みますから」

「テメエは助かるんかい！！」

沖田が持っていた毒薬入りの瓶を奪った。

「その後で返してくれ」

「即捨てるわ！！安全にな！！」

「おーい。うるせえぞ」

そう言うのは銀時先生だ。

「あれっ？先生って現国じゃ」

「暑いから。代理の先生頼んだから」

それだけかよつと政宗は思う。

「あれっ？」

突然朝は壊れかけていた新八が言った。

「どうした？」

「いやっ。サンジと陽介とロニがいないなっと思って。」

ちなみにサンジは1Z、ロニは1Wの生徒だ。

「そういえば、更衣室の近くでレイヴン先生がいたような」

レイヴン先生とは中等部の数学の先生だ。

「サンジ達遅れてるんじゃないのか？」とルークが言ったが

「でも僕達の中で一番早く来たみたいだし」

新八がすぐに否定する。

「どうしたんだ？」

突然の声は七花のようだ。

「ようしち・・・」

政宗は声をかけようとしたが、七花の右手に血がついている事に気が付き絶句した。

「お前！その血」

「ああ。返り血だ」

「どこかの馬鹿が、私の裸を見ようとしたからなすぐに七花が始末した。」

七花の隣にいたとがめが言う。

まさかそれって・・・とルークは思ったが声に出せなかった。その後武田が来て水泳の授業が始まった。

「うおおお!!」

「おい!!水しぶきが蒸発してるぞ!」

「てか。これ水しぶきと言うのか?」

幸村が猛スピードでクロールしたり（台詞は上から幸村、慶次、政宗の順）

ゴボゴボ

「バリスタ!!泳がないなら泳げないって言え!」

バリスタモンが沈んだり

「死ね!!土方!!」

「何すんゴボツ!!」

沖田が泳いでいる土方の足を引っ張ったり。

「家康ウウウ!!伊達政宗えええ!!」

「うわっ三成!!」

「こんなところでもか!!」

三成が家康と政宗に攻撃したりなどがあった。

5限の授業が終わりやがて6限となった。

「あっお前達」

泳げないため見学していたルフィ達に声をかけたのはドレークだ。隣にはホーキンスがいる。

「よおドレーク!それにホーキンス」

「・・・」

ホーキンスはカードを めくっていたが突然動きが止まる。

「どうしたバジル屋?」

「逃げた方がいいな」

「はあ?」

「まさか!?!」

ホーキンスの言葉にある事を思い出すドレーク。

「お前ら、早くプールから」

「テメェら。こんな所で何をしている」

突然の声それは・・・バルバトスだった。

「やつ、あの俺ら能力者」

「んな事関係あるかああ！さっさと入って来い！」

ドレークの言葉を遮るバルバトス。

「いや関係あるから！俺ら泳げ」

「どおりやああ！」

ルフィが言い終える前に、ルフィ達を斧でプールへと落とす。

「テメエ！ナマハゲ！人の話最後まで」

ばしゃああん キッドが言い終える前にルフィ達はプールへと落ちた。

「ルフィー！」

あがっていたウソップとキラーとガイはルフィ達を救助する。

「何で、バルバトス先生がいるんだ！？信玄先生いるのに！」

「暑いからと」

ルークの質問に答える小十郎。

「まあ。今回はお館様がいるだろ？そこまで滅茶苦茶にはならないはず」

佐助はそう言った。

「バルバトス！ルフィ達は泳げない体質だ！それを知ってプールに突き落としたと言うのか！」

「んな事関係あるかあ！」

バルバトスと信玄が言い争っている。まあこう言う時は、信玄に任せればいいだろうと政宗は思った。

ところがその時

「あの〜バルバトス先生に、武田先生少しよろしいでしょうか？」

ジエイドが、バルバトスと信玄に話しかける。

「ああん？」

「どうした？」

「実はとある研究所である生物が脱走してこっちに向かっているそうなんです」

研究所から脱走？何かいやな予感がほとんどの者がそう思った直

後。

ゴゴゴゴゴ 突然の物音。その物音の主はプールへと進んでいる。それは銀魂第2訓に出てくるペスだ。

「おいしいい！！何でこいつがあああ！」

新八がつっこむ。しかも何だか怒っている。

「ちなみにあの生物。ハロルド先生の作った興奮剤を飲んでしまったので手強いですよ」

「あのマッドサイエンティスト何やっているんだ！」

銀時がそう叫ぶと同時に、ペスの足が政宗達に向かったくる。

「どりゃああ！」

何とか、避けれたものがいたが、
ドガッ

「ぐあああ！」

バルバトスはあたり、飛ばされていった。

「よっしゃっ！バルバトスの奴吹き飛んだ！」

「アンタ。この状況下で何言っているんですか！」

喜ぶ銀時につっこむ新八。そしてペスはプールへと近づく。

「このままやられっぱなしじゃCOOLじゃねえしな」

「某も協力する！」

政宗と幸村はペスに向かって行く。

「じゃっ俺も行くとするか」

「ああ！」

ユーリとルークも向かう。

「うひょおおお！デッケエタコだ！」

気を失っていたルフィが起きペスを見て喜ぶ。

「あいつたこ焼きにしたらうまそうだな！」

そういったのは、ピンクの長髪的女子生徒、1-Wのボニーだ。

「じゃっ行くアル！」

神楽の言葉を合図にルフィ達も向かう。

向かってくるペスの足をかいくぐる政宗達。

「DEATH FANG!」

「烈火!」

「戦迅狼破!」

「襲爪雷斬!」

「ゴムゴムのピストル!」

「ほあちゃああ!」

しかしまだ倒れない。

「ちっしつこい」

「すみません。少し下がってください」

ジェイドに言われ、政宗達は下がった。

「疾きこと疾風の如く!」

信玄が出した竜巻に飲み込まれるペス。

「戦慄の戒めよネクロマンサーの元に具現せよ。ミスティックゲージ!」

ドガツ ジェイドの術を直接当たった。

信玄とジェイドの攻撃でペスは倒れた。

「スゲエ」

「さすがはお館様!」

「いやジェイド先生も凄いよ」

口々に感想を言う政宗達。

「さてっ。この生物はすぐに研究所に返しなすしう」

「えええ。くえねえのか?」

「まだ研究が進んでいない生物なので、食べてはいけませんよ。」

「てか。その研究段階の奴倒しちゃって良かったのか?」

「気を失う程度に調整しましたよ。全く興奮剤を飲んでいたので良かったものを、普通だったらあなた達の攻撃で倒されていましたよ」
政宗の質問にため息をしながら答えるジェイド。

「いてて」

ルークが腕を押さえながら言う。どうやらペスの攻撃が少し当たったようだ。

「大丈夫か？」

「ああ。一応アップルグミ持ってきたし」

「えっ」

ルークの言葉に固まる生徒達。

「えっ？何」

その後

「アイテムなんぞ使ってるんじゃない！」

飛ばされたはずのバルバトスが戻ってきて、ルークに攻撃する。

「ええええええ！」

その後学園近くの森の大木まで吹き飛ばされたルークが発見されたのはまた別の話

第七話 プールでの戦い（後書き）

作者「どうも。作者です」

銀時「どうも銀さんです。ってか今回も俺の出番全くなかね!？」

作者「気にしたら負けだよ」

銀時「気にするわ!」

作者「安心して、次回の話の後長編出すからそんな時活躍できるはずだよ・・・多分」

銀時「おい!何だ多分って!」

作者「質問・感想待っています!。では」

銀時「無視するな!ってかこついうの前にもあったよな!」

第八話 若き虎と凍空（前書き）

銀時「そっぴや作者。次回から長編やるって言っぴたよな」
作者「うん！詳しくは後書きで！」

第八話 若き虎と凍空

タツタツタツ

人通りがあまり少ない道路に足音が響く。

「はっはっはっ」

足音の主は真田幸村だ。

ここはクロスオーバー学園学生寮から離れた場所。今日は休日だ。普段幸村の休日の過ごし方は信玄直々に鍛錬なのだが、今日は信玄はある用事のため信玄と鍛錬が出来なくなった。そのため幸村は自分の出来る事で鍛錬をすることになった。今やっているランニングもその一つだ。

「はっはっはっ」

幸村が走っていると人通りの少ない交差点に着いた。幸村が走っている道の向こう側に一人の少女が交差点に飛び出していた。その少女の横から車が来て今にも少女を轢きそうだ。

「いかん!!」

幸村は走る速度を上げ少女を抱き上げ、少女が歩いていた道路に向かって走った。間一髪避けることが出来た。

「ありがとうございます。助かりました!」

少女が幸村にお礼を言う。

「いや。大した事はしてないでござる」

少女の容姿は白の長髪で色白の肌だ。「そういえば。何か急いでいたようでござるが?」

幸村は少女に訊ねる。

「あつ。そうでした!お兄ちゃん地図見ませんでしたか?」

「地図?」

そういえばこの子と会う前に何かの紙が空に舞っていたような。

「地図らしき物なら見たでござるが」

「本当ですか！どこに」

「それが、すぐに見失って、申し訳ないでござる」

「そうですか。いえっいいですよ」

少し暗い顔をしたが、すぐに明るい笑顔になった。

「どこか行きたい場所があったでござるか？」

「はい！うちっちクロスオーバー学園って言う学校に転校するんです！それでうちっち寮って言うところに暮らすので、そこに行きたかったんです。」

「クロスオーバー学園でござるか」

「お兄ちゃん知っているんですか？」

「某はそのクロスオーバー学園に通っているの でござる」

「そうだったんですか！」

「もしよろしかったら、某が案内するでござるか？」

「いいんですか！？ありがとうございます！そっ いえばうちっちまだお兄ちゃんの名前聞いてないですね」

「あつ。これは失礼した。某は真田源二郎幸村と申す。お主は？」

「うちっちは凍空こなゆきです！」

「ではこなゆき殿。行くでござる」

「はい！」

幸村とこなゆきは川原の近くについた。

「おつ。幸村じゃねえか！」

声をかけたのは、白い髪で左目には眼帯をした男、幸村と同じクラスの長曾我部元親だ。

「元親殿。何故ここに？」

「今、工芸部の奴らと昨日作ったカラクリのテストをしているところだ」

確かに川原には元親の他に同じ工芸部のウソップとガイとバリスタモンがいる。

「そっでござるか」

「つてか誰だ？その嬢ちゃん」

「ああ。クロスオーバー学園に転校してくるので、学生寮まで案内しているのをごさる」

「凍空こなゆきです！」

「ハハハッ！元気のいい嬢ちゃんだ！俺は長曾我部元親だ。困ったことがあつたら俺に言えよ！」

「おい！元親！早くやろうぜ！」
ウソップが呼ぶ。

「おう。じゃあな！」

元親はウソップ達の元に行った。

「元親お兄ちゃんいい人ですね。」

「元親殿は面倒見が良いからな。さあ行くでござるよ」
「はい！」

次に二人は神社の前についた。

「幸村お兄ちゃん。ここは？」

「辰姫神社でござる。こここの神社に願い事を書いた絵馬を置けば願い事が叶うという噂があるとか」

「そうですか」

二人が話していると、瀬田がやって来た。

「あつ幸村じゃないか」

「瀬田殿。どうしてここに？」

「ちよつとこの神社に用事があつただけど。先客がいるからちよつと待つよ」

「先客？」

幸村は神社の境内へ行くすると神社の端の方にある木の影で二人の男がいる。

「あれは沖田殿とホーキンス先輩？」

「でっ例の品は？」

沖田はホーキンスに聞く。

「もちろん手に入った」

ホーキンスは懷から藁人形を取り出す。

「これにその者の髪を仕込めそして釘を打てば呪う事が出来る」

「ありがとうございます。土方さんの髪すでに手に入ってますし」

「だが釘を打つ場所と時間には気をつける。後誰にも見られない様に」

「分かってますって」

何だか恐ろしい話をしている。

「幸村お兄ちゃん。わらにんぎょうって聞こえましたけど？」

どうやらこなゆきは呪い云々の所は聞いていない様だ。

「知らない方が良い！」

二人はすぐに神社を離れたと言うか逃げた。

二人は次に、広場に着いた。ここまで二人はかなり歩いた

「こなゆき殿疲れていないでござるか？休憩しようか？」

「平気です！」

案外体力には自身がありそうだ。

「あつ真田先輩！」

突然幸村に声をかけたのは赤い髪を二つに括った少女、中等部3-Dの陽ノ本アカリだ。

「アカリ殿どうしてここに？それよりその・・・タイキ殿が」

アカリの座っているベンチの横にはタイキが眠っている。

「ああ。タイキの奴また無茶しちやってダウンして。」

「そうだったのでござるか」

確か前にベルゼブモンから、タイキはよく無茶をすると聞いたような。

「そういえばその子は？」

アカリは幸村の隣にいるこなゆきに目を向ける。

「ああ実は・・・」

幸村はこなゆきが転校生である事と、学生寮まで案内している事を

伝えた。

「そうだったんですか。それでこなゆきは何年なの？」

「中等部3年です！」

「じゃあ。同じクラスになるかも知れないわね。その時はよろしく」

「はい！」

少し話をした後、二人はまた歩き出した。

「あれ。幸村じゃないか」

二人が道を歩いていると、ルークとアツシュに出会った。

「ルーク殿。アツシュ殿。どうしてここに？」

二人が一緒にいるのはとても珍しいのだ。ルークはともかくアツシュはルークと一緒にいたくなさそうだし。

「ああちよつと用がある所があつて。そこがアツシュと同じだから一緒に行っているんだ」

「おいバカ弟。くだらない事を喋っている暇があつたらさっさと行くぞ」

「おいアツシュ幸村に失礼だろ。じゃあ」

ルーク達は去っていった。

「あの人達顔同じでしたね。うちつちビックリしました」

「ルーク殿とアツシュ殿は双子の兄弟でござる。少し仲が悪いでござるが。」

少しの沈黙の後。幸村はこなゆきに質問した。

「そういえば。こなゆき殿」

「はい？」

「こなゆき殿のご両親は？」

少し引つかかっていた事だが言うタイミングが無かった。幸村がそれを訊くとこなゆきの明るい顔が暗くなった。

「こなゆき殿？」

「うちつちの家族は、一族は・・・半年前に雪崩で全滅しました。」
突然の事実幸村は驚いた。

「なつ。そつそれはすまない！その事を知らず」

「謝らなくていいですよ。うちつちは大丈夫です！」

そういつてこなゆきは笑顔を見せた。

その後しばらく二人は会話が出来なかった。

二人は工事が中止されたのビルの前を通りかかった。

「おつ幸村じゃねえか」

前から幸村に声をかけたのは土方だ。

「土方殿」

「どうしたこんな所で、でそのガキは？」

「ああ。実は・・・」

一方その頃 元親達がいる川原では

「よし！坂の上り下りはクリアだな！」

元親達はカラクリのテストを続けていた。

「じゃあ次は・・・『頭からロケット花火発射』？」

ウソップはカラクリの機能が書かれてあるメモを見て固まった。

「ああ。うまく発射できるかどうか調べてみよう。まあ撃つのは上へ撃つけどな。ちなみに火薬は普通のロケット花火の5倍だけだな」

「いやいや。それはあんまここだと危ねえだろ。もっと人里離れた場所でだな」

そう言った時。

ガッ

「うお！」

ウソップは近くの石に転んで

ポチッ

「あっ」

ロケット花火発射のボタンを押してしまった。

ビシュ カラクリからロケット花火が発射して、ロケット花火の目

指す方向は・・・

その数分前

「しまった。俺としたことが。」

総悟の前には、ホーキンスからもらった藁人形が車に轢かれていた。
「困ったな。今夜土方さんを呪おうと思ってすでに土方さんの髪の毛を仕込んだのに・・・」

そして現在 ビルの屋上

「おい。このクレーンのワイヤーちよつと脆くなっているんじゃないか？」

ビルの様子を見ていた作業員はあるクレーンを見る。そのクレーンは数本鉄骨を挟んでいた。

「うわっ確かに。ちよつとの衝撃で切れそうっスね」

「おい！そんな事になって見る！もし下に人がいたら」

その時 ビシュ カラクリが撃ったロケット花火がクレーンのワイヤーの脆い部分に当たった。

「えっ」

ブチッ クレーンのワイヤーは切れ鉄骨が下に落ちる。そしてその先には

「むっ」

ふと 幸村達は何かを感じ上を見ると、鉄骨が落ちてきた。

「くっ！」

幸村は槍を構え

「烈火！！」

ドドドッ 目にも止まらぬ速さで鉄骨を突く。

「おりゃ！」

土方は刀で鉄骨の軌道をずらし避ける。

しかし

フツ これまでの鉄骨より大きな鉄骨が降ってきた。

「ちっ！このデカさじゃあずらせねえ！」

「くっ！」

幸村達は頭を抱え伏せた。

・・・

いつまでたっても、鉄骨が落ちた衝撃が来ない。幸村が顔を上げると

「なっ」

こなゆきがその鉄骨を片手で軽々と受け止めた。

「あっ」

こなゆきは何を思ったかそう言った。幸村達に怪我はなかった。

「さあ着いたでござる」

それから数十分後、二人は女子寮の前に着いた。あの後土方は男子寮に戻った

「・・・」

あれからこなゆきは黙ったままだ。

「こなゆき殿？」

「幸村お兄ちゃん怖くなかったんですか？」

こなゆきは幸村に訊く。

「えっ？」

「あんなに大きいのを片手で受け止めて」

いや別に、っと幸村は思った。学園には色んな人がいる。魔術が使える者も、刀を持たずに人を斬れる者も、雷を出す者も、手足が伸びる者もいる。確かにその小さな体であんな大きな鉄骨を受け止めたのはスゴイ事だが、別に恐れる事ではない。この学園に慣れてしまった証拠だな。そこまで考えた時幸村はある事に気づいた。おそらくこなゆきはその怪力で人々から恐れられ、友達が出来無かったのかもしれない。さっきこなゆきは家族はもういないと言ってた。自分を受け入れてくれる家族はもういない。あの明るい笑顔の裏で

は本当は寂しいのかもしれない。

「確かにこなゆき殿の怪力はスゴいでござる。しかし某はそれでこなゆき殿を怖がったりしないでござる」

「えっ？」

「鉄骨を片手で受け止めようがこなゆき殿はこなゆき殿でござる。怪力だけでこなゆき殿を恐れなくてござる」

「・・・」

「それに、クロスオーバー学園には様々な人がいて様々な力を持った人々がいるでござる。中にはあの鉄骨よりも重い岩を投げ飛ばす者もいるでござる。」

「本当ですか？」

「うむ。だから某は怖がらなくてござる。むしろ某はこなゆき殿の怪力のおかげでこうして無傷でいれた事に感謝しているでござる。」それはこなゆきにとつて嬉しかった事だ。この怪力は一族では当たり前のことだったからそれで感謝されるのはあまりなかった。こなゆきを除く一族全員が全滅した後近くの町に引き取られた時はこの怪力で恐れられた。だが幸村の話ではクロスオーバー学園では、様々な力を持つのは当たり前でこなゆきの怪力はここでは当たり前なものになる。

「では某はこれで」

幸村は男子寮に戻ろうとしている。

「あ、あの」

こなゆきは幸村を呼び止める。

「何でござる？」

「あの、うちの事こなゆき殿じゃなくて、こなゆきって呼んでほしいです」

「別にいいでござる」

「それで、幸村お兄ちゃんの事お兄ちゃんって呼んでいいですか？」
「いいでござるよ」

幸村の返事に、返事にこなゆきは満面の笑顔になった。

「じゃああらためまして、よろしくですお兄ちゃん！」

「こちらこそよろしくでござるこなゆき」

幸村が去った後こなゆきはこの学園を紹介してくれたとがめお姉ちゃんに感謝した。ここではこなゆきの力は当たり前になる学園を紹介してくれた事。そして幸村に出会った事になった事を。

そして幸村が男子寮に戻った時

「ホーキンス！お前後輩に何を渡しているんだ！」

「何故気がついた？」

「さっき総司からお前が沖田に藁人形を渡していたと言ってた」

「ふむ。それがどうした？」

「どこの世界に後輩に呪いをすすめる奴がいる！」

ドレークがホーキンスに向かって何かを言っている。ちなみに彼らは中3からの腐れ縁らしい。

「あつちやああ。バレちゃいましたか。」

「バレちゃいましたかじゃねえ！」

沖田と土方はもめている。

「何でござるか？」

幸村は近くにいた政宗に言う。

「さあな」

余談だが、工学部が作ったカラクリは処分されたらしい。

第八話 若き虎と凍空（後書き）

作者「・・・ハア」

ユーリ「んっ？どうした作者」

銀時「気にすんなよ。何でもデジモンクロスウォーズで何かベルゼブモンが死ぬ流れになっているから落ち込んでいるだけだ」

作者「うるせえな！お前に分かるか！好きなキャラが死ぬかもっていう流れになっているんだぞ！」

銀時「いや別に、俺には関係ねえし。ってかアイツのどこが」

作者「・・・真理の雷」

ピシヤアアアン

銀時「ギヤアアア！！」

作者「さて作者の調子が戻って来たので、長編の話します」

銀時「テメエ。俺はガン無視か」

作者「長編の内容は、夏休み政宗達の里帰りにルーク達が同行します。政宗達はそこである事件に巻き込まれ、そしてある人達の過去が明らかになります。」

銀時「誰だ？そのある人達っーのは？」

作者「それは本編で。後この話ではオリキャラとして政宗の父親と従兄弟が出てきますからそこも楽しみにしてください」

銀時「当然俺も出るよな！」

作者「出るよ。一応」

銀時「おいなんだ一応って」

作者「今回はここまでそれでは」

銀時「楽しみにしてるよ！」

第九話 里帰りと旅行（里帰り編）（前書き）

作者「さあ！今回から長編が始まりますよ！」

銀時「あんま期待すんなよ」

新八「銀さん！そんな事言わないで下さい！」

第九話 里帰りと旅行（里帰り編）

ここは、クロスオーバー学園男子寮。今は夏休み中だ。

「後三日ですね。」

「ああそうだな。」

良直の言葉に政宗は答える。

「何だ？三日後何かやるのか？」

話を聞いていたルークが政宗に聞く。

「俺達三日後に実家に戻るんだ」

「そういえば、政宗達ってかなり遠い所から来たんだっけ？」

「ああ。長い間顔も見せてねえし久々に戻ろうって事に」

「へえー。どんな所何だろうな。政宗の実家」

思わずルークはそう呟く。

ルークの言葉に政宗は

「じゃあ一緒に行くか？」

「えっ？」

「実は親父が『高校で出来た友を連れてきてもいい』と」

「まあ宿題はほとんど終わっているし、でも迷惑にならないか？」

「No problem。連れてくるのは、十人までならいいと」

「そんな大人数で？」

「俺の従兄弟も近くに住んでいるしいざとなったら、従兄弟の家に」

政宗がそこまで言った時。

「うおおお！スゲーよお前」

「ははは。」

「お前らお登勢のババアに感謝しろよ」

何やら食堂の方が騒がしい。

「おい。どうしたんだ？」

政宗達は食堂に向かい佐助に聞く。

「実はルフィの旦那が福引きで旅館の団体様の宿泊券を当てたんス

よ」

「本当か！？」

佐助の言葉にルークは驚く。当てた本人はシシシと笑っているが。

「後、お登勢理事長が知り合いからもらった同じ旅館の宿泊券をめぐって先生達でじゃんけん大会をして銀時先生が勝ったと」

「マジかよ・・・んっ？」

政宗はその宿泊券に書かれている旅館の名前を見る。

「どうした？」

ルークが政宗に聞く。

「この旅館俺の家の近くにある旅館だ」

「政宗の家？」

「ああ。」

「実は」

ルークは政宗が実家に戻ることと十人までなら政宗と一緒にに行ける事を話した。

「じゃあよ皆で行こうぜ政宗達の里帰り」

「まあ。いいんじゃないか」

ルフィの提案にその場にいた全員が賛成した。

「これだと他のクラスの奴も数人行けるな」

「じゃあ俺ジーニアスやゼロスとか誘ってくる」

「俺もキッド達にも声かけてみる」

「待て待てお前ら。とりあえずそいつらの都合も考えろよ」
はい。

「まさか本当に大人数でくるとはな」

「迷惑だったか？」

「いやんな訳じゃねえけど」

「そうか・・・あれっ？」

「どうした？」

「ベルゼブモンとバルモンがいないなっ」と

「ああ。確か今日は家に用事があると。」

「家？」

「ちよと遠いけど、行くの？」

佐助はルークに言う。

「けど俺今日用事があるし。二人も誘いたいけど」

「じゃあ俺が行こうか？」

そう言ったのは政宗だ。

「えっ？いいのか？」

「ああ。」

政宗が行くことになった。

「でっ。何でアンタがいるんだ？」

ここはとある電車の中だ。ベルゼブモン達の家に行くためには電車に乗る必要があるからだ。そして政宗の隣には銀時がいる。

「あいつらの家行つた事ねえしついだと思つて」

「ついだか。」

少し政宗はあきれた。

それから十数分後。

住宅地から少し離れた場所で「ここか？」

「多分そうだな」

政宗達の目の前には大きな建物がある。建物の庭では小さな子供達が遊んでいる。

「何だここ？保育園か？」

「やつぱ間違えたか？」「あれっ？兄ちゃんとおじちゃん誰？」

庭で遊んでいた子供の一人が話しかける。

「お前おじちゃん呼ばわりされてるぞ」

「いやお前だろ」

「いやいやお前だ。なっ、こっちがおじちゃんだろ。」

銀時は子供に聞く。

「白髪のおじちゃんの方だよ」

「このクソガキ！！誰がおじちゃんだ！！」

「落ち着け！COOLになれ！」

「おい。どうしたんだ？」

ガチャ 建物から出てきたのは。

「あつ。ベルゼブ？」

「えつ。政宗に銀時先生？」

「すみませんね。先生に失礼な事を。」

「いやいいって。俺も取り乱しちゃったしな。」

三人は建物の中にある部屋にいる。窓からは庭で遊んでいる子供達の姿が見える。

「政宗の里帰りか。迷惑じゃないならいいが」

「そうか。そういやバルはどうした？」

「バルモンは少し用があつてな。少ししたら帰ってくると思う」

「そうか」

「にしても何だ？あのガキ達」

銀時が聞く。

「俺達の弟です」

「おいおいお前の親父若い頃結構遊んだんだな。」

「いや違うから。ここに拾われた子達だ。」

「孤児か。って事は」

政宗が聞く。

「ああ。俺とバルモンの親は俺達が幼い頃事故で死んだ。そしてこの孤児院に拾われた。」

「そうか。すまねえな。」

「いやいいって。ここに帰ってきたのは、近くを通ったついでに院長に顔を見せるために来ただけだから。」

「そうかい。そっぴや気になっていたんだが。」

「何ですか？」

「あの建物なんだ？」

銀時は孤児院の裏側にある石造りの建物を指差す。

「教会ですよ。女神様の」

「女神？」

「先生は知っていますか？女神の戦士団と言うのを」

「ああ。数年前まであったデジモンで結成された組織だろ？」

確か女神と言うのを信仰し、そして悪事を犯したデジモンや能力者など特殊な者達を捕まえたり、慈善活動ねどといった事をしてたらしい。

「俺とバルモンは正確に言うとその女神の戦士団に拾われたんです。」

「けど確か女神の戦士団は数年前に突然壊滅したんだよな。」

銀時の言葉にベルゼブモンは少し顔を暗くする。

「ベルゼブ？」

「いや。何でもないです。」

「そうか。じゃあ俺達寮に戻るから」

「そうか。俺もバルモンが戻ってきたら寮に戻るから」

「ああ。じゃあな」

それから数分後

「ここだな。」

政宗達はその女神の教会の前に着いた。誰かが手入れをしたのかあまり雑草は生い茂ってない

「あの顔一体・・・んっ？」

教会の扉の前には二束の花束が手向けられている。

「ひよつとしてあいつら。ここが目的だったのか？」

「さあな。お前あんまこういう事に首を突っ込まないほうだろ。」

銀時が政宗に言う。

「ああ。じゃあさつさと寮に戻るか」

「そうだな・・・あっ！」

突然銀時が声をあげる。

「どうした？」

「しまった！今日ジャンプの発売日じゃねえか！」

ハアッ その言葉に政宗はため息をつく。

政宗達が戻ってきてから数十分後ベルゼブモン達が戻って来て、バアルモンもOKだった。

それから出発までの数日は、皆旅行の準備をしていた。

第九話 里帰りと旅行（里帰り編）（後書き）

銀時「にしてもお前大丈夫か？」

作者「何が？」

銀時「確かデジモンクロスウォーズでベルゼブモンが」

作者「イノセントダック！」

銀時「ギャアアア！」

作者「次回ですが、政宗の従兄弟と父親が登場します。」

銀時「んでっ里帰りに同行する奴らも集合するんだよな。」

作者「そうです。次回も楽しみにしてください！」

第十話 久しぶり（里帰り編）

三日後集合場所の学生寮。

「全員揃ったか？」

銀時が聞く。

「OKだ。」

「こつちもいる。」

全員いるようだ。

「政宗の実家かどんなところなんだろうな」とルークは呟く。

「聞いた話ですが、海が綺麗な場所らしいとか。楽しみですねアッシュ。」

「ああそうだな。」

ナタリアとアッシュは楽しそうに会話をしている。

「おい里中。天城は来てないのか？」

陽介が千枝に聞く。

「雪子旅館の手伝いで来れないってさ。一緒に行きたかったな。」

千枝は残念そうだ。

「にしてもまさかこんなに集まるとは思わなかった。」

「そうでござるな。」

佐助と幸村が話していると

「あつ！お兄ちゃん！」

幸村に声をかけたのはこなゆきだ

「こなゆき。こなゆきも来てたでござるか！」

「はい！皆に誘われました。」

「おい真田。何だそのガキは？」

「てかさつきお兄ちゃんって言ってたよな。妹さん？」

政宗と慶次が聞く。

「いやそんな訳あるか。」

「色々あつて親しくなつたのでござる。」

「凍空こなゆきです！」

「伊達政宗だよろしくな。にしても真田が猿飛以外を呼び捨てするところなんてはじめて見たぜ。」

「おつ。こなゆきじゃねえか。」

「こなゆきに話しかけたのは七花だ。隣にはとがめがいる。」

「とがめお姉ちゃんに七花お兄ちゃん！」

「何だ？知り合いか？」

「ああ。昔少しな。」

「答えたのはとがめだ。」

「おい。さつたと駅行くぞ。」

「はい。」

「あなたもまさかこんなに集まるとは思わなかったでしょ？」

「政宗に声をかけたのは、青の長髪で耳が尖った女子生徒、同じクラスのスジュディだ。」

「ああ。まっほとんどの奴は旅館だしな。」

「でも十人はあなたの家に来るそうね。」

「まあな」

「おい。お前ら何してんだ。」

「銀時が呼ぶ。」

「ああ。すぐに行く。」

「出発した。」

新幹線の中で

「おい。何してるんだ？テメエ」

「座っているだけだが？」

「その座ってる場所だよ。どこ座ってんだ！？」

「座席ではなく七花の膝に座っているとがめ。」

「あつ！」

「はうつ！」

コレットが何もない所で転んで、手に持っていたホットドリンク（間違えて買ってしまった）を工舎にぶっかけたり。

「おい。この駅弁うめえな！」

「それよりこっちのも美味いぞ！」

「おかわりネ！」

大食トリオ（ルフィ・ボニー・神楽）が駅弁や途中で買ったみやげ物の菓子を食ったり

「あれ？巽君熱があるんですか？顔が赤いですよ。」

「なっ何でもねえよ！」

完二が同じクラスの白鐘直斗と隣の席になって赤面したり（りせが席を替えました）

「お妙さん。隣の席に座っても」

「うるせえ！」

「お妙ちゃんに近づくな！」

近藤がお妙と九兵衛にぶっ飛ばされ、そのぶっ飛ばされた近藤が、

「うう小生とした事がゴッソ！アツッ！」「官兵衛！」

官兵衛に当たり、しかも官兵衛の手に持っていたホットドリンク（間違えて買った）を官兵衛の顔に浴びたりなど

まあ新幹線の中でもこんな事をしていたが、数時間後ついに目的地に着いた。

「着いたぞ。」

「確か、政宗の従兄弟が出迎えてくれるんだっけ。」

「ああ。にしてもどこで」

「おい！政宗！」

政宗に声をかけたのは、褐色の肌で黒の短髪の政宗より背の高い男。
「よう。久しぶりだな。」

「政宗は相変わらずだな！それよりこんなに大勢で、皆お前の」
「ちげえよ。ほとんどの奴は別の理由で来た。」

男と政宗が楽しそうに話している。

「あのさ。政宗。ひよつとしてこの人が」

「ああ。俺の従兄弟の成実だ。」

「伊達成実^{しげさね}だ。よろしくな！」

「初めまして。俺ルークといいます。」

「ミユウですよ！」

「そんなかたくなになくても、いいつて。それよりその死んだ魚のような目のした奴は何だ？」

「どーも。こいつの担任の銀さんです。」

「ああ先生なのか！いつも政宗がお世話になってます。」

「テメエは俺の親父か。」

「久しぶりだな。成実。」

「お久しぶりです成実さん！」

「小十郎にお前ら久しぶりだな。」

「何だか。気さくな人だな。」

「ああ。」「じゃあとりあえず、家に帰ろつか。叔父さん待つてるぜ。」

「ああ。」

それから数分後ルフィと銀時が当てた宿泊券の旅館に着いた所で一時旅館に泊まる組と政宗の実家に泊まる組の二組に別れた。

ちなみに実家に泊まる組のメンバーは政宗達以外ではルーク、ユーリ、慶次、元親、新八、ロイド、桂、総司、陽介、ガイだ（ちなみに、旅館組と実家組を決めたのはくじ引きで決めました。）

「着いたぜ。」

旅館組と別れて数分後政宗の実家に着いた。

和風の家で青い屋根瓦だ。

「結構大きいな。」

ユーリがそう呟く。

玄関の前に立ち政宗は開けようとしたが手を止め右手で刀を持つ。

「政宗？どうしたんだ？」

ルークの問いかけを無視して政宗は左手で扉を開ける。

その瞬間

ガキンツ

突然玄関から一振りの刀が出てきて政宗はそれを刀で受け止めた。

「えっ！？」新八が声をあげる。

「いきなりこんな Surprise かよ。」

「腕はおちてないようだな。」

「HA！当然だ。久しぶりだな親父。」

「ふっ。そうだな。」

「ちよつと叔父さん。出迎えの挨拶それかよ。」

「政宗が腕をおとしてないかと思ってな。」

政宗に攻撃したのは、少し短い髪を結って口元に髭を生やした男だ。

「あの。」

「んっ？」

「何やってるんだアンタら！？」

「いきなり剣勝負かよ」

新八とユーリがつっこむ。

「君達は、政宗の友達か？」

「まあ俺と小十郎のクラスメートみたいなもんだ。」

「そうか。驚かせてすまなかった。私の名は伊達輝宗という。よろしく。」

「あつ。どうも。」

とりあえずさっきの事は受け流す事にした。

「まあまあ。ここで立ち話するのは何だしとりあえず中入ろうか。」
成実の提案で中に入る事にした。

ルーク達は自分達が寝る部屋に荷物を置いた。

「あれ？政宗は？」

ルークは近くに政宗がいないことに気がついた。

「自分の部屋に荷物置いてっで親父さんと話してるんだろ。」

ユーリが答える。

その時、新八の携帯が鳴った。

「はい。はいそうですね。僕達の所も着きました。・・・分かりました。」

ピッ

「先生達海に行く準備出来たって。っで海に集合ってさ」

「早いなオイ。」

「じゃあ。俺達も少ししたら海に行こうか。」

それから少しして、政宗達が戻り、準備が出来た後政宗達は海へと向かった。

第十話 久しぶり（里帰り編）（後書き）

銀時「ついにしやがったなオリキャラ。」

作者「はい。政宗の父親と従兄弟です。紹介文書いておきます。」

・伊達輝宗

政宗の実の父親。

物静かで冷静だが、剣の腕は小十郎以上。

・伊達成実

政宗の従兄弟。

年は政宗と同じ。気さくで少し兄貴肌。

作者「今回は海に行きます。そこで何人がフラグが立ちます。」

銀時「じゃあ俺も。」

作者「また次回」

第十一話 海へ行こう！（里帰り編）

浜辺

「うつひよおおお！！海だ！」

「うるせえぞ。ルフィ。ガキですかこのヤロー。」

銀時達と合流した政宗達。

「じゃあ早速あその更衣室で水着に着替えましょう。」

数分後

女子より一足先に着替えを終えた男子達。

「じゃあ早速行くとするか！海の男の血が騒ぐな！」

そう言つて元親は海へと向かう。

「よし！じゃあウソップ！俺達も行くぞ！」

「待てルフィ！お前泳げないだろ！」

「大丈夫浮き輪あるから。キッドとローも早く来いよ！」

「ああ？んな自ら溺れに行くバカがどこに」

「ひよつとしてユースタス屋お前海が怖いのか？」

ローがニタツつと笑い挑発する。

「んだと！？待ちやがれ！」

ローを追うキッドその先には海

「キッド！浮き輪！浮き輪！」

「幸村よ！沖まで行くぞ！」

「了解しました！お館様！」

そう言つて猛スピードで沖まで泳ぐ幸村と信玄。

「スゴッ」

ルークは幸村達を見ながら言った。

「あつ。ルーク」

後ろからティアの声が聞こえる。

「ティア。やっと来た。」振り替えると水着に着替えたティアだった。

「どうしたの？」

「いやっ。可愛くなって思っで。」

「そう。」

「おい。慶次と一緒にビーチバレーしようぜって言ってたけど。おっティア可愛いじゃないか。」

「分かった。一緒に行く！ティア行こうか？」

「ええ。」

「やっぱりナミにしいなにジュデイス胸デッカイアル。」

ナミとしいなとジュデイスと神楽が話している。

「そうかしら。」

「どうしたら、そんなにでっかくなるアルか？」

神楽は自分の胸を触る。

「フフツ。いつか大きくなるわよ。」

「ああ。にしてもアンタ達。恥ずかしくないのかい？」

しいなはナミとジュデイスの水着を見る。二人の水着は露出度が高いのだ。

「別に気にしないわ。」

「そうね。」

「うおお！ナミちゃんにジュデイスちゃん最高です！」

「ナミすわああん！」

奇声を発したのはアホ神子ことゼロスとエロコックことサンジだ。

「アンタ達か。」

しいなはため息をつく。

「おっ。しいな何だよその水着。あんま露出してねえな。もっとう」

ドゴッ

「殴るよ！このアホ神子！」

「黙れネ！」

しいなと神樂がゼロスとサンジをぶっ飛ばす。

「殴ったよだろ！」

「何で俺も！」

バシャーン

「全く。あっそういえばアイツどこなんだろう。」

「えっ？ロイドならあそこでジーニアスと。」

「違うよナミ。アイツって言うのは」

しいながそう言いかけた時

「おい！ゼロス殿とサンジ殿が飛んで来たが一体何があったでござるか！」

海から幸村の声が聞こえる。しかも近づいている。

「ああアイツらの事は気にしない」

しいな達は固まった。何故なら幸村と信玄が巨大なシャチに乗って来たからだ（ちなみに信玄は二匹のシャチの背に仁王立ちをしている）。

「アンタら何してんの！」

「実は沖まで行ったらこのシャチ達と出会ってお館様と共に戦いそして意気投合したでござる！」

「こ奴らも熱き心を持っておる。」

「スゴッ。」

「拳で語り合えば種族の差など」

「幸村。こっち見るネ。」

「むっ？」

神樂が指差す方にはナミとジュデイスがいる。

「よっ」

「フッ」

次の瞬間

コオオオオ 幸村の顔が真っ赤になり。

「は・・・は・・・は・・・破廉恥でござるつつうう！！」

幸村は海を走った。

「ちよつと幸村！」

「なるほど。アイツって幸村のことでアイツのためにああいう露出を控えた水着にしたのね。」

ナミは納得した。

「でも何でアルか？幸村に対して」

神楽は首を傾げる。

「なるほどねえ。デカメロンにもついに」

「ほーう。」

さつき飛ばされたゼロスとサンジが海面に顔を出し言う。

「とがめお前海に入らないのか？」

「何を言っておる。日焼けするではないか。それに貴様は私のひ弱さを知らないのか？波が来たらすぐ流されてしまっわ。」

「なら普通の服を着ればいいじゃないか。それにその時は俺が助けるのに。」

七花ととがめが話す。

「おつ貴様もそう言う事が言えるようになったか。それよりどうだ？私の水着は？」

「・・・えっ？」

「ちえりお！何の反応も無いのか！可愛いとか何か言え！」

「あつうん。可愛いな。」

「相変わらずあの二人仲いいな。」

「そうだな。」

その二人を見ながら、陽介と総司が話す。

「にしても羨ましいぜ七花！俺も彼女欲しい！」

「ははっ。」

総司は苦笑いした。

海の家

ウオオオオ!!

海の家で歓声が上がっている。その中心にいるのは

「おかわり!」

「俺も!」

巨大なラーメンを食べているボニーとルフィだ。

店の張り紙には『ジャンボラーメン! 時間内に食べきったらタダ!』と書かれてある。

「すみません。勘弁して下さい。」

店長は涙目だ。

そこから少し離れた場所では

「おい! マヨネーズがきれたぞ! おかわり!」

「いやお客さん初めてですよマヨネーズをおかわりする人なんて。」

「知るか! 焼きそばが台無しだろ!」

「いやもうそれ焼きそばじゃないです。黄色い物体です。」

「土方さん。よかつたら俺のマヨネーズ使いませんか?」

総悟が土方にマヨネーズを渡す。

「おう。すまね・・・おい総悟何か入れてねえだろうな」

「嫌ですね土方さん少しばかり毒薬を(ボソツ)。」

「やつぱかよおお!!」

土方と総悟のバトルが始まった。

「ハアツ!」

浜辺でビーチバレーをするロイド達。ロイドの鋭いスマッシュがドゴツ

「ウゲツ!!」

新八の顔に当たる。

「あっゴメン新八!」

「お前何やったんだよ。大丈夫か新八?」

銀時は落ちた新八の眼鏡を拾って言う。

「お前何やってんだよ！つーかドッジボールの時もあったよなそんなの！」

「んだよちよつとした冗談だつて。」

「冗談にも程があるは！！」

「全くよお。」

近くにいたユーリがため息をつく。

「あの。ユーリと一緒にビーチバレーやらないんですか？」

エステルが聞く。

「面倒くせえし俺やった事ないしな。」

「そんな楽しいですよビーチバレー。」

「分かったよ。やるぜ。」

「よかった。」

ユーリも参加する事になった。

「それにしても政宗の学校って面白い奴多いな。」

皆と少し離れた場所で、政宗と成実が喋る。

「HA！まあな。」

ふと見ると、近藤が妙に吹っ飛ばされたり、先程飛ばされたゼロスとサンジに運悪くぶつかり気を失った工舎と官兵衛（官兵衛はその直後クラゲに刺された）がガイとフレンに助けられたり、元親の碇槍にロープを繋げ水上スキーを楽しむ慶次がいたり、気を失った幸村をしいなが見たり、とがめと否定姫が女の戦いをしたりなどがあった。

「だがそのお陰で退屈しないですむがな。」

「あつ。政宗に成実さん。ここにいたのか」

「成実でいいよ。でどうしたんだ？」

「ビーチバレーどうかなって思ったんだけど。」

「俺はあんま興味ないしな。」

「そっか。あつそういえば聞きたい事があつただけど。」

「何だ？」

「政宗のお父さんの輝宗さんと従兄弟の成実があったけど、政宗のお母さんってどこにいるんだ？」

その言葉に政宗達は凍りついた。

「えっどうしたんだ？」

「えっあーその〜。」

答えに詰まる成実だが政宗は

「俺のお袋はもういねえよ。」

「えっ？」

「ちよつと歩いてくる。」

そう言つて政宗はどこかへと行つた。

「政宗つてお母さんを亡くしてるのか？」

「いや・・・そういう意味じゃないけどでも・・・もう叔母さんはいないしそれに・・・アイツも」

「えっ？」

ルークはそれ以上聞けなかった。いや聞いてしまえば、もう政宗と仲良くやれないと思つた。

その後、日が暮れて政宗達は政宗の家へ、他のメンバーは旅館へと戻つていった。

だがルークは海で政宗と成実が言つたあの言葉が頭から離れなかった。

第十一話 海へ行こう！（里帰り編）（後書き）

作者「どうも作者です。」

銀時「銀さんです。にしてもしいなと幸村にフラグ立ってるけど大丈夫か？幸村の奴？」

作者「まあ大丈夫でしょ。」

銀時「あと政宗に何か妙な感じがするんだが、一体何なんだ？」

作者「それは、追々分かっていきます。次回は政宗達が夏祭りに行きます。そこで数組はデートっぽい事をします。」

銀時「俺は入ってるか？」

作者「入ってません。」

銀時「ウガッ！」

ドサッ

第十二話 夏祭り（里帰り編）

今日は政宗の家の近くで夏祭りがあるらしく行くことになった。

「つでどこを回ればいいんだろう？」

ルークはそう呟いた。

今ルークは、祭の会場の入口付近にいる。祭好きの慶次達はもう行っちゃったし、他のメンバーもどこかへと行っちゃったし。

「あら。ルーク。」

ルークに声をかけたのはティアだった。

「ティア。どうしたんだ？」

「少し辺りを歩いていただけよ。」

「あのさ。俺と一緒に回らないか？俺一人だし。」

「別にいいけど。」

ルークとティアは一緒に行くことになった。

「ふふふ。やったな。」

「いいねえ。恋だね。」

二人から少し離れた場所でガイと慶次が話している。

「さてさてどうなるんだろうな。」

一方

「結構人集まっているんだね。」

「この祭は、ここでは一番人気のある祭でござる。」

「そういや。アンタもこの出身だっけ。」

「うむつ。それにこの祭で太鼓を叩くのはお館様でござる。」

「そうかい。」

しいなと幸村が話す。近くに知り合いはいない。

（何でこんな事に・・・）

しいなは数分前の事を思い出す。

「よっデカメロン。」

会場の近くを歩いていたしいなに声をかけたのはゼロスだ。

「なんだい。アホ神子」

しいなは札を構える。

「いや。何で警戒してんの。まあいいや。ちょっと来いよ。」

「えっ？ちよっ」

そう言われて、しいなはゼロスに押されて、ある場所に行くと

「幸村？」

「しいな殿？何故ここに」

「それはこっちの台詞さ。どうしたんだい？？」

「それが、佐助がここにいてくれと言われて、さっき電話で『少し用事が出来た』と言われてどうしようかと」

「じゃあ。俺様はこれで。」

そう言つてゼロスは何処かへと行つた。

「何がしたかつたんだろ。まあよかつたらアタシと一緒に回らない？」

「いいでござる。」

そして現在

「よし。何とか上手くいつてるな。」

「おう。」

少し離れた場所でゼロスとサンジが頷き合っている。

「二人共良い感じね。」

そう言つたのは、水で出来た体の女性。総司のペルソナの一体ウンディーネだ。

「あの何がですか？」たまたま近くにいた新八が聞く。状況がまだ飲み込めてない

「しいなはな。恋をしているんだ。幸村に」

ゼロスが言う。

「ええええ！！？マジですか！」

「ちょっと声が大きい。バレるって」

「だが、アイツは好きって言う事に気がついていない。だから俺様達が後押ししてやろうという事になったのさ。」

「アタシは総司を通じて知ったからね。一定の範囲なら総司と離れていても実体化するし。」

「レディの純粹な愛。見守ろうじゃねえか。」

「はあ。あの僕はここにいなきゃダメですか？」

「いや。お前どっか行つていいいぜ。」

ゼロスの言葉にムカツときたが、堪えて何処かへと行く新八であつた。

一方

「ふうやつと終わったな。」

政宗は皆よりかなり遅れて会場に來た。

政宗はここに来る途中、中学時代の頃からの良直達以外の舎弟達と出会いお互いの事を話し合っていた。しかも政宗は中学時代はかなり名の知れた男（不良）だったので舎弟の数は多いため、時間がかったのだ。

「小十郎はどこかへ行つちまつたし、どうすつかな。」

そう呟いていたら

「随分遅かつたわね。」

「テメエかジュデイス。」

ジュデイスだった。

「ユーリ達はどうした？」

「良い雰囲気なのに邪魔しちやいけないでしょ？」

「Ah。確かにな。」

エステルがユーリの事が好きと言う事は知っている。

「いつもいる先輩やあなたの舎弟は？」

「小十郎はどこかへ行つちまつたし。アイツらここまで付き合わせる事もないし。」

「そう。じゃあお互いに一人だし、一緒に行かない？」

「ああ。別にかまわねえけど」
政宗はジュデイスと共に行く。

ルーク&ティアペア

「でっティア。どこか行きたい場所ってある？」

「いいえ。特にはあなたは？」

「俺も別に……。」

ルークは悩んでいた。話のネタが無いことだ。

（何かないかな。学校じゃ時々話しているけど）
そう悩んでいると。

「おっルーク！ティア！」

ルーク達を呼んだのはルフィだ。側にはウソップとチョッパーとハ
ンコックがいる。

「よっルフィ。ゾロ達はどうしたんだ？」

「サンジはナンパしにいったし、キッドには断られたし、ローはど
っかいったし、ゾロは……。」

「んっ？ここどこだ？」

何故か山の中にいた。

「迷子だし。」

「……っでハンコック先輩は」

「気安く呼ぶな！」

「はい。」

「ハンコックがさっき一緒に行きたいって言ってたんだ。祭はたく
さんいるほうが楽しいし。」

おそらくハンコックはルフィと二人っきりで行きたかったんだろう。
少ししてルフィ達と別れた。

「っでどこに行こうか」

ティアに聞いたがティアはある方向を見たまま動かない。

「ティア？」

ルークがその方向を見るとそれは射撃の店だった。棚には様々な景品が並んでありその中にクンフージュゴンのぬいぐるみがあった。

「あ、ありがとう。」

ティアの手にはクンフージュゴンのぬいぐるみがある。ルークが射的でとった物だ。

「いいって。それより何だか人が多くなって来てるな。」

「そろそろこの祭りのメインイベントがあるそうよ。」

「ティアにカツコイイ所を見せれたなルーク。そういやこの祭りのメインイベントってなんだ？」

「たしか武田のおっさん達の太鼓の演奏とその後には花火が打ち上がるらしいぜ」

「この祭りってメインイベントになると騒がしくなるな。」

幸村&しいなペア

「にしても人が多くなって来てたね」

「そろそろお館様達の太鼓の演奏が始まるからな。」

しいなと幸村が話している。二人はとりあえず出店に寄ったり辺りを歩き回ったりしてただけだった。二人が会話していると

「市絶対に手を離すなよ！」

「はい長政様。」

長政とお市が手を握りながら歩いていた。

「まあこんなに人が多いとはぐれやすいしね」

「そうでござい」

ドンッ

誰かがしいなに当たりバランスを崩した事によりしいなは人の波に飲み込まれる。

「あっ！」

「しいな殿！」

ガシッ 幸村はしいなの手を掴む。

「怪我は！？」

「大丈夫ないよ。それより・・・」

しいなは顔を赤くする。

「しいな殿？」

「手を離してくれるかい？」

「えっ・・・あつまぬ！！」

幸村は手を離す。

（何だろう。何で顔が熱くなっているんだろう）

しいなは自分の気持ちが分からずにいた。

「うおお！やりやがった幸村！」

「ふっ手を繋ぐなんて、見ろよしいなちゃん顔が赤いぜ。にしても

うらやましい俺まだナミすわぁんとでさえ手を繋いだ事ないのに！」

『でもまだ自分の気持ちに気がついてないようね』

影から見守っていたゼロス達。

政宗&ジュデイスペア

「ぶ、ぶ、プレセア！ぜ、ぜっ、絶対に、は、離さないでね。」

「はい。」

2・Dのジーニアスとプレセアが手を繋いでいる。

「何やってんだあいつら。」「そうね。」

政宗とジュデイスがその様子を見ていた。

「そっいえば政宗に彼女は？」

「いや。いねえぜ。大体俺に興味を持つ女ってあんまいないと思うし」

「そうかしら？」

やけにジュデイスの声が強い。

「どうした？」

「いえ。何でもあつ！」

ジユデイスはわざと転んで政宗に抱きつく。

「うおっ！」

「ごめんなさいね。」

「いや。それはいいから早くどけよ。何か見ている奴もいるし」

「くうう！うらやましいぞ政宗！俺様ジユデイスちゃんに抱かれた事ないのに！」

遠くから見ていたレイヴンが悔しがる。

「何を言っているんだお前は。」

「にしてもジユデイスの姉さん急に転びましたね。」

「まあ確かに。」

小十郎と良直達はその理由が分からなかった。

それから少しして祭りのメインイベントの一つである太鼓の演奏が行われた。中央には信玄がその中で一番大きな太鼓を叩いている。客席はかなり盛り上がっている。

数十分後演奏が終わった。

「すごかったね！さっきの演奏！」

「うむっ！」

幸村は自分が褒められた様に嬉しそうだ。それほどまで信玄の事を慕っているのだ。

「次は花火が上がるんだっけ？」

「実は某花火を見るのに最適な場所を知っているでござる。」

「本当かい？」

「去年佐助と共に見つけての、こっちでござる。」

幸村はしいなを案内する。

「ティアちよつと休むか？」

その少し前。ルークとティアが話す。「ええ。あの神社はどうかし

ら？」

二人は近くにあった神社で休憩する事になった。

「・・・」

「・・・（気まずい）。」

ティアは何か喋らないといけないと思った。

「あの・・・ルーク？」

「何だ？」

「学校はどう？」

「いや楽しいけど」

それくらい同じクラスだから知っているのに

「じゃあ」

「んっ？」

「・・・イオンはどうしてるの？・・・はっ」

ティアは口をおさえる。

（何て事を）

言っではいけない事なのに

「イオンは病院を通院しながらだけ学校に行ってるよ。」

「そう。ごめんなさい。あなたが一番いやな事を聞いてしまつて。」

「いいつて。ティアが謝る事じゃないし。それにあれは俺のせいだし。」

「ルーク。でもあれは！」

ティアの脳裏に浮かぶのはあの日の出来事あの日の前からルークの事は知っていたがあの日からさらにルークという人の事を知った。

「あれはあなただけの」

「あれっ？ルークとティアじゃねえか。」

二人に声をかけたのは銀時だ。

「先生？どうしてここに？」

ルークが聞く。

「さつき。政宗の親父さんとあつてよ。花火がよくみえるポイント

があるっていわれてよ。」

「そうですか。」

ルークはさっきの話を聞かれたかと思ったが銀時がルークにこっそりと

「安心しろ俺は聞いていない。」

と教えた。

「おつ。ルーク達じゃねえか。」

次に政宗とジユデイスが来た。

「政宗。政宗達も花火を？」

「ああつ。」

その後幸村としいなが来て、Z組や他のクラスの者も来た。その後花火を見た後、それぞれ旅館と政宗の実家へと帰った。

第十二話 夏祭り（里帰り編）（後書き）

銀時「おいおい。ルークも何か曰く付きの過去あるのかよ。」
作者「次回は、政宗とルークの過去が明らかになります！」

第十三話 人は誰しも知られたくない過去がある（里帰り編）

旅館にて

「はあゝにしても風呂もゆっくり入れないのかよ。」

ガイはため息をこぼす。

ここは旅館にある温泉のすぐ近くの中庭。ガイは浴衣を着ている。

ガイ達は温泉に入っていたが、さすがはと言うべきかクロスオーバー学園の生徒が何人も揃っていたら何も起きない事はない。

ルフィやウソップなどがはしゃぐのは別にいいとして（いいのかよ！）

あの水泳の時の女子更衣室ののぞきと同じく女湯をのぞこうとするバカ（サンジ、近藤、東城、レイヴン、ゼロス）がいた。（ちなみに陽介は政宗の実家にいるのと前回七花にボッコボコにやられたのが原因で参加しなかった）。

しかしすぐにバレて、術や技やスキルなどでボッコボコにされた。

しかし技の一部が男湯の方に行きしかもたまたまそこにいた官兵衛が吹っ飛ばされさらに吹っ飛ばされた先が超高温の熱湯風呂だった。あの時の官兵衛の悲鳴はまだ耳に残っている。

「あの後、ドレーク達が助けて、んで原因を知った七花やエミル達がサンジ達をフルボッコしたんだよな。」

ガイはそう呟く。すると

「あつガイ先輩。」

自分に声をかけたのはティアだ。

「おっティアどうしたんだ？」

「えっと・・・。」

「ルークが何かしたのか？」

「いえっ！って何でルークが出てくるんですか？」

「祭りでアイツとデートした後何だか暗かったからな君もルークも。」

「デートって・・・はい。でもアレは私が悪いんです。」

「えっ？」

「神社に行った時私はルークにある質問をしてしまったんです。」

「あの質問？」

「『イオンは元気が』っと。」

「イオンって・・・ルークの友達の名前だよな。ルークより一つ下の。」

ガイは覚えている。あれはまだガイがクロスオーバー学園に入学する前、当時のルークの数少ない友達だったイオンを。

「なあティア。」

「はい？」

「本当に何があったんだ？俺がクロスオーバー学園に入学して、アイツが転校するまでの間。アイツは教えてくれないし。それにアイツが変わったしな」

「・・・。分かりました。私もルークが中学を卒業して転校するまでの間は知りませんが、私の知っている限りなら。」

ティアは語る。

一方 政宗の実家

ルークは一人軒下にいた。さっきまで政宗達と成実で話が盛り上がっていた。自分達の通っている学園で起きた事や成実の話などで。今でも笑い声が少し聞こえる。

ルークはある事を思い出す。あの海で

『お袋はもういねえよ。』

政宗のあの言葉、政宗に何かがあったはず。しかし無理に聞こうとは思わない。言いたくない過去かもしれないし、ルークも、誰にも知られたくないような過去を持っているからだ。

ふとルークは自分の髪に触れる。

（俺はあの頃から変わったのか）

ルークは自分の過去を思い出す。

昔のルークは今と違って、大変わがままで自己中心的で自分の責任を他人に押し付けるような、今思えば最悪な奴だった。そのためかルークには友達があまりいなかった。そんな自分の友達だったのは自分より一つ年下の少年、イオンだった。イオンは体が弱いが誰にも優しく、しかし心は強い。

ルークは自分の数少ない友達だったイオンのことを大切に思ってた。それは今も変わらない。

しかしルークが中学3年の時そんな日常に変化が訪れた。

中学3年の夏、ルークはある柄の悪い先輩にその性格のせいで目をつけられそしてケンカを挑まれたのだ。

今から思えばやめとければよかったのに当時のルークはその時自分の事をバカにされたせいで、そのケンカを挑んだ。

しかし相手は一人ではなく多数だったのとその時のルークは未熟だったのでルークはボコボコにやられたのだ。そしてルークに攻撃が迫ったその時イオンがその現場を目撃して、ルークを庇い自分が飛ばされ、イオンは近くにあった川に落ちた。

さらにそれを目撃したのはイオンだけではなくある少女も目撃していた。

それは当時同じクラスだったティアだった。

ティアはその男達に攻撃したが、ティアも巻き込まれてしまい、ティアは大怪我を負った。

その後イオンかティアどちらかが呼んだ警察が来てその男達は逮捕された。

イオンは川に落とされ体が弱いとその日は体調が悪かったのが原因でかなりやばかったらしい。

周囲はルークはただ巻き込まれただけと思っており、ルークは友達を傷つけられた少年と言う目で見られた。

しかしルーク本人は自分が許せなかった。自分のせいで無関係なイオンやティアが酷い目にあったそう思うようになった。ルークは自

分を責めある事を思った。

このままじゃいけない。このままじゃまた誰かが自分のせいで傷つく。

変わりたいとルークは決意した。ルークはその時長髪だったが決意の証として髪を切った。

その後ルークは自身の頑張りや支えてくれた人のお陰で今のようなルークになったのだ。しかしルークは未だにあの日の出来事を忘れられないのだ。

「おや。君はルーク君だったか？」

過去を思い出していた時ルークは声をかけられた。それは輝宗だ。

「あつ輝宗さん。」

「政宗達の所へは？」

「ちよつと疲れたので休んでいるんです。」

「そうか。」

そう言うつと輝宗は少しの間口を閉じる。そして

「君から見て政宗はどんな感じだ？」

「えっ？・・・まあ。冷静だけどどこか熱い所があるし、それに俺達にも優しい、いい奴です。」

「そうか。」

輝宗は嬉しそうだ。

「はい。」

「もうあれから何年も経つのに心配してしまうとはな。」

「あれから？」

「・・・」

「もしかして、政宗のお母さんの話ですか？」

その言葉に輝宗は目を大きく開いた。

「何故そう思う？」

「実は」

ルークは海で政宗に質問した事とその時の政宗の反応を伝えた。

「そうか・・・アイツもまだあの事を・・・ルーク君。」

「はい。」

「今から言うことはあまり人に話さないでくれるか？」

「は、はい。」

輝宗は一度目を閉じそして再び目を開け話す。

「私の妻、政宗の母親は数年前に離婚している。」

「！！」

「政宗は幼い頃に病によって右目をなくした。政宗に右目がなくても、政宗は政宗だ。だから私は政宗とは今まで通りに接した。しかし私の妻はそうではなかった。」

「えっ」

「妻は政宗を嫌い、政宗に、自分の息子に向かって『醜い』と言った。」

「そんな！ただ右目をなくしただけで！」

「確かに、しかし妻は政宗をその日から突き放した。私のもう一人の息子で、政宗にとっては一歳下の弟である小次郎を、政宗から離し、政宗と会う事を禁じた。」

「そんな・・・あんまりだ。」

「それから数年が経ち、私と妻は離婚、妻は小次郎を連れて何処かへと消えた。」

「捜さなかったんですか？」

「いくら捜しても消息は不明私が家を出ている間に出て行った。それが政宗の心を」

「政宗の・・・心？」

「政宗は私に言ったのです『俺のせいで、皆離れ離れになった。全部俺のせいだ』と」

「そんな！政宗は悪くない！どこも悪くはないのに！」

「私も政宗に言いました。そんな事はないと。しかし政宗には声が届かなかった。政宗は学校でも右目がないせいでいじめられていた。それと妻と小次郎が出て行った事によって心に深い傷を負ったのだ。」

「心の・・・傷。」

「体に受ける傷はそれほど酷くなければ、いつか治る。でも心の傷を治すのはとても難しい。今はああして笑う事も出来るが、当時の政宗は消却的で人を恐れて笑わない子だったんです。」

今の政宗とはとても違う。

「しかしそれでも、政宗は強くなりました。力だけでなく心も。政宗だけの力だけでなく小十郎や政宗を慕う者達のおかげで、政宗の心は癒されました。」

それだけじゃない。輝宗も政宗の心を癒してくれたのだろう。とルークは思った。

「だが政宗の心はまだ完全に癒えてないだろう。」

「そう、だと思います。」

あの顔も

「話を聞いてくれて感謝する。ありがとう」

「いえ、こちらこそありがとうございます。」

そう言った後、輝宗は何処かへ行った。

「心の傷」

ルークは物思いにふけた。

「親父から話を聞いたのか？」

突然声をかけたのは政宗だ。

「き、聞いてない。」

「HA！謝るなよ。もう気にしてねえよ。あれからもう何年も経っているんだ。」

おそらくそれは嘘だろう。政宗はあまり素直じゃないから。

「おーい！何してるんだ！」

陽介が呼ぶ。

「あつ！すぐ戻るよ！」

ルークと政宗は元の部屋に戻った。

第十三話 人は誰しも知られたくない過去がある（里帰り編）（後書き）

作者「どうも！作者です。今回はこの話のメインキャラ政宗とルークの過去を書きました。」

銀時「人はそれぞれ色んな過去を持っているんだよ。」

作者「おっ銀さん良いこといったね。」

ユーリ「史実の伊達政宗もそうとうな家庭事情だしな。」

銀時「てか昔のルークって初期の（長髪）ルークなような感じか？」

作者「はいそうです。では今回はここまで！次回もお楽しみに！」

第十四話 お出掛け（里帰り編）（前書き）

作者「学校始まったよ。」

銀時「でも、これまだ夏休みなんだよな。」

作者「なるべく早く書き上げるさ！後、後書きである発表があります。」

第十四話 お出掛け（里帰り編）

「そんな事があったのか。イオンの容態が急に悪くなった事は知っていたけど。」

ガイはティアからルークの過去を聞いた。

「これが私の知っている全てです。」

「ありがとう話してくれて。」

ガイはティアに礼を言った。

（ルークは未だにその事を悔やんでいる、か。でも後悔しているばかりじゃ・・・）

ガイはそう思った。

翌日

クロスオーバー学園のメンバーは近くの街に出掛けていた。

「どうしようかな。」

ルークは一人悩んでいた。

「一人で行くのはつまらないけど、ガイはどっかに行ったし、ティアは昨日の事で会うのに何だか躊躇するし、」
すると

「おっ！ルーク」

声をかけたのは陽介だ。

「どうしたんだ？」

「いや、一緒に行こうかなって思ってたさ。総司に里中もいるしよ。」
「もちろんいいよ。」

ルークは今日は総司達と一緒に行くことになった。

一方

「エミル。どこ行こっか。」

「うん。でも・・・ちょっと離れて恥ずかしいよ。」

中等部３Ｆのエミルとマルタが一緒に歩いている・・・というかマルタがエミルに抱きついていてる。

「えー。まあエミルがいうなら」

マルタはしぶしぶエミルから離れる。

「はあー。私もいつかあの方と・・・キヤ。」

エミル達を見ているのは同じ中等部３Ｆの鶴姫だ。鶴姫は頭の中で風魔とのデート風景を想像している。その思い人は一人街を歩いているが

一方

「つで。どこ行くんだとがめ？」

「目的地はない。」

「じゃあ何で出掛けたんだ？」

「たわけ。こういう風に一緒に歩いたり喋ったり時々店に寄ったりする事に意味があるのだ。」

「そういうもんか？」

「そういうものだ。」

七花とがめは一緒に歩いている。しかもちゃっかり手を繋いでいる。

「あの二人自分達がラブラブですっていう事全然隠してないな。」

「あのゼロス先輩？胸に何か黒いものがあるような感じするんだが、病気か？」

「いや。それは病気じゃねえよ。現に俺様にも何だか胸に黒いものがあるって七花をぶん殴りたいって思っている。勝てる相手じゃないのに。」

「落ちて着こな二人とも。」

慶次とサンジとゼロスが話している。（内二人は黒い感情が出てきている。）

一方

「でっ。どっか行きたいところあるか？」

「はい。昨日この近くに古本屋を見つけたのでそこに行こうかと。」

「そ、そうか。」

「どうしたんですか巽君？顔真っ赤ですよ？」

「なっ、何でもねえよ。」

完二と直斗が一緒に歩く。完二の顔が赤いのは直斗が普段とは違う女の子っぽい服装をしているからだ。

（久慈川の奴。まあ確かに可愛いけど）

恐らく服を選んだのだろう同級生が頭に浮かぶ。

そんな二人を見守っている

「何やってるのあいつ。手を繋ぐとかそんな事やればいいのに。」

「もう少し見守りましょう。」

りせとウンディーネは顔がほころんでいる。

（こういうの好きそうだもんなウンディーネ。）

そう思ったのはウンディーネを捜しに来たセタンタだった。

一方

「全くもう！また無茶して！」

「そんなに怒るなよアカリ。木に引っかった風船を取りに木を上っただけだろ。」

「風船取って、その後枝が折れてもうちょっとで落ちるところだったでしょ！あそこの枝細かったし」

タイキとアカリが一緒に歩いている。

「でもさ。あの子泣いてただろ。ほっとけないじゃないか。」

「まあ。そこがタイキのいい所だけど、でも悪い癖だし。」

アカリはブツブツ言う。

「そういえば、アイツ本来に來なかつたよな。」

「アイツ?・・・ああキリ八君ね。キリ八君ってこういう風に皆で旅行するって何だか苦手そうだし」

キリ八と言うのはタイキ達と同じクラスの少年だ。

「せっかく。皆と一緒にに行けるのに。」

「またタイキのほっとけないね。」

アカリはため息するがタイキの思ひは理解できる。キリ八はルーク達より少し早い頃に転校して来て、しかもあまり群れるのが嫌いなため、友達があまりいないのだ。それをタイキがほっとけないと思ひよくキリ八に接するのだ。

「でも、いつかキリ八君も心を開くでしょ。そんなにタイキが構つたら。」

「そうかな?」

さつきまでの雰囲気と違ってかわつて和やかな雰囲気となつた

一方

ルークと総司達は土産物屋にいた。

「このぬいぐるみ菜々子が喜びそうだな。」

総司は街のマスコットのような物のぬいぐるみを見ていた。

「菜々子ちゃんきつと喜ぶだろうな。」

ちなみに菜々子とは総司の従姉妹でクロスオーバー学園の小等部に通つてゐるのだ。

「あつ!これ。肉ガムのご当地限定のやつじゃない!これ欲しかったのよ!」

そう言つて千枝は目を輝かせている。

「お前はそれかよ。ルークは誰に渡すんだ?」

「父上と母上と中学の頃の友達とか。」

最も中学の頃の友達はイオンしかないが。

「あれっ？あそこにいるのって。」ふとルークは店の外を見ると、ルーク達がいる店の向かいに花屋がありそこに、小十郎以外の園芸部のメンバーがいた。

「何やってんだ？」

「あつルーク。今、今度育てる植物の種を買いに来たんです。」

「へえー。旅行先で。」

「バアル。この種。」

「これは・・・月雪花げっせつかの種か。」

「月雪花？なんだそれ？」

ルークはバアルに聞く。

「雪のような白い花だ。上手に育てれば満月の夜に月光に咲き、花びらが輝くと言われている。だが、人の手で育てるのは難しく、ほとんどの場合は、蕾のまま枯れるか、月に照らされることなく日中で咲いてしまうかどちらかだ。」

「難しいんだな。」

「でも、見てみたいですね月の光で輝く所を。」

「バアル、エステル、この種を植えて、一生懸命育てて、月雪花を輝かそう。」

「ですね。」

「ああ。」

エステル達のやり取りを見ていたルークはふと花屋の中を見る。どうやらこの花屋では花や種などの他にビーズで花を模したアクセサリーも売っているようだ。ルークはの中で、セレニアの花をビーズで模した髪飾りを見つけた。

「これ、ティアに似合いそうだな。昨日はちよつとうやむやに終わっちゃったし。」

ルークはその髪飾りを買った。その後、総司達と合流して両親とイオンの土産物を買った。

「誘ってくれてありがとな。陽介」

「いって。三人だけでいつものメンバーだったから、たまには他の奴も誘おうかなって思ってた。」

「でもルークと他の人と一緒に行くのもたまにはいいな。」

「そうだね。」

総司達と楽しく会話をしていると、

「あつ政宗に小十郎。」

政宗と小十郎と一緒に歩いて来た。

「よう。」

「何してたんだ？」

「ちよつとばかり中学の頃一緒につるんだ奴らに誘われて再会を祝ってPartyしてた。」

そういえば、政宗って中学の頃、かなり名のしれた不良だったっけ（成実から聞きました）

「そういえば政宗ゼロス先輩から聞いたけど今夜なんかするらしいな。」

陽介は政宗に聞く

「ああ。どっかの誰かの提案で近くの森で肝試しするぜ。」

「肝試しか。」

「ルークはこういうのは苦手か？」

総司がルークに聞く。

「いやっ別にそういう訳じゃないけど。そこって何かいわく付きとかそういうのじゃないよな。」

「安心しろ。ただそこにはなんかの祠があつてそれを壊すとかそんな位だ。」

「大丈夫なのかそれ？」

「そんな祠壊す馬鹿いるか？」

「まあ確かにそうだけど。」

その後旅館で千枝と別れ、ルーク達は政宗の実家に戻った。

第十四話 お出掛け（里帰り編）（後書き）

作者「実は、近いうちに新しい話を書きたいと思います。」

銀時「おいおい。この小説と両立して書けるのか？」

作者「頑張ってみる。」

ユーリ「ちなみにその話って、クロスオーバー学園に出てくるキャラも出るのか？」

作者「出ますよ。でもユーリ達は出ませんよ」

ユーリ「はあ!？」

作者「だって私ヴェスperiaについての知識って小説と動画位だし」

ユーリ「それでよく出せるな!俺達を」

作者「次回と新しい話をお楽しみに!」

第十五話 肝試し（里帰り編）

その夜

ルーク達は森についた。

「確かに、雰囲気はあるよな。」

ルークは呟く。

「雰囲気だけはな。実際ここで神隠しにあったとか幽霊を見たとか聞かねえし。だから心配すんな。」

政宗はルークにそう言う。

「別にそんななんあっても怖くねえし。」

「ほおー。」

そう話していると、

「さあ始めようぜ肝試し大会！進行役のゼロス・ワイルダーです！ゼロスが皆の前に出てくる

「まず最初にこの肝試し大会の主催者の言葉です。」

「そういえば、誰がこれを思いついたのか分かってなかったな。誰なんだろう？」

ルークが呟く。

「それは・・・」

「ぶるああああ！この俺様よ！」

出てきたのはバルバトスだった。

「えっ！？バルバトス先生！？」

「夏休みでたるんだ貴様らの根性を叩き直すために発案したんだよ！」

「いやたるんでねえし。」

政宗がつっこむ。

「うるせえ！さっさと一人ずつ森に入ってきて来い！」

ええええ すこしざわついた。この暗い森を一人、しかも主催者があのバルバトスだからきつとただ事では済まされないのではっとな

もが思った。

「ちよつと待つてよ皆さん！一人だけじゃつまらないでしょ？だから二人一組のペアで行きます！後、主催者はバルバトス先生でも、進行役は俺だからバルバトス先生は手をつけてません。」

オオオオ！！　ゼロス先輩マジ感謝！

とゼロスに向けて声援がとぶ。

「勝手に決めてんじゃねえええ！！」

「だって。先生に任せたらヤバい事になるし。ルールは簡単。二人一組でこの道を進んで、奥にある赤いハンカチが枝に括つてある杉の木の前にノートがあるからそれに名前を書いて帰つて来てください！ペアは今から回す紙に番号が書いてあるから、時分と同じ数字の人とペアです。」

そう言つて、サンジと慶次が紙を配り全員が紙を見る。

「あつ！私と一緒にだねロイド！」

「ああ！」

ロイドとコレットは同じペアのようだ。

「俺は・・・か。」

「あら、私と同じね。」

政宗とペアはジューイスだ。

「アタシは幸村とだね。」

「よろしくでござる。」

しいなと幸村のペア。

次々にペアが決まる中。

（やったな。）

（そうだな。）

（ふっ）

ゼロス、慶次、サンジの三人だ。実は数組のペアは無造作ではなく、作為的にそのペアになるようにしていたのだ。

（明日で、俺ら帰るからな。これで少しでも仲が縮まればいい。）
とゼロスは思った。

ちなみにランダムのパアは

「よろしくな。」

「何故じゃああー!!」

ホーキンス&官兵衛パア

「よろしく頼むぜ!」

「はい!」

元親&こなゆきパア

「よろしく頼みますよ。ディエスの旦那。」

「ああ。」

ドレーク&佐助パア

「。。。」

「あ、あのよろしく願いします。」

バアルモン&工舎パア

「ヨロシク。」

『ああ。』

バリスタモン&風魔パア

「小十郎さんと一緒になれておら嬉しいだ!」

「そうか。」

いつき&小十郎パア

「ふん、まさか貴様のような者と組む事になるとはな。」

「それはこっちの台詞だ!」

元就&大ペア

「全くアイツは。」

「二人共喧嘩しなければいいけど。」

トーマ&雪子パア

「よろしくな。」

「おう!」

総司&ルフィペア

「何だか不気味だな。」

「そ、そうだな。」

チョッパー＆ウソップペアなど他にもランダムで決められたペアがあります。

「じゃあ。番号が1番のペアからどうぞ。後のペアはそれから3分後に行ってください。」

「じゃあ行こうぜ!」

「うん。」

ロイド＆コレットが行く。

「にしても、こうして入ってみるとさらに、不気味だな。」

「そうだね。」二人は暗い森を歩く。

その時

ガサッ

「グワアア!!」

「ひゃ!」

「誰だ! って近藤先輩?」

それはフランケンシュタインに変装した近藤だった。

「何だ。バレたか。」

「近藤先輩だったんですか。何をしていますか?」

コレットが聞く。

「俺はいわゆる脅かし役だ。俺以外にもいるぞ。」

「そうか。じゃあ。」

「気を付けるよ。」

近藤は手を振って見送る。

一方

「不気味ね。」

「ああ。あのアカリ?」

「なに?」

「ちよつと。離れてくれないか? 歩きにくいんだけど。」

「えっ。あつ！ごめん！」

次に来たのはタイキとアカリのペアだ。

「そっぴや、小さい頃一緒にお化け屋敷行って、んでアカリがすごく怖がつてたよな。」

「ちよっ何で覚えてるの！大体あの時タイキすっごくビビっていたじゃない！」

「えっ！何で覚えてるんだ！？」

その時

「お皿が一枚、二枚、三枚・・・」

突然、不気味な女の声が聞こえて来た。

「えっ？」

「あれ？一枚足りない・・・うらめしや。」

そこには、白い着物を着た不気味な女がいた。口には血がついている。

「キヤアアア！！」

「うわっ！」

二人は固まった。

クスクス

突然、笑い声が聞こえる。

「そんなに驚くなんて、ちよつと意外。」

「えっ・・・つてネネ！？」

よく見るとそれはネネだった。

「どう？」

「何か、本当にすごかった。」

「ネネってこういう演技って上手だよな。」

そう話しているとガサッ

「バアッ！！」

狼男の変装をした誰かが突然現れた。

「キヤアアア！！」

ドゴッ

「グフッ!!」

アカリはその誰かの腹にパンチをした。

「って。ゼンジロウ？」

「何で、パンチを？ガクッ」

一方

「さっさと、行って、ノートに名前を書いて帰ろっ。」

「そうでござるな。」

しいなと幸村が歩いている。

「しいな殿は怖くないでござるか？」

「いやっ別に。アンタは？」

「某も、怖くは」

その時

ガサッ

「わっ!!」

『うらめしや〜。』

ドラキュラの変装をした桂と、エリザベスが驚かすが

「・・・何やってんの？」

「桂殿にエリザベス殿。」

「何だ？怖くないのか？」

「いやっ何で『わっ!!』なんだい。あんなんじゃ、怖がらないって。」

「エリザベス殿は、声を出しておらぬし。」

「し、しまった!」

何だ、っと二人は先へ進もうとすると、

「こんばんは。」

包丁を持った園芸部顧問の屁怒呂がいた。

「キヤアアアア!!」

森中にしいなの絶叫が響いた。

「な、何だ？今は？」

「さあ。でもどこか聞き覚えがあるわね。」

しいなの絶叫をルークとティアが聞いていた。
すると

シクシクシク

誰かが、泣いているようだ。よく見てみるとお市がうずくまって泣いていた。

「お市先輩どうしたんですか？」

ルーク達が近寄ると、

「市に・・・気づいてくれたの？」

「あ、ああ」

前の人達は気付かずに行ったのか、とルークは思った。

「あの私たちと一緒にいきますか？」

「い、いいの？」

「はい。」

「そう・・・じゃあ。」

と、お市が顔を上げると

「イツシヨにイコウ？」

それは、顔が青白く、口は耳まで裂けて、頬には生々しい傷がついていた。そして周りには黒い魔手が出現した

「なっ、お、お市せんば！！？」

ガシッ

「えっ？」

突然ティアがルークの腕を掴み、猛スピードで先へと進む。

ヒョコ

「いやゝ。凄いね。流石はお市ちゃん。」

ゼロスが様子を見に来た。お市は特殊メイクをしているのだ。しかし
ゾゾゾ

「すみません。これもうやめてください。」

黒い魔手はまだ、出ている。

「はあはあ。どうしたんだ？ティア？」

かなり離れた所で、二人は止まった。

「・・・。」

「ティア？」

よく見てみると、ティアの顔が真っ青だ。

「ひよつとして。ティアって。」

「先を急ぐわよ。」

「あ、うん。」

すると

「待つて。」

突然ティアはルークを止める。

「どうしたんだ？」

「何かが・・・いる。」

ティアはナイフを構える。ルークも剣を構えると
ザッ

「なっ！」

一方

「・・・。」

「どうしたのかしら？」

政宗とジュデイスが歩く。しかし政宗は黙ったままだ。「いやっ。

ガキの頃に、一度この森に来た事があるんだ。夜になる直前くらいの時間で。」

「そうなの。」

「何だかその時と何かが違うって思って。」

「時が経てば場所も人の心どこが変わるものよ。その時と、気持ち
が違うだけなのかもね」

「確かに、そうだが。」

（そう、あれはあの時、お袋と小次郎が家を出ていった後、俺はこ

の森に入ったあの時はただ・・・)

そう政宗が思っている

「ハッハッハッ!!」

突然の笑い声の後

バッ ドラキュラの変装をしたレイヴンが政宗達、いやジユデイスに迫る。

「弧月閃!」

ドゴッ

「ギアアア!」

ジユデイスの攻撃でレイヴンは吹っ飛ばされた。

「やつぱ、反撃か。」

「あら、ひょっとして、キヤア怖い!何て言っ
て抱きついて欲しかった?」

「いやっ。別に・・・!」

政宗は何かの気配を感じた。

「人じゃないわね。」

ジユデイスも気がついたようだ。

その時
バッ

「DEATHFANG!」

ドガッ

突然襲いかかって来た何かを政宗は倒す。

「これは。」

政宗達は、その何かを見る。

「魔物?」

それは、ゴーストという魔物だった。

第十五話 肝試し（里帰り編）（後書き）

作者「次回からは、バトルに突入します！って何してんの銀さん。」
銀時「いや、ムー大陸の入り口が。」

作者「行つとく、けど最後に出てきたあれは、魔物だからね。あっちの方じゃないからね。」

銀時「わ、分かってる！」

第十六話 森での戦い（里帰り編）

「裂破掌！」

「ノッ カートル・ライト！」

ドッ ズバツ

ルーク達に襲いかかってきた魔物は、ルークの技で吹っ飛ばされそれを追撃したティアの投げたナイフで倒された。

「ふう。にしても何でこんな所に魔物が？」

「分からないわ。でも今は先に行ったロイド達を追いましょう。」

「そうだな。」

ルーク達は先へと進む。

「魔神剣・双牙！」

「レイトラスト！」

ドゴッ

ロイド達は魔物の集団に襲われたが倒した。

「こいつって、確かデーモンだよな。」

「うん。そういえば、戦ってきた魔物って悪魔族か、霊族だよな。」

「そうだな。何か関係あるのか？とりあえず、今は来た道戻って皆と合流しよう。」

「うん！」

ロイド達は来た道に戻る。

「はあ？魔物に襲われた？」

政宗とジユデイスは一度森の入り口に帰り、現状を報告する。

「政宗達の言うとおりだよ。この森急に魔物の反応が発生したよ。りせは自分のペルソナ『ヒミコ』で情報を集めている。」

「じゃあ。タイキ達があぶねえ！」

シャウトモンは今にも、森へと行きそうな勢いだ。タイキ達は、あ

まり戦う力はないのでそれを心配しているのだ。

「落ちてシャウトモン。焦っても何も解決しない。」

ドルルモンがシャウトモンをなだめる。

「俺達は一度、俺達の一つ後に来るペアのバアルモン達と会った。バアルモン達はタイキ達を追っている。それに、俺達を脅かしている奴も森にいるから」

「でも、俺はアイツの相棒だ！こんな時にこんな所でのんびりなさしてられねえよ！」

ダッ シャウトモンは森に入ってしまった。

「全くアイツは。」

ドルルモンが呟く。

「そういえば、お前らの後に行った奴ってバアル達以外にも二組いたよな。そういつらとは？」

ゼロスが聞く。

「残念だけど、会えなかったわ。」

「そっか。にしても何で急に魔物が出たんだ？ひょっとしてお前の言っていた祠でも壊れたのか？」

「だが、祠は壁に囲まれて、入り口には頑丈な鍵がかかっていたはずだ。そう簡単に壊れるとはおもわねえが。」

「やけに、詳しいな。」

銀時が聞く。

「昔、一度そこを通りかかった事があるんだよ。」

「・・・」

小十郎は黙ったままだ。

「でも、まだ中には、ルーク達がいるんですよ？」

エステルが言う。

「ああ。早く合流しねえと。」

元親が言う

「先生。」

新八が銀時に聞く。

「わ〜ってるって。行つて来い。ただしあんま無茶すんなよ。」
『ハイッ!』

全員が言う。

「先輩達気をつけて。私はここで原因とかを突き止めるから。」

「僕も情報を集めてみる。君達の役に立つかもしれない。」

ワイズモンは擬人化を解いて、本当の姿になる。

「よし。行くぜ!」

元親の掛け声と共に森へと入る。

その直後

「なっ! ということだ!」

ワイズモンは来たばかりの情報に驚く。

「どういう事? これって。」

りせも驚いている。

「たあ!」

タイキはその辺にあった木の棒でその者に攻撃したが効いてない。

「どうしようタイキ!」

「くっ。」

二人は囲まれているのだ。しかしそれは魔物ではない。白いボロボロの布を被り、手が出ている。それはまるで絵本や肝試しの変装でよく出てくるオバケのような、

「こいつらって、デジモン?」

それは、バケモンというデジモンだ。

バツ

バケモンが襲いかかる。

「うわっ!」

「くっ!」

タイキはアカリをかばうように、前に出る。その時

「おりゃあああ!」

ドゴッ

何者かが、バケモンを殴り飛ばす。

「大丈夫か！」

「大先輩！」

それは、大だった。

「俺達も、こいつらに襲われたんだ。」

「そうだったんですか。そういえば、先輩とペアの人は」

「あれ？何かしらあの光？」

アカリの目線の先には、空中に浮かんだ緑色の光の輪だ。
ゴッ

その輪に触れたバケモンが弾き返されるが、そこには

「うわぁ！」

タイキ達は何とか避けられた。

「弾手『壁』」

タイキ達と反対側の輪の向こうには元就がいる。

「おい！テメエ俺達までも巻き込みやがって」

「貴様らが我の技の範囲に入ったからであろう。」

「んだと！」

「ちよっ！毛利先輩に大先輩やめてください！」

タイキが止めようとする。しかし

ガサッ

「うわっ！また来た！」

今度はデジモンだけでなく、魔物もいる。しかし

「ソウルクラッシャー！」

ドゴッ

「ヘヴィスピーカー！」

「ドルルバスター！」

「メテオスコール！」

ドゴッ

「ベビーフレイム！」

ゴッ

「シャウトモン！バリスタモン！ドルルモン！スターモンズ！」

「アゲモン！」

「兄貴！来たよ！」

「大丈夫かタイキ！」

シャウトモン達がデジモン達を気絶させた。

「ふん。ようやく貴様らの手駒が来たか。」

「あん？」

「ちよつ大先輩！」

今度はアカリが止める。

「あれ？バアルモンはまだきてねえのか？」

「バアルモンもここに？」

「ああ。タイキを追っていったんだけど。」

「おかしいな。バアルモン、一体どこに？」

「おい！今は考えるのは無しだ！速くこいつらを。」

タイキ達の目の前には、大勢のデジモンと魔物がいる。

タイキはクロスローダーを、大はデジヴァイスを持つ。

「シャウトモン！バリスタモン！ドルルモン！スターモンズ！デジ

クロス！」

「シャウトモン×4！」

「デジソウルチャージ！」

「アゲモン進化！ジオグレイモン！」

シャウトモン×4とジオグレイモンが迎え撃つ。

一方

「うおおお！烈火！」

ドゴゴ

「散力翔符！」

シュッ

幸村としいなは、魔物達と戦っている。

「虎炎！」

ドゴッ

燃える拳がデュラハンをふっ飛ばす。

「これで、終わりだね。」

「うむっしかし道を外してしまった。」

「今は皆と合流しないとね。」

「そうでござるな。」

二人は歩き出す。すると

「だ・た・た・た・た・た・た・さ・」

誰かの声が聞こえる。

「誰でござるか！」

「どこにいるんだい！」二人が辺りを見回すと、

「助けて・・・下さい。」

「工舎殿！」

工舎が倒れていた。

「しっかりしな！今助けを呼ぶから。」

「むっ？そういえばバルモン殿は？」

「バルモンは、黒いなにかに・・・」

「黒いなにか？」

「！！危ない！」

「はっ！」

ゴッ

「グッ不覚！敵に気づかぬとは」

何者かの大きな手が幸村を攻撃した。

「幸村！」

「かすり傷でござる！」

幸村を襲ったのはデビモンとレディーデビモンだ。

「何で、ここに」デビモン達は襲いかかった。

「ふっ！たあ！」

幸村としいなが応戦する。「くっ！ううう！」

幸村とデビモンは槍と爪でつばぜり合いをしているが、幸村が若干

押されている。

ヒュッ

しいなと戦っているレディデビモンは腕をランスの様に変え、しいなに突撃する。

「はっ！」

しいなはジャンプして避けるが、

ガラッ

「なっ！」

しいなは崖の近くに着陸したが、足場が崩れしいなは崖から落ちそうだ。

崖の下からは、水の流れる音が聞こえる。

「しいな殿！」

「襲爪雷斬！」

「ホーリーランス！」

ルークとティアは魔物の群れに囲まれ戦っている。

「くっ！一体どこから来たんだ！この魔物達」

「そうね、しかも悪魔族や霊族、デジモンもアンデット系や悪魔系が多いわ。」

魔物の他にもバケモンやマミーモンなどのデジモンがいる。しかも操られているようだ。

「皆大丈夫かな。」

ルークはそう呟く。

『お前も、あのデジモンと同じ、強い負の記憶を持つか。』

突然、謎の音が響く

「えっ？一体誰・・・」

ビュン

「うわっ！」

「ルーク！」

突然ルークが黒い手のようなものに捕まり

「ティ……」

包み込まれ、どこかへ、連れていかれた。

「ルーク！」

「にしても俺がここに来たときは魔物いなかったはずだが。一体どうなってるんだ？しかもデジモンも」

政宗とジューデイスと小十郎といつきも魔物の群れに襲われた。

「さつき。魔物の一体をテネブラエに渡したわ。何かわかればいいけど。」

テネブラエとはマルタに従う謎の生物で、魔物の言葉がわかるのだ。

「今は、こいつらを片付けましょう。穿月！」

「そうだべ！雪転がし！」

小十郎といつきも順調に倒している。

「そうだな……」

『また一人。』

「んっ？」

ビュッ

ルークを捕まえた黒い手が政宗を襲う。

「政宗様！」

小十郎が政宗の前に出るが

ビュン

突然手は方向を変え、

ガッ

「なっ！」

「政宗様！」

「小十ろ・・・」

政宗も黒い手に包まれどこかへと連れていかれた。

第十六話 森での戦い（里帰り編）（後書き）

銀時「おいおい。何かヤベエ事になってるな。」

作者「うん。次回はいいよいよ黒幕が明らかに！」

銀時「楽しみにしておけよ。」

作者「感想お願いします！」

第十七話 黒幕（里帰り編）

「ゴムゴムのガトリング！」

「ジャックフロスト！マハブフーラ！」

ドゴゴ

ゴォー

ルフィの連続パンチとジャックフロストの技で、魔物の群れを倒した。

「ふうー。これで終わりだな。」

「うん。でも一体何で魔物やデジモンがこんなに。」

プルル

総司の携帯が鳴る。りせからだ。

ピッ

『先輩！やつと今回の事件の発端となった物の場所が分かったよ！』

「分かった場所を教えてください。」

『分かった。他の人達にも連絡しておいたし、そこで集合するらしいよ』

総司はりせからその場所を教えてください。

「ルフィ！すぐにそこに行くぞ！」

「ああ！こんな事した奴ぶっ飛ばしてやる！」

『あつ、後先輩。実はさっきティア先輩と片倉先輩に言われたんだけど。』

「何だい？」

『ルーク先輩と政宗先輩が黒い手のような物に攫われたって』
「何だって！」

「影潜の術！」

「はぁッ！」

ズバッ

ドサッ

佐助とドレークは目の前にいた大型の魔物を倒した。

「ふう〜やっと終わった。」

「油断するな。まだ何かが潜んでいるかもしれない。」

「俺様は油断してないぜ。」

その時

「・・・な殿！」

聞き覚えのある声がかすかに聞こえた。

「今のはまさか」

「真田の旦那！」

二人は声がした場所へと向かう。

「・・・なっ。」

崖から落ちかけたしいのだが、下の川には落ちなかったなぜなら、

「ぐっしいな・・・殿」

「幸村！」

幸村がしいなの腕をしつかりと掴んでいたからだ。もう一方の手は

崖の端を掴んでいた。しかし

「ちよっあんだその腕！」

崖の端を掴んでいた方の腕からは、血が流れている。デビモンとの戦いを突然中止した時、大きな隙が出来て、その時に腕を怪我したのだ。

「心配無用。これしきの傷」

「だってそんな怪我。・・・はっ！」

しいなの目には、デビモンとレディデビモンが今にも幸村を襲おうとしているのが見えた。

「幸村！逃げて！あたしの事はいいから！」

「そんな事は出来ない！・・・グッ！」

幸村は腕が痛むのか苦しそうだ

「やめてくれ！そんな・・・そんな怪我を負って」

しいなはそう叫ぶが

「め、目の前で、守れるものを守れず、自分だけ生き延びるなど某には出来ない。この手は絶対に離さぬ！」

「幸村・・・！」

デビモン達が幸村を襲う。

しいなは目を閉じる。

・・・

いつになっても、自分の腕を掴んでいる幸村の手の感触は離れず、下の川に落ちる衝撃もない。しいなは目を開けた。

「！！」

「大丈夫ですか？」

目の前で、工舎が刀を手にデビモン達を抑えている。

「工舎！」ガキッ

工舎は、デビモン達を少し遠くへ離れた。

「しっかり！」

工舎は幸村の手を掴みしいなを引き上げた。

「すごいねあんた。」

「そ、そんな事ないですよ。」

「幸村その傷、あたしが」

「これは、某が未熟だったゆえに負った傷、しいな殿のせいではないでござる。」

しいなは謝ろうとしたが、幸村に遮られた。

ふと、見るとデビモン達が立ち上がった。

「しいな殿！」

「ああ！反撃だね！」

ダッ

二人は駆け出した。

ゴッ

レディデビモンが炎を放つが、しいなは飛んで避ける

ビシュ

デビモンが爪で攻撃しようとするが、幸村は槍でやり過す。

「甘いね！あたしの力をみせてやる！」

デビモン達の周りに陣が出来る陣からは四つの光の柱が出ている、そして

「風塵封縛殺！」

ドゴッ

デビモン達は光に飲まれるが、まだ立っている。

「うおおお！！」

幸村は二本の槍に、炎を纏わせ

「火焰車！」

炎乱舞で、デビモン達を攻撃する。

ドサッ

デビモン達は倒れる。気絶したようだ。

「や、やったね。」

「そ、そうで・・・」

クラッ

流石に無茶してのか、幸村は倒れかける。

「幸村！」

しいなが幸村の手を掴み何とか倒れなかった。

「全く無茶して。」

「う、うむ。」

幸村は苦笑している。しいなもつられて笑うが、ふとある事を思い出す。あの時、崖から落ちかけた時しいなはある事を心の中で叫んだ。

『幸村！』

何故か幸村に助けを求めたのだ。近くには工舎がいたのに、なぜかデビモンと戦っていた幸村にだ。

（あっ、ひょっとして）

しいなは、ある事に気づくあの夏祭りの時幸村と手を繋いだ時、心

が温かくなつた。あの時もその気持ちが何なのか分からなかった。だが今なら分かる。あの時の気持ちもさっきの事も

(あたしは、幸村の事が・・・)

「真田の旦那！」

突然の声。声の方を見てみると

「佐助！ディエス殿！」

佐助とドレークがいた。

「先程お前の声が聞こえてきてな。途中で魔物と遭遇して少し遅れてしまった。しかしこいつらは？」

ドレークは倒れているデビルン達を見る。

「く、詳しい事は後ほど。それと工舎殿が」

「ちよつ旦那！その傷どうしたんだ！・・・後」

佐助はしいなと幸村をじつと見る。

「な、なんだい？」

「いやー。まさか旦那が女子に手を握られても恥ずかしがらないって。」

「あつ」

ずっと握りっぱなしだったのだ。

幸村の顔が段々と赤くなる。

「あつ幸村？」

ブシュー

幸村の傷口から血が勢いよく流れる。

「ちよつ！旦那！」

「幸村！しつかり！」

「どうしたんだ幸村！」

「あ、あの私は？」

出血はすぐに治まったため大事のにはいたらなかった。

「虚刀流野莓！」

「ハアツ！」

ドガッ　ズバッ

七花と成実、魔物の群れと遭遇した。成実の武器は槍だ。
ゴッ

「うおっ！」

七花が吹き飛ばした魔物が成実に向かって来て何とか避けたが、バ
ランスを失い転んだ。

「今ので最後だな。」

「うむ。」

隠れて見ていたとがめが頷く。

「待たんかい！」

成実は突っかかる。

「お前なんださっきの奴！ぶつかりかけたわ！」

「お前があんな所にいるからだろ。」

「んだと！？」

「すまないな成実。こいつは他人を気遣って戦うことなどなかった
からな。」

「まあ。いいけど。」

「あついた！成実さん！七花！とがめ！」

声のする方を見ると、新八と銀時が走ってくる。

「おお！新八！坂田先生！」

ガサッ

「！！！」

成実達の背後から、巨大な魔物が現れ、成実達を襲おうとしている。

「はっ！」

「とおっ！」

ゴスッ

巨大な魔物に巨大な岩が当たった。魔物は後ろへと倒れる。

「大丈夫ですか？」

銀時の隣にはこなゆきがいた。

「えっ？まさかお前が？」

成実は動揺を隠せない。

「おりやあああ！」

「はあああ！」

ドガッ

銀時と新八で止めをさす。

「皆さん大丈夫ですか！」

「ああ何とか。」

「全員無事だな。よしじゃあ親玉の所へ行きますか。」

「はいっ！」

「これって・・・」

目的の場所に着いた時新八は驚きを隠せなかった。おそらく祠を囲んであったのだろう黒い石の壁が粉々になり、隙間から祠のものだろう木片が見える。近くには曲がった南京錠が転がっていた。

「おいおい。一体どうやってたらこんな事になるんだ？」

「あつ銀時先生！」

総司とルフィが先に来ていたようだ。よく見てみるとタイキや大や元就、ユーリにエステルなどほとんどのメンバーが集まっている。

「これってどうなってるんだ。」

「さあな。それより小十郎とティアとベルゼブモンは？」

三人の姿が見えない。

「それが、ルーク達が行方不明で、ルーク達を捜しているようなんです。」

ガイが説明する。

「ルーク達一体どこに。」

新八が呟く。

『お前達か。我の邪魔をするのは、』

突然空から声が聞こえる。

「誰だ！」

銀時達は声の主を探す。

「銀ちゃん上！」

「はっ！」

神楽の声に反応して、銀時は後ろに退いた。銀時の立っていた所には、黒い炎が落ちてきた。

「あ、危うく丸焼きになる所だった。」

『ほう。避けたか。』

ズン

祠の残骸の上に降り立ったのは、獅子の様体だが。普通の獅子より3倍は大きく、鋭い爪に鋭い牙、黒い眼で全身は黒と紫体からは黒い炎が出ている。

「テメエが黒幕か。」

ユーリが言う。

「その通り俺は黒牙。^{こくが}遠い昔にこの祠に封じられていたのだ。だが、今日この日俺は解放された。」

「解放？」

「この地を支配しようとしていたのだがな。俺の力に惹かれて来た者達は貴様らに倒されたが。」

「テネブラエが言っていた。魔物達は何かの力に惹かれて来たって。デジモン達は強い力に縛られたような感じだったって。」

エミルが説明する。

「まあ、だがテメエの力に惹かれて来た奴は殆ど俺達が倒した。残りはテメエだけだ。」

銀時は黒牙を睨み付ける。

「愚かな。」

コオオオ バシユツ

黒牙は口から黒い炎を吐き出す。

ガッ

銀時達は上手く避けた。

「ハアッ！」

「爪竜連牙斬！」

「獅子旋吼！」

「五羅！」

「ゴムゴムのガトリング！」

ドガッ

銀時とユージとロイドと元親とルフィが反撃するが、あまり効いていないようだ。

ビシュッ

黒牙の尾により銀時達は吹き飛ばされる。

「グッ！」

「グランシャリオ！」

「プリズムソード！」

「アギダイン！」

「メギドラ！」

「スプラッシュ！」

コレットとマルタと雪子と直斗とジーニアスが術を使うが

コオオオオ ビシュ

黒い炎に押し返される。

「キャア！」

「コレット！」

「次は俺達だ！」

「ライディングデストロイヤー！」

「ウイニングナックル！」

「アンドウ・ポラン」

「バーニングスタークラッシャー！」

ドガッ

ライズグレイモン（途中で再び進化した。）とマツハガオガモンとライラモンとシャウトモンX4で攻撃するが、
ダッ

素早く避けられ、黒い炎を当てられる。

ゴッ

「ぐあっ！」

「シャウトモン×4！」

4人の完全体とデジクロスしたデジモンは、一気に元の姿に戻る。

「強い！」

「だが、諦めてたまるかよ！」

「ふん、無駄な事を。」

ビュッ

黒牙は一瞬にして、ユーリの近くに移動した。

「なっ！」

「ユーリ！」

黒牙は爪で攻撃しようとする。

「鳴神！」

「バニシング・ソロウ！」

「デス・ザ・キャノン！」

ドガッ

「グッ。」

森からの突然の攻撃。それは

「小十郎！ティア！ベルゼブモン！」

「すまねえ少し遅れた！」

「いや。おかげで助かった。」

「それにしても、強いわね。私達の攻撃も退いたけどあまり効いていなかった。」

「あいつの力は一体。」

すると

「そうか。そういう事なのか！」

皆と少しばかり離れた所で情報を集めていたワイズモンが声をあげる。

「どうした？ワイズモン。」

「黒牙の力の秘密が分かった。おそらく黒牙は人の負の思いを力に変えている。」

「負の思いって？」

「怒り、憎しみ、悲しみなどの感情が非常に強くなった物だ。」

「ほう。気がついたか。その通りお前達から三人ほど力の源になってもらった。」

「三人つてまさか！」

新八はある予想をする。

「政宗にルークにバアルモン。」

銀時が言う。

「その通り、あいつらは負の思いが強い負の記憶を持つからな。」

「負の・・・記憶。」

ティアはルークのあの事件を思い出す。

「政宗様。」

「くっ！」

小十郎とベルゼブモンも何かが分かったようだ。

「まさか。その負の記憶を再び見せて負の思いを集めてたんですか

！」

エステルが聞く。

「ああ。その通りだ。」

全員が黒牙を睨みつける。

「おい。その負の思いがある場所分かるか？」

「ああ。そこに政宗達はある。」

「分かった。俺が行く。政宗様を助けないとな。」

「私もルークを。」

「俺も」

小十郎達が政宗達の救出を申し出る。

「分かった行け。」

「はいっ！」

「ティア！俺も行っていいか？あいつの事ぶん殴らなきゃいけないえ

し。」

「ええ。」

「タイキ！お前も行つて来いよ。」

シャウトモンがタイキに言う。

「でも。」

「俺達の事は気にすんなよ。アイツお前には一番に心を開いたし。」

「・・・分かった。」

「逃がすか。」

黒牙は黒い炎を出そうとするが、

ビュン ドガッ

「ぐっ！」

突然爬虫類のような尾が黒牙に当たる。

「大丈夫か皆！」

それは恐竜に変身したドレークだった。

「ドレーク！」

「はあっ！」

しいなも追撃する。

よく見ると、佐助もおり何故か知らないが幸村を抱えている。

「やっと来たか遅すぎるぞ。」

「それより旦那が！傷負ってるんだ。」

「エステル！」

「はいっ！」

エステルが幸村の治療を行う。

「お前ら速く行つてやれ！」

銀時の言葉に、小十郎達は動く。

ガッ

爪が銀時を襲うが、銀時は木刀で抑える。

「先生！」

ベルゼブモンとタイキが止まるが

「速く行け！弟が危機になっている時こそ兄貴が助けなくてどうす

るんだ！」

「！！はい！」

ダッ

小十郎達は政宗達の居場所へと向かった。

「きばれ、テメエら。アイツらが政宗達を助けるまでの辛抱だ。」

「ああ。なるべく時間を稼がないとな。」

全員が再び黒牙を見る。

第十七話 黒幕（里帰り編）（後書き）

作者「もうすぐで里帰り編もクライマックスです！」

銀時「速く書けよ。」

作者「無論そのつもりさ！」

第十八話 過去と大切な人（里帰り編）（前書き）

作者「今回はいつもより長くなっています！」

第十八話 過去と大切な人（里帰り編）

「うおおお！朱雀翔！」

幸村の攻撃。

「幸村！次は俺だ！」

チャキ

ゾロは力を溜め

「三刀流奥義！百八煩惱砲！」

飛ぶ斬撃を喰らわす。

「どけっ！クソマリモ！ムートンショット！」

腕力強化！刻蹄十字架！
アームポイント クロス

サンジの足技とチョッパーの攻撃が胴体に当たる。

「愚かな。」

黒牙の爪が二人を襲うが、

「ほあちゃあああ！」

「おりやああ！」

「断空剣！」

ドガッ

神楽と銀時とゼロスが、足を攻撃してズラす。

「当たりそうだったじゃねえか」

「うるせえ。テメエの攻撃あんま効いてねえだろ。」

「テメエもだろうが！」

「んだとっ！」

「二人ともやめろ！そんな事してる場合じゃ。」

ビュン

ウソップに黒い炎が近づいてきた。

「ギアアアア！避けられねえ！」

「ROOM」

ヴウウウン

半球のサークルが出来る。

「シャンプルズ。」

ビュン

ドゴツ

ウソップがいた場所には炎に焼かれた、祠を囲んでいた石の壁の残骸だった。

「大丈夫か？狙撃屋。」

先程の技はローの能力だ。

「助かったぜ。よし！反撃だ！」

キキイイ

ウソップは巨大なパチンコを引つ張り

「ファイヤーバードスター！」

鳥のような形をした炎を撃つ。それと同時に

「スパイラルフレア！」

リタが火炎術を放ち

「ハアアア！」

ガガガ

神楽は自分の傘から銃弾を放ち。

「喰らえ！」

「オリヤッ！」

土方と沖田はバズーカを放った。しかし沖田は土方を狙っていた。

「何すんだテメエ！」

「ちよつとしたミスでさあ。」

「大きなミスだ！」

「いや。あんたら何やってるんスカこんな時に！？イノセントダツク！」

「黒点撃！」

「十飛！」

「一目惚れ！」

ドガッ

完二と千枝はペルソナを使い。元親は碇槍で突進して、慶次は力を刀に溜め攻撃し、追撃した。

「行くぜ麦わら！」

「おう！ギア3！」

ルフィは腕を膨らませ、キッドは何処からか鉄を集め巨大な鉄の拳を作る。

「おらよっ！」

「ゴムゴムのギガントピストル！」

ドガッキッドとルフィの拳が炸裂した。

「どうだ！」

しかし

「ふん何がだ。」

まだふらつかず、立っている。

「ちっ！まだ立っているか！やっぱり三人を助けないといけないのか。」

元親は睨み付ける。

「頼むぞ。」

銀時は今はこの場にいない、救出に行っている者達に向かって言う。

「後、どれくらいだ！」

「もう少しです。」

ティアはワイズモンから送られたデータを携帯で見ながら言う。近くでは小十郎とベルゼブモンとタイキが走って（ベルゼブモンは飛んでいるが）いる。

「政宗様。」

小十郎は呟く。小十郎と政宗は幼い頃からの仲だった。幼馴染みからまるで主従のような、相棒のような関係になった時の事は今でも覚えている。そうこの森がその時の場所だ。

（政宗様。あなたがいまだに過去に苦しむのならはこの小十郎、あ

なたを殴ってでも連れて帰ります。」

「ベルゼブモン。やっぱりバアルモンはあの事を」

「ああ。あいつはいまだに・・・」

タイキはベルゼブモンとバアルモンの過去を知っている。

ベルゼブモンとバアルモンは幼くして両親を事故で失い、その後女神の戦士団の団長であり後に二人の師匠のエンジエモンに拾われ、銀時と政宗が行った孤児院に入った。二人は拾われた時から女神の戦士団に憧れを抱き、いつか女神の戦士になろうと二人は誓った。二人は女神の戦士になるために日々鍛練を重ねていた。しかし幸せな日々は突然壊された。

数年前、女神の教会で女神への祈りが行われた。その時ベルゼブモンは突然、風邪をひいたため祈りには欠席して、教会にある医務室で休んでいた。

夕方、祈りが行われた最中、突然協会に謎の集団が現れた。その者達は動きを封じる毒を使い、多くの戦士達を動けなくした後殺した。動ける者もいたが、その者達も強く倒された。エンジエモンはその集団のリーダー格と戦っており、リーダー格の男は押されていたが、突如狙いをエンジエモンから近くにいたバアルモンに狙いを変えた。バアルモンは毒の影響は無かったが、恐怖で足がすくみ動けなかった。

バアルモンにリーダー格の男の剣が突き刺さりかけた時、エンジエモンがバアルモンを庇い、エンジエモンが剣に刺され、命を落とした。

一方ベルゼブモンは医務室にいたが、謎の集団の一部が戦士達の間で祈りの場だけでなく教会を探っていた。祈りの場以外にも戦士は

いたがその者達も毒を吸わされ殺された。ベルゼブモンは戦士の一人に隠れていると言われ医務室のベッドの下に隠れていたため無事だったが、ベルゼブモンは戦士達が倒れる瞬間を見てしまった。動けはずなのにベルゼブモンは恐怖で動けなかった。

この事件によりほとんどの女神の戦士達は殺された。犯人は過激な差別主義の集団でほとんどが捕まったが、リーダー格の男はまだ捕まっていない。

その事件が原因で、バアルモンは自分のせいでエンジエモン様は殺された、と自分を憎み、ベルゼブモンももし自分が動けていたら、と自分を憎んだ。それ以来バアルモンはほとんど感情を表に出すことが出来ず、ベルゼブモンもタイキ達と出会うまで笑えなかった。

「バアルモンは俺が助けないと・・・」

「俺達だろ？バアルモンは俺にとっても大切な人だ。だから助けに行く。それとも俺って役に立たないか？」

「そんな事はない。分かった一緒に助けよう。」

「ああ！」

「着いたぞ！」

ガイの言葉に全員がそれを見る。

木々が生い茂った所から一気に開けた場所に出た。その中央には

「ルーク！」

「政宗様！」

「バアルモン！」

政宗達が黒いオーラに包まれて倒れていた。目は開いていたが目に光が無い。

「ワイズモン！バアルモン達を見つけた！どうすればバアルモン達を助ける事が出来る！？」

タイキはワイズモンに連絡する。

『三人は負の記憶に囚われている。君達が彼らからそれから解放出来れば。三人に触れて三人に直接語りかければいい。幸いそこにいるのはそれぞれの大切な人だ。早くしないと、三人の精神が壊れるかもしれない。それ以外にも奴は何か仕掛けているかもしれないし。』

だからか、と小十郎は思った。政宗を助けに行くとき、ジユデイスも行こうとしたが、『私では意味がないから』と断った。ジユデイスは何かを悟ったのだろう。

『だが、それは危険な賭けだ。失敗すれば君達も囚われる。』

「安心しろ。絶対に成功させる。」

ガイが言う。その言葉にティア達も頷く。

『分かった。君達はそれぞれその人に触れていれば、三人の心の中に入れる。気をつけてね。』

ワイズモンとの会話はここまでだ。

「よし。行くぞ。」

「おう。「はい」」

ガイの呼びかけに小十郎達は答える。ティアとガイはルークの肩を、タイキとベルゼブモンはバアルモンの肩を、小十郎は政宗の肩を持つ。

オオオオ 小十郎達も、黒いオーラを包み、小十郎達は心の中へと入った。

「ティア無事か？」

「大丈夫です。」

ティアとガイは、真っ暗な空間にいたが、お互いの姿ははっきりと見えた。

「ティア見ろ！あそこに」

「ルーク！」

ガイの指差す方には、ルークがぼうつと立っていた。

ルークの目には、真つ暗な空間もガイもティアも見えない。見えるのは過去の映像だけだ。あの日の路地裏、ルークが原因で喧嘩になつてしまった時、近くの川でイオンが落ちた。浅かったので溺れはしないが、顔色が悪く吐息が荒い。ルークの近くでは、ティアが壁にもたれて座っている、腕や足には傷がある。

「俺は、何て最低な奴何だろう。」

親友が、自分を助けてくれた少女が、倒れているのに、あの時は何もせずにただ呆然と立っていた。

そんな自分を嫌って変わろうとした。ガイからは『以前とは全く違う』と言われる程にだ。

しかし、自分がしてしまった事は消えない。勝手に喧嘩を挑んで、勝手に負けて、勝手にティアとイオンを巻き込んで、ルークはふと思った。自分が変わろうとしたのは、これから逃げようとしたのではないのだろうか。だとしたら俺は本当に最低だ。

『黙れバカ弟！』

アッシュの自分に向けるあの態度、当たり前だこんな最低な奴が弟だなんて・・・

「ルーク！」

誰なんだ？俺に呼びかけるのは一体。こんな奴を呼ぶなんて・・・

「ルーク！帰るぞ！それはただの幻覚だ！」

力強い声

「何で、こんな俺を？」

「なっ？」

「俺は、友達を生死の狭間まで追い込んで、助けに来た人を傷つけ、何もしなかった。それどころか変わるつと言つて、その罪から逃げようとしている。こんな最低な奴助ける価値なんて。」

「違うわ！」

凜とした声が響く。一体誰なんだよ。この声？

「あなたが変わろうとしたのは、逃げようとしたからじゃない。忘れてしまったあの日の誓いを。」

あの日って何だよ

「『俺は大切な人を傷つけてしまった。それは消せない。だから俺は変わって見せる。』」

何なんだよ一体。

「『このままだと、俺はまた大切な人を傷つけてしまう。だから俺は変わりたい。もうこんな事をしないように。』あなたが変わろうとしたのは、罪から逃げるのではなく、その罪を繰り返さないようにするためでしょ。ルーク」

ふと頭にかすった映像。何処かの花畑で、一人の少女と向かい合って話す。

「覚えているこれ？」

誰かの手が、俺にそれを見せる。ナイフのようだ。

カラン

何かが落ちる音がした。それは何かの髪飾りだ。何らかの花を模している。

ふと、頭にかすった映像が鮮明になる。

あの日誓った日。少女に自分は変わりたいと言った。でも少女はそんな簡単に変わるはずがないと言う。俺は変わると証明するため、俺は当時長かった髪を切ったのだ。少女のナイフを使って

「ルーク。何でアッシュがお前に厳しくあたるか知ってるか？」

「知らない。」

「アイツはな、『あの頃のアイツよりはましたが、気を抜いたらまた元通りになっちまう。』ってさ」

「アッシュが？」

「お前が変わる前は、気に入らないからあたったが、今はお前が、

また間違いを起こさない様にしてるだけだ」

ああ、俺は何てバカだったんだろ。こんなにも俺のことを支えてくれる人がいるのに、俺はまた過去に縛られている。

「さあ。帰るわよルーク。」

今なら分かる。この声の人。俺のせいで傷つき、俺を見ていると言ってくれ。そして・・・俺の大切な人

「ああ。行こうガイ、ティア」

俺はその手を掴む。

「俺のせいだ。」

バルモンが呟く。バルモンに見えるのは過去の映像。祈りの場で倒れている戦士達、気を失っている俺。そして・・・そんな俺を庇うようにして息を引き取った師匠。

俺があの時動けていれば、少なくともエンジェモン様はその隙を突いて、アイツを

なのに俺が恐怖に震えて、動けず。大切な人を失ってしまった。それだけじゃない。兄貴を、兄貴の心を傷つけてしまった。俺が動けていれば、何かが変わったのかもしれない。

「俺は人を不幸にしてしまうのか？」

ひよっとしたらタイキを、俺に接して、兄貴に笑顔を取り戻してくれたあいつまで巻き込んでしまうのか？俺は・・・なんでこうまでして大切な人を傷つけてしまう。バルモンの心が黒くなる。

「バルモン！」

誰かが呼びかける

「バルモン！しっかりしろ！」

誰だよ一体。

「俺が、悪いのに、なのに・・・」

「バアルモン？」

「何で兄貴まで傷つくんだ？」

「……」

息を呑む声

「何で兄貴まで傷つくんだ？」

その言葉が、ベルゼブモンの心に刺さる。そういう事か、とタイキは思った。二人は責任を押し付けるのではなく、それが全部自分のせいと責任を受け入れた。

責任転嫁は確かに最悪だ。でも責任を自分で背負いこんだせいで、大切な人を傷つけ、そしてその大切な人も自分のせいと背負い込む、その繰り返しだ。ベルゼブモンも、自分が動けなくて戦士達が殺されたと思い、後悔している。

「俺達は本当に兄弟だな。」

誰かが言う。一体何のことだ。

「俺も、同じだ。自分がもし動いていればと悔やみ、お前は悪くないと言った。それがお前を傷つける事になってしまふなんて」
そんな事ない。

「俺達は本当に不器用だ。そのせいで大切な事を忘れてしまった。俺達は俺達以外にも大切な人がいる事を、辛かったらお互い相談すればいいのにお互いそれを忘れてしまふ。」

「バアルモン。俺はお前と出会って不幸になった事はないよ。むしろバアルモンとベルゼブモンに出会えて本当によかった。それはこれからも変わらない。じゃあ聞くけど、エンジエモンさんは、戦士達は出会わなければよかったって言ってたか？」

これは、俺だけではなく兄貴にも言っている事だ。そうだあの日エンジエモン様は、俺に向かってこういった。『お前達と出会ってよかった。』その後エンジエモン様は息を引き取った。おそらくお前

達とは俺と兄貴だけでなく、孤児院にいる子供達も含まれている事だ。エンジエモン様は最後まで俺達のことを思っていたのに、俺はそれを最後の言葉を忘れてしまっていた。

「それと、これはエステル達園芸部の皆からの伝言だ『約束があるからちゃんと帰って来てね』」

それは、あの花を輝かせる約束だろう。俺はその約束を破りかけたこんな所で

「帰るか？ここにいても何も変わらないなら、ここを出て、皆を」

「バアルモン。こんな俺だけど、まだ兄貴って呼んでくれるか？」

手を差し伸べる。それは二つあった。一つは偶然出会って、そして俺に優しくしてくれて、俺を友と呼んだ人。もう一人は、生まれた時からずっといて、俺を支えてくれた、俺のただ一人の大切な兄

「ああ。」

俺はその手を掴んだ。

『醜い』

それは、肉親からの言葉だ。政宗もまた過去の記憶を見ている。方で幼い政宗は蹲っている。部屋には机やベットや本棚など必要最低限のものしかない。自分の部屋だ。

俺は幼い頃に病気で右目を失った。それが、俺の生活を一変させてしまった。母親は、徹底的に俺を嫌って、弟であるアイツを俺から遠ざけた。そしてそれから数年たった時、母親は、弟を連れ何処かえと行ってしまった。その時の親父の辛そうな顔は覚えている。その時俺は思った。

俺のせいで家族は離れ離れになってしまった。家族だけじゃない。幼い頃から俺と仲がよかった、小十郎も俺と知り合いと言うだけで離れて行った（まあ。あまり友達はいない方だったが、さらに孤立した）。それに成実もそうだ。俺のせいで不幸になった奴がいる。いつだったか誰かに言われたことがある。

「お前は不幸を振りまく存在だ」

それが、幼い俺を酷く傷つけた。それは今も変わらない。

俺はあんなあつさりと捕まってしまった。アイツらは無茶をするだろう。俺が不甲斐ないせいで。

政宗の心はまた黒くなる

「政宗様！」

誰かの声が、聞こえる。

「政宗様！お気をしつかり！」

「離れる。俺に構うな」

少しの抵抗だ。

「俺って本当に、愚かな奴だ。何で大切な人を傷つけてしまうんだろうな。親父もアイツも」

「！！」

「あいつの言ったとおりだ俺は不幸をふりまく存在」

ドゴツ

頬に衝撃が走る。それが殴られたと気づくのはすぐだった。

「そのような弱気な事を、言わないで下さい！俺はあなたと出会って不幸だと思ったことは一度もありませぬ。輝宗様も成実も・・・そしてアイツらも」

カキンッ

「筆頭！目を覚ましてください！」

「僕達、筆頭に救われたのにまだ何もしていないのに！」

「筆頭！何を抱え込んでいるか分かりませんが、俺達の事も忘れなideくだせえ！」

「筆頭！皆筆頭のことを待ってるッス」

「全くあいつらは、黒牙を相手にしていろって言うてたのに」

おそらく、気を失っている俺達に魔物が襲って来たので戦っているのだろう。

「政宗様。あなたを慕っている者は大勢います。その者達はあなたと出会って不幸とは思っていない。あなたは自らあいつらを不幸にさせるつもりですか？」

俺は・・・

「それに・・・あなたは右目を失っていない・・・あなたの右目は俺です。」

ふと頭によぎるあの日の事

まだ祠があつて、その近くで俺は泣いていた。それはお袋が出て行ってすぐの事だ

『政宗様！』

そんな俺をアイツは、捜しに来てくれた。俺はアイツに何故俺は右目がないのだろうとガキっぽい事を言ってしまったそんな俺にアイツは

『だったら俺が右目になります。俺があなたの右目になってあなたを支えます』

「過去のことをいつまでも引きずってるなんて、俺COOLじゃなかったぜ。」

「政宗様！」

差し伸ばされた手。それは幼い頃からの付き合いで、俺を支えてくれる、俺の右目。しかし他にもある。俺を信じてくれた奴の手が、見えないけれど、感じる。

「行こうぜ。小十郎」

俺はその手を掴む。

第十八話 過去と大切な人（里帰り編）（後書き）

作者「いよいよ次回は里帰り編のクライマックスです！」

ユーリ「見てくれよな！」

銀時「それ俺のセリフだ！」

第十九話 決戦（里帰り編）（前書き）

作者「いよいよ里帰り編もラスト！楽しんでください！」
銀時「後、後書きでお知らせがあるらしいぜ。」

第十九話 決戦（里帰り編）

「はあはあ・・・くっ」

「大丈夫かよ先生。」

「あ、甘い物食いてえ。」

銀時だけでなく、他の者も体力の限界が来ているようだ。しかし黒牙はふらついてもいない。

「どうした？それで終わりか？」

ゴッ

黒牙は、数個の巨大な火炎弾を発生させ、当てようとする。

「チッ！」

その時

ビシュ ゴッ

突然火炎弾が全て銀時達に当たる前に全部爆発する。離れた所で爆発したので、これでの怪我人はなかった

「一体・・・何が？」

「ご無事ですかな？」

前を見ると、輝宗が刀を構え立っていた。

「輝宗さん！」

「赤い髪の子から、色々と危険な状況である事を知って来たのですよ。」

りせの事だろう。

「えっちよつと待つて。じゃあさっきのは・・・」

陽介の言う事が終わる前に、黒牙の爪が輝宗に迫る。

「むんっ！」

ピシュ

輝宗は一閃して、傷を負わせる。その瞬間は見れなかった。

「す。すげえ」

「輝宗さんって、居合いの達人で、その速さは上杉先生と同じかそ

れ以上って」

ロイドは驚きを隠せないようで、佐助が説明する。

「流石は、政宗の親父」

銀時がそう言った直後

「グオオオオ！」

突然黒牙が吼える。しかも苦痛のようだ。

「どうしたんだ？」

銀時が首を傾げる。

「力の源が、無くなったんだ。」

ワイズモンが説明する。

「じゃあ。あいつら助かったんだな！」

「ああ。」

元親が嬉しそうに言う。

「お前ら！あいつらが作ってくれたチャンス無駄にするなよ！」

『はい！』

銀時の言葉に全員答える。

「ふっ。いくらあ奴らが解放された所で、貴様らは我に倒される！」
ゴッ

黒い炎を纏った爪が銀時達を襲う。

ガッ

しかしそれを受け止めた者がいた。

「させるか！」

「はああ！」

受け止めたのは、シャイニンググレイモンとミラージユガオガモンだ。

「どうやって進化したんだ？確かお前ってデジモン殴んなきゃ進化出来ねえんだろ？」

銀時は大に聞く。

「こいつさ。」

大は右腕につけた銀色の腕輪を見せる。

「ハロルド先生が、デジモンとほとんど構成している物が同じの腕輪をくれたんです。それで大はアグモンを進化させる事が出来たんです。ただし力は普通の90%しか出せませんが」

トーマが詳しく説明する。

「たまには、役に立つ発明するな！あのマッドサイエンティスト！」

「はあ！」

シャイニンググレイモンとミラージユガオガモンが爪を離し、その隙に

「グロリアスバースト！」

「フルムーンブラスター！」

ドゴッ

「ぐっ 貴様ら！！」

「ペルソナ！トール！」

総司はペルソナトールを出す。

「行くぜ相棒！」

そう言うと同時に陽介のペルソナ『ジライヤ』が『スサノオ』に進化した。ここでは陽介達は進化前と進化後のペルソナを自由に出すことが出来ます。

「ブレイブザッパー！」

スサノオは自分の周りを囲む、突起がいくつか付いた輪を黒牙目掛けて投げる。

「真理の雷！」

トールは、光の柱のような雷を落とす。

「ぐううう！」

ゴッ

流石にキレたのか、炎をさらに大きくして突進しようとしている。

「乱れ十六夜！」

「ホーリーランス！」

「断空剣！」

ドゴッ

突進する直前に、止めたのは

「あっ」

新八が声をあげる。

「片倉先輩！ティア！ガイ先輩！」

「と言う事は」

ユーリは小十郎達が来た所を見る。

「よお。」

予想通り、政宗とルークとバルモンがいる。近くにはタイキとベルゼブモン、そして何処かへ行っていた。政宗の舎弟の四人がいた。「無事だったんだな！」

ロイドが政宗達に向かって言う。

「ああ。ちつとやばかったが。さてと、俺達をあんな目にあわせた奴はどこだ？」

政宗は黒牙を睨む。傷だらけだがまだ立っている。

「貴様ら！何故あの空間から脱出できた！」

「あたり前だろ？俺達のHeartはそこまで脆くはねえんだよ。」
「くっ！がああああ！」

黒牙は、政宗達に突進するが、その前にルフィが立ち上がる。

「ギア2」

ブシユウウ

ルフィの肌は赤くなっており、煙が出ている。

「ゴムゴムのJ E A Tピストル！」
ドゴッ

目にも見えない速さで、黒牙を殴る。

「くっ」

少しひるんだようだ。

「タイキ！待ってたぜ！」

「ああ！ベルゼブモン！バアルモン！いけるか？」

「ああ。」

「いつでもいい。」

「よし！シャウトモン！バリスタモン！ドルルモン！スターモンズ！スパロウモン！デジクロス！」

「デジクロス！シャウトモンX5！」

「ベルゼブモン！バアルモン！デジクロス！」

「デジクロス！」

現れたのは、ベルゼブモンの左腕にバアルモンの銃が付いたような姿だ。

「さあ。行くぜ！」

ダッ

「メテオインパクト！」

ドゴッ

「ツインズキャノン！」

ゴッ

ベルゼブモンは右腕と左腕から、緑と赤の銃弾を撃つ。

ゴッ

「くっ！」

「次は俺だ！」

続いてルークとティアの攻撃

「穢れなき風我に仇なす者を包み込まん。イノセントシャイン！」

「これで終わりにする！響け！集え！全てを滅する刃となれ！ロスト・フォン・ドライブ！」

ガッ

二人の秘奥義を受けた黒牙。後一撃で倒せそうだ

「政宗様！」

「ああ！これでフィニッシュにする！」

ダッ

「おのれええええ！！！」

黒牙は、炎を纏った爪で政宗を襲うが、政宗は紙一重でかわす。
「何！」

「覚悟は出来たか！DORAGOMVITE！」

ズバッ

「ゴオオオオ！！」

ドサッ

黒牙は倒れた。

翌日

「お世話になりました。」

ルーク達は輝宗と成実に礼をする。

「気をつけて帰ってな。」

「また来いよ！」

「じゃあな。親父、成実。」

政宗も礼をする。

「そういえば、黒牙はどうしたんだ？」

ロイドが銀時に質問する。

「何でも、力がメツチャ激減して、それこそオタオタよりも弱い位の、しかも大きさも子猫並に小さくなったし、もう一発で完全に倒せるけど、そこまでやる必要はないからって事で、ジェイドが一足先につれて帰ったらしいぜ。」

「それってたぶん。」

「まあ。これがアイツの罰だな。」

「そういえば、何で黒牙は復活したんだ？しかもあんも祠の壊れようって。」

ルークがそこまで言った時

「デメエら！俺を置いていくな！」

所々に葉っぱや木の枝が付いたバルバトス先生がいた。

「バルバトス先生！どこにいたんですか！肝試しが始まった時からいなかったし。」

「ずっとあの森の中にいたのさ！んでっ暇だったから技の練習をしていたんだがな、黒いデツカイ岩にジェノサイドブレイバーを放ったら、突然気を失って・・・そういや。何か黒い炎出てたな。」

・・・

その言葉に全員が黙る。

「ひよつとして、その岩はこれでは？」

輝宗はバルバトスに、壊される前の祠の周りの写真を見せる。

「おお！そうだ！これだ！これ・・・あん？」

バルバトスを全員が睨む。それは、黒牙の時よりも怖い。

つまり今回の事件の原因は・・・

『お前かあああああ！！！！！！』

全員でフルボッコする。

「ぶるわああああ！！！」

バルバトス先生にお仕置きと言う名のフルボッコをした後、政宗達

は新幹線に乗った。いつもどおりの生活が待っている。いや、行く

前と少し変わった事がある。それは・・・

「隣いいかい？」

「いいでござる。」

しいなが幸村の隣に座る。

「その傷さ。まだ完全には治ってないんだね。」

幸村の腕の傷は、治療術で治療したが、すぐに戦わなければいけなかったのだ、完全には治っていない。帰って来てから治すのだ。

「うむ。これも某が未熟だったゆえ。」

「やっぱり武田先生と殴り合いしたのかい？」

「うむ！もちろんでござる！帰ったら今までよりも鍛錬に励まねば！」

「アタシも協力するよ。」

しいなは幸村に微笑みかける。

「兄貴。怪我は？」

「大丈夫だ。」

「そうか。」

ベルゼブモンとバルモンが喋っている。近くにはタイキがいる。

「バルモンが戻ってこれてよかった。」

「心配をかけたなタイキ。」

「いいっていいって。俺はバルモンが無事でよかった。」

「俺もだ。無事でよかった。」

「・・・フツ。」

それは、あの日、尊敬する戦士達と師匠を失って以来の笑顔だった。

「政宗様。申し訳ありませぬ。」

「はあ？」

「理由はどうあれ、あなたを殴ってしまいました。」

「別に気にしてねえよ。あれ俺を助けるためのだろ？」

「しかし！」

政宗は小十郎の顔の前に手を突き出す。

「もういい。喋るなよ。これくらい。殴られるなんて、中学じゃよくあった事だし。それに・・・お前が助けてくれてよかった。」

「政宗様。」

政宗は居辛くなったのか、席を離れる。

「ごめんなさいね。助けにいけないくて。」

ジユデイスが政宗に言う。

「HA！別に、俺をあんな過去から助けれるのは、小十郎くらいって思っただら？ってか聞いてたのか？親父がルークに話してたこと」

「ええ。少し散歩してた時にね、私耳がいいから。安心してその時他に誰もいなかったから」

「誰にも言うなよ。」

「もちろん。」

「あの。ティア。ごめん。」

「私は、あなたを見ているって言ったでしょ。」

「あ、うん。・・・そうだこれ。」

ルークはポケットからあの髪飾りを出す。

「これって。」

「渡したかったけど、タイミングがなかったんだ。ありがとう。」

「ええ。」

ティアは髪飾りを手にした後微笑んだ。

第十九話 決戦（里帰り編）（後書き）

銀時「え〜。今までクロスオーバー学園を見ていただきありがと・

・」

作者「いや最終回じゃねえよ！終わるか！」

銀時「冗談だつて、んで何だよお知らせって。」

作者「お知らせは二つあります、実は次回から新しい作品が出ます！楽しみにしてください！」

銀時「もう一つは？」

作者「実はアンケートを取ろうと思います。内容はクロスオーバー学園に出てきたキャラで、好きな男性キャラ、女性キャラのアンケートです。好きな男性キャラと女性キャラをそれぞれ書いてください。こういう風に。」

例

男性キャラ

政宗

女性キャラ

ティア

作者「アンケートは、一回につき、男女それぞれ三回です。」

銀時「つーか何でこんな事を？」

作者「いつか書く話で、このアンケートを参考にする事があるんだ。

感想・アンケートお待ちしています！」

銀時「そっぴや。あんま感想来て・・・」

作者「それは言うな！」

第二十話 新しい仲間（前書き）

作者「今回から新しい作品が出てきます！」

第二十話 新しい仲間

ここは、クロスオーバー学園校長室。ここには今三人の人物がいる。

「と言う事だよ。分かったかい？」

言ったのは、クロスオーバー学園理事長、お登勢だ。

「いや、あのすいません。頭に突きつけられた物が気になって聞いてませんでした。」

そう言うのは、『今は』この学園の教師ではない男だ。

「・・・・・・」

その男に銃を突きつけている、魔王と言う言葉が彼のためにありそうな位の迫力がある男、彼こそこのクロスオーバー学園校長織田信長だ。

「ちよつと校長。どうせこいつ逃げないから、銃を下ろしたらどうだい？」

「フン」スツ

信長は銃を下ろす。この学園で信長に指示を出せるのは、お登勢理事長と、教頭のダオス先生ぐらいだ。「じゃあもう一回言うからよく聞けよ。実はね、夏休み中に問題を起こした教師がいてね、そいつ前から問題になってたけど、今度の事件で、ついにそいつの事を辞めさせる事になったんだけど、そいつあるクラスの副担で、代わりの副担にアンタを選んだんだよ。」

「ちよい待ち。何で俺？他にもいるでしょ。」

「そこも、やっぱりクロスオーバー学園。色々な意味でヤバイのは知ってるだろ。普通の奴よりは、アンタがいいしね。それにあんた教師免許持つてるし。」

「分かったよ。やればいいだろ？」

「最初っから言ってたんだけどね。それからアンタの村の奴何人がこっちに通わせてもいいよ。」

「本当か！ああでもアイツが落ち込むだろうな。仕事が無くなるって」

「安心しな。村でもそのまま続ければいい。頼んだよ村長。」

「了解。」

そう、自称河童の、河川敷村の村長は答える。

数日後

「おはよう政宗。」

「ああ。」

ルークは政宗と一緒に行く。

「今日から二学期か。」

「そついや。猿飛が言ってたが、また転校生が来るらしいぜ。」

「またかよ。一体どんな奴なんだ？」

「デメエも転校生だったけどな。」

その後始業式が終わりホームルームとなった。

「えゝ。知ってる奴は知ってると思うが、実は1-Wの副担が学校辞めたらしく、新しく副担が来たそうだ。」

ザワザワ

クラス中が騒ぐ

「先生。そもそも1-Wの副担って誰だったんですか？」

新八が聞く

「ああ。バルバトスだ。」

やっぱりか、と誰もが思った。夏休みの黒牙事件。あれはバルバトスが起こした物だし、それに色々と問題あったしな、っと思った。そして誰もが

「これで・・・あの地獄の体育が」

ウソップが呟く。あの体育はマジでやばかった。ルフィは落とされた事を思い出したのか、嫌そうな顔をする。

「で、新しい担任って?」

新八は聞く。

「何でも、校長と理事長と古い付き合いの奴らしい。」

一方

1 - W

「と言うわけで、バルバトス先生の後任の先生だ。」

「よろしくな! 気軽に村長って呼べよ!」

(・・・河童?)

誰もがそう思ったらしい。

1 - Z

「後、このクラスに転校生が来ている。今から紹介するぞ。」

ガラッ

入ってきたのは、四人の男女だ。黒い髪の男と、金色の髪の女と、天辺の髪型が葉っぱのような女と、何故か星形のマスクを被った男だ。

「じゃ。適当に自己紹介をしてくれや。」

「分かりました。俺は市ノ宮行。リクルートもしくはリクと呼んでください。」

「二ノだ。よろしくな。」

「P子ですよろしくね!」

「星だ。よろしくな。」

また個性豊かな人が、と新八は思った。

『俺が言うのも何だけど、あそこメツチャヤバイから』

数日前村長に言われた言葉を思い出すリク。まあここよりヤバイ所

なんてつと思つたが。あなたの言う通りだ、つと今理解する。

後ろでは、土方と沖田が斬り合いをしてるし、総司からは妙なものが出てるし、ルフィは腕が伸びるしなど、色々な人達がいる。

「どうしたリク？具合でも悪いのか？」

二ノがリクに声をかける。

「あつ、二ノさん。ちよつと河川敷よりも個性的な人達がいるので、ちよつと動揺しただけです。」

「そうか？だがいい奴らだぞ、さっきエステルと言う奴が私達のために学園の案内をしてくれるらしい。」

まあ確かに普通な人もいるみたいだし、とリクは思ったが、ふとりクはリクに対しての殺気を感じた。それは星だ。

「何なんだ一体？」

「チクシヨー。二ノの隣なんて・・・羨ましい！」

リクと二ノは隣通しなのだ。ちなみにリクの反対方向の隣の席は新八の席だ。

「何だそんな事ぐらいで」

「何だとは何だ！二ノの隣何て」

星がそこまで言った時

「銀さん！！」

ガッ

「メゴオオオ！！」

2ーJの生徒であるはずのさっちゃんこと、猿飛あやめが星に抱きついた。

「たまたま教室の近くに来たら、銀さんの声がして・・・誰よあんた？」

さっちゃんは相手が銀時ではないことに気がついた。

「いや、俺は、ギアアア！！」

さっちゃんは突然星に殴りかかった。

「ちよつと何してるんですかあなた！」

「何してるんだあんた！確かに星は先生と声似てて間違えるのは分

かりますけど殴るな！」

リクと新八がツツコミを入れる。その後さっちゃんを何故かあった大きな箱に入れそれを縄で縛った後2ーJの教室に放り込んだ。

「とても個性的な方々ですね。」

リクが新八に言う。

「ええでもいい人達ですよ。あつそうだ、これからよろしく」

新八は手を出す。

「こちらこそ。」

リクは手を握り握手をする。

その時

ズズウウン

2ーJから衝撃と何かが倒れた音がした。

「シスターしつかりしろ！」

小十郎の声が聞こえる。

「おいどうしたんだ！しかもゼロスも何か暗いし！」

これは官兵衛。

「マリアと話していたらシスターの顔の傷口が開いて倒れた！後聞
いていたゼロスも」

ガイが答える。

大丈夫なのだろうかと不安に思うリクであった。

第二十話 新しい仲間（後書き）

作者「作者です！」

銀時「銀さんです。新しい作品は荒川アンダーザブリッジなんだな。」

「

作者「そうです！ーZにはリクと二ノとP子と星で、2ーJにはシスターとマリアさんです！」

銀時「新しい奴らもよろしくな」

作者「感想・アンケートお待ちしております！」

第二十一話 テストと追試

ここは、クロスオーバー学園の学生寮、ロイドの部屋だ。そこには数人の生徒が座っている。

「コレット」この意味何なんだ？」

「えっとねこれはね・・・。」

コレットは、一つの英単語を見る。

「リク。この数式ってどうやれば解けるんだ？」

「これはな」

リクは、ある数式の解き方をルークに教える。

「ZZZZZZ」

「酢昆布おかわりネ！」

「あんたら何やってんの！勉強しろ！」

机に突っ伏して寝ているルフィと菓子を食べている神楽に新八はツッコミを入れる

実はクロスオーバー学園はもうすぐでテストなのだ。そのため、コレットの提案で勉強会が行われているのだ。参加しているのは、ロイド、ルフィ、ルーク、コレット、リク、新八、二ノ、神楽だ。

「と言う事だ。」

「へー。リクって物事教えるの上手いな。」

「リクの説明は分かりやすいからな。」

「二ノさん。何か分からない所は？」

「そういえば、ティアはどうしたの？」

新八はルークに聞く。

「女子寮で勉強会があってそこに参加してるんだ。」

「ティアも頭良いしな。」

「そうネ。」

ルフィと神楽は再び菓子を食う。

「いやだから勉強しろよ！アンタら何のために勉強会来たの！二人

共一学期の期末テストで追試になったでしょ。」

ビクッ

突然ルフィと神楽の手が止まる。

「その時テスト返しの後・・・」

「うおお！やるぞ！」

「やってやるネ！追試勘弁！」

二人もやる気になった。

「一体何があつたんだよ。」

リクはぼそつと呟いた。

一方

土方の部屋

「ごはああ！」

ドサッ

「大丈夫ですかい？近藤さん。」

同じく勉強会をしていた、近藤、土方、沖田、佐助、幸村、シスター、官兵衛、ドレーク、ホーキンス達。しかし突然近藤が血を吐いて倒れた。ちなみにやつてるのは英語だ。

「む、無理だ。これ難し過ぎる。」

「さ、佐助。政宗殿はこんな難しい言葉をいつも使っているのだな。」

幸村は机に突つ伏している。

「いや。あの人が使ってるのあんま難しくない言葉だと思うけど。」

「二人共あまり無駄口を叩くな。」

ガシャン

シスターは銃を構えながら言った。

「は、はい！」

近藤は起き上がり、幸村は鉛筆を持って再開した。

「そついえば、疑問に思つたんだが土方。」

「んっ何だ？」

シスターが土方に聞く。

「この部屋何か異臭がするのだが。・・・まさか毒ガス!」

「いや違つたるシスター。しかし確かに妙な臭いがする。」

ドレークも同じ意見だ

「おいお前ら失礼だな変な臭い何てしねえよ。」

「いや。例えばこの冷蔵庫とか・・・」

シスターが冷蔵庫を開けると、中にはマヨネーズがギッシリと詰まっていた。

「俺が作った特製マヨネーズだ。ちなみに机の引き出しには、土方スペシャルのレシピがある。もらつていくか?」

「いや、やめておく。私は何も見なかった」

シスターは冷蔵庫の扉を閉じる。

「そういえば何なんだ?あの賞状?」

官兵衛の指差す方には一枚の賞状が飾つてある。

「フツ。マヨネーズ王決定戦の優勝した時のやつだ」

「何なんだマヨネーズ王決定戦とは」

「マヨネーズを愛し、マヨネーズを知る者達が己のマヨラー魂をかけて」

「土方さん。そんな話聞きたくありません。後あの冷蔵庫のマヨネーズとあの賞状燃やしていいですかい?」

「良い訳ねえだろうつう!!」

沖田と土方の喧嘩が始まる。

「落ち着け二人共!・・・そういえば。」

ドレークはある事に気がついた。

「どうした?」

「いや。山崎の姿が見えないなと思って。アイツも参加すると言つてたし」

「そいつなら。外でミントンの素振りをしているぞ。」

ホーキンスが言った通り、寮の前で山崎はミントンを「ふんっ!ふんっ!」と言いながら素振りをしていた。

「山崎いいいい！テメエ何してんだあああ！！」
ギヤアアア

土方が山崎に殴りかかった。

一方

「あ、相棒これってどうすりゃいいんだ？」

「ああ。これは」

政宗の部屋でも勉強会が行われている。参加しているのは総司、陽介、政宗、小十郎、桂だ。

「と言っことだ。」

「おおこんな難しい問題が解けるって、流石は学年成績トップ5に入る奴。」

「そうかな。」総司と陽介がそのような会話をしている時

「何をやっている桂？」

小十郎はノートに何かを書いている桂に言う。

「新しいラップの振り付けと歌詞を考えている所だ。」

「ヅラ。今は勉強会だ。自分の部屋でやれ。」

「ヅラじゃない桂だ。そういえば、他の奴らはどうした？」

「ルーク達は勉強会。七花は今頃彼女に教えられているし、キッドはキラと一緒にやっていると云ってたぜ。佐助や風魔が。」

「どれだけ情報通なんだあいつらは？それにしても、ルフィや神楽やキッド達も真面目にやるなんて、あいつら何か変な物でも食ったのか？」

陽介が政宗に聞く。

「そういや、お前テスト返された日に休んでたっけな。俺も追試じゃなく音だけ聞こえてたが、あれは流石にな・・・。」

「ええ。あれは音だけでも・・・。」

「そっだね。」

政宗達はある事を思い出していた。

「なに？一体何だよ！」陽介の声が部屋中に響く。

それから数日後テストが行われ、それから数日後テストが返される。
「つー訳でテスト返すぞ。」

銀時が気だるげに言う。

「まずは最高得点者だが、とがめ、リクルート、総司、トーマお前らだ。」

やつぱりなと政宗は思った。

それから、テストが返された。政宗とルークは中々で、ルフィと神楽はギリギリ追試を免れた。「でつ。追試組だが、山崎、P子。お前ら追試だ。」

ええええ。

「つーかP子。お前、普通だったら、平均点以上だったがな。」

「えっ！？何がいけなかつたんですか！？」

「よく見る。名前書くの忘れてるぞ。」

「あっ！？」

いや、どんな、うっかり間違いだ！と、政宗は心の中でつつこんだ。

「後、ザキお前何だよこの解答。」

「えっ？何がですか？」

「『主人公が、一番好きだったのは』

って問題で何で『あんパン』なんだ！」

「お腹減ってたので、つい。あんパンおいしいですよ。先生もよかつたら。」

「とにかく、お前ら後で教室の上の部屋に行け。」

よく見ると山崎の顔は青い。

一方

21」

「はい。という訳で、桂君が追試です。」

「先生！なぜ俺だけ追試なのですか！そしてなぜ里帰り編に俺は出てこなかったのですか！」

「後の質問は、作者に言ってください。」

いや、お前の出すタイミングがなかったというだけだから。

「それと何ですか。長文を書くところに、妙な文がありますが。」

「ラップの歌詞です。」

「そんな堂々と言うことですか？とにかく後で、例の教室にいれま
すからね。」

一方

11Z

「先生大丈夫なのか？あいつら。」

政宗が聞く。

「さあな。」

銀時がそう言った後

「うつけ者があああああああ！！！！」

信長の声が学園中に響く。

「ぎゃあああ！！」

「村長うつうつう！」

「エリーiiiiiii！！」

山崎達の悲鳴が聞こえる。

「あれって、本当にヤベエしな」

「そうネ。」

経験したルフィと神楽が言う。

数分後、ボロボロになった山崎とP子が帰ってきた。

第二十一話 テストと追試（後書き）

銀時「おい！あいつら大丈夫か！」

作者「いや、大丈夫に決まっていますよ！ケガはあんまりないですよ！」

作者「感想・アンケートお願いします！」

第二十二話 デート&お出かけ攻防戦（前書き）

作者「今回はいつもより長くなってます！そして遅い更新にごめんなさい！」

第二十二話 デート&お出かけ攻防戦

それは、昼休みの時間で、政宗が屋上で小十郎と舎弟達と昼飯を食べている途中から始まった。

「天下ランド？」

政宗は、今日の前で話していた女子生徒、ジュデイスに言う。

「ええ。今度の日曜日よかったら一緒にって思っで。」

天下ランドとは、クロスオーバー学園から少し離れた所にある人気の遊園地だ。

「俺は、別に構わないが小十郎。」

「政宗様。実は、この小十郎丁度その日外せない用事があるので一緒にできません。どうぞお二人で」

「別に気にしないが。いいぜ。」

「よかったわ。じゃあね。」

そう言っでジュデイスは去っていった。次に小十郎と舎弟達が少し席を外した。

「どうなるんでしょうかねえ。」

良直が言う。

「残念ながら、俺はこういう色恋沙汰はあまり。」

小十郎が言う。

「多分問題ないと思いますけど。ちょっと気になりますね。」

文一郎が言う

「筆頭上手くいくといいんですけどね。」

孫兵衛が言う。

「大丈夫だろ！俺らは筆頭とジュデイスの姉さんの仲を応援しようぜ。」

弥三郎が言う。実は政宗本人を除いて、小十郎と舎弟達はジュデイスが政宗に惚れている事を知っているのだ。敬愛する筆頭こと政宗の恋愛を影ながら応援しているのだ。

一方

「天下ランドでござるか？」

廊下でしいなに呼び止められ、幸村は言う。

「そっそのペアチケットがあつてね。一緒にどうかなつて。」

「しかし、お館様との鍛錬が・・・。」

「実はさ旦那丁度その日お館様急に用事が出来て旦那との鍛錬できないってさ。」

「そ、そうなのか？・・・って佐助！いつからいた！」

突然現れた佐助に驚く幸村。

「ついさっき。それより旦那返事は？」

「お、そうか。では一緒に参りましょうか。」

「うん！」

いきなり幸村を直視してしまつて、しいなは顔をそらす。

「しいな殿？いかなされた？」

「な、何でもない！」

あの肝試し以来、しいなは幸村の事を意識し始めたのだ。チケットはコレットから渡されたのだ。『これで、幸村を誘つてみたら？』と言われて。

（さてつと。しいなは案外こういうの苦手だし、旦那はこういうの経験ゼロで、恋愛とか超鈍感だし、どうなる事やら。）

佐助は心の中でそう思った。

一方

「天下ランド？」

12の教室でベルゼブモンとメルヴァモンは話していた。

「ああ。イグニートモンからチケットを渡されてな。一緒にどうだ？」

「ああ。別にいいが。」

実は二人ともお互いの事が好きなのだが、その事を表に出せないのだ。

「これで、二人の仲が縮まればいいけど。」

「そうだな。」

教室の前の廊下で、メルヴアモンの弟イグニートモンと、バアルモンが見ている。

（姉さん♡兄貴♡頑張れ）

二人の弟は、お互いの姉と兄を応援している。

一方

「デート？また河口まで行くか？」

教室で二ノとリクが会話をしている。

「いえ、今回は河口ではなく天下ランドと言う遊園地に行きます！リクは二ノに言う。

「遊園地・・・どんな所だ？」

「楽しいところ・・・だと思いますよ遊園地なんてほとんど行ったことないですけど。あのどうですか？」

「いいぞ。」

二ノは即答で言う。

「そうですか！では次の日曜日に。」

「ああ。」

そんな二人のやり取りを憎らしげに見ている者がいる。

そんなやりとりがあった昼休みを過ぎて、放課後。学園近くの公園で

「ルフィ買って来たか！数量限定のメロンパン！」

「ああもちろん！そっちはどうだ？」

「うちも買って来たよ！たこ焼きパン！」

「よっしゃああ！」

ルフィとボニーが喋っている。実はルフィとボニーと神楽の大食ト

リオは、一日数量限定のパンをそれぞれ3つのパン屋で買って来たのだ。

「そついや。遅いな神楽。」

「おっ帰ってきた。」

神楽が公園に向かつてるが、手には何も持っていない。しかし「フフフ。」

神楽は何か意味ありげに笑っている。

「跪くアルお前ら。」

「「はあ？」」

「頭が高いつて言つてんだヨ！工場長と及び！」

「女王様の方がいいんじゃないのか？工場長。」

「それより、船長はどうだ？工場長。」

「女王様や船長より生産的アル！」

「じゃあ工場長。DXイチゴクリームパン買って来たか？」

ボニーが聞く。

「それは、買い損ねたけど。」

「おいおい！俺達買って来たぞ工場長！」

ルフィが言う。

「数量限定のパンは駄目だけど、もつと素敵な情報がアルよ。」

そう言つて神楽は、一枚の紙を取り出す。

「天下ランド。チーム対抗大食い王決定戦挑戦者募集！？」

「こ、工場長！！」

そして、日曜日の天下ランド。

「よお。」

「あら、ごめんなさい待たせた？」

「いや、俺もさつき来たところだ。」

政宗とジュデイスは、天下ランドの入り口近くで待ち合わせをしていた。

「じゃあ行くか。」

「ええ。」

政宗達は中へと入っていった。

「でつ、何で俺達が？」

「少し、心配でな。政宗様はああいう事は初めてなんだ。」
ルークとティアと小十郎と舎弟達が様子を見ていた。

「さてつ、では行くか。」

「あ、はい。」

小十郎達も移動する。

一方

「ゆ、幸村。」

「おはようでござるしいな殿！」

政宗達とは少し離れた場所で待ち合わせをしていた幸村達。幸村達は遊園地へと向かう。

「さてはて、どうなることやら。」

ゼロスは見届けている。近くには、ロイドとジーニアスとゾロとウソップとチョッパーがいる。

「何で俺達も？」

ロイドが聞く。

「いいじゃないの、ロイド君。こついつのも。」

「僕も・・・いつかプレセアと・・・。」

「ZZZZZ。」

「おいゾロ寝てるぞ。・・・んっ？」

ウソップはある場所を見るそれは

「どうじゃ？」

「くっ人が多すぎて狙えねえ。」

ハンコックとサンジが隠れている。サンジは何故か銃を持っているが。その先には

「じゃあ。行くか！」

「そうだな！」

「行くアル！」

ルフィ達が、遊園地に行こうとする。

「おいお前！わらわ達も行くぞ！」

「はいハンコック様！」

「何やってんだお前ら？」

ハンコック達に向かって言うウソップ。

「どけ長鼻！わらわのルフィがあのような者達と、で、デートなどと。」

「あいつ、両手に花何ぞ……。」

「あのな。二人とも、ルフィ達はチーム対抗大食い王決定戦に出るためで、決してデートでは。」

「あっ！ルフィが行ってしまう！行くぞ！」

「はい！」

ドゴッ

「ぐふっ！」

ハンコックに押されて、倒れるウソップ。二人も遊園地に入っていく。

「あっ！ちょっと待て！」

「どうしたウソップ？」

ロイドが聞く。

「ああ、実は……。」

ウソップはさっきあった事を話した。すると

「ルフィがやばい！いやそれ以前に天下ランドが！」

「確かにな。」

「じゃあ俺様がしいな達を追うから、ロイド君達は、ルフィ達を追ってくれ！」

「分かった！」

ロイド達は二手に分かれる事になった。

一方

「あゝあいいなあ。遊園地デート。いつか村長と。」

「それだつたらさつさと告白しなさいよ。」

「誰もが、ナミみたいにはなれないんだよ。」

「へへっ恋を見守るのもいいよな。」

リク達の事が気になってついて来た、P子とナミとユーリと慶次だ。

「あら？あそこにいるのつて。」

ナミはある方向を見る。

「ちっ！人が多くて狙えねえ！」

「あつアイツら入りましたよ！」

「何！行くぞ沖田！」

「へい。」

銃を持つ星と沖田だ。

「何だかやばくねえか？」

「デートを台無しにはさせたくないからね。」

「私二ノのために頑張らないと！」

「行くか！」

ユーリ達も向かう。

一方

「く。アイツら仲良くしちゃって！」

「リリスモン様は彼氏いない暦長いからねイビル。」

「前に付き合つた彼氏もすぐに別れちゃってますからねイビル。」

「嫉妬イビル。」

「うるさいよアンタら！」

隠れているのは、クロスオーバー学園の教師リリスモンとその部下のイビルモンだ。視線の先には、ベルゼブモンとメルヴァモンが楽しそうに話している。

リリスモンは一度ベルゼブモンを部下にしようとしたが断られ戦いを挑んだが、倒され、一方メルヴァモンとは、ベルゼブモンとの戦いの前一度戦って負けてしまい。リリスモンのプライドを傷つけてしまい、そのせいかリリスモンは二人を快く思っていないのだ。

「行くわよあんた達！」

二人が遊園地に向かったため、リリスモンも向かう。

「うわっやばい事になってる。」

二人の様子を見に来た、タイキとシャウトモンとバリスタモンとドルルモンとバルモンとイグニートモンと銀時と新八だ。

「タイキ二人を。」

「ああ！先生。」

「別に構わねえよ。行くぞ新八。」

「はい！」

タイキ達も向かう。

遊園地に入った政宗とジュデイスペア。

「ねえ。良かったらあれに乗らない？」

ジュデイスは、メリーゴーランドを指差す。

「ちつと恥ずかしいが、まあいいぜ。」

「おいリク！あの馬柱が刺さっているぞ！」

「二ノさんあれは、メリーゴーランドの馬です。」

リクと二ノも行く。

「あれ？ルークどうした？」

ユーリ達は、ルーク達と出会った。

「あつユーリ。政宗達が心配で、ユーリは？」

「ああ実は。」

ユーリはここまでの経緯を話す。

「それってやばくないか？」

「ああ。だから。」

「あつ！ユーリアイツらメリーゴーランドに向かっている！」

P子の声に反応して見ると、星と沖田がメリーゴーランドに向かっている。

「やばい！行くぞ！」

ユーリ達もルーク達も向かう。

政宗達とリク達は楽しそうに、乗っているが、リク達の後ろでは

「ちつ、リクの奴良く考えたな。これに乗るなんて、当てにくいし、ちよつと気持ち悪くなってきた。」

「あんにやるー。ってか遅いなこの馬！さっさと追いつけよ！」

「いや。追いつかないから！これメリーゴーランドだからね！土台と一緒に回ってるから。」

ルークのツツコミも聞いておらず、

「よし今だ！」

星は撃つが、リクをずれて、政宗に当たりそうだが

「鳴神！」

ドゴッ

小十郎の鳴神で相殺した。

「この893野郎！邪魔すんなよ！」

「政宗様の邪魔はさせん！」

「つーか。沖田。お前なんで、参加してるんだ」

ユーリが質問する。

「面白そうだったので！」

「それだけかよ！」

一方

ベルゼブモンとメルヴァモンはボートに乗って、ジャングルのような場所を探検すると言つアトラクションに乗っていた。

「さあ。さつさと来なさいよ。あたしの毒の爪の餌食にしてあげるわ。」

リリスモンは木の影に隠れて、彼らを待っていた。少しして、二人が乗っているボートが来る。

「今よ！」

ビュン

リリスモンは腕を伸ばし、ベルゼブモンに近寄ろうとするが

「ロックダマシー！」

ガキン

同じく隠れていた、シャウトモンに阻まれ、腕は方向を変え、ベルゼブモンは助かったが

ベチン

「はぶっ！」

ドボン

何故か乗っていたガイに、腕が当たりガイは川に落ちる。

おい大丈夫か！ってか何で落ちたの！？、などの声がボートから聞こえる。

一方

「す、少し目が回ってきたよ。」

「大丈夫でござるか？」

「アンタは、紅蓮脚で回るの慣れてるしね。」

しいなと幸村は何事もなくコーヒーカップに乗っていた。

「うゝん。もうちょっと何かあったらいいんだけどな。」

ゼロスはコーヒーカップに乗りながらそう言う。そんな中

「おりゃあああ！」

「負けないぞおお！」

何故か桂と近藤が、どちらが速く回るか競っていた。

「何やってんのあいつら？」

ゼロスはそう呟く。

「そろそろお昼にしない？」

「そうだな。」

ジユデイスと政宗は、レストランへと向かった。そこには何故か人だかりとなっていた。

「何なんだ？」

政宗はレストランの中をのぞくと

「おかわり！速くもってこい！」

「おい！こっちにも！」

「遅いアル！」

「あの。すみません！もうお題のジャンボチャーハン五つすでに達成してますよ！」

「もうやめてえ！店が、店が！」

「何やってんだアイツら？」

「大食い王決定戦？」

ルフィ達から事情を聞いた政宗達。

「おう！そんで見事俺達が優勝したぞ！」

「あれくらいなんともないって事だ！」

「そうネ！」

「いや。つーか店の奴もう涙目だったぜ。優勝者はタダだったか？」
ルフィ達はジユースを頼んでいる。

「おい。眉毛。本当にこれでいけるのか？」

「ええ。ジユースを激辛ドリンクにすり替えましたよ。」

少し離れた席で、ハンコックとサンジが見張っている。ちなみに、

サンジが激辛ドリンクにすり替えたのは、ルフィだが、ハンコックは神楽か、ボニーだと思っている。

（ふふつ。これでみつともない姿をさらして、二人に幻滅される）
サンジがそう思った矢先に、三人のジュースをのせた盆を持つウェイトレスが来る。

しかし、

「お邪魔星！」

ビシュ、 ウェイトレスの足の前に、バナナの皮が現れ
ガツ

「キャ！」

ウェイトレスは転びそうだったが、体制を何とか保つが、盆にのっていたジュースは落ちる。

「ちっ！何て事だ！」

ビシャ

サンジの頭に、激辛ドリンクが振ってきた。

「あつつうつつうう！！！」

「やったな。ウソップ！」

「へへ〜ん。」

バナナの皮を撃つたのはウソップだ。あつつうつつうう！！も、申し訳ございませんお客様！ってか何このバナナの皮！？店内では、そうした騒ぎがあった。

「少し休憩しようか？」

「そうでござるな。」

昼食を終えた、幸村達は、ベンチで休んだ。

（こ、これがアイツが言ってたチャンスか？）

しいなは、心の中でそう思った。デートの前日、ゼロスは言ったのだ。

『しいなど、幸村は手は握っているけど、それは危ない状況でしかできなかった。なら今度は自分の意思で手を繋いで歩く。そして良かったら、観覧車で告白！』

観覧車で告白は、かなりハードルが高いと思っっているしいのだが、手を繋ぐならと、しいなは、手を繋ごうと、手を伸ばす。しかし、そんな二人を遠くから見ている者がいる

「お前らあああ。」

元クロスオーバー学園の教師バルバトスが、清掃員のアルバイトをしていた。

「よくもおおお。俺様をおおお。ぶるあああ！！」

バルバトスは二人に向かってダッシュするが、

「シャイニング・バインド！」

「おりやあああ！」

「インディグ・ネイション！（秘奥技ではない方）」
ドゴッ

ゼロスと銀時とジーニアスにより、バルバトスは茂みに吹っ飛ばされた。

「デメエが、出てきたら、ここのデート全部メチャクチャになるわ！」

「ってかアンタどうやって面接に受かったんだ！」

銀時と新八のツツコミの後、ロイド達は、また分かれる。ちなみに幸村が立ち上がったので、手はつなげなかった。

「次はあれに乗るか？」

「ええいいわよ。」

政宗達は、ゴーカートに向かう。そして同じくベルゼブモンとメルヴァモンが向かっている。

「あっ？ベルゼブにメルヴァじゃねえか。」

「政宗、それにジュデイス。どうしたんだこんな所で」

「おでかけよ。二人はひょっとしてデート？」

「な、何を言っている！チケットをもらったので来ただけだ！」
そういつてベルゼブモン達は、中へと入っていった。それに続いて
政宗達も入っていった。

「えっ！ベルゼブモン達も狙われているのか！」

「そうなんですよ。だから俺達も」

「ああ。だが知り合いがこんなに多いと怪しまれる。とりあえず、
バルモンとイグニートモンは、ここに隠れている。さすがに弟い
ちや気づくだろ。」

「分かりました。」

じゃんけんで、のるのは、ルークとティアのペアと、銀時と新八の
ペアだ。

ゴーカートを運転する、カップル二組、ベルゼブモン達を追うリリ
スモン達。ちなみに運転しているのは、イビルモンの一人だ。

「いいかい！アイツらに近づいて、スピードを上げて、アイツらを
コースから勢い良く外すんだよ！」

「あ、リリースモン様！アイツらですイビル！」

イビルモンは指差すが、それは、同じカラーの車を運転している政
宗達だったが、気づいていない。

「よし！アイツらに、突撃よ！」

「はいっ！」

イビルモンは、スピードを上げるが

「あつと！」

ドン

銀時が運転する車に、横から押されて、リリースモンの乗っている車
をずらす

「あつ、すいません。」

銀時が言う。

「くっくっく……ってアイツらじゃない？」

リリスモンは少し前にいる、ベルゼブモン達を見つける。しかも、先はカーブだ。

「さあスピードを上げて！」

「はいイビル！」

スピードを上げ、二人を追うが

「ティア！」

「ええ！」

ティアは、譜歌を歌う。

「ナイトメア！」

ぐうう

運転していたイビルモンが、眠る。

「ちよつとアンタ！このままじゃ！」

ドン

リリスモン達の車は、コースからのガードレールに当たり、コースから乗り出したため動かなくなった。

一方

「リク、次はあれに乗ろうか？」

「あれですか・・・いいですよ。」

リク達は、ジェットコースターへと向かう。その途中でルフィ達と出会う。

「あれ、三人共どうしたんだ？」

「おお！リク、大食い王決定戦に優勝して、このまま帰ったら、つまらねえからなっと思って。」

実は、幸村達もジェットコースターに乗る。

リク達は、真ん中の席に座り、ルフィ達は先頭の席に座り、ボニーは少し離れた席に座り、しいな達は先頭から二席後ろの席に座り。星達はすぐにリクの真後ろの席に座り。ハンコック達はルフィの後ろの席に座った。

ジェットコースターが動き、高い所から、急降下し、猛スピードになる。

「うおっ！思った以上にキツッ！」

星達の計画は、トンネルに入った時にリクに強力な下剤を飲ませ、二ノを幻滅させる作戦だが、

ブワッ

「はわわわわわー！」

沖田はテンパる。

「ちよっど、どうしたんだ！？」

「や、やばい。これきつい！キツ過ぎるし、何かふわってなる！」

「ちよっお前さつきとテンション違うぞ！」

「Sだから打たれ弱いの！ガラスの剣なの！た、助けて天体！」

沖田は星を揺らしながら言う。

「あ、おい！揺らすな！余計恐くなる。って次ループにギヤアアアアー！」

一方サンジ達も同じ、下剤を飲ませる作戦だが、二人は今回もやる相手をお互い違っている。

「な、貴様！」

「えっ？」

「ルフィに何をするか！」

ドゴッ

「おぶっ！」

トンネルに入る寸前下剤を持ちルフィに飲ませる準備をするサンジにハンコックが怒り蹴りを入れる。

「ちよっやめて！本当にこんな時に！」

そんなことがあったとは、知らない幸村達は、トンネルに入るが

ピシャーン！

「キャアアアー！」

演出で、雷のような物をやったのに、驚くしいな。しいなは雷が苦

手なのだ

「し、しいな殿！」

プシュウウウ

ジェットコースターが終わり、星はかなり疲れている沖田に自分の肩を貸し、ハンコック達はすぐにルフイ達を追う。しかししいな達は「しいな殿。終わったでござるよ。」

「え、そ、そうかい？」

「あ、あのだから。」

「えっ？・・・あっ！」しいなは幸村に抱きついていた。

「ご、ごめん。」

「いえ、別に」

幸村の顔が真っ赤だ。

「よっしゃ！抱きついた！これで、手を繋いだらな」
ゼロスはそう呟く。

「今回も、阻止できたね。」

「アイツらが自滅したただけだな。」

P子とユーリはそんな会話をする。

「くっ！何て事だ！何故阻止される！」

「確かに手強いっスね。」

ベンチで星と沖田が、作戦会議をしている。

「あいつら！しぶと過ぎる！」

「いえ、本当に脅威なのは、邪魔する奴らですイビル。」
リリースモンとイビルモン達も作戦会議をする。

「くっ！まさか貴様がルフイを狙うとはな！」

「いや、俺レディを狙うなんて出来ないですよ！」

「メロメロメロウ！」

ガキン

ハンコックは、サンジを石にした。

「おつ。リリースモン先生。まさか先生も？」

「アンタ達はあの天然パーマの所の生徒。それにアンタはジェイドの。」

「もしかして、貴様らも」

「「デートの邪魔。」」

「なるほど、同じか。」

「あつ！おい星見てみる！」

沖田の指差す先には、リクとニノが、観覧車に向かっていた。しかも他のカップルも観覧車に向かっている。

「ヤバイですねえ。観覧車か。こりゃチューしますよチュー。」

「何！？そうなのか！」

「観覧車といったらチューっすよ。あれはそれをするために、作られてるんですよ。」

「おい！に、ニノがニノが危ない！」

「ルフィと口付けを交わすのはわらわじゃ！」

「そんなのは、どうでもいいけど。むかつくから行くわよ！」

こうして、デートを邪魔する奴らが手を組んだ。

「おい！やばくねえかあれ！アイツら手を組んだら、デート邪魔する所か観覧車が崩壊するわ！」

近くで、見ていた銀時たち、それぞれのデートを見守る者達。声を発したのは銀時だ。

「まずいですよ先生！あれってかなり大きいですし崩壊したらどれだけの被害が！」

「ちっ！政宗様の邪魔はさせねえ！」

「兄貴が初めて好きになった人なんだ。その人との思い出を邪魔をするな。」

「ええ！それは姉さんも同じですよ！」

「神楽とボニーがあぶねえ！もしかしたらルフィも」

「ああそうだな。」

「うん！そうだね！」

「よし。お前ら。手を組むか？」

コクリ

ゼロスの言葉に、銀時達は頷く。

「そういえば、政宗って好きな人っているの？」

観覧車に乗った政宗達。ジューデイスは政宗にこんな質問をする。

「あつ？いねえよ。大体俺つてもてねえからな。」

それは、勘違いで、政宗は中学時代からかなりもてていた。

「そうかしら。あなたが気づいていないだけで、本当はあなたが好きな女の子はいるはずよ？」

「はあ？」

政宗はジューデイスを見るがジューデイスは微笑むだけだ。

「今日は楽しかったね。」

「そうで、ござるな。」

しいなと幸村も乗り込んだ。ゼロスに言われた自分の意思で手を繋ぐのは無理だった。

「……………」

「し、しいな殿？いかなされた？」

「いや！な、何でもないよ。」

二人に気まずい空気が流れる。

「今日は、楽しかったな。」

「ああ。そうだな。」

ベルゼブモンとメルヴァモンも観覧車に乗っている。しかし話す事が見つからないからか。重い沈黙が流れる。

「二ノさん、今日はどうでしたか？」

「そうだな。楽しかったぞ。しかしジェットコースターと言っののはかなりきついな。川の水流より強い。」

「ええ。俺もそう思いましたよ。」

リクと二ノも喋っている。

「にしても、今日は楽しかったな！」

「おう！決定戦も優勝したしな！」

「私またやってみたいアル！」

ルフィ達は楽しそうに会話をしている。

沈黙や楽しそうな空気などが流れるそれぞれのゴンドラの中。しかし外では

「あっ？」

「むっ？」

「何だあれは？」

「えっ？」

「何だ？」

ゴゴゴゴゴ

巨大なヘリコプターに乗った、それぞれグラサンをかけた星と沖田とハンコックが銃を構え、近くで巨大な飛行デジモンに乗ったリリスモン達が、銃を構える。

「俺達は、デートぶち壊し隊。観念しろよリクルート！」

「ルフィに近づいた事後悔させる。」

「ふふふ観念することね。」

しかも、ヘリコプターの下には、機関銃が、観覧車に向かって構え、巨大な飛行デジモンが、口を開き炎を出そうとする。まさに絶対絶命の時

「必殺アトラス流星！」

「三十六煩惱砲！」

ビシュ

ヘリコプターの機関銃が崩れる。

「何！！」

しかも

「な、何だ。動けねえ！」

星達や、巨大な飛行デジモンが、動けないため、銃や炎を撃つ事が出来ない。

「よしっ！やったなイグニートモン！」

たまたま近くにいたスパロウモンに乗ったイグニートモンが、星達の動きを止める。

「バアルモン！」

「ああ分かっている！発射！」

ダウン

ドルルモンとデジクロスしたバアルモンが、ドルルキャノンで飛行デジモンを撃つ。

「くっ！」

「銀さん！志村先輩！」

「おう！」

ダッ

同じくスパロウモンに乗った銀時と新八がヘリコプターのプロペラに向かって攻撃する。しかもその後

「力の違いを見せてやる！インディグネーション・ジャッジメント
！」

「サンダーボルトテンポー！」

「鳴神！」

ドガッ

ジーニアスとナミと小十郎が、追加攻撃をして、プロペラが崩れる。

「あっ！プロペラが！」

おいしい！！

星達はヘリコプターごと落ちる。

ドゴッ

「うわっ！」

「今ですイビル！」

イビルモンがイグニートモンを攻撃して、動きを止めるのに解放される。

「ふふっ！良くやったわ！」

「おい」

低い声で呼ばれ、振り向くと

バリバリ

政宗が刀に雷を纏い、ベルゼブモンは擬人化を解き、右腕の巨大な銃にエネルギーを溜める。

「させるかっ！」

ゴオオオオ

飛行デジモンが、炎を撃とうとするが、

「させるか！天翔蒼破斬！」

「くらいな！デイバイン・ジャッジメント！」

ロイドとゼロスの攻撃で防がれる。そして

「HELLDORAGOM！」

「デス・ザ・キャノン！」

ドウッ

ゴッ

「うわあああ！」

政宗とベルゼブモンの技で、リリスモンは飛行デジモンごと吹き飛ばされた。

「大丈夫ですか？二ノさん？」

「ああ。にしても何があったんだ？」

「さあ。でも俺何もできませんでした。」

同じく狙われていた政宗達も反撃できたのに、いやむしろあの超人

達に自分が入っても

「大丈夫だ。リクはリクの出来る事をしたらいいだけだろ?」

「そ、そうですね。」

リクと二ノは手を握っていた。

「何と、デートではなかったのか!」

「ああ! つかデートって何なんだ?」

墜落する寸前、ハンコックはルフィ達の乗るゴンドラに乗った。

「そうそう。こちらは大食い王決定戦に出場してただけだ。」

「そうアル!」

何とか誤解を解いたルフィ達だった。

「大丈夫か? メルヴァモン。」

「ああありがとうな。」

ベルゼブモンとメルヴァモンはお互いの無事を確認できて安心する。

「それにしても一体何だったんだろうな。」

「さあな・・・ってお前。」

ベルゼブモンはメルヴァモンに手を握られている事に気がついた。

「あつ! すまない。」

「いやっこちらこそ。」

二人の顔は赤い。

「大丈夫でござるかしいな殿?」

「う、うん。」

幸村としいなは会話をしている。

「もうすぐで、降りれるでござる。」

「そ、そうだね。・・・あのさ」

「何で、ござるか?」

スッ

しいなは幸村と手を繋ぐ。自分の意思で

「なっ！しいな殿！？」

「ちよつと、これから降りるまで、このままで」

「う、うむ。」

二人は降りるまで、手を握っていた。

「ありがとね」

「別にたいした事はしてねえよ。」

政宗は刀を鞘に納める。

「じゃあお礼ね？」

「はあ？お礼つて・・・。」

ジューデイスは政宗の頬にキスをする。

「ちよつ！お前」

「フフフ。」

今回のデートで様々なカップルが少しずつだが進展した。

第二十二話 デート&お出かけ攻防戦（後書き）

銀時「今回色んなカップルがあつたな。一組は除いて。」

作者「そうだね。」

銀時「にしても、今回告白する奴はいなかったか。まっ進展はしたけど。」

作者「そうだね。にしても今回は長くなつたな。まさかここまで長くなるとは」

銀時「本人も驚いているか。」

作者「感想・アンケートお待ちしております！」

第二十三話 『黒狼』登場！（前書き）

作者「今回は、新しいキャラが出ます！」

第二十三話 『黒狼』登場！

ここは、クロスオーバー学園のある部屋。今そこでは、風紀委員達の会議が行われようとしている。

「では、これより会議を行う。」

委員長である近藤が言う。

「まず最初に、それぞれの報告を行ってくれ、まずはフレン。」

「はい。」

1Wの生徒で、ユーリと幼馴染みであるフレンだ。

「昨日、園芸部の活動場所近くのガラスが一枚割れました。」

「器物破損とは、なんたる事、犯人は分かったのか？」

長政が言う。

「それが、なんでも園芸部の活動を見に来ていた生徒で、鍬で耕そうとして鍬を振り上げたら、そのいきおいで、鍬が手から離れたそうで。」

「それが原因で、ガラスが割れたのか？」

「いえ。鍬が、近くの木の幹に当り、それに驚いた猫が、下に落ちた所は板の端で、猫が乗った方とは反対側の端には、空の植木鉢があつて、しかも猫が乗っている方は下に台がなくて、結果猫の重さで、反対側の部分が上がつて、その勢いで飛んだ植木鉢がガラスを」

「いや、どんなピタゴラスだ！ある意味奇跡だぞそれは！」

長政がつっこむ。

その鍬を離れた生徒は、今村長を捜していた。

「次は、アスベルだ。」

「はい。」

アスベルが席を立つ。

「二日前、園芸部の花が数本盗み出されそうになったようです。」

「何という悪だ！犯人は分かるか？」

「それが・・・明智先生です。」

「先生！？何やっているのだ先生は！」

「何でも、新しい薬を作るためだそうです。ですがその時ソフィが来て、殴り飛ばしました。」

「お花さん守りたかった。」

「いや！その気持ちは大切だが、殴り飛ばすな！ちゃんと注意をしる。」

「まあまあ。抑える長政。じゃっ次は、総悟だ。」

「へい。」

沖田が立つ。

「実はある女子生徒が、誰かに付き纏われているらしくて相談しに来ました。」

「ストーカーか！何という事だ。この事は先生達に言わねば！」

「いえ。犯人分かってますしそんな必要はありません。犯人は委員長です。」

「えっ？なあんだ。それってお妙さんだったのか。いやあ」

「委員長！！またか！これ以上やったら風紀委員の評判が落ちるぞ！」

「長政様が怒っている・・・市のせい。」

「市！何でも自分のせいにするな！」

「全く長政。もうちょっとカルシウムとれって。」

「委員長が言うことか！」

「んじゃあ次はコビーだ。」

しばらくして、近藤が言った。

「あっはい。」

中等部3-Dの生徒、コビーが立つ。

「昨日、ある男子生徒が、クロスオーバー学園付近でカツアゲされたらしいです。」

「俺も昨日カツアゲされたって言う奴と会ったぜ。」

土方が言う。

「またか。」

近藤の目が真剣になる。最近クロスオーバー学園の周辺でカツアゲされるという事件が多発しており、風紀委員の中でも問題になっていた。

「くっ！またカツアゲか！それで、顔は分かるのか？」

長政が聞く。

「残念ながら、今回も口にマスクをつけていて、目も帽子で隠しており、顔までは。」

「俺もだ。・・・だがある情報がある。」

「何だ？」

土方の情報を聞く。

「実は、最近カツアゲがあった場所で、高杉一派が目撃されている。」

「高杉だと！」

近藤は驚いて声を出す。

「高杉？」

サッカー部の部活前、ユニフォームに着替えたルークは政宗と話をしている。

「ああ。高杉晋助。小十郎と同じ2Jの奴だが、教室にはあんま来ていなくて、校舎から少し離れた小屋で仲間達とたむろっているんだ。近くの不良高校に殴りこみに行ったり、不良グループ潰したりで、『黒狼』っていう異名がついたんだ。つい最近まで停学くらっていたから、お前が知っているはずないしな。」

「そういえば、そういう名前中学で聞いた事あるような。」

「そして、五獣で唯一未だに暴れている奴なんだよな。」

突然二人の話に入ってきたのは、佐助だ。

「お前！何でこんな所に！？」

「いやああ。新聞部の記事のネタを探していたんだよ。」

「それに、五獣って何なんだ？」

「あつ、ルークの旦那知らないのか？数年前、クロスオーバー学園の近くやある地域でかなりの強さを持ち、恐れられている五人の不良の事だ。そいつらは高杉の旦那の『黒狼』を含めて、『独眼竜』

『西海の鬼』『鉄虎』『紅蓮獅子』と言う異名を持っているんだ。」

「初めて知ったよ。あつ！そろそろ練習が始まりそう。」

ルークはグラウンドへと向かう。

「あんた言わなくていいの？『独眼竜』の旦那。」

「別に言わなくてもいいだろ。」

実は政宗もその五獣の一人『独眼竜』の一人なのだ。

「ふゝん。まあいいけど。じゃっ俺様はあのネタ追うわ。」

「あのネタ？」

「知ってるだろ？最近この辺りでカツアゲが行われているって、んでっそれに高杉先輩が関わってるかもって事だ。」

「何だと？」

「場所は、校舎から離れた小屋って以外情報がないです。皆高杉先輩達が怖くて近寄らないんですよ。」

アスベルと長政と近藤が高杉に会いに行く事にした。

「それにしても、高杉の奴がカツアゲか。」

「何たる悪行。私のこの剣で削除する。」

長政は剣を構える。

「だが信じられん。あの高杉がドヒュッ！」

近藤の頭に、野球ボールが当たる。

「委員長！」

アスベル達が駆け寄る。

「あつ！大丈夫ですか！」

「しっかりしろ！」

グラウンドから来たのは、野球部のロイドとドレークだ。

「おつロイドにドレーク。」

「すみません。幸村が勢いよくかつ飛ばして。」

「いやいいって。」

「それに、お前らなんでこんな所に？」

「いや。ちよつと高杉によろがあつて。何だか例のカツアゲ事件で関係ありそうだから。」

「委員長！一般の生徒にそんな事を言つては」

「高杉！」

ロイドとドレークは驚いている。高杉はこの学園で生徒の場合で恐れられている数少ない人物だ。良く知らない者ではその悪名で、名前を聞いただけでも震え上がらされるのだ。二人が平気なのは、ロイドは一度会つたことがあり、ドレークは風紀委員に入っていた時、何度か会つた事があるのだ。

「でも、高杉先輩がカツアゲつて」

「アイツは他校の不良や、不良グループと喧嘩はするが、その様な事はしない男のはず。」

「俺だつてあんまり、信じられないんだ。」

「委員長は人を信じすぎているのだ。どんな悪でも悪だ。」

「そうだが・・・。」

「じゃあ俺達はこれで」

二人はグラウンドへと向かう。

「あつ、ありました小屋です！」

小屋を見つけたアスベル達。

「よし、では行くぞ！」

ガラッ

長政が、小屋の扉を開けるが

「な、何だこれは？」

中には、誰もいなかったが、中には写真が数多く壁に貼られている。それは二種類あり、右側の壁には銀時ばかり貼られており、左側に

は 九兵衛の写真ばかり貼られている。

「ま、まさかここは、ストーカー同盟の会場か!？」

「何だそれは!」

「ストーカー達が、それぞれの好きな人について語り合う場所だ。」

「それってただのストーカーの集まりじゃないですか!悪質の!しかもこれって絶対あやめ先輩と東城先輩ですよ。」

「・・・アスベル。校長に連絡するぞ。すぐに削除せねば。」

「はい。」

「ここは、はずれだったな。」

近藤がそう呟いた。

後にストーカー同盟は潰され、九兵衛は東城にバズーカを放ったと言う。

「おっ!小屋があつたぞ!」

数分後、小屋を発見した。

「今度こそ高杉か!」

ガチャ

ドアを開けると、そこには大きな水が入った穴があるだけの部屋だった。

「何だこれは」

すると

「ぷはっ!」

水の中から村長が出てきた。

「だ、誰だ!」

「確かW組の副担任の」

「おう、まさかここを発見するなんてな。」

「あの、あんた何やってるんですか?」

近藤が聞く。

「いや、俺って河童じゃん?あんまり、人目につきたくないし、荒

川とこのクロスオーバー学園を繋ぐトンネルを作ったんだよ。この穴がその繋いでる穴。」

「そういえば、P子が村長は自分達より遅く出るのに、いつも村長が一番最初に来るって言ってたね。」

三人は何も見なかったことにして、小屋を後にした。

「にしても、この学園どんだけ小屋があるんだ？」

近藤が呟く。

「くっ！高杉達はどこにいるんだ！」

長政がイラついている。

「あつ！委員長！副委員長！あそこ！」

アスベルが、指を差すほうには、体育館近くの小屋から出てくる、左目に眼帯をした鋭い目の男子生徒。そう、彼こそが高杉晋助だ。近くには、高杉を慕う者達がいる。

「高杉！！」

ダッ

長政が駆け出す。

「あつ！長政！」

近藤の言葉を無視して行く。

「十文字！」

ドッ

十文字を放つが、高杉は避け、十文字は

「何故じゃあああ！！」

たまたま近くにいた官兵衛に当たる。

「くっ！貴様関係の無い者にも手を出すとは！」

「いや、アンタがやったんツスよ！」

そう言うのは高杉一派の紅一点、来島また子だ。

「晋助様！」

「気にすんな、行くぞ。」

高杉は別のルートで行こうとする。

「あ、待て！」

「そこまでだ高杉！」

高杉の後ろから、別の所で高杉を捜していた沖田が来てバズーカを放つ。

ドゴッ

しかし、高杉はそれを避けるが、沖田はバズーカを連発する。高杉は何処かへ逃げようとする

「あ、！待たぬか高杉！」

「待てよ！高杉」

「あつちよつと官兵衛ほつたらかし！？バズーカも当たってるけど」

「俺が運んでいきます！」

「頼むぞアスベル！」

近藤達は後を追う。しかし、途中で見失ってしまった。

それから数分後

「ここが、カツアゲが多発している場所か。」

山崎は、カツアゲの現場に来ていた。本当は土方もいたが、新しいマヨネーズの臭いがすると言ってどこかへと行ってしまった。

「はゝあ。ひよつとしてカツアゲにあっちゃったりして、んな訳。」
ドン

山崎は、誰かの肩とぶつかった。

「あ、すみません。」

「何してくれてんだお前？」

「へっ？」

見ると、目を帽子で隠して、口にマスクをつけてる男だ。それだけでなく、数人の男達に囲まれていた。

「テメエこれ。骨折したぞ。治療費だせや！」

「ええええええ！？」

カツアゲにあつてしまいました。

「あ、いや！俺金持ってませんよ！」

「だったら飛んで見ろよ！」

「ええっ？」

「おらっ飛べよ！」

何だか、いつでも殴りかかってきそうな雰囲気だ。

「ちよっえっ！？」

その時

「何やってんだお前ら？」

「あん？」

ドゴッ

「ぐふっ！」

山崎がぶつかってしまった男に蹴りを入れたのは、

「た、高杉！」

高杉だ。

「た、高杉！まさか『黒狼』！」

「何で、こんな所に。」

男達も、動揺しているようだ。

「晋助。こいつらがカツアゲグループでござるな。」

そう言ったのは高杉一派の一人の河上万斎だ。

「さっ。晋助様やっぱり。」

また子が聞く。

「ああ。行くぞ。」

高杉達が、迫る。

「ひるむな！」

カツアゲグループ達も、応戦するが、圧倒的な力の差で数分後全員倒された。

「す、すごっ。」

山崎は驚きを隠せない。

「まるほどね。そういう事か。」

突然の声、それは

「銀時先生！」

そこには、銀時とドレークがいた。

「テメエらは、カツアゲグループを調べていた。んでっ現場にも来た。」

「お前がこんな事をするような奴じゃないという事は知っていた。」

「何だ。銀時に、元風紀委員の奴もか。」

「先生つける先生を。」

「で、でも何でこんな事を？」

山崎が聞くと、高杉は振り向いて

「俺はただ、むかつくから壊した。それだけだ。」

そう言つて、高杉達は、どこかへと行つた。

「おい高杉！たまには教室に来いよ！」

銀時はそう言つたが、高杉はふり返らなかつた。

その翌日、J組に高杉達の姿があつた。理由はただ『気が向いただけ』だと言つた。

第二十三話 『黒狼』登場！（後書き）

銀時「にしても、今日はルークと政宗の出番あんまなかったな。」
作者「まあ。基本的な主人公だから、出ない事もあるよ。」
作者「感想・アンケートお待ちしております！」

第二十四話 出会いと絆の橋（前書き）

作者「今回は、後書きで重大な話があります！」

第二十四話 出会いと絆の橋

高杉達が、カツアゲグループをボッコボコにしたその日

「そうか。高杉が」

近藤は山崎の報告を聞いていた。部屋には、近藤と山崎の他に、風紀委員が全員いる。

「カツアゲグループは、全員捕まりました。」

「それにしても、高杉め一体何の目的で、」

「何でも、『氣にくわないから、倒した』って。」

長政の質問に答える。

「だが、また暴行をして。」

長政は納得してない。

「落ち着け。とにかく今日はこの辺で終わりにする。」

風紀委員達は帰る準備をしていた。

「それにしても、」

アスベルは呟く。

アスベルはロイドとドレークと出会った事を思い出す。

「ドレーク先輩と、近藤委員長と長政副委員長が揃うと、あの話を思い出すな。」

「アスベル。それって何？」

ソフィが聞く。

「先輩達三人が風紀委員を変えたって話だ。」

「なんなんすかそれ？」

沖田が聞く。

「総悟。これは、風紀委員に伝わる有名な話だろ。」

土方が言う。

「すみません。そう言う話あんま興味なくて。土方さんが殺されたって話なら興味ありますけど。」

「デメエ。」

拳が震えているが、抑える。

「アスベル。話をしてやれ。」

「分かった。コビー達から聞いた話だけど。何でも、かつて風紀委員は今と違って、色々問題があっただ。」

「問題？」

「ああ。自分達の評価を上げるために、無実の人に濡れ衣を着せたり、平気で暴力をふるったり、他にも問題を起こして、校内の評判は最悪だったんだ。」

「ひでえなそりゃ。まあ未だに俺に暴力をふるう奴はいるが。」

「違いますよ。抹殺です。」

「余計悪いわ！」

土方と沖田の口論が静まり、再び話をする。

「つで、そんな風紀委員に当時中等部一年だったある三人が入ったんだ。」

「それが、近藤さんと、浅井副委員長。そしてドレークだ。」
土方が言う。

「三人は、風紀委員に入ったのは、風紀委員を変えるためだった。三人は、変えるために努力した。暴力を止めたり、濡れ衣着せられかけた人の無実を証明したり、当時の風紀委員長と対立したりした。そして、三人が中等部三年の時、近藤先輩は中等部の風紀委員長、ドレーク先輩は副委員長となって、風紀委員は今の様になった。」

「三人とも、すごいんだね。」

「ああ。」

「それが今では、ストーカーとは。」

沖田は近藤を見る。

「沖田それは違う。俺はハンターだ！愛の！」

近藤の言葉を見殺してアスベルは呟く。

「それにしても、何でドレーク先輩は風紀委員を辞めたんだろう。」

土方は知らないか？」

アスベルが聞くが、少しばかり重い沈黙が流れた。

「そついや、お前は高等部から入ったから知らないんだよな。」

「えっ？」

「ドレークは、責任を取って辞めた。それだけだ。」

土方はそのまま帰ろうとする。近藤も沖田も黙っている

その頃、荒川の橋の近くで

「あれから、結構経つな。」

ふとつ、リクが呟く。

「何だリク？」

二ノが尋ねる。

「いえ、あの橋で二ノさんと出会ったことを思い出して、」

リクと二ノは橋の上で出会ったのだ。

「そうだな。」

「っで思ってたんですよ。もし、あの時二ノさんと出会ってなかったら、もしこの橋に来なかったら、俺は今の俺じゃなかったんだなって。他人を信じれず、頼る事も出来なかった俺を変えてくれたんです。二ノさんも、村長達も」

「私も、お前と出会えてなかったら、色々知らないことが会ったんだろうな。」

二人はじつと橋を見る。

「私達で、四度目かもしれないな。」

「えっ？」

二ノの発言に、反応するリク。

「村長から聞いたんだ。この橋では、私達を含めて四回。誰かと誰かが出会ったり、繋がりを持ったりする者がいたつと。前に家康に言ったら『出会いと絆の橋』と言われたな。」

「四回もですか。一体どんな人達だったんでしょうか。」

その日の翌日の休日。

「おつ。ジュデイスじゃねえか。」

橋の近くを通りかかった政宗は、ジュデイスと会う。隣には、彼女の親友であるバウルがいる。

「あら、どうしたの？」

「別に、散歩してたら、通りかかったただだ。」

「そう・・・ねえ覚えてる？」

「AH？」

「この橋の上で私とあなたが出会った事。」

「ああ。」

政宗は出会った時の事を思い出す。

それは、高等部の入学式の前日。政宗達は、この地を訪れ、学生寮にある、自分の部屋の荷物を整理した後、辺りを散歩していたのだ。そして、あの橋の上で柵にもたれかかり、ぼうつとしていた所を、バウルと散歩していたジュデイスと会ったのだ。

「にしても、良く覚えてるなそんな事。」

「当然よ。だって、あなたと初めて出会った場所だもの。」

「んっ？」

「いえ、何でも。」

ジュデイスはただ、どこかを見ていただけだった。

その数時間後

「こっちの方にさ、上手い肉料理の店があるから行こうぜ。」

「んなの、テメエのダチの長鼻やトナカイに頼めよ。」

「ウソップ達用事があるってさ。それにお前ら暇だろ？」

「まあ、シャチ達は、出かけてるし、ベポもどっか行っただしな。」

「ったくよ。」

「シシシ。」

ルフィとキッドとローが歩いている。

「おっ！なあキッドここつてさ。」

「あの橋か。」

「そうだな。」

「ここで、キッドとダチになったんだよな。」

「ダチじゃねえよ。」

「ユースタス屋ひよつとしてツンデレか？」

「おい。トラファルガーぶっ飛ばされたいか。」

実は、この橋で繋がりを持った者とはルフィ達の事だった。

それはルフィ達が中等部三年の事。キッドはその時五獣の一人『鉄虎』と恐れられ、喧嘩をする毎日だった。ある日、クラスの席替えで、偶然ルフィとキッドは隣の席となったのだ。ルフィは最初、隣の席にいるキッドに話しかけたが、自分が信用できる者しか親しくないキッドには、いつも無視されてた。そんなある日、キッドがいつものように広い路地裏で喧嘩をしていると、ルフィが現れたのだ。しかもいつもの陽気な笑顔ではなく明らかに怒りの表情で。実はその時、ルフィは幼馴染のウソップとチョッパーを何者かに傷つけられ、その傷つけた本人に、ウソップ達に危害を加えたのはキッドだと騙されたのだ。ウソップ達を傷つけた者は、キッドを潰したがつていたため、キッドによく話しかけ、力も強いルフィを騙したのだ。

勘違いの中で、ルフィとキッドの戦いが始まった。しかし戦いの中で、ルフィはある違和感を覚えた。キッドが本当にウソップ達を傷つけたのか。その戦いを一時中断させたのは、当時同じクラスだったローだった。ローから事の真相を知らされ、その直後、ウソップ達を傷つけた者達と戦う事になったが、ルフィとキッドが手を組み、すぐに撃退した。

そしてその後、ルフィとキッドはまた戦う。しかし今度は、ただの喧嘩だった。

その喧嘩は、路地裏から、あの橋の上に移り、そして橋の上で、ルフィとキッドは同時に倒れた。

その後、ルフィとキッドはお互いの強さを認識し、以来友となったのだ。

「っでいつの間にか、いたローとも仲良くなったんだよな。」

「つーか、トラファルガー！ 知ってたんなら、速く止めるよ。」

「すぐに止めたら、面白くないだろ？」

その後、ルフィ達が去り、数分後

「あつ、先生見てください。」

「ここつて、確かリク達が暮らしている所だよな。」

新八と銀時も、この橋の上に来たのだ。

「あの、銀さん覚えてますか？」

「何をだ？」

「ほら、僕達が初めて会った時の事。」

それは、高等部の入学式の朝。

「もうすぐで、僕も高等部か。」

新八は一人、橋を歩いていた。

その時

「おい。」

「えっ？」

気がつくと、新八は、感じが悪い男達に囲まれていた。

「金を出せよ。」

「えっ、ちょ。」

カツアゲされたのだ。

「で、でも僕お金なんてもって。」

ドンッ

「うわっ！」

突然押されて、新八は誰かとぶつかったのだ。

「何か、さつきチャリンって音が聞こえたな。」

「そ、そんな。」

「持つてるじゃねえか。さっさと出せよ。」

もし出さなかったら、自分はいくらにボコボコにされる。しかし新八はその時本当に持つてなかったのだ。新八は当時この辺り、で悪質な暴行事件が多発している事を思い出した。まさにヤバイ状況だった。

しかし

「おい？」

「あっ？」

ドゴッ！

「のがっ！」

ドサァー

新八が押されて、ぶつかった人物が、感じの悪そうな男の一人を、木刀で吹っ飛ばした。

「だ、誰だお前は！」

「ギャーギャーうるせえんだよ。見てみるよこれ。」

その人物が、見せたのは、道路でぐちゃぐちゃになった、イチゴチヨコだった。

「お前らが、こいつを押したせいで、俺のイチゴチヨコ潰れたじゃねえか！！」

ドゴッ

また一人、男を吹っ飛ばす。

「俺はな！これ滅多に手にはいらねえ物だから、後のお楽しみに取っておいたのによ！台無しじゃねえか！」

ドゴオッ

ドサッ

残りの男達も全員吹っ飛ばす。

「あ、あなたは？」

「ああ。そうそう。一つ言っておく。」
ビツ

その人物は、新八を指差す。

「テメエは別に関係ねえからな。後これ、バラすなよ。特に、教師には。」

それが、新八と銀時の出会いだった。

「ああ。はいはい思い出しましたね。」

「まさか、あなたが担任だとは、思いませんでしたよ。」

「いや、俺もよまさかあの妙にこんな地味メガネの弟がいるなんて知らなかった。」

「誰が、地味だ！」

新八の叫びが響く。

リクと二ノ。政宗とジュデイス。ルフィとキッドとロー。新八と銀時。

四つの出会いと絆が生まれたこの橋。しかし橋の住人は、村長さえ知らなかった。

この橋の上で、もう一つ絆が生まれていた事を。

そして、その絆は後に、ある事件をきっかけに、大きな役割となった事になるのは、後の話。

第二十四話 出会いと絆の橋（後書き）

銀時「何なんだ？重大な話って。」

作者「実は、次回、また長編を書きます！」「
ユーリ「またか。」

作者「はい！この後次回予告をします。」

次回予告

「どういう事だ。おい！どこだ！」

突然消えた生徒達。

「まさか、奴らが。」

再び現れる敵。

「まさか、また私達が集まるとは。」

「確かに。」

「さあ。行くかい。」

再び、集まる者達

「十数年前、生徒と教師が行方不明となった事件があった。」

十数年前に起こった事件。

そして・・・

「そんな、嘘だろ・・・。」

敵となる友。

「絶対に、お前を助けてみせる。」

それは、あの日、あの橋で約束した事。

「さあ。行くか!」

『おう!』

クロスオーバー学園長編『襲撃編』。

作者「次回をお楽しみに!感想・アンケートをお願いします!」

第二十五話「突然の奇襲」（襲撃編）（前書き）

作者「今回から長編です！」

第二十五話「突然の奇襲」（襲撃編）

早朝近くの河川敷にある教会。ここにはシスターが住んでいる。

「それは本当か？」

教会のシスターの部屋でシスターは無線を聞いていた。

『ああ、あいつら、また来やがった。』

通信をしているのは、シスターの知り合いの男だ。

『うち！この町も、あいつらのものに。シスター！お前は協力者を！』

「ああ分かった。」

そこで、通信は途切れた。トントン、ガチャ

「シスター？どうしたんじゃ？」

同じく、教会で暮らしているステラが、寝起きなのか目を擦りながら入ってきた。

「ステラか。・・・ステラ、村長に伝えてくれ。奴らに気を付けて下さい、っと」そう言っ、シスターは部屋を出る。シスターが向かった部屋には数羽の伝書鳩がいる。シスターは、部屋にある椅子に座り、机に置いた紙に、あることを書く。

二枚の紙に同じことを書いたら、二羽の伝書鳩の足に紙を一枚ずつ括りつける。

「頼むぞ。」

シスターは、伝書鳩を外へと離す。伝書鳩はそれぞれある場所へと向かう。

数分後

クロスオーバー学園から少し離れた場所にある寺。

一人の僧が箒を持って掃除をしていた所に
バサッバサッ

伝書鳩が寺に降り立った。

「んっ？」

僧は、伝書鳩に近づき足に括りつけてあった、紙を外し、書かれた内容を読む。

「！！！」

僧の顔が突然、青くなり直ぐ様寺へと向かう。

「僧正！」

僧は、ある人物の元へと向かう。

「何事か？」

返事をしたのは、見上げる程の巨体で背中には白い羽を生やした僧、ウルージだ。

「先程、あの男からの伝書鳩が届きました。」

僧はウルージに紙を渡す。

「また来よったか。あやつめ。」

一方、クロスオーバー学園から少し離れた場所にある神社。しかし神社とは名ばかりで、本当は心に深い傷を負った女達の心の病院みたいな場所だ。「迷彩様。」

神社の巫女である黒巫女がこの神社の神主である女性、敦賀迷彩にあの紙を渡す。「また来たかい。全員に伝えといてくれ。しばらく本堂で隠れる、と。」迷彩の目が鋭くなった。

伝書鳩が紙を渡した時。

クロスオーバー学園の学生寮である事件が発覚した。

ここは、官兵衛の部屋。

ガチャ

「……。」

官兵衛が朝から暗い顔をしている。

「どうした？」

近くを通りかかったホーキンスが聞く。

「ホーキンス。昨日、何か交霊会とか、こつくりさんとかでもしたのか？」

「何を言う。そんな事はしてないぞ。少しばかり沖田と、黒魔術を少々。」

「やっぱりか！昨日の夜、金縛りにあうわ、物が勝手に動くわ、変な声は聞こえるわで、あまり眠れなかったぞ！」

「やはり、あの時逃げた者がいたか。安心しろ、そいつはかなり力が弱い悪魔だから、明け方にすぐに魔界に帰した。」

「いや、そういう問題ではない！」

ホーキンスと話していたが、

「そういえば、ドレークいないのか？小生よりも早起きなのに。」

ドレークの部屋は官兵衛の部屋の向かい側だ。

トントン

官兵衛はドレークの部屋の扉を叩く。

「ドレーク？起きてるか？」

返事はない。

「官兵衛、管理人から鍵を借りてきた。」

「用意が速いな。」

ガチャ

ホーキンスが借りてきた鍵を使い扉を開ける。

「ドレーク？」

部屋に入る。しかし、そこに、ドレークはいない。

一方

「おいルフィ！起きろよ！」

ガチャ

「ふああああ。よく寝た。」

ウソップに起こされて、ルフィが部屋から出てくる。「あれ？チヨッパーは？」

いつもは、ウソップと一緒に来ているチヨッパーがいない。

「それがさつき部屋の扉を叩いたんだが、返事がなくて、」

「まだ、寝てんのか？」

「一応合鍵を持ってきたんだけど。」ガチャッ

チヨッパーの部屋に入る。

「チヨッパー？どこだ？」

その部屋にチヨッパーはいなかった。

一方、男子寮近くの空き地

「定春ーごはんアルよ。」

神楽が、クロスオーバー学園に迷い込んで来た巨大犬、定春の餌を持ってきた。

「定春？」

しかし空き地には定春の姿は無い。

「どっか、散歩しているのかな？」

そう言つて神楽は餌の入った容器を、空き地に置いた。しかし、神楽は知らなかった。定春が来たくても来られない理由があった事に、

その後

「ドルルモン？どこだキユ？」

「あれ、ゼロス先輩？」

「総悟？散歩でも言ってるのか？」

学生寮で、数人の生徒が姿を消した。

「一体どうなってるんだ？」

「さあな。」

「筆頭！」

良直が、政宗に声をかける。

「文一郎と左馬助がいません！」

「SHIT！何て事だ。」

「政宗殿。」

幸村が呟く。

「お前ら！」

官兵衛とホーキンスがくる。

「黒田先輩！ホーキンス先輩！」

「ドレークを見なかったか？」

「ドレーク殿も、」

「いや、見てねえな」

「そうか。」

「一体何が起きてるんだ？」

「ああ、多分こいつが、召喚した悪魔が」

ドスト

ホーキンスが無表情で、官兵衛の頭に本でチョップする。

「のがあ！」

「あの、悪魔は力が弱いと言ったはずだ。生徒を何人も連れて行くなどはできない。」

「あの、何やらとんでも無い事をいったような。」

幸村が聞く。

その後、政宗達は、学校へと向かい、その途中新八と銀時と出会う。

「チョッパやドレーク先輩が行方不明？」

新八はかなり驚いている。

「またかよ、」

銀時はそう呟く。

「またっ、て？」

ルークが聞く。

「実は、さつき、数人の生徒に会ったんだが、そいつらも知り合いが行方不明になったと。」

「一体・・・何が？」

政宗達は沈黙する。

その数分前、荒川にて

「あれっ？シスターは？」

学園へ行こうとするリク達だが、シスターがいない事に、気がつく。
「何でも、用事が出来たらしい。」

二ノがそう答える。

「それに、星もいないわね。」

P子が、呟く。

「そういえば、私の家の前には来なかったな。」

「そういや、星の奴二ノさんの家の前で、演奏してましたっけ。まあうるさい奴がいなくて良かったんじゃないですか。」

少しの疑問を持ちながら、リク達は学校へと向かう。

その少し後

「やべえ！アイツら先に行っちゃったか！つーか今日早いな！」

川の中から、村長が出てきた。先程ステラから、シスターの伝言を聞いたばかりだった。

「何でも、リクが今日当番らしくてな。追いかけるけ？」
ステラが聞く。

「バカ言っんじゃないやねえ！いつ俺の肉の欲しさで襲う奴がいる。穴から、学園へ向かってそこで。」

そう言いかけた時

「何でござるかあれは？」

近くに、いたラストサムライが橋の向こうを指差す。そこには数人の集団がいる。

「やべえ！アイツら隠れていたのか！四の五の言ってられねえ！」
そう言つて、村長は河川敷から出ようとする。

一方 橋の上では

「あれ？何だろうあの人達？」

「えっ？」

P子が指を指す方を見るリク達。橋の向こう側には
「！？」

人数は三人で、全員同じ黒い服を着て、髪形も同じ真ん中だけが剃つてあり、しかも目が虚ろで、「ザビ、ザビ、ザビー」などと妙な事を言つてるし、奇妙と思わないはずがない。

「な、何なんだあの人達！？」

ピクッ

リクのツツコミに反応した男達は

ダッ

素早い動きでリク達に迫る。

「えええええ！？」

混乱するが、

ズザザッ

突然男達の真上から、網が降つてきて、捕らえる。

「これって。」

「シスターのトラップだ！お前ら速く！」

村長が、出てくる。

「村長！？」

「速く、川にかぱちゃんハウスに逃げろ！」

「行くぞリク！」

「えっ、ちょここから！？」

ドブンッ

リク達は川に落ちる。

一方

「なっ、何なんですか！？この人達！」

新八達も、黒い服の男達に囲まれていた。

「分からねえだが、こいつらがヤベエって事は分かる。」

「いや、もう見た感じヤベエだろ！変な服を着て、変な髪で、変な事を言ってるぞこいつら！」

ザザッザザッ

徐々に近づいて来る男達。

その時

ドゴォン！！

「えっ？」

突然の爆発、煙が晴れると、男達は倒れていた。

「安心しろ。急所は外してある。」

「シスター先輩！」

そこには、手榴弾を手に持ったシスターがいた。

「お前何してんの！？何道で、手榴弾なんて投げてんの！？」

銀時がツッコむ。

「まさか、潜んでいた者がいたとは、政宗だったか。貴様らはすぐに学園に行け。」

「えっ？」

「私は、まだ潜んでいる奴を捜す。」

ダッ

「あっちよつと！ちゃんと説明を！」

新八の声を無視して、シスターは行ってしまう。

少し戸惑っていたが、またあの男達と同じ姿の男達が現れたので、政宗達は猛ダッシュで学園へ向かった。

「皆さん！」

校門には、ジェイドがいた。

「ジェイド！まさか今回もお前かあの変態のどっちかが、変な薬作って。」

そう言う、銀時にジェイドは槍を突きつける。

「冗談は言わないで、下さい。すぐに校長室に向かってください。」

「校長室？」

政宗達は校長室へと向かう。

校長室

銀時が扉を開けて部屋を見ると、かなりの広さの部屋で校長の席の上には、『是非も無し』と達筆で書かれた紙が額に飾られている。

「あつ！政宗！ルーク！」

「ソフィ！エステル！バルモンも！」

校長室には、お登勢理事長と園芸部のメンバーと七花とがめがいた。ちなみに小十郎は政宗と一緒に来ていた。

「エステル速いな。」

ユーリがエステルに言う。

「私とソフィ、今朝の水やりの当番だったので、バルモンはある花を気にしてて」

「花？」

ルークが、尋ねるがバルモンは黙っている。

「お前らも速かったんだな。」

政宗は七花とがめに言う。

「俺はたまたま鍛錬をしていて、何か妙だなんて思っていたらとがめが寮の前にいて。」

「私も嫌な予感がしていたんだ。」

その後も、クロスオーバー学園の生徒達が、校長室に集まってくるが、まだ来ていない人がある。

すると

ブウン

「うおっ！」

壁の一部が、反転して、モニターが出てきた。

ヴウン

音が発せられ、モニターにある場所の映像が流れる。

『よおお登勢！そっちはどうだ？』

そこには、村長が映し出され、後ろにはリク達と、まだ来ていない生徒もいた。

「アタシらの所はほとんどの生徒が集まってるよ。」

『俺の所も、集まってはいるが、全員いるか？』

「まだ来ていない生徒もいる。奇襲をしかけられたからね、逃げ遅れた生徒もいる。ウルージやシスターや迷彩達がここへ導いてくれるだろう。」

『そうしてくれてるとありがたいがな。』

村長とお登勢が話をしている。

「あの。」

ルークがお登勢に声をかける。

「一体何が起きてるんですか？」

それは、この部屋に集まっている、かばちゃんハウスにいる生徒や教師が知りたい事だ。」

「分かった話すよ。」

そう言つて、お登勢は、近くにあつた灰皿でタバコの火を消す。

「今この町は、ある敵に襲われているんだ。」

「敵？」

政宗が聞く。

「名は『ザビー教』妙なそして強烈な宗教団体さ。」

第二十五話「突然の奇襲」(襲撃編)(後書き)

作者「今回は、今回の敵『ザビー教』について書きます!」

銀時「おい、向こうで何かやってるぞ。」

元就「我は・・・サンデ、いや違う、違うのだ・・・我は。」

島津「て、天使が、ヒゲの生えた天使が、」

銀時「アイツら大丈夫か?」

作者「元、ザビー教だもんね。感想・アンケートお待ちしております!」

第二十六話 戦いの決意（襲撃編）（前書き）

銀時「つーか、アイツら大丈夫か？感想でもかなり心配してくれていたけど。」

作者「あの、二人は何とか耐えています。」

第二十六話 戦いの決意（襲撃編）

「ザビー教？」

政宗が口を開く。

「愛だの何だの言っている奴だけだね、入教のしかたが無理やりで、一度喰らいついたら中々離れないという悪質な奴なんだ。」

「うわぁ。」

新八が呟くが

「ザビー様を愚弄するな！あの方こそ愛の伝道師でなるぞ！」

突然声を発したのは、元就だ。

「元就？」

ルークはドン引きだ。

「はっ！我は一体！」

「そういや、お前って元ザビー教だったな。何とか抜け出せたけど。」

「

元親が、呟く。

「つで、今回の敵はそのザビー教って奴か？」

「ああ、実はザビー教は以前も、この町で布教という名の侵略をしたんだ。」

「そんな、事が。」

「まじかよ。」

新八と銀時が呟く。

「まあ、その時あんたはまだ免許取ってなかったし、アンタらその時冬休みで寮暮らしは、故郷に帰ってたからね。」

「ひよつとしたら、姉上と九兵衛さん達と一緒に旅行した時に」

「にしても、まさかそんな事件があったとはな。」

『んで、そんな時シスターが町を守るのに奮闘したって訳よ。』

村長が、話に入ってくる。

『シスターそんな事を？』

リクも驚いているようだ。

『シスターだけじゃなく、学園の近くにある、寺のウルージって言う僧正とその寺の僧や、三途神社の神主の敦賀迷彩っていう奴も、一緒に戦ったらしいぜ。』

「敦賀迷彩。」

とがめが呟く。

「知ってるのかとがめ？」

政宗が聞く。

「敦賀迷彩。四季崎記紀が作りし完全形変体刀の一本、千刀『ツルギ』の所有者だ。一度会った事がある。」

「四季崎つつたら、数百年前の有名な刀鍛冶の名前だな。俺も噂ぐらいなら聞いた事はあるぜ。」

日本史の教師の服部全蔵が言う。

「まあ、その話は後にしよう。でも、ザビー教はかなりの大人数だったんだ。」

「そんな怪しげな宗教に、そんなに入ったのか？」

政宗が聞く。

「入ったんじゃない、入れられたんだ。」

佐助が口を開く。

「その通り、ザビー教は、洗脳して、無理やりザビー教に入れたのさ。」

お登勢が言う。

「無茶苦茶だな。」

ユーリが言う。

「それに、そのザビー教の教祖ザビーっていう奴がかなり強くてね。そんな時にアタシらの学園も協力したのさ。」

「ここも？」

「ああ、シスター達と、一緒に道を開いて、信長校長とダオス教頭とシャンクス達が、ザビー教の中心に殴り込んでいったのさ。ちなみにあたしは学園側の指示をしていたね。」

「まあ、あの校長と教頭なら、な。」

「確かに。」

政宗とユーリが頷く。その横で

「シャンクス。」

ルフィは目を輝かせている。シャンクスはルフィが中等部にいた時の担任だった。普段はおおらかな性格で、生徒達に慕われており、しかも腕っぷしも強く、かつて生徒に手を出していたあるヤクザの組をわずか数人で潰したという伝説もある。ルフィはそのシャンクスの事を尊敬しており、麦わら帽子は中等部の卒業式の時シャンクスから、借りた物だ。現在はある悪名高い不良高校に行き、不良達の世話に明け暮れているらしい。

「それで、その三人と言うか校長がザビーをぶっ飛ばしたのさ。ここ最近はその姿を隠していたのに。」

「その上、今回はかなりタチが悪い方ね。」

ハロルドが入ってきた。

「ハロルド何か分かったのかい？」

お登勢が聞く。

「ジェイドから、報告があっただけで、逃げ遅れた生徒が、ザビー教の信者に襲われて、しかもそいつも虚ろな目で、変な髪をして、変な言葉を発していたらしいわよ。おそらく何かに感染したようね。んで、強制的にザビー教に入れられるという」

「では、奴らはザビゾンか。」

桂が呟く。

「ゾラ。ぶっ飛ばされたいのか？」

銀時が言う。

「ゾラじゃない、桂です。」

「あんま、ふざけんなよ。」

ユーリが注意する。

「そつえば、信長校長とダオス教頭は？姿が見えませんが」

新八が聞く。確かにこの部屋の主の姿が見えない。

「それが、二人とも出張で、しかも何かトラブルがあったらしく、すぐには帰ってこれないと、」

お登勢が残念そうに言う。

「そんな。」

エステルが呟く。

「しかも、シャンクスも、こっちへ向かおうとしてるんだけど、ザビー教の奴らが妨害しているらしいし、おそらく校長達が、戻って来られないのも、ザビー教の仕業だと思う。」

「つまり、数年前最も脅威だった奴が帰ってこない隙にここを征服しようって事か。」

ユージがまとめる。

「ああ、そういう事さ。銀時、全蔵」

「何だ？」

銀時が呟く。

「あの時と、同じ様にあたしら教師も、防衛に参加するよ。」

「さつき、シスターが言ってたんだが、潜伏していた奴は、全て捕らえた、と。」

「この扉は頑丈だから、奴らは入りにくいけど、いつ破られるか、分からん。校長達が帰って来るか、もしくはアタシらが、ザビー教を倒すか、どちらかだ。」

「分かったよ。」

「じゃあ、アンタらはここにいろよ。」

お登勢が、生徒に向かって言う。おそらく生徒達に危険な目にあって欲しくないと言う事だろう。

「でも……。」

新八が何か、いいたそうにする、しかし、その前に

「俺達（小生達）（私達）も戦う（戦うネ）」

そう言ったのは、ルフィと官兵衛と神楽だ。

「お前ら。」

銀時が呟く。

「俺らも、このまんまやられっぱなしじゃ気がすまねえ！それに町にチヨッパがいるかもしれないし！」

「ドレークは強い。だが、あんな大群で一斉に来られたら、いくらアイツでも……。」

「私は定春の事が心配ネ！」

はっ、新八は思い出した。三人とも、それぞれ今行方不明の人物と親しい仲なのだ。そして他の生徒も

「俺もだ。このまま、こんな所で籠るなんざ、性分じゃねえ。それに、文一朗達が心配だ」

「ザビー教には、ちよつとした因縁があるからな。俺も行くぜ。」

「総悟は俺達風紀委員の一人だからな、俺達も戦わないと。」

「ドルルモンが、ドルルモンがひよつとしたら、怪我をしているかもしれないっキュ！」

「私も、花壇のお花さん達が、あそこには……。」

「先生僕達も戦います。」

政宗、元親、近藤、キュートモン、ソフィ、新八も言葉を発する。

他の生徒も同じだ。そして河川敷の方にいる者も

『私も、星の事が心配だ。』

『星殿は、我ら河川敷の仲間でごさる。』

『先生。俺も行方不明のゼロスの事が心配だ。』

『ニノさん。』

ニノ、ラストサムライ、ロイドも同じで、リクは戸惑っている。その様子を見た銀時とお登勢。銀時は頭を掻きながら言う。

「忘れてた。コイツら、かなり強くてあんま言う事聞かない事。」

「そういや、あの時も、勝手に出て行って戦う奴が何人かいたね。このクロスオーバー学園の、生徒の遺伝か？」

お登勢も、ため息をついて言う。そして

「構わないね。だけど、勝手に出て行って、勝手にザビー教に入らないようにする事だ！」

『はいっ！』

校長室にいる者も、かばちゃんハウスにいる者も、力強い返事をする。

第二十六話 戦いの決意（襲撃編）（後書き）

作者「次回は、ザビー教との対決です！」

銀時「にしても、ルフィと神楽はともかく、官兵衛は一体どう言う流れでああなったんだ？原作違うし。」

作者「少し、ネタバレしますが、あの二人は過去にある事があって、あんなに仲が良いんです。それについては後ほど。感想・アンケートお願いします！」

第二十七話 防衛戦！（襲撃編）（前書き）

銀時「つーか。行方不明の奴らどこにいるんだ？」
作者「今回はついに居場所が明らかになります！」

第二十七話 防衛戦！（襲撃編）

ここは学園近くの大通り。道には、簡易だが大きなバリケードが建てられている。そのバリケードは町のいたる所に建てられている。

一般人はすでに避難しているか、もしくはザビゾン（桂命名）となり、新たな信者を捜してさ迷う。現在、町の西側の大通りにいるのはザビゾンと

「はあ！」

ドッ

「はっ！」

ズバッ

シスターと、ウルージの寺の僧と、敦賀迷彩達だ。

ザビゾンとなった者は皆無理やり入れられたのと同じだ。そのため、峰打ちだったり、麻醉銃を使っている。

ドドッ、ドドッ

シスター達の元に馬に乗った薄桃色の髪の女性が来た。彼女はマリア、河川敷の住人で、シスター達と協力しているのだ。マリアの他にもステラも協力をしている。

「シスター。東側が、何やら苦戦しているようよ。」

「東側は、ウルージがいるな。分かった。私が、向かう。」

「我々も共に行きます！」

「あまり大勢だと、ここが、苦戦する。1人か2人でいい。」

シスターは、2人の僧と共に東側に向かう。

「全く。何をしたいのかしら、あのエセ宗教は。信者を増やすため、だけじゃないわね。今回は」

マリアが呟く。

「確かに。潜入だの、何だの、用意周到だ。」

「奴等、どこかへ、向かっているような。」

僧の一人が話に入ってくる。

「ちょっと、誰が勝手に話に入ってきて良いっていったの？あまり喋らないでくれる？」

「す、すみません。」

優しいような、外見に似合わずドSな、マリアさんだ。

「でも、確かに、前のようにウロウロするのではなく、何処か、目的地に向かっていている感じね。」マリアが呟いた時。
ズズズ

「んっ？」

ザビゾンが来た方向から、何かが来る。仁王像に車輪を着けたようなもの、仁王車だ。しかも、かなり多い。

「どうやら、本格的に征服したいようね。」

マリアはそう言って、暗器を構える。迷彩も千刀『ツルギ』の一本を構える。僧達もそれぞれの武器を構える。その時

「HOW。仁王車か。だがたたつ斬るのみだ。」

「政宗様。あまり、油断なさるな。」

「行くぞ！」

ダッ

「なっ。」

後ろから、三人仁王車へと駆け出す。

「DEATHFANG！」

「穿月！」

「魔王絶焰惶！」

ドガッ

一気に、三体の仁王車を倒す。

「君達は？」

迷彩が聞く。

「俺達は・・・クロスオーバー学園だ！」

政宗がそう名乗る。

一方、東側も大通り

「なあ。これってザビー教と言う宗教がやったんだよな。」

「そうだな。」

ウルージの寺の僧の二人が話す。

「んでつ。これが、布教と言う名の征服だよな。」

「ああ。」

「一応聞くが、相手は宗教だよな。」

「その通り。」

「でも」

ズズン　ズズン

二人の目の前には、巨大な足だ。かなりでかいが、これでもこのからくりの一部で背中には、武装がしてある。名は鉄機からくり兵器だ。

「これ、どこをどう見たら宗教で、どこが布教だ！」

「その通り！」

「二人共、喋るのは、それぐらいで今はこのからくりをどうにかせんと。」

ウルージが忠告する。手には、巨大な鉄の棒を持っている。

「あつ！すみません僧正！」

二人も、すぐに戦闘の準備をする。

「それにしても、手強いな。」

シスターは手榴弾を投げながら、言う。あの二人はシスターが連れてきた者だ。

「確かに。ぬあつ！」

ドゴッ

鉄の棒を、鉄機の足に叩きつける。足にヒビが入ったが、倒れない。

「くっ！」

その時

「ゴムゴムのバズーカ！」

「ジャックフロスト！ブフーラ！」

「三刀流！勇爪！」

「おりゃあああ！」

「俊迅剣！」

ドガッ

ルフィと総司とゾロと銀時とガイが、一つの足に集中して攻撃して、足が一本崩れた。

「お主らは。」

「お前は。」

「にしても、これ本当に布教活動かよこれ？」

「いや、ザビゾンが出てきた時点で、これは征服だと思っんですが。」

「

銀時と、総司が話す。

「どうやらあの学園の方達だろう。ぬう！」

ドガッ

再び、鉄の棒で数回足に攻撃する。

ボキッ

ゴゴゴ

足が折れ、バランスを失い鉄機は、崩れる。シスターが爆弾を何個も使って、自分も攻撃してやっとだった。

「気をつける。崩れるぞ。」

「先に言え！」

銀時達は全力で、崩れる鉄機から離れる。

一方

ここは、東西の大通り以外の防衛ポイント

「十飛！」

「一目惚れ！」

ドゴッ

元親と慶次が、仁王車を倒す。しかしまだ二体残ってるが、一体はすでにボロボロだ。それは

「おりゃああ！」

ドゴッ

巨大化したステラが仁王車を張り手で、転倒させる。

「それにしても、仁王車を作るなんぞ。まあ俺らの所よりは、まだまだだが。」

「そういえば、工学部でもあったよな。」

そしてもう一体は

「虚刀流奥義『緑柳花紅』！」

ドゴッ

七花が、仁王車の胴体を殴る。一見効いているようには見えないがゴゴゴ

仁王車が崩れる。緑柳花紅は、相手の内部を破壊するいわば鎧通しの奥義だ。

「にしても、中々やるけん。」

あたりには、仁王車の残骸と、気絶したザビゾンが倒れている。

「それにしても、お前が協力するなんてな。お前こうゆう、他人と協力するなんて事しないし。」

元親が七花に言う。

「このままだとがめが危ないだろ？それに、あいつらを倒せといわれたしな。」

「やっぱ、七花って心底とがめちゃんに惚れてるんだな。」

「まあそつだな。それに俺はとがめの刀だし。」

慶次と七花が会話をする。

一方

「はあっ！」

「ふっ！」

ドゴッ

かばちゃんハウスから、出てきたリク達は、防衛ポイントへと向か

う。途中でザビゾンも出てきたが、ラストサムライと二ノによって倒される。

「やっぱり二人とも、凄いわね。」

「何だろうなんか俺が守らなきゃいけないのに守られている感じは。」

鍬を持ったP子と、P子から借りた鍬を持つリクが呟く。ちなみに、他の河川敷の住人は、まだかばちゃんハウスにいるか、同じく戦っているかどちらかだ。

「にしても、村長一体どこ行っただろう。まさか町から逃げ出して。」

「村長はそんな事する人じゃないわ!」

実は、村長が、かばちゃんハウスから消えたのだ。P子が同行したのは、村長を捜すためだ。

ブンッ

突然二ノに襲い掛かってくるザビゾン。

「危ない!二ノさん!」

ドゴッ

リクはあの、ツツコミの時に使うあのポーズで、ザビゾンを倒した。

「おお。すごいなリク。」

「ええ。新八や山崎達にこうゆうツツコミで比較的普通の奴は、こうゆうの覚えておけつと言われて。」

「そうか。」

「おっ!あそこにいるのはマリア殿ではござらぬか!」

ラストサムライがマリアを見つけた。

「それにあそこにいるのは、政宗達だ!」

リク達は駆け出す。

「あらリク君に二ノ達。来てくれたのね。」

近くには、ルーク達もいる。リク達は何とか合流出来た。

一方

防衛地点から少し離れた場所では、

「おい。今はシスター達と合流すべきではないか？」

「何言ってるアルか！定春達が、心配じゃないアルか！」

「ドルルモン！どこにいるキュー！」

神楽とキュートモンと官兵衛が走っている。目的は行方不明の者を捜すためだ。

「確かに心配だが、無闇に突っ込んでも、すぐには見つからないだろ？小生達が捕まったら何の解決にもならない。理事長の話では相手は、隣町の人々を多くザビゾンに変えている。数ではこちらが遙かに劣る。だからこそ今はシスター達と合流すべき。」

「定春どこネ！」

神楽達は全く聞いていない。

「いや、聞けよ！」

しかし、官兵衛も、本当はすぐに 捜したいのだ。

（ドレーク。無事でいてくれ。）

そつ心の中で何度も願っているのだ。その時

ドゴッ

鉄機が現れる。

「なっ！」

「どけええええー！！」

神楽は傘を振り回し、鉄機の足に攻撃をする。

「うおりゃあ！」

ドゴッ

官兵衛も、鉄球を振り回し足に攻撃するが、

「二人共上！」

キュートモンの言葉で上を向くと、鉄機の背中で隠れていたザビゾン達が襲いかかる。

「あっ！」

「なっ！」

二人は動けない。

その時

ビシュッ

ドサッ

何者かが目にも止まらない速さで、ザビゾンを斬りつけ、気絶される。そして鉄機の足に

「くらえっ！」

「デス・ザ・キャノン！」

ドゴッ

何者かが、バズーカと銃で撃つ。

「チャンスネ！ほわちゃあああ！」

ドゴッ

神楽は蹴りを入れ、鉄機の足を破壊する。そしてザビゾンから二人を助けたのは

『大丈夫か？』

風魔だ。鉄機の足を撃ったのは

「まったく何してんだ。」

「無事でよかった。」

土方とベルゼブモンだ。

「助かったぞ。」

『気にするな。それより速く防衛地点に来い。ある情報がある。』

数分後

官兵衛達は、防衛地点に着いた。そこには、大きなテントがあり、中には机に乗せられているパソコンがあり、画面には、お登勢が写っていた。

『全員無事なようだね。』

「一応わな。つで何かあったのか？」

銀時が聞く。

『ザビー教の今回の中心部通称『ザビー城』の場所が特定できた。』
「となると、突撃か？」

シスターが聞く。

『ああ。それと、ザビー教の今回の狙いが分かった。』

「狙い？」

新八が聞く。

『奴らが、向かう先。一見バラバラのように見えるけど実は、ある場所に向かっている。』

画面が町の地図に切り替わった。ザビゾンのルートを示すように、矢印が書かれている。そして矢印の行き先は

「学園？」

新八の言う通り。場所はクロスオーバー学園だ。

『そう。今回の狙いはクロスオーバー学園。おそらくあの時の仕返しと言うわけだろう。学園へ向かうルートのトラップは？』

お登勢が、シスターに聞く。

「もうすでに、設置してある。」

どうやらシスター達は、すでに聞いていたのだ。

『それと、もう一つ。これはコイツが説明する。』

お登勢の代わりにワイズモンが写る。

『これは、僕達。クロスオーバー学園の者に関係する事だ。』

「どういう事だ？」

銀時が聞く。

『ザビー城に、行方不明になった者達がいるかも知れない。』

「……」

その言葉に、敏感に反応したのは、官兵衛、ルフィ、神楽、キュートモンだ。

「本当かそれは！」

「チョッパーがあいつらの所に!？」

『落ち着いて聞いてくれ。今回の襲撃と大量の行方不明事件。あま

りにもタイミングが良い。ひよっとしたら、何か関係しているかもしれない。それとこれ。』

ワイズモンは、小さな機械を見せる。

『昨日。沖田が黒魔術と言うことをやると言う事に興味を持ってね。発信機をつけて居場所を特定しようとしたんだ。ところが、いざ誰かと一緒に黒魔術をやるうとした所で、突然発信機に異常が出てしまつて。』

ふと、官兵衛はホーキンスを見る。

『それで、まだ沖田に発信機をつけたままと言う事を思い出して、居場所を探してみたんだ。そしたら、沖田の居場所がザビー城だったのさ』

「つまり、総悟はそのザビー城に？」

近藤が聞く。

『しかも、今回の事が関係あるなら、ひよっとしたら、他の皆もいるかもしれない。』

「先生。」

新八が銀時を見つめる。

「分かっている。俺達がザビー城に向かう。信長校長達程じゃないが、俺達だつて立派な戦力だ。」

「小生も向かうぞ。」

「俺も！」

「私もネ！」

「僕もだキュ！」

官兵衛達も、手を上げる。他にも共に向かう事を決めた者もいたが「あまり、頭数が多いと、防衛が不十分になる。」

とシスターに言われた。そしてそのシスターも向かう事を決意した。「星は、河川敷の仲間だ。それに、私もクロスオーバー学園の者だ。すまないなウルージ、迷彩。」

「何をおっしゃる。お主一人が抜けたぐらいで、揺るがぬ。」

「守つてやるさ。あの子達を。」

二人は頷く。

「よし。行くぞ！」

『おおおおおおお！！』

銀時の言葉に、力強い返事をする。

一方

「久しぶりだな、この町。そしてあの学園。」

「何だかすごい事になってますね。」

「ああ。さあ俺達も行くか！」

「はい！」

「ワウ！」

二人の男と一匹の狼が町に向かって走り出す。

第二十七話 防衛戦！（襲撃編）（後書き）

作者「今回は、衝撃の対決！そして最後に出てきた人達の正体が明らかだ！」

銀時「一体誰なんだよ。そいつら。」

作者「だから、次回のお楽しみだって！」

第二十八話 洗脳と助っ人 と信者 (襲撃編) (前書き)

作者「今回から新しいキャラが出ます！」

第二十八話 洗脳と助っ人と信者（襲撃編）

ザビー城へと向かう、銀時達。

「そーい。何であいつらは、戦ってくれてるんだ？」

銀時が、シスターに質問する。

「ウルージは、ザビー教の事をあまり快く思っていない。迷彩は、自分の神社にいる黒巫女達にこれ以上心の傷を増やさないためだ。」

「まあ。いきなりあんなのに襲われたら、大抵の人は。」

そう話していると

ドッ

ザビゾンが大勢現れた。

「やはり、ザビー城に近づくと、相手も多いな。」

シスターは銃を構え、他の皆も戦闘準備をする。

その時

「どけっ。」

ドゴッ

何者かが、ザビゾンの一人を吹っ飛ばす。その後ろには四人の人物があり、その者達も

ドガッ

辺りのザビゾンを倒す。銀時達も戦う。

数分後、ザビゾンが、全員気絶して、銀時は最初にザビゾンを攻撃した男に近づく。

「来たか、高杉。」

高杉だった。そして共に戦っていたのは、高杉一派の者だ。

「俺は、ただこのいかれた奴らをぶっ飛ばしただけだ。」

「こんな奴ら晋助様にかかれば、何ともないっす。」

「じゃあ。僕達と一緒に。」

新八が尋ねるが

「勘違いするな。俺達はただ、ぶっ壊したいだけだ。お前らとつる

む事なんざしねえよ。」

そう言つて、高杉達は別のルートでザビー城へと向かう。

「ほつとけよ。あいつらなら大丈夫だ。」

「そう、ですよ。」

新八は不安を抱えながら、ザビー城へと向かう。

数分後ついに、敵の本拠地ザビー城が見えた。

「何だか。かなりやばい所みたいですね。」

新八がひくのも無理はない。建物はまるで、昔の日本の城を小さくし二階だけだが何だか妙な装飾があつて、鉄の柵があり、どこか西洋風だ。

「ちなみに、これは本物のザビー城を少し小さくしたようで、本物はもっと大きいらしいぞ。」

シスターが付け足す。

「どうやって作ったんだ？こんな短時間で？ザビーマジック？」

銀時が呟く。城への道は一本道だ。途中で別れた高杉達とも、合流できると思う。

「よし、行くぞ。」

ザビー城へ向かつて走る銀時達だが

ドシュッ

「うわっ！」

ドゴッ

「のこっ！」

突然何かが、撃つてきて、銀時達はとつさに避ける。

「な、何だ？」

砂煙が現れたが、すぐに晴れて、撃った人物が現れる。

「なっ！」

それは擬人化を解いたドルルモンと、バズーカを持った沖田だった。

「ドルルモン？」

「何やってんだ！総悟！」

キュートモンと土方の呼びかけにも反応せず、二人は再び攻撃する。
「うおっ！アイツら正気じゃねえ！」

「一体何が。」

リクが呟いた直後

「リク上だ！」

「えっ！？うわっ！」

二ノ声に反応して、リクは後ろに避けるその直後何者かがリクのいた場所にギターを振り下ろしていた。地面がめり込んでいる。

「なっ！お前星！？」

それは、星だった。

「一体皆どうなってるんだ？」

ルフィが呟く。

「分からねえ。だがアイツらの目を見る限り普通じゃねえ。」

銀時の言う通り、三人の目には光がなく、まるで操られているみたいだ。

「まさか、洗脳？」

新八が呟く。その直後三人が、迫ってくる。

「ちっ！」

ガキン

土方は沖田の刀を自分の刀で受け止める。

「キュートモン下がってて！」

「で、でも。」

「戦わないといけない。ドルルモンを助けるために」

タイキは決意を固め

「シャウトモン！バリスタモン！スターモンズ！デジクロス！」

「デジクロス！シャウトモンX2！」

ガキン

スターモンズ達の斧でドルルモンを受け止める。

シュバツ

「あっ！」

「あぶねえ！」

ガッ

「先生！」

星のギターを銀時が受け止める。

「今だ二ノ！リク！」

「ああ！」

「えっ、あっはい！」

リクも意味が分かったのか、星の後ろに行き

「はあっ！」

「やあっ！」

二ノのパンチとリクのツツコミが星の後頭部に放たれ
ドサッ

星は倒れる。

シュッ

ドルルモンがシャウトモン×2から少し離れて

ビュウウ

ドルルトルネードを放つ

「はっ！クロスオープン！」

とつさに、デジクロスを解いたが、

「ウワッ！」

バリスタモンには、当たる。しかし

「俺を忘れるなよ！ソウルクラッシャー！」

ドゴッ

ジャンプをして、避けたシャウトモンの一撃が、ドルルモンに当たり

「ヘビースピーカー！」

バリスタモンの攻撃で、ドルルモンが倒れる。そしてそのバリスタ

モンの攻撃は

「くっ。」

近くにいた沖田にも、影響を与え

「今だ！はあっ！」

ドゴッ

沖田の頭に、土方は鞘で攻撃する。

「安心しろ、怪我はない。」

少しの間、三人は気絶をしていたが

「くっここは？」

「あれ？何だここ？」

「イテテ。」

三人は目覚めた。

「ドルルモン！」

「キュートモン。」

キュートモンはドルルモンに抱きつき

「大丈夫か星？」

「二ノ！俺の事心配してくれるのか！？」

二ノは星に駆け寄り

「総悟。大丈夫か？」

「うわっ土方さんが俺の事心配するって、今日は厄日ですかい？」

「よし。叩ッ斬ってやる。」

「落ち着けトシ。」

戻って早々に、土方と沖田が喧嘩を始めそうになった。

「んでっ？お前ら一体何があっただんだ？」

銀時が質問する。

「さあ。俺もさっぱり。家にいたら、突然何かが、俺の体を通り抜けたような感覚があって、んで色んな事が嫌になって、気がついたらここに」

「俺もだ。」

「俺もです。土方さんを抹殺する事がアホらしくなるくらい。」

「そうか。ならお前はあのままの方が良かったのかもな。何か気がついた事はないか？」

土方が聞く。

「そういえば、窓から何かが入って来る所を見たな。白い何かだが。」

ドルルモンの言葉に

「ま、まさか。お、おば。」

ウソップは青ざめている。

「ザビーの新しい洗脳方法か？まあいい。何人か総司達と一緒に援護に加わってくれないか？リク、二ノお前達も行った方がいい。ここからはお前達では手に負えない程の敵が現れるかもしれん。」

シスターが、リク達に言う。

「ええ。何だかそう思いますよ。俺この中じゃ一番足引つ張りそうですし。皆頑張って」

「シスター気をつけてくれ。」

リク、二ノ、星は援護に戻る事にした。

「じゃあさつさと、あのへんてこな建物に」
ズーン

銀時が言いかけた時に、地面が揺れる。

「な、何だ？」

ルフィが呟いた時

ガアアアア

ギャウウウ

「な、何じゃこりゃああああ！！？」

巨大なワニや、三本の首を持った巨大な鳥、四本の腕を持った巨大なゴリラなどの猛獣達が現れる。

「ちょっ！まじやばいよこれ！」

銀時が言った直後

ビュッ

「あっ！」

ルークが、巨大なワニに襲われる。

「ルーク！」

政宗が叫ぶ。

その時

「少し眠っている。」

ドガッ

「えっ？」

何者かが、巨大なワニの横顔にパンチを打つ。巨大なワニは吹き飛び、後ろにいた巨大なゴリラに当たり、二体は吹き飛んだ。

「ガララワニにトロルコング。こっつて本当にただの宗教団体か？」

ルークを助けたのは、青い髪の大男で、耳の所に三本の傷がある。

「大丈夫か？」

「えっ、あ、ありがとうございます。」

「あっ！お前。」

「トリコ！」

銀時は驚き、ルフィは目を輝かす。二人は知り合いのようだ。

「おっ！ルフィ久しぶりだな！」

ルフィにトリコと呼ばれた男が言う。

「誰なんだアイツ？」

政宗が、銀時に聞く。

「アイツの名はトリコ。シャンクスの知り合いだ。半年くらい前に、未知なる食材を求めて旅に出たんだ。」

「そ、そうなんですか？」

突然の登場に動揺を隠せない。

「トリコさん！合流できましたか。あっ！ルフィ！」

「ガウッ！」

現れたのは、少し小柄な青年と、白い大きな狼だ。

「おお！小松！テリー！久しぶり！」

「久しぶりだな。」

「よお！」

ルフィとゾロとウソップが反応する。

「お前らどうしてここにいるんだ？」

銀時が聞く。

「ああ。それは。」

トリコが言いかけた時

ゴガガガアアア

猛獣達が迫る。

「ギア2。」

ゴオオオオ

ルフィの体から、蒸気が出てきて、体が赤くなる。

「ゴムゴムのJ E A Tピストル！」

ドゴツ

目にも止まらない速さで、猛獣を吹っ飛ばす。

「話は後にしようぜ。今はこいつらを。」

政宗も刀を抜き、攻撃する。

それから、数分後猛獣を全て倒した。

「でっ、さっきの質問だが。」

「ああ。実は信長校長から、連絡があつてよ。」

「信長校長が？」

「ああ、自分やダオスやシャンクスはすぐには行けないから、せめてお前が行ってくれと、伝書鴉で」

「何だよ伝書鴉って、伝書鳩の鴉バージョン？」

銀時が聞く。

「にしても、あの校長が」

「ああ見えて、生徒の事を思ってくれる所もあるしな。それに今は学園の危機だしな。」

政宗の一言に近藤が説明する。

「じゃあ。トリコ！」

「ああ。行くぜ。」

再び銀時達は、ザビー城へと向かう。

「MAGNAM！」

「虎炎！」

ドゴッ

ザビー城に入った瞬間。大勢のザビー教信者に囲まれ、政宗達は戦う。

「先生。この人達外にいたザビゾンと様子が違いますね。」

「ああ。操られたっていう感じじゃねえ。」

新八と銀時は会話しながら戦う。確かに、ザビゾンの様に、目は虚ろではなく、変な言葉は呟いていない。

「おそらく、こいつらは本当のザビー教信者だろう。ここまで宗教熱心とは思わなかった。」

シスターは麻酔銃を撃ちながら言う。

「にしても、一体どつからあの動物達を集めたんだ？しかもあの動物達普通のよりも強かったぜ。」

「そついや、トリコさんって世界中旅してたんですね。」

トリコの言葉にルークが言う。

「それに、沖田達の洗脳も何処がおかしい。何かが引つかかる。とにかく今はザビーの元に。」

シスターが言いかけたその時

「あなた達みたいなたたをザビー様の元へは行かせませんよ！」

ドゴッ

「うおっ！」

突然砲弾を撃たれ、銀時は寸で避ける。

「な、何だ！？」

現れたのは、何かの男の顔を模したからくりだ。

「さあ。ご覧なさい。ザビー様のこの美しさを！」

そのからくりの上に乗っているのは、金色の髪で、変な黒い帽子と、服を着た男だ。

「誰だお前？」

政宗が聞く。

「僕は、大友宗麟！偉大なるザビー様のしもべです！そしてこのからくりはザビー様のお姿をした高貴なからくりです！」

「という事は、あのからくりの顔が、ザビーの顔って事か。」

「おかしい髪をしてるな。」

ルークと政宗が言う。その発言がかんに触ったのか。

「あ、あなた達！ザビー様を呼び捨ての上、侮辱するとは許せません！発進！」

ドゴッ

目から砲弾が出てくる。

しかし

「弾き手壁！」

ドガッ

突然光の丸い壁が出てきて、砲弾を弾き返す。

「なっ！」

「お前は！毛利！」

現れたのは、毛利だ。何故か息が絶え絶えだ。

「そ、そのからくりは我が破壊する！跡形もなくな！」

「おお！あなたはサンデー！何故このような事を！」

「黙れ！ザビー教を抜けた時から、毎晩の様に見るあの悪夢。今ここで終わらせる！」

ドゴッ

突然からくりの横から、何者かが攻撃する。それは島津だった。

「あ、あなたはチェスト！」

「おまはんらのやり方は許せん！以前は入っていたが、迷いはありません！毛利どん！共に戦うぞ！」

「貴様らは先に行け！我らはこのからくりを破壊する！」

「お、OK！」政宗達は次の部屋へと進む。

「そっぴや、あの二人元ザビー教信者だった。」

「マジかよ。」

銀時の言葉にトリコが驚く。

「な、何故か知らぬが、心惹かれた様な。」

「落ちて着け官兵衛！ドレークの事だけ考えろ！」

一瞬入教しようとした官兵衛だが、ルフィに止められ、元に戻った。

第二十八話 洗脳と助っ人 と信者（襲撃編）（後書き）

作者「次回はいよいよザビーとの対決です！」

銀時「つーか。元就何で、息絶え絶えだったんだ？」

作者「元就にとって、ザビー教は、消し去りたい過去なんです。」

銀時「マジで大丈夫なのか？」

作者「大丈夫でしょう。感想お願いします！」

第二十九話 ザビー登場（襲撃編）（前書き）

作者「ついに、ザビー教教祖ザビーが登場します!」

第二十九話 ザビー登場（襲撃編）

「麦わら！」

ザビー城を突き進む中、後ろから、キッドとローと七花と総司とヨシノとララモンが現れる。

「キッド！」

ルフィは嬉しそうだ。

「元就達と一緒に、来たんだ。」

「この事件の元凶とやらをぶっ飛ばすの、俺も混ぜるよな。」

「風紀委員として、アイツを許せないしね。」

総司とキッドとヨシノがそれぞれ言う。

「そっぴゃ、何でお前らも一緒にいるんだ？」

政宗は共に来ていた、ローに話しかける。

「ちよつと気になる情報があつてな。」

「とがめに、潰して来いと言われて。」

キッド達を加えて、政宗達は突き進むが、途中で道が分かれる。一方はなにやら輝いている雰囲気があるが、もう一方は、地下へと続く。

「二手に分かれようか？」

ルークが提案するが

「いや、敵の数が分からない中で、戦力を減らす事はできない。それにしても、地下か。」

「俺達の目的は、ザビーを倒すのと、捕まった奴らを捜すためだ。ひよつとしたら地下にいるかもしれないしな。」

政宗の提案で、地下へと降りる事に、部屋は薄暗く、牢屋のようだがひよつとしてここに？」

ふと耳をすませると、誰かがこちらへと向かってくる。それは、髭をたくわえ、手には、チェーンソーの様な武器を二本持った男だ。

「あんたも、ザビー教か？」

政宗が、刀に手をかける。

「手前、立花宗茂と申す。一応はザビー教に属しております。してここにいかようで？」

「立花宗茂。確か島津先生と互角の力を持つ武人で、昔から代々続く大企業の家族を守る家の者だとか。」

佐助が言う。

「お前！チョッパー達を何処へやった！」「ルフィが聞く。」

「チョッパーと言う方がどうか知りませぬが、捕らわれている方々ならあちらの牢に。」

宗茂は、政宗達を案内する。その牢には

「文一朗！左馬助！」

「ゼロス！」

そこには、文一朗と左馬助とゼロスがいる。

「チョッパーは！？」

「定春もいないネ！」

「ドレークもいない。」

「他に、捕まった方々の内いくつかは、奇襲役として、あのような姿に。」

宗茂は悔しそうだ。

「そついや、行方不明になった奴の何人かが、ザビゾンになっちまったと。そいつらも合わせたら、後はチョッパー達しか見つかったねえぞ。」

銀時が言う。

「牢屋の鍵はこれです。」

「にしても、アンタもザビー教なのに、何故？」

政宗が聞く。

「我が君、宗麟様がザビー教に入教されたので、手前も巻き込まれてこのような事に、いかに我が君といえど、これは許せません。止められず申し訳ない。」

「宗麟ってあの？」

「確かそのある大企業の社長の息子らしい。ついでに言つと宗麟の父親も入教しているらしい。」

佐助が言う。

「アンタのような奴がいてよかったぜ。」

政宗が言う。

「他にも、反対する者がおりましたが、手前以外は、皆あのような。」

「ザビゾンの事だろう。」

「そんなに、責めないで下さい。今は三人を助けないと。」

「ああ。」

政宗達は牢の鍵を開け、牢の中へと入る。

「おい。大丈夫か？」

「ゼロス！おいゼロス！」

政宗とロイドが声をかける。すると

「うつ・・・筆頭？」

「筆頭・・・すみません。」

「来て・・・くれたんだな。ハニ。」

三人共起きる。

「皆辛そうだけど。」

ルークが訊く。

「ここに、閉じ込められている時、変な歌を何時間も聞かされて。そしたら、沖田達が変わった。」

「俺と文一朗も、やばかったんですが、筆頭と片倉様と良直達の事を考えて、耐えてました。」

「俺も、レディ達の事を考えていたら、何とか。」

「どうやら、三人は洗脳されかけた様だ。」

「三人共無事で、良かった。後はチョッパー達か。宗茂さん。心当たりは？」

「ひょっとすると。ザビー殿の下かもしれません。」

「ザビーか、よし、行くか。」

『おお!』

政宗の言葉に、全員反応する。

しかし、地下牢から出てきた時

「うおっ!」

もの凄い数のザビー教信者が取り囲んでいた。

「うおりゃあ!」

ドゴッ

宗茂が次々と倒していく。

「この場合は、手前に任せて、皆様はザビー殿の下へ!」

「分かった!」

政宗達は、もう一方の道を進む。

一方

「ちええええすとおおお!!」

「散れ!!」

ドゴッ

「ザビー様ああ!」

ドサッ

島津と元就は、からくりを破壊し、宗麟を吹っ飛ばした。さらにその後

ドガガ

「おばおおお!!」

元就は容赦なく、宗麟を攻撃する

「まだだ。日輪よ」

「落ち着くど毛利どん!こ奴の体力はもう零。先を急ぐど」

「そうだな、ならば我らは。」

奥の方から、ザビー教信者が現れる。

「簡単には、行かせてはくれぬか。」
二人は再び武器を構える。

「ゴムゴムのストーム！」

「ホアチャアア！」

「どおりやあああ！」

ドガガッ

行く手に信者とからくりが立ちはだかるが、ルフィと神楽と官兵衛がぶっ飛ばす。

「す、凄い。」

「強くなってるな。ルフィの奴。後神楽と官兵衛って奴も強いな。おりゃっ！」

ドゴッ

トリコは一撃で、仁王車を破壊する。

「っ、強い。」

新八のその強さに驚くが、その時

「うおっ！」

仁王車の腕が飛ばされる。それは七花がやった物だった。

「ちよつと七花君！何をするんだ！」

「あつ、悪い気がつかなかった。」

「本当に、アイツ協調性がないな。」

小十郎がそう言いながら、木騎を攻撃する。

「アイツ。ほぼ一対一か一対多数の戦いしかしてないから、味方がいる状況での戦い方を知らないだとか。ほっ。」

佐助も木騎を攻撃する。

「それにしても、強いな本当にあの三人。」

「もうすぐでチョッパー達と会えるから、気張ってんだろっよ。」

ロイドとゼロスも信者と戦っている。

廊下の先に、大きな扉がある。

「ここに、ザビーがいるのか。お前ら慎重に」「どおりやあああ！」

「おいしい！！聞けよ！！」

政宗の言葉を見殺して、ルフィと神楽が扉を破る。部屋の中は奥の方に金色の何かの像が置いてあり、その前に男がいる。その像とそっくりだ。

「おお。良くキマシタネ。愛を知らない人タチヨ。」

それは、ザビゾンと同じ髪型をして、黒い服を着て、両腕には、キヤノンが装備されている大男だった。

「やっと会えたな。ザビー！！」

シスターが叫ぶ。

「テメエがこの騒動の元凶か。」

「人の気持ちを無視して入教させるとは、なんたる事だ！！」

政宗と幸村が言う。

「お前！チョッパはどこだ！」

「定春を返せや！この真ん中ハゲ！」

「ドレークはどこにおるのだ！」

ルフィと定春と官兵衛が言う。

「サア？何処でしょう。」

ザビーはとぼけている。

「お前！」

「麦わら！行くぞ！」

「斬ってやる！」

ダッ

ルフィとキッドとゾロがザビーに迫る。

「オオ。野蛮な人タチネ。なら、この歌を聞かせるネ。これで、あなたもザビーファミリーの一員。」

その時

ドッ

何かの歌が部屋中に響く。

「うあつ！」

「ぐっ！」

「うおっ！」

ルフィ達は倒れこむ。

「な、何なんですかこの歌は。」

「あ、頭が割れる！」

新八と銀時が倒れこむ。

「これだ。この歌で俺達は・・・ぐっ。」

ドルルモンは一度擬人化して耳を押さえる。

「な、何なんですか・・・こ・・・。」

「小松！しっかりしろ！耳を押さえとけ！！」

倒れる小松にトリコが言う。

「これが。洗脳に使われる歌か。」

シスターが分析する。

「洗脳とは失礼ネ。これはザビー教教団の歌ネ。では、私モ。」

ザビーも歌いだす。

「ざ、ザビ。」

「ルフィ！しっかりしろ！チョッパーだ！チョッパーを思え！」

「はっ！チョッパー！」

危なかったルフィを止めたゾロ。

「ヨシノ！しっかりして！」

「大丈夫。それよりこの歌を何とかしないと。これだけの音量どこ

かにスピーカーがあるはず。」

ヨシノはスピーカーを探す。しかし

「くっ、この歌で集中して探せねえ。」

銀時が言う。

「どうする。タイキ！」

「この音を何とかしないと。はっ！バリスタモン！シャウトモンの

声を広げられるか！？」

「任せ口！」

「シャウトモン！」

「おうよ！こんな歌なんかより俺の魂のこもった声を聞け！」

ゴツバリスタモンにより大きくなったシャウトモンの声が、ザビーの歌を打ち消す。

「よし！これで、スピーカーを探せる！」

政宗達はスピーカーを探す。

「あつ！あつた！ありました！」

小松が指をさす方に、大きなスピーカーがある。他にも3個、スピーカーを見つけた。

「あれか！小十郎！」

「はっ！」

「行くぞ！」

「おう！」

政宗と小十郎とトリコとルフィがそれぞれスピーカーへと向かう。

「あつ！ちよつと待っ」

ザビーが止めようとするが、

「W A O D A N C E！」

「鳴神！」

「3連釘パンチ！」

「ゴムゴムの斧！」

ガッ

4人はそれぞれの技で4つのスピーカーを破壊する。すると、あの歌が聞こえなくなった。

「何てコトをするのデスカ！あつ！」

しかもルフィが壊したスピーカーが、ザビーの像に当たりバキッ

ザビー像の右半分が壊された。

「あつ、ワリイ。」

しかし

「んっ？何だこれ？」

政宗はある物を見つける。ザビーの像の下に大きな階段があったのだ。地下へと向かっている。

「あつ！」

「ひょつとして、この中に、チョッパー達が！」

「あつ！駄目ネ！そこはあの人がイル・・・アッ。」

ザビーはある事に口を滑らす。

「なにっ？」

「まさか。他にも首謀者がいるのか？」

「そいつがザビゾンを提案して、あの猛獣達を強くしたんだな。」

政宗とルークと銀時が言う。

「よしっ！なら中に。」

ルフィが向かおうとするが

「させないヨ！突撃アーレ！」

ドッ

ザビーがルフィに突撃するが

ドガッ

「オウツ！」

沖田が、バズーカを撃って止める。

「ここは、俺達に任せとけ。」

「風紀委員として貴様を許せん！」

「俺を操った事後悔させてやる。」

土方と近藤と沖田が立ちはだかる。

「ナラバツ！」

ドサッ

壁が開いて現れたのは、機械で出来たザビーそっくりのからくりだ。

「メカザビー登場デース！しかも」

ドガッ

ザビー城の屋根が壊され、そこから、金色の龍の装飾のからくり、滅騎が現れた。

しかし

「はあっ！」

ドガッ

シスターが手榴弾を投げ、メカザビーの一体を破壊する。

「あのからくりは、私達に任せて！」

「先輩達は、皆を助けてください！」

滅騎にタイキ達が立ち向かう。

「行け！」

シスターが叫ぶ。

「分かった。行くぞ！」

政宗達は階段を下りていく。

第二十九話 ザビー登場（襲撃編）（後書き）

銀時「つーかお前宗茂登場しないかもって言ってたよな。」

作者「何とか、登場できました。」

銀時「そして、新たな黒幕か。」

作者「ええ。正体は次回明らかになります！」

第三十話 もうひとりの黒幕、衝撃の対決（襲撃編）（前書き）

作者「今回は、もう一人の黒幕が登場します。」

第三十話 もうひとりの黒幕、衝撃の対決（襲撃編）

階段を下りて、長い廊下を走る政宗達。そしてその前には
「何だこりゃああああ！！？」

新八が絶叫する。目の前には、奇妙な動物達がいた。頭は犬なのに、胴体は猿。足が馬で、頭は熊などといった、つぎはぎの動物達だ。

「キメラって奴かこいつらは？」

ローが、襲ってきたキメラ動物を返り討ちにする。

「おそらく、もう一人の黒幕の仕業だろうな。」

ルークも攻撃する。

「本当になに考えているんだ？」

銀時も、木刀で攻撃する。

「外の猛獣達もそいつが何かをして、強くしたのかもな。」

トリコも攻撃する。その後もキメラ動物達を相手にしながら進む。数分後、廊下には新たなキメラ動物達の姿が見えない。

「一体、誰があんな奴らを」

政宗が、そう呟いた時

「な、なんだ？あれ」

ルフィが指を指す方を見ると、暗い廊下から、まるで絵本に出てくるお化けの様な者が現れた。

「な、な、な、」

銀時は立ち止まる。

「先生ひよつとしてあれってお化けじゃ」

顔色が悪い新八が銀時に言う。

「な、何いってんだよ新八。そんなのいる訳ねえだろ。」

そう言う銀時も膝が笑っている。その二人に

ブンッ

お化けのような者が二人をすり抜ける。

「銀時！新八！」

政宗が二人に言う。外傷はないが
ダンッ

「地味で、ツツコミしか取り得がない僕って一体何があるんだろう。」

「

「こんな薄汚れた天然パーマで死んだ目の自分が憎らしい。」
膝を着いて暗い事を言っている。

「おい！どうしたんだよ銀さん！新八！」

「一体何が。」

ブンッ

ルフィとトリコもすり抜けられ

ダンッ

「俺なんてどうせミジンコ以下だ。」

「今まで食ってきた食材達すみません。」

二人も暗くなった。

「えええっ！？ルフィのような奴が！？」

「トリコさんどうしたんですか！？」

「ちっ！どうやらあのゴーストが原因のようだな。」

「そういえば、沖田達が白い何かが現れて、突然全てが嫌になった
って。まさかあれが！」

政宗とルークは確信した。

「という事は能力者の仕業か！」

ゾロはそのゴーストを斬ったが、効果は無いようで、ゾロもネガティブになった。

「どうする・・・んっ？」

ウソップは、暗闇の中に誰かがいる事に気がついた。

「まさかこいつが！」

ウソップはその人物に向かって走る。

「あっ！待て。あいつらが」

ロイドが言い終える前に

ブンッ

ゴーストがウソップをすり抜け、ウソップは、倒れそうになる。
「ホロホロホロ。馬鹿な奴だな。こいつらがまだいるのに。」
突然、暗闇の中にいる誰かが喋る出す。

しかし

ズンツ

ウソップは、足を食いしばって、倒れるのを防ぎ
ビュン

パチンコを撃つ。

「はぐっ！何で・・・ネガティブホロウが・・・」
暗闇にいた人物、ベローナがそう言いながら倒れる。
「当たり前だ・・・俺は元からネガティブだ！」

その後、目を覚ましたベローナからもう一人の黒幕について聞こう
としたが、けつして口は割らなかった。

「こんな所にいてもラチがあかねえ。先を進むぞ。」
政宗達は、先を進む。ちなみにベローナはそこら辺の柱にくくりつ
けた。

「あ、後。」

政宗がウソップに向かって。

「良いこときつとあるぜ。」

何故か励ます。

「何か相談に乗りましょうか？」

「ガウツ。」

小松とテリーも励ます。

「いや、そんな憐れむような目で俺を見んなよ！」

再び走り出した政宗達。

「そういえば、ロー」

「なんだ？」

ルフィが走りながらローに聞く。

「お前気になる事があるって言うてたけど一体何だそれって？」
確かにローはその様な事を言っていた。

「今回の行方不明の事件。どうも気になって猿飛屋やジェイ屋と一緒に調べてみた。」

ジェイと言うのは、中等部3・Dの生徒で、佐助は風魔と同じ情報通で、その実力は佐助達と同等だ。

「気になった？」

「実は今回と同じ行方不明事件が十数年前にあった。」

「えっ!？」

その言葉に政宗達は一瞬立ち止まってしまったが、すぐに走り出す。
「ど、どういう事だ!？」

ルークが聞く。

「今から十数年前。クロスオーバー学園の生徒や教師が何人も行方不明になった。その犯人は当時最高の医師と呼ばれた男によって起こされたものだった。」

「何でそんな事を？」

新八が聞く。

「人体実験。そのためには、より多くの被験者が必要だった。クロスオーバー学園の生徒や教師の多くは体が強い奴や精神力が強い奴がいるしな。」

「そんな事で。」

新八の声が暗くなる。

「犯人の居場所が分かり、当時はただの教師だった校長を中心に、学園で屈強の奴らや、女神の戦士団などが協力して戦った。」

「女神の戦士団ってあの。」

「ベルゼブモンやバアルモンが聞いたら喜ぶかもな。」

ユーリと銀時が言う。

「そして、校長達により、生徒や教師達は救出され、犯人の医師は行方知れずだ。」

「ひょっとして、今回の事件は」

政宗が何かを言いかけたが、目の前に扉があったので、口をつぐむ。
「ついに、もう一人の黒幕のお出ましか。」

政宗が呟く。

「お前ら。準備はいいか？」

『おう！』

銀時の言葉に、全員答える。

「はああああ！！」

政宗達はその扉を突き破って進んだ。

現れたのは、かなり広い部屋で、部屋の奥の方に、泡を出している
緑色の液体が入られている器が何個もあった。

「ここは。」

政宗が呟いた時

「ザビーの奴め、こんなにも邪魔な奴らをここに通して。」

「！！」

部屋の奥から現れたのは、鼻がまるで蚊の口のような男だった。

「お前らが、今のあの忌々しい学園の奴らか。まあ。あの男がいな
いなら、たいした事はないな。」

「やっぱり、今回のもう一人の黒幕はお前だったか。十数年前の行
方不明事件の犯人。ドクトル・ホグバック！」

ローが、その男、ホグバックに言う。

「ポースポース！その通りだ！」

「目的は一体何なんだ！」

新八が言う。

「定春はどこネ！」

「ドレークをどこに隠した！」

「チョッパーは！」

神楽達が叫ぶ。

「ふん！うるさいガキ達だ！まあここまで来た褒美だ。私の目的を
話そう。それは、復讐だ！」

「復讐？」

「そうだ！私はあの時！ある研究を行っていた！その研究が完成すれば、全世界が震撼しただろう！」

「よく言うぜ。人を自分の意のままにまるで人形のように操るや、新しい人類を作るなんていう研究なんぞ。」

ローが言う。

「ふん！凡人には理解出来ないのだ！その研究の邪魔をした者もそうだ！」

「信長校長達か。」

政宗が呟く。

「ああ！アイツらさえいなければ、私の研究は完成していた！だから私は復讐を決めた！そして私と同じく学園の奴らに復讐をしようとした奴がいたのだ。」

「それが、ザビー教。お前らは同盟を結んでいたんだな。ザビー教は表で戦い、お前は影で様々なものをあいつらに与えた。」

「キメラ動物に、強化した猛獣。アレはお前がやった事なんだな。」
トリコが言う。

「ああ。奴らの技術力はすばらしくそして私の研究も理解してくれた。全てはお前らに復讐するためだ！」

ホグバックは、政宗達を指差す。

「ったく。そういう風な技術もつと別の事で使えばよかったのにな。つで？どうするんだ？ザビー教の奴らはあらかた片付けたし、ザビーももうすぐ倒せるはずだ。このまま降参して自首するか？」

政宗が言う。

「確かに。だがまだ切り札はある。」

「AH？」

その時

「！！」

ガキン

「先生！」

銀時を白い大きな何かが襲う。とっさに銀時は木刀で防御するが

ガキン

ドゴツ

木刀を弾かれ、銀時は吹っ飛ばされる。

「ぐおっ！」

ドガッ

銀時は、壁にめり込む。

「銀さん！うわっ！」

ドゴツ

近くにいた新八も吹っ飛ばされ、床に叩きつけられる。

「新八！・・・！」

ガキン

その者の一撃を神楽は傘で止めようとしたが

「！何・・・で」

ドゴツ

神楽も吹っ飛ばされ、床に叩きつけられる。

「神楽！」

ルフィが叫んだ時

「はっ！」

「ぬおっ！」

ドゴツ

ルフィと官兵衛の後ろから、何者かが攻撃した。二人は寸での所で、

避けた。二人のいた所には、大きなクレーターが出来ていた。敵は二体のようだ。

「！！」

「なっ！」

敵の姿を見たルフィと官兵衛は一瞬立ち止まる。

ドゴッ

「ごあっ！」

「うぐっ！」

ドゴッ

二人は、床に叩きつけられ、床にめり込む。

「ルフィ！黒田！」

政宗が叫ぶ。

「何で・・・だ。」

「嘘・・・だろ？」

二人は起き上がる。

「嘘ネ。何で・・・。」

神楽も起き上がり。そして三人は叫ぶ。

「定春！」

「チョッパー！」

「ドレーク！」

それは、三人が捜していた定春、チョッパー、ドレークだった。

「あれが、チョッパーだと！？だってあんな。」

「定春！？アイツが！？」

ルークと政宗は信じられないようだ。定春は元から大きいけど、今日の前にいるのはそれよりも大きく、どこか愛らしい顔ではなく、まるで獅子のような顔だ。チョッパーもいつもの人獣型よりもはるかに大きく、蹄は指のようになっていて。ドレークも見た目は恐竜の獣型の時とは変わらないが、大きさはそれよりも大きい。

「ああ・・・昔・・・アイツが暴れた事があるんだ・・・その時と・・・同じだ。」

銀時が途切れ途切れに言う。

「間違いない。あの角に、あの帽子。あれはチョッパーだ。」

ウソップが言う。確かに、頭には見慣れた帽子を被り、あの角が生えていた。

「ポースポス！その通り！こいつらは私の作った『狂人薬』を投与し、力も瞬発力も増大！そして悪魔の実の力を暴走されたのだ！」

ホグバックが高らかに言う。

「ちっ！切り札ってそういう事か！」

ユーリが言う。

「悪魔の実を暴走って！そんな事したら命に危険が！」

ナミが叫ぶ。

「ふん！こんな奴らがどうなろうと知った事じゃない！」

ゴオオオオオ

チョッパー達は叫ぶ。

「やめろ！チョッパー！」

「やめて！定春！」

「ドレーク！小生達の事が分らないのか！」

ルフィ達は叫ぶ。

「無駄だ！こいつらは今や暴走状態！お前らの事など分かるわけがない！」

「そんな。」

新八は愕然とする。

しかし

「くっ。」

チャキッ

銀時はフラフラになりながらも、立ち上がり、木刀を構える。

「銀ちゃん！？」

「定春。わかんねえのか。こいつが、捨てられたお前も拾ったこいつが・・・なら、ぶっ飛ばして目を覚まさせてやる。」

「でも！」

「神楽！こいつをこのままにしてえのか！」

「・・・。」

チャキ

「ゾロ！？政宗！？」

ゾロと政宗も刀を構える。

「ルフィ。確かにつれえよ仲間と戦うのは。だが、このままほったおいてもコイツは苦しむだけだ。」

「チョッパー目を覚まさせてやるよ。」

政宗とゾロがそう言う。

「麦わら！黒田！そのまま突っ立ってんのかよ！こいつらを取り戻したくねえのか！」

「・・・！」

キッドの言葉にルフィと官兵衛が反応する。

バッ

「チョッパ！ すまねえ。 だがお前を助け出してみせる。」

「定春。 私戦うネ。 定春取り戻すアル！」

「戦うぞドレーク。 お前さんを取り戻すために。」

バッ

政宗達は、暴走したチョッパー達に立ち向かう。

第三十話 もうひとりの黒幕、衝撃の対決（襲撃編）（後書き）

銀時「仲間との戦い。これほど辛いのはないな。」

作者「ええ。そうですね。次回は、チョッパー達との戦いと、防衛線の戦い、そしてザビーとの戦いです。そして次回新しいキャラが登場します！」

第三十一話 それぞれの戦い（襲撃編）（前書き）

作者「今回は、新しいキャラが登場します。」

第三十一話 それぞれの戦い（襲撃編）

政宗達は、暴走したチヨッパー達と対峙する。

「新八。」

「なんですか？」

銀時が新八に話しかける。

「あの二人を呼べ。」

「あの二人ってまさか！」

「ああ。あの二人なら、定春を元に戻せるかもしれない。」

「分かりました」

新八は、ポケットから携帯を取り出そうとするが、
ダッ

定春が突っ込んで来る。

「うわっ！」

「おりゃっ！」

「とおっ！」

銀時と神楽が抑える。その上で

「戦迅狼波！」

「襲爪雷斬！」

ユーリとルークが攻撃する。

「今だ！速くしろ！」

「分かりました！」

他のメンバーも戦っている。

ギャオオオオン

ドッドッ

ドレークがローを目掛けて迫る。

「ROOM」

フォー

半球のサークルが出来て、ローは刀を振るい、厄介な尻尾を切ろう

とするが

ビュッ

予想以上に速く、すぐに回避に切り替えようとするが

「シャンブル」

ドゴッ

「グアッ！」

ドシャアッ

尻尾で叩かれ、後ろに吹っ飛ばされ、ローは壁にぶつかる。

「ロー殿！つく烈火！」

ドドド

幸村が連続突きを放ち

「厄玉突進！」

「三刀流奥義！三千世界！」

官兵衛が自分の鉄球を当て、ゾロも三刀流で攻撃するが

ドゴッ

「うおっ！」

「ぬおっ！」

「ガッ！」

あまり効いておらず、突進され、三人は吹っ飛ばされる

ブオオオオオ

ゴッ

チョッパーが、腕を振るうが

「ぐっ！」

ガシッ

トリコがそれを受け止める。

「今だ！テリー！」

「ガウッ！」

ダッ

その隙にテリーが、牙をむき、突っ込むが
ブンッ

「なっ！」

ゴスッ

「ガウッ！」

「ぐあっ！」

ドサッ

チョッパーは、トリコを力任せに投げ、それをテリーに当てた。

「くっ！ギア2！」

バシュッ

ルフィの体から蒸気が出る

「ゴムゴムのJ E A Tピストル！」

「くらえ！」

「火の鳥星！」

「ムートンショット！」

「D E A T H F A N G！」

ルフィが目にも見えないパンチを放ち、キッドが腕に集めた鉄の拳で攻撃して、ウソップが、パチンコで撃って、サンジの足技で攻撃して、政宗も六爪流で攻撃するが

ゴッ

『ぐわっ！』

五人は吹っ飛ばされる。

さらに

ドゴッ

「うわっ！」

銀時達も吹っ飛ばされる。

「っ、強い。」

幸村が立ち上がりながら言う。

「ドレーク屋達は元から強いしな。」

ローが起き上がる。

「くっ！本当は、チョッパー達苦しんでいるんだろうな。」
ウソップが立ち上がりながら言う。

「当たり前だ。無理やり操られて戦わされる。そんな事をこいつらにさせたんだ。あのクソ黒幕は」

サンジはホグバツクを睨む。

「ポースポス！どうだこの力は！これならあの男にも勝てる！」

「HA！何言つてやがる。こんな位俺達で充分だ。」

政宗が立ち上がり刀を構える。

「ふん。よくもまあそんな減らず口を叩けるものだ。さあやれ！」

ダッ

チョッパー達が向かってくる。

「定・・・春。」

神楽は立ち上がりながら、定春との出会いを思い出す。定春は学園の近くで捨てられていたのだ。それを神楽が見つけ、寮へと連れて来たのが始まりだ。定春は神楽に一番良く懐き、授業の時間以外は神楽と一緒にいた。そして政宗達も定春の事を心の中では大切にしており、以前定春の真の力が発動してm暴走した時も、決死の覚悟で助けた。

（定春。絶対助けるネ。）

「チョッパー。」

ルフィは、チョッパーを見つめて、チョッパーの出会いを思い出す。チョッパーは人里離れた森で暮らしており、悪魔の実を食べた事が原因で、トナカイからも人間からも迫害を受けていた。ルフィ達は、その森に迷い込んでチョッパーと出会った。最初は警戒していたチョッパーも、次第にルフィを認めて、ルフィ達と友達となり、育ての親に当たる人物の薦めで、クロスオーバー学園に入ったのだ。

（チョッパー。お前の苦しみ俺達がぶっ壊してやる）

「ドレーク。」

官兵衛はドレークを見つめる。そしてある事を思い出す。ドレークとの出会い、ある秘密、そしてあの橋の上での事。

（あの日の『約束』果たしてみせる）
ダッ

ルフィ達は、チョッパー達を向かい撃とうとする。
ドゴッ！！！！

時は少し遡り、防衛線。

「ふう。これで全部か？」

陽介が呟く。目の前には、気絶させてある、ザビゾンと壊れたからくりが散らばっている。

「ふっ。俺達にかかれれば造作もない。」

桂が刀を鞘に収める。傍には先程までボードで戦っていたエリザベスがいる。

「ってか、ほぼあたしと花村で倒したんですけどね。」

千枝が溜め息をついて言う。ピピピッ

陽介の携帯が鳴る。相手は山崎だ。

「どうした？山崎。こっちのザビゾンは倒したが」

「ああ。俺らの所も倒したけど、実はさっき、かすがから連絡があつて。学園に数人、ザビゾンやからくり、それに奇妙な動物が侵入したんだ！」

その報告に陽介達は驚く。

「何だと！？一体どうやって」

「実は、さっき地下道を見つけたんだ。生憎途中で、崩れてて先には進めなかったけど、奴らはそれを利用してら奇襲をした。そして今回も、それを使って。かすが達が、戦っている。陽介達も援護し

てくれないか？」

「分かった！それで、他に戦っている奴は？」

『それが、二人ほど花壇の近くで戦っている。それと、アイツらも」

一方 クロスオーバー学園花壇近く

「はあっ！」

「スターストローク！」

ドガッ

ソフィとエステルが共に戦っている。

「お花さんには近づけさせない！」

「園芸部の名にかけてです！」

二人の前には、ザビゾンと仁王車が数台。そしてキメラ動物がいる。

「あの子達。何だか辛そう。」

「そうですね。」

その時

フッ

「はっ！」

後ろから、一人のザビゾンが現れた。物陰で隠れていたのだ。

その時

ビシュ

ビッ

何かの弾が、ザビゾンに当たり一瞬ひるんだ。

「はあっ！」

ドガッ

ソフィが殴って吹っ飛ばす。

「大丈夫か！？」

二人の前に、現れたのは、赤い角が生えた帽子を被り、ゴーグルをつけ、手にはパチンコを持った男子生徒がいた。

「どおりやあああ！！！」

ドガッ

金髪の気の強そうな女子生徒が、ホッケーのスティックでザビゾン
を攻撃する。

「ボッスンにヒメコ！来てくれたんですね！」

「当たり前だ！スケツト団参上！」

パチンコを撃って二人を助けた男子生徒の名は、藤崎佑助、通称ボ
ッスン。そしてザビゾンに攻撃したのは、鬼塚姫子、通称ヒメコ。

二人は1-Wの生徒でスケツト団と言う部活の部長と副部長だ。

『間に合ってよかった。』

続いて現れたのは、眼鏡をかけて、ノートパソコンを打っている男
子生徒、笛吹和義、通称スイツチだ。彼も1-Wの生徒でスケツト
団だ。

『二人がこの花壇で戦っている事は予想していた。』

「うん。ここのお花さん守りたいから。」

「片倉先輩とバルモンが一番危険な、最前線で戦ってますから、
私達も守れる物を守るために」

二人の決心は固い。

「よし、安心しろ！こいつらぐらい俺のパンチで」

そう言う割には、手が震えている。

「お前めっちゃ震えてるやん！ってかさっきの一発以外、攻撃して
へんやん！」

「しかたねえだろ！だってめっちゃデッケエからくりいるし、変な
動物いるぞ！何なんだよアイツらは！」

『ボッスン落ち着け、俺達も頑張らないといけない』

そう言いながらスイツチも、後ずさっている。

「お前もかい！」

そう言い合いをしていたら

バッ

尻尾は蛇で、頭は虎で、足は熊のキメラ動物が襲い掛かる。

「うおっ！」

しかし

「おりゃあっ！」

ドガッ

黒い髪で、リーゼント頭の男子生徒が、キメラ動物を殴り飛ばす。

「すまねえちよつと遅れた！」

「助かったぜ。弦太郎。」

彼はの名は、如月弦太郎。1-Wで、スケット団の部員だが、実は非公式の部活仮面ライダー部にも入っている。

殴り飛ばしたキメラ動物は、すぐに起き上がる。

「手強いな。なら！」

バッ

弦太郎は、何処からか、金属で出来たベルトを腰に装着し、そこに四つのスイッチを空いている所に差し込み、側面にあるスイッチの様な物を押す。

『3・2・1』

「変身！」

途端、弦太郎は、仮面ライダーフォーゼに変身し

「宇宙来タアアー！」

お決まりのセリフを言った。

「仮面ライダーフォーゼ参上！」

ダッ

フォーゼは、キメラ動物へと向かう。

ふと、見ると、仁王車がこちらに向かってくる。

「あれは、私達が！」

「うん！」

「せやな！」

「俺も、援護をする！ウソップから何個か使える弾をもらっている。

」

ソフィ達は、仁王車に向かう。

「どおりやー！」

ドガッ

フォーゼはキックをキメラ動物に当てる。
バツ

キメラ動物が、熊の腕を上げる。

「はっ！」

ドガッ

フォーゼは後ろに避けた。

「なら、これで！」

フォーゼは青いボタンを押す。

『ランチャー』

途端、弦太郎の右足に、ランチャーが装備され

「行けえ！」

ドッ

ランチャーが、キメラ動物に全弾直撃する。煙が晴れると、キメラ動物は気絶をしていた。

仁王車と戦っていた方も

「おりゃあ！」

「火薬星！」

ドガッ

ヒメコとボッスンが動きを止めその隙に

「解放します！必中筆頭！クリテカル・ブレード！」

「行きます！邪と交わりし、清き清閑よ。セイクリッド・ブレイム

！」

ガッ

二人の秘奥義で、三体破壊された。残りの仁王車もフォーゼに倒される。

「ふう。終わったな。」

「良かった。お花さん無事で」

「そつえば、ユーリ達どうしたんですか？」

エステルが聞く。

『先ほど連絡があつて、何でも、今回もう一人黒幕がいるらしい。ユーリ達はそれと戦っているというぐらいしか。』

スイッチが説明する。

「

「私も！」

エステルとソフィは向かう事を決意した。幸いザビゾン達はほとんど捕まえたので、行っても支障はない。

「俺も行く！友達がヤバイかもしれないんだろ？」

弦太郎も向かうらしい。

「よし。ここは俺達に任せろ。」

ボッスンが言う。

「よし！じゃあ先に行ってくる！」

フォーゼはオレンジ色のスイッチを押す

『ROCKET』

フォーゼの右腕にオレンジ色のロケットが装備され

ゴッ

ロケットにより、フォーゼは飛んだ。

一方 ザビーと戦っている者は、

「はぁ！」

ドン

シスターのバズーカがメカザビーに当たり

「スザク！アギダイン！」

共に残った総司がペルソナ『スザク』を出し炎属性のスキルにより、メカザビーを倒した。メカザビーはこれで、全てだ。また滅騎も

「ローゼスレイピア」

「ハードロックダマシー！」

最初は苦戦したが、ロゼモンとオメガシャウトモンにより倒された。
「オォー！何と言う事デシヨウ！酷いデスネ！」

「お前が言っな！！」

土方達が、ザビーに斬り込もうとする。しかし

「火葬あれ！」

ゴッ

「あっつ！」

バズーカを下に向けさせ、バズーカの砲口から炎が出てきて、ザビーが飛ぶ。

「ならばっ！」

ドン

シスターが、ザビー目掛けて銃を撃つが

「天使あれ！」

ガッ

ザビーには当たらず、何処からか現れた髭の生えた天使が代わりに受けた。

「何だこいつら？」

土方が言う。

「相手は、空を飛んで、そして攻撃はあの髭が代わりに受けるか。」
近藤が分析する。

「最悪なんですけど。」

ヨシノがため息をついて言う。

「言っておきマスガ、この子達攻撃も出来マスヨ。ソーレ！」
ゴッ

髭が生えた天使が土方達目掛けて、突進する。

「怖っ！」

ブンッ

そう言いながらも、土方と近藤は刀で斬って、沖田はバズーカを発射して何とか向かってくる一体を落としたが
ガッ

「くっ！」

「グアッ！」

残り二体が、シスターとオメガシャウトモンに当たる。見ると、ザビーの周りにまた髭の生えた天使が現れる。

「サア！今度こそトドメを差して上げマスヨ！」

ゴッ

ザビーが、空を飛びながら迫ってくる。いつ黒こげになるかも時間の問題。

その時

「散れ！」

ダッ

誰かがジャンプをして、ザビーに斬りかかる。それは、周りの髭の生えた天使が身代わりになるが

「あなたは、タクティシャン！」

それは、毛利だった。

「黙れ！その名を、口に、するな！」

顔色が悪い。精神的にキツイようだ。

「おい大丈夫か？」

土方が心配する。

「マサカ、あなたが裏切るなんて許せません！行きナサイ！天使達ヨ！」

髭の生えた天使が毛利に向かうが

「弾き手壁！」

突然緑色の光の円状の壁が現れる。

ガッ

髭の生えた天使が跳ね返される。しかも、後ろにはもう一つ壁がある。

「マサカ！」

ガッ

後ろの壁にも、跳ね返され、髭の生えた天使は、ザビーに当たる。ドガッ

「おう！」

その後も何回かザビーに当たり、髭の生えた天使は消えた。

「何て事をするんですか！ならばあなたを先に黒こげにしてあげマシヨウ！」

その時

「あの、変な奴が邪魔で斬れなかったぜ。」

「へっウワツ！」

ドガッ

共に残っていた七花が、高くジャンプして、ザビーに踵落としをくらわせ、落とす。

「おう！」

「悪いが、とがめに頼まれているんだ。お前を倒せと。」

七花は冷静な口調で言う。

「トガメ？あなたの好きな人デスカ？それなら、ザビー教に入って、愛を。」

未だに、入教させようとしているザビーだが
ダッ

七花は走りながら

「悪いが、俺はただ単に、とがめに惚れているんだ。お前の言う訳の分からねえ奴を勝手に押し付けるな。」

そして

「虚刀流最終奥義。七花八烈！」
ドガッ

「ふごっ！」

虚刀流の七つの奥義を一気に炸裂させる技により、ザビーはすぐに倒される。

「やったな。」

土方が言う。

「こいつのお仕置きは俺に任せてください。さーてどうするか。」
沖田の目が嬉しそうだ。

「後にしろ。そしてここでやるな。まだ中等部の奴がいる。」

近藤が言う。

その時

「ヨシノ！タイキ！」

「ヨシノさん！委員長！無事ですか！」

滅騎によつて壊された壁の外の方から、大とトーマがそれぞれ、シヤニンググレイモンとミラージユガオガモンに乗つて、現れた。

「大先輩にトーマ先輩どうして？」

「実は、町を襲つたザビゾン達をほとんど撃退したから、君達の助けに行けるようになったんだ。」

「俺とトーマは先に来た。後アイツも。」

大が言つた後

「うおっ！」

ドガッ

壊れた壁に当たつて、フォーゼが現れた。

「弦太郎！？」

「よお！風紀委員長！それに皆！」

フォーゼが言う。

「それで、ザビーって奴は？」

大が当たりを見渡す。

「もう倒したけど、実はまだ黒幕がいるらしい。」

総司が答える。

「何だと？」

フォーゼが呟いた、その直後

ドオオオオオオン!!!

ザビー城の後ろの森で、突然轟音と砂煙が出る。

「何だ!?!」

中にいるため、近藤達は、砂煙が見えない。

「何だ。あれは?」

大達は、デジモンに乗って、煙が上がった方へと向かう。フォーゼも、ロケットを装備して、向かう。

「これは!」

タイキが驚く。木々はなぎ倒されており、土が盛り上がっている所を見るに、どうやら、地下で何かがあったらしい。

「皆あれ!」

ヨシノが指を差す方を見ると

「政宗! ルーク! 幸村!」

「ルフィ! 神楽! 黒田先輩!」

傷だらけで倒れている、政宗達がいた。

第三十一話 それぞれの戦い（襲撃編）（後書き）

銀時「おいおい！大丈夫なのかよ俺ら！」

作者「お前らがやわではない事は私は知ってるよ。」

銀時「っ！か。いい加減アイツらの過去をさっさと書けよ。」

作者「それは、次回書きます。ではっ！」

第三十二話 もう一つの絆 (襲撃編) (前書き)

作者「いよいよ。官兵衛とドレークの出会いが明らかになります!」

第三十二話 もう一つの絆 (襲撃編)

「政宗！ルーク！」

大が、政宗とルークに駆け寄る。

「うつ・・・大か？」

「くっ・・・何でここに？」

どうやら意識はあるようだ。

「キュートモン。治療を！」

「了解だキュ！」

キュートモンが治療をする。

「幸村！」

「お兄ちゃん！」

しいなとこなゆきが幸村に駆け寄る。

「しいな殿にこなゆき？何故ここに？」

「あたし達も、応援に来たんだ。それにしても何でここまで。」

「某達よりも・・・ルフィ殿達が・・・傷が大きい。」

確かに、ルフィと神楽と官兵衛は、この中で一番傷が大きい。

「ヒールウィンド。」

「ハートレスサークル。」

ゼロスとティアが治療をしている。

「一体誰が。」

その時

ブオオオオオ

下の方から声が聞こえる。それは、暴走したチョッパー達だった。

「な、何だあいつら！」

大が叫ぶ。

「チョッパーと、定春と、ドレークだ。」

ユーリが教える。

「ユーリしっかりしろ！エステル達がここに来る。」

フォーゼが教える、

「チョッパ先輩達って。どういう事なんですか!？」

タイキは驚いているようだ。

「それは・・・。」

コーリが教えようとするが、

ガキン

下では、銀時、トリコ、ゾロ、サンジ、慶次、元親、ロイド、新八など、まだ戦える者達が食い止めている。

「お前ら! そいつらをどっか遠くに運んで、治療をしてくれ!」

銀時が叫ぶ

「先生!」

「情けないが、俺はこうして食い止める事しか出来ねえ!」

銀時が言う。

「ルフィ達の知り合いか! 頼むぞ!」

トリコが叫ぶ

「あの、誰ですか?」

トーマが聞く。

「頼むぜ! 俺達はここで食い止める!」

慶次が叫ぶ。

「俺も食い止めてくる。人数は多い方が良い。」

「俺もだ!」

「俺も」

総司と、フォーゼと、山崎も共に行く。

「じゃあ皆を離れた所に」

政宗達を連れて行く。

地下室から離れた場所で

「大丈夫? 政宗」

「何とか・・・か。」

ジユデイスが政宗に話しかける。

「俺よりも、ルフィ達が、とくに官兵衛がやばい。」

確かに、ルフィ達の中で官兵衛の傷が大きい。

「それで、一体何があったんだ？」

土方が聞く。

「実は……。」

ルークがこれまでの話をした。

「そんな……。」

「ひでえ事をするぜ。」

エステルが言い、土方が言う。

ザッ

誰かが立ち上がる音がした。音のする方を見ると、ルフィと神楽と官兵衛が立っている。

「いか……ねえと。」

「定……春。」

「これくらい……。」

「無茶すんなよ！お前らボロボロだろ！もう少し治癒術をやってから。」

「でも……。」

流石に、限界なのかルフィと神楽は崩れ落ちる。しかし官兵衛だけは立って歩こうとしていた。

「お前！一番やばいんだろ！だったら。」

近藤が止めようとする。

「行かないと……いけないんだ。」

そう言う官兵衛は、今にでも倒れそうだ。

「どうして、そこまで。」

エステルが呟く。共に来たホーキンスはじつと官兵衛を見る。

「約束したんだ……。あの日に……。もうあんな思いをあいつがしないように」

「あんな思い？」

ルークが言う。

「まさか。あの事件か？」

近藤が聞く。

「ああその通りだ。」

「何なんだ？あの事件って。」

政宗が聞くが、近藤達は黙っている。

「これから、言う事は誰にも言うな。」

そう前置きをして近藤は話をする。

「二年前に起きた事件を知ってるか？」

「二年前の事件。確か校内に謎の生き物が現れて、生徒に怪我を負わせた事件か。」

佐助が言う。

「その事件の犯人が・・・ドレークだ。」『！？』

政宗達は驚いている。

「ちよつと待って下さい！あの人そんな事をするような人には」
ルークが言う

「もちろん理由がある。悪魔の实の暴走を知ってるか？」

「確か、特殊な成分があつて、その成分と能力者の体内の悪魔の实の力が反応して、悪魔の实の力が暴走する事か？あのトニー屋のような。」

ローが説明する。どうやら、あの姿は悪魔の实の力が暴走した姿らしい。

「そう、その悪魔の实の暴走が原因なんだ。二年前のあの日。ドレークは明智先生から無理やりある薬を飲まされたんだ。その薬の中に悪魔の实の力を暴走させる成分が入っていた。」

「全くとんでもない事をしてくれる先生だぜ。」

政宗が呟く。

「その後、ドレークの中にある悪魔の实の力が暴走してしまい。我を忘れて生徒達を襲った。幸いな事にそれほど酷い傷ではなく、誰もドレークが変身した時を見ていないから、ドレークがやったとは

誰も気づかなかった。」

すると、近藤の目が暗くなった。

「それから数日後ドレークは風紀委員を抜けたんだ。」

「何で。」

ルークが呟く。

「許せなかつたんだ。例え暴走でも、自分がした事には変わりはないから。そう思ったんだろう。だから自分を許せなかつた。風紀委員を抜けてからのあいつは、人と関わる事を極端に避けていた。また暴走した時に誰も傷つけないために」

「自分から孤独な道を進むなんて。」

ルークが呟く。

「だが、しばらくして、あいつは元に戻った。お前のおかげか？」

近藤が官兵衛に聞く。

「そんな事はない。小生が先にあいつに助けられたんだ。」

「助けられた？」

政宗が言う。

「あれは、中等部三年の秋の事だ。あの時、半兵衛と大谷によって、小生の手に、この鉄球付きの錠がつけられたのさ。」

「その錠ってその時から？」

ルークが言う。

「それで、屋上にいたのだが、野球部のボールが鉄球に当たり、さらには動いた鉄球が、屋上にある柵に当たって、しかも運悪く、それは壊れかけた柵で、それにより、柵が壊され鉄球は下に落ちて、小生も繋がっているため、屋上から転落しかけた。」

「流石は学園一の不幸者。」

佐助が言う。

「その時、小生の腕を掴んで助けたのが、ドレークだ。あいつは小生を引き上げて『大丈夫か？』と一言だけ聞いて、小生が大丈夫だと言うと、何処かへと行ってしまったんだ。」

「あいつは、あの時極力人と関わらなかつたからな。」

近藤が呟く。

「それから数日後。近道として通った人通りの少ない路地裏で、ドレークと再会したが、また起きた。」

「まさか、暴走が？」

「ああ。今度はハロルド先生に飲ませられた薬に入ってた。」

「あのマッドサイエンティスト。」

政宗の拳が震える。

「小生はすぐに、異変に気づき、そして近くに川がある事に気づいて、そこに連れて行こうとしたんだ。悪魔の実の能力者は水の中なら、能力を無効化できるからな。」

官兵衛の頭にあの日の事が蘇る

〈回想〉

「しっかりしろ！すぐに川に連れて行ってやる！そこで、少しの間我慢して川の中に入ってくれ！」

「う・・ぐ・・・俺に・・・近づかない方が・・・。」

ドレークの顔に、緑色の鱗が浮かび上がり、尻尾が生え、爪が鋭くなっている。変身が進んでいるのだ。

「もうすぐだ・・・もうすぐで。」

「お・・前・・・！！グアアア！！！」

ビッ

「くっ！」

官兵衛の腕に引掻き傷が出来る。

「頼む・・・近づくな・・・もう・・・傷つけたく・・ない。」

今にも、意識が途切れそうだ。

「しっかりしろ！後は、橋の下に降りれば。」

現在二人は、橋の上において、官兵衛はドレークに肩を貸している。官兵衛の目に、橋の下に降りるために階段が写る。

「もう少しだ。後少し。」

しかしこんな時でも、官兵衛の不幸パワーが炸裂した。
ガッ

「えっ？」

鉄球が、橋の柵の間をすり抜け、落ちそうだ。そして繋がっている
官兵衛も

「おおお！！こんな所で足止めは！」

すぐに引き上げようとしたが

ボキッ

「えっ？」

またも不運。その部分は、今にも壊れかけていて、官兵衛が手にか
けた瞬間崩れた。

突然支えを失い官兵衛とドレークは

「なぜじゃあああああ！！」

ドボンッ

川へと落ちた。

「ごぼっごぼっ！」

（川の中に入った方がいいが、このままでは溺れる！）

鉄球は、川の底へと沈んでいるため、官兵衛は沈みかけている。一
緒に落ちたドレークは悪魔の実の能力者なので、泳げない。ふち見
てみると、顔に浮かび上がった緑色の鱗は消え、尻尾も短くなっ
ている。能力が無効化されているのだ。

（このままでは二人共溺れて）

何とか泳いで、ドレークの元へと向こうとするが、鉄球により段々
と沈む官兵衛。

その時

フワッ

（えっ？）

突然鉄球が、軽くなったような気がした。まるで、誰かが鉄球を持
ってくれたように

丁度その時

（何なんだ？この黒い物は？）

二ノがたまたま魚を取っており、鉄球を不思議に思った二ノが持ち上げたのだ。

（よし今のうちに）

官兵衛は足だけで泳いで、ドレークの腕を掴み、岸へと向かう。もうすぐで岸だったのだ。

バシャッ

「ぶはっ！」

岸へと着いた官兵衛は、ドレークを持ち上げ、鉄球を引き上げる。

丁度二ノは鉄球を手放していた。ちなみにその時二ノ以外の河川敷の住人は全員何処かへと行っており、リクもその時は河川敷には住んでいなかったのだ、岸にはだれもいない。

「おい！しつかりしろ！おい！」

官兵衛がドレークの顔を叩く。

「うつ・・・ここ、は？」

目を開けたドレーク。

「気がついたか。安心しろ岸に着いたし、お前さんの能力の暴走は収まった。」

「そう・・・か。・・・！お前・・・それ。」

官兵衛の腕には、無意識の内にドレークが着けた傷があった。

「これくらいの傷どうと言う事はない。」

「また・・・傷つけたのか・・・。」

ドレークの顔が暗くなる。

「また・・・あの時の様に。」

「まさか。夏に起こったあの事件の事か？」

あの事件の真相を知っているのは、風紀委員と生徒会だけで、官兵衛はその時生徒会に所属していたのだ。

「また・・・傷つけてしまった。」

「そんなに責めるな。無事でよかった。」

「しかし・・・。」

ドレークは納得しないようだ。少し間を置いて官兵衛は口を開く。

「小生はな。道を歩けば、上から何かが落ちてきてぶつかる事がある。」

「えっ？」

「運悪く、不良に絡まれた事もあるし、運悪く熊と出会った事もあるし、事故に巻き込まれる事もある。お前さんに助けられた時も、橋から落ちた時も、運が悪くてそうだった。そこまで小生は運が悪い。だからお前さんの悪魔の実の暴走に遭遇して、傷を負った事ぐらい、小生の数多くある不幸の中のごく一部だ。だから気にするな。」

「・・・。」

「お前さんは、一人であの事件の責任を抱え込んでいる。あれはお前さん一人のせいじゃない。もしもお前さんがその不幸を抱え込み続けるなら。」

官兵衛は自分の拳を自分の胸に当てる。

「その不幸。この学園一の不運な男、黒田官兵衛が受け止める。お前さんの不幸ぐらい小生の不幸の中に入れたぐらいで変わりはない！」

「官・・・兵衛。」

「まあ。簡単に言うとな。」
スッ

官兵衛はドレークの前まで自分の手を伸ばす。

「友にならないか？」

「・・・。じゃあ俺からもだ。」

「えっ？」

「お前がそこまで不幸なら、俺もその不幸を分かっ。それならお前の不幸を減らす事ができるかもしれない。だが、もし俺がまた今回のような事が起きたらその時は。」

「その時は全力でお前さんを止めるさ。もし傷つけたくないなら。」

もう暴走を起こさないようにしろよ。」

「元からそのつもりさ。」

スッ

ドレークも手を伸ばし、二人は手を結ぶ。

それが、もう一つの橋で生まれた絆だった。

く回想終了く

「それからだ。小生とドレークが友になったのは。」

「……。」

官兵衛の話を聞き終えた政宗達。

「じゃあ。先輩が止めたいのはその約束のためですか？」
ルークが聞く。

「それだけじゃない。友だから、だ。」

官兵衛は微笑して返す。

「それなら、何としてもあいつらを元に戻さないとな。」

ユーリが言う

「ああ！チヨツパーは絶対に助ける！」

「定春をこれ以上苦しませないネ！」

ルフィと神楽が言う。

「ならまずは、怪我を治せ。向かうのはそれからだ。」

「分かった。」

三人は再び治療される。

「……。」

ふと見ると、トーマが何かを考えている。

「どうしたトーマ？」

大が聞く。

「なあ大。確かこの森の近くに湖があったよな。」

「え、ああ。シャイニンググレイモンに乗っていた時に見えたよな。」

「・・・そうだ。それだ！これなら。チョッパーとデイス先輩を助けられる。」

「えっ？」

その言葉に全員が反応する。

「誰かが、チョッパーとデイス先輩を湖までひきつける。そして湖へと落とす。二人は能力者それなら、水の中に入れば暴走は止まる。」

「でも、水の中から出すのは？」

ルークが聞く。

「俺達がやる。元に戻った直後すぐに引き上げてやるさ！」

大が自信満々に言う。

「だけど。定春は。」ピピピ

突然政宗の携帯が鳴る。相手は新八だ。

『政宗！阿音さんと百音さんが森の前まで来たらしいです！』

「本当か！」

「誰なんだ？」

「二年の先輩で、前に定春が暴走した時に協力してくれた。」

佐助が答える。

「チョッパー達には悪いが、これしか方法が見つからないからな。」

政宗が呟く。

「ああ。だからこそ、必ず助けるぞ！」

ルフィの言葉に

『おお！！』

全員が答える。

第三十二話 もう一つの絆 (襲撃編) (後書き)

作者「いよいよ襲撃編もクライマックスです！」
銀時「絶対に助けるぞ」

取り戻す友（襲撃編）（前書き）

銀時「にしても、今回は結構遅かったな。」

作者「色々あって、書く時間が少なかった。今回は三人の救出です。」

取り戻す友（襲撃編）

ガッ

「ぐはっ！」

銀時が、定春の突進で吹っ飛ばされる。もう体はボロボロだ。

「銀時！すぐにあいつらの所に、くっ！」

ガッ

トリコは、自分に振り下ろされかけたチョッパーの腕を捕まえた。

しかし

ドガッ

「ぐあっ！」

その間にドレークが攻撃して、床に叩きつけられる。

「トリコさん！」

新八が叫ぶ

「はあっ！」

フォーゼが定春に向かって飛び蹴りをしようとするが

ドガッ

「うわっ！」

足で攻撃され、床に叩きつけられる。

「くっ！」

残ったメンバーも皆ボロボロだ。

ゴッ

チョッパーが、キッドに向かって腕を振り下ろす。

「くっ！」

その時

「ゴムゴムのピストル！」

ドガッ

ルフィのパンチがチョッパーを攻撃する。見ると、地上には、ルフィの他にも政宗やルーク達先ほどまで治療を受けていた者達と、治

療をしていた者達が現れた。

「先生！皆を元に戻す事が出来そうです！」
ルークが言う。

「本当か！」

「そんな事出来るはず」

ホグバツクがそう言おうとするが

「チョッパーとドレーク先輩を湖に落とす。悪魔の実の能力者だから、無効化され元に戻るはずだ！」
ウソップが言う。

「はっ！」

「チョッパー！こっちに来い！」

ギョーン

ルフィは両腕を伸ばして、チョッパーの腕を掴み、上へと持ち上げろうとする。後ろには、神楽と幸村達が、ルフィを引っ張っている。

「あつやめ」

ビュン

ホグバツクの言葉を無視して、チョッパーを地上に着く事に成功したルフィ達

「こつちだ！速く来い！」

官兵衛が、鉄球を投げて、ドレークに当てる。

ギヤオオオオン

ドッドッ

「あつ」

ドッ

ドレークも地上に着く。

「ゾロ！サンジ！動けるか！」

「ああ！チョッパーを湖へ誘導させるんだろ？このボロボロなマリモよりも、動けるぜ。」

「黙れやボロ眉毛。テメエなんざすぐに捕まるだろ？俺は大丈夫だ！」

「んだとテメエ？」

「やんのか？」

「お前ら何喧嘩してるんだ！速くチョッパーをしねえとチョッパーが」

ブオオオオオ

チョッパーがウソップに襲い掛かる。

「うおっ！」

「よし！すぐに」

「ペルソナ。パールヴァティ、メディラマ。」

コオオオオ

突然、総司が、桃色の衣を着た女性のペルソナ『パールヴァティ』を出し、ゾロとサンジを回復させる。

『無茶をしないで下さい。あなた達の傷は大きい。』

「せめて、これだけでも回復しないとな。」

「ああ。助かる。」

「助かったぜ。パールヴァティさん。じゃっ」

ダッ

二人は地上へと行く。

「ドレークの誘導は俺も行こう。」

「じゃあ、俺も。」

ホーキンスとユーリが官兵衛と共に誘導する事になった。

「よし行くぞ。」

ダッダッ

ルフィ達と官兵衛達は、湖に向かって走り出す。それをチョッパーとドレークが追う。

「定春！こっちに美味しいご飯があるアルよ！」

ピクンッ

定春は臭いで察したのか、神楽の方を見ると、神楽の手には、肉がある。

「定春。朝から何も食ってないからお腹ペコペコのはずネ。いくら

操られていても。」

ドドド

定春は神楽を追って、地上に着く

「あっちよっ！お前ら！？」

ホグバツクが慌てている。見たところあまり戦う事には慣れていないようで、主にキメラ動物を操るぐらいだったのだろう。

「よし、俺達も行くぞ。」

「はい！」

銀時と新八も、地上に行く。途中で、エステルとティア達に治療されて、神楽の向かった場所へと行く。

「さあつ。後はテメエだけだ。」

政宗とルークは地下に降りる。土方達も一緒だ。

「ドクトル・ホグバツク。お前はもうここまでだ。」

近藤の声は怒りで震えている。

「そしてテメエのくだらねえ復讐のために、作られたキメラ動物達。操られダチと戦わされたチョッパー達。俺はテメエを許さねえ。」

トリコも、怒りを露にしている。

「もうテメエには手駒は残ってないだろ？観念しろ。」

政宗が言う。

しかし

「まだだ。まだこいつがいる！」

ポチッ

ゴッ

奥の壁が突然、開き、中から足は蜘蛛で、体は虎、尻尾は蛇で、頭はライオンの頭と熊の頭の二つの巨大なキメラ動物が現れた。暴走したチョッパー並にデカイ。

「これこそ、私が作った最強のキメラ動物！あの者達よりも数倍強いぞ！さあやれ！」

ゴッ

キメラ動物が、突進する。政宗達は武器を構える。

その時

「真の愚か者は貴様だ。ぬんっ！」

ゴッ

突然床から、黒い巨大な棘が現れる。

「なっ。」

ドンドンッ

さらに、銃を撃ち、追撃をする。

ゴッ

キメラ動物が倒れる。

「えっ？」

ガッガッ

「愚かな者と書いて愚者。その名は貴様にふさわしいな。ダオスレ
ーザー！」

ゴッ

巨大な光線がキメラ動物に直撃し、立ち上がったキメラ動物が再び
倒れる。

ガッガッ

「お、お前は」

「あ、の」

『信長校長！！ダオス理事長！！』

信長とダオスが現れた。

「お、お前ら！」

「私達の大切な生徒を操ったのはお前だなホグバツク。」

「余の学園を襲い、生徒を傷つけた事を後悔させてくれるわ。」

まさに霸王色の覇気を持つてるんじゃないのか？と疑うくらいに
二人は威圧する。

「あのキメラをあそこまで、ダメージを追わせるなんて。さすがは
学園最強。」

「さすがは、白髭と互角かそれ以上の力を持った二人。かつてデビ
ル大蛇を一撃で倒したと言われてるしな。」

政宗とトリコが呟く。

「くっ！おい！いつまで寝ている！さっさと倒せ！」

ゴォッ

キメラ動物は、再び立ち上がるが、あれだけの攻撃ですでにフラフ
ラだ。

「さて、あそこまで傷ついても強いと思うが、君達に任せてもいい
か？君達の実力を見たいからな。」

「あれしきの敵を倒せぬとは言わせぬぞ。弱き者は捨てるが？」
ダオスと信長は、政宗達に任せるらしい。

「HA！当たり前だ！さあっ行くぜ！」

『おうっ！』

政宗達は突っ込む。

ゴッ

ライオンの頭の口から炎が放たれる。

バッ

政宗達は避けた。その隙に熊の頭が噛み付いてくる。

ガキン

「させるか！」

小十郎が前に出て、防ぐ。その後ろで

「十飛！」

ドガッ

元親が突っ込む。

キメラ動物がひるんだ隙に

「おらよっ！」

「はあっ！」

「ふっ！」

ドガッ ズバッ ズシャッ

キッドとキラーとローが追撃する。

ガッ

キメラ動物が蜘蛛の足を高く上げ地面に突き刺す。

突き刺さった場所には槍を突き刺した様な穴が出来た。

「気を付けろ！こいつの足はアイアンスパイダーの足かもしれないねえ

！素早く、そして足で突く攻撃は鉄の槍と同じ威力だ！」

トリコが忠告する。

「それなら。ジャアクフロスト！」

現れたのは、ジャックフロストを黒くしたようなペルソナ、ジャア

クフロストだ。

『呼んだヒホか！』

「ああ。あの足にブフダイン！」

『凍って砕ける!』

ゴッ

ジャアクフロストの攻撃で、三本の足が凍りつく。

「今だ!一目惚れ!」

「くらえ!」

「とお!」

「はあ!」

慶次の攻撃と、土方と沖田のバズーカでの攻撃、近藤の刀による攻撃を喰らう。

ズッ

しかし、まだ凍っていない二本の足が、慶次達を襲う。

その時

ビュッ

突然、蜘蛛の足が、食いちぎられたように消えた。

「ワウッ!」

「ナイスだテリー!」

テリーが、目にも見えぬ速さで、蜘蛛の足を食いちぎったのだ。

「次は俺達、カミウチ。」

「力の違いを見せてやる!インディグナイト・ジャッジメント!」

「俺様の本気見せてやるよ。シャイニング・バインド!」

「契約者の名において命ず出でよセルシウス!」

「サンダーボルト!テンポ!」

「来たれ雷裁きを受けよ!洗華月翔閃!」

バルモンの雷の攻撃と、ジーニアスの雷の剣を突き立てる術、ゼロスの光の術と、しいなの氷の精霊セルシウスの召喚術、ナミの雷を落とす技と、ジュデイスの技が、当たる。

「な、何故だ!最強のキメラ動物なのに何故!」

叫ぶホグバック。

「当たり前だ。」

それに向かって、冷たく鋭い言葉を言うのは政宗だ。

「こいつの攻撃なんざ、あいつらの、無理やり自分の友と戦わされている、チョッパ、定春、ドレークの悲しみの攻撃に比べたらこんな奴の攻撃くらい何ともねえよ。」

ガアアア

キメラ動物が政宗達に突っ込んでくる。

「レディアント・ハウル！」

ドガガ

ルークが、キメラ動物を打ち上げる。

「行くぜ！」

フォーゼは、エレキスイッチにより、金色のエレキステイツに姿を変え、手にはビリーザロッドと言う武器が握られている。フォーゼはビリーザロッドにコンセントを差し込み

『リミットブレイク』

「ライダー100億ボルトブレイク！」

ドガッ

ビリーザロッドに雷が纏い、キメラ動物に当てる。

「見せてやる！」

ロイドは、二本の剣を一つにし、それをキメラ動物目掛けて攻撃する。

「天翔蒼波斬！」

ドガッ

そしてその、直後

「くらえ！十連釘パンチ！」

ドガッ

トリコのパンチが炸裂する。

ドゴッ

キメラ動物は、後ろに吹き飛ぶが、立て直し襲ってくる。

「後、もう少し！」

ルークが呟く。

「行くぜ！真田幸村！」

「うむ！」

ダッ

政宗と、幸村が立ち向かう。

「とどめだ！火焰車！」

「くらいやがれ！PHANTOMDIVE！」

ドガッ

幸村の槍は炎を纏い、政宗の刀は雷を纏い、キメラ動物に向けて、攻撃した。

ドサッ

キメラ動物が倒れた。

「よっしゃああ！」

「強くなってるな。彼ら。」

「ふん。まだまだ弱い。」

ダオスと信長が話す。

「そ、そんな最強のキメラ動物が……。」

ダッ

ホグバックは、隠し通路を使って、逃げようとするが

「させるか！」

ドッ

「のこっ！」

小松が体当たりをして、止める。頭を強く打ったため、ホグバックは気絶をした。

「ナイスだ小松！」

「とりあえず、こいつを縄で括って、後はお前の好きにしろ。」

土方が、沖田に言う。

「ありがてえ。じゃあ俺がとっておきのお仕置きをしときます。」

沖田は、黒い笑みを浮かべている。

「さて、あっちは、どうかな。」

その頃、森の切り開いたような場所で

「全く、神聖な犬神にあんな事をさせるなんて。」

「その犬神を、捨てたのはどこの誰だ？」

「うるさいわね！とにかく、始めるわよ！」

その場には、銀時と新八と神楽。そして高等部2・Gの阿音と百音だ。

「いい？今回は前回と同じようなキャッチボールで繋ぐ物ではなく、私と百音そして神楽が、こういう風に三角を作るように立ち、この験力のこもった紙に念を送り結界を作り、そこに犬神を閉じ込めるの。問題は絶対に動いてはいけない事。だからあなた達二人が私達を守りなさい。」

「分かった。じゃあ新八は百音を守って、俺が神楽を守る事で」

「おい、私はどうする？犬神に食われると？」

ドドドッ

定春が追ってきた。

「来たわ！念をこめて！あの子の思いをその紙に！」

「定春。」

神楽は、定春に対する思いを、紙に向けた。

「銀さん！」

「ああ、やってやるぜ。」

ダッ

定春に向かう銀時と新八。しかしそれは、とても困難な事だった。何せ今の定春達は政宗やルーク達と共に戦っても、倒せなかった。それを二人だけで対処するのはとても難しい事だ。しかも結界の中から出ない様にだ。神楽達に襲い掛かるのならば、銀時達は必死で止めたり、自分から罔になったりもした。

「ドゴッ」

「うつ！」

ドシャアア

「新八！」

「動かないで！結果がペアになるわ！」

新八は、定春に吹き飛ばされ、地面にめり込む

「く、新・・・八。」

銀時も、先程エステル達が治療したばかりだが、体が傷だらけだ。

「後、もう少し。もう少しで結果が。」

ゴッ

定春が銀時達に向かって突っ込む。

「くっ！」

銀時はふらふらになりながらも、木刀を構える。しかしあの強烈な攻撃では、次の攻撃で倒されてしまいそうだ。

「銀ちゃん！」

その時

ダッ

定春と銀時の間に割り込んで来た男がいる。

「七・・・花？」

「・・・。」

七花の目は鋭い。

ダッ

「七花！？」

「全力でお前を倒す。」

「！！！」

その言葉に、銀時達は驚愕する。

「やめ・・・てくれ・・・七花・・・さん。」

「お前の全力の技を喰らったら、そいつは！」

「やめるネ！」

しかし、その言葉を聞かず

「虚刀流。『飛花落葉』！」

ドッ

定春の体に、張り手をする。

ドサッ

「！！」

定春は倒れた。

ボウッ

その直後、結界が完成して光が現れ、そして消えた後そこには、元の定春の姿があった。

「定春！」

神楽は定春に駆け寄った。それを見た銀時は、静かに眠りについた

その頃

「ゴムゴムのピストル！」

「コーカスシュート！」

ドッ

湖へと向かうルフィ達、その後ろにはチョッパーが追ってきている。

近くには官兵衛達がありその後ろにはドレークが追っている。

「もう少しで湖だ。」

「もてよ。俺の足。」

ホーキンスとサンジが言う。

しかし

ドゴッ

「ぐあっ！」

ドサッ

チョッパーの腕が当たり、ウソップは吹き飛ばされた。

「ウソップ！」

ルフィが立ち止まり助けに行こうとするが

「止まるなルフィ！」

「！！」

「ここで、止まったらやられる！俺に構わず湖へ！」

「・・・くっ！」

ダッ

ルフィは再び走り出す。

「チョッパー。見えるか？ルフィが・・・お前の・・・ために・・・必死に・・・頼むから・・・元に・・・戻ってくれ。」

聞こえるはずもないチョッパーに向かって、ウソップは語りかけ、ウソップは気を失う。

「くっ！」

「ユーリ！」

一方、ユーリも腕が傷だらけだ。

「俺も・・・ここまでのようだ。官兵衛！ホーキンス！絶対に湖まで行けよ！途中で倒れんな！」

「もちろんだ。」

「すまん！」

ダッ

官兵衛とホーキンスも走り出した。

「ルフィ見ろ！湖だ！」

目の前には、湖がある。

「よし！チョッパーを湖に。」

ボゴッ

「うわっ！」

チョッパー達が追いついてしまった。

ブオオオオオ

ギヤオオオオオン

二人の雄たけび。しかしそれは、どこか悲しさがある。

「チョッパー。もう少した。」

「ドレーク。すまんな。」

ドゴッ

「はっ！」

チョッパーのパンチが来たが、ルフィは寸でで避ける。
ガッ

「はあっ！」

ドレークの攻撃を、官兵衛が避ける。しかし二人共回復をしているとはいえ、やはり、ダメージはまだ残っており、動きが鈍い。

ドガッ

「ぐっ！」

「ぐあっ！」

ドサッ

「ゾロ！サンジ！」

チョッパー達の攻撃により、ゾロとサンジは立ち上がったが、ふらついている。

ガアッ

ドレークの牙が官兵衛に襲い掛かるが

ガキン

「ホーキンス！」

ホーキンスが剣で、防いだ。

「お前！」

「安心しろ。」

ガブッ

「くっ！」

ホーキンスの肩に、噛み付いてきた。

「どおりやあ！」

ドッ

官兵衛が、鉄球で攻撃をして、噛み付くのをやめさせる。

「しっかりしろ！」

しかし肩には傷がない。

「まだ一つ残っていたが、それももう。」

身代わりとなる藁人形がさっきので最後のようだ。

ドゴッ

「ぐっ」

ドサッ

「ホーキンス！」

吹き飛ばされたホーキンス。

「ルフィ。・・・チョッパーを湖に投げ込んで来い。」

「俺らの事はあんま気にすんな。」

ゾロとサンジの言葉で、ルフィはチョッパーに駆け出す。
ダッ

同じく、官兵衛も駆け出した。
ゴッ

途中で何回も攻撃を受けるが、二人は走る。そしてチョッパーとドレークの後側、森の方に回り込んだ。

「チョッパー。今元に戻す。」

「ルフィ！」

ルフィの頭の中で一瞬チョッパーの声が響いた気がした。

「ドレーク。あの日の約束今ここで。」

『大丈夫か？官兵衛。』

官兵衛も頭の中で一瞬ドレークの声が響いた気がした。
プウッ

「ギア3」

ルフィは右腕を膨らまし

「行くぞ。」

官兵衛も、攻撃の準備をする。チョッパー達が攻撃する準備をしかけたが
スッ

「「えっ？」」

二人は動きを止める。まるで自分から攻撃を頼むように

「チョッパー。」

「ドレーク。」

キッ

二人は覚悟を決める。

「ゴムゴムのギガントピストル！」

「災い、転じて！」

ドゴツ

ルフィの巨大な腕によるパンチと、官兵衛の、鉄球を中心に自身も縦方向に回り、突撃により、チョッパーとドレークは

バツシャアアアン

湖に落ちた。そしてルフィと官兵衛は

「うわああああ！！！」

「何故じゃああああ！！！」

勢い余って、自分達も湖の真上に移動し、落ちてしまう。
ポスン

「大丈夫か？ルフィ」

「黒田先輩も大丈夫ですか？」

チョッパー達を引き上げるために来た、大とシャイニンググレイモンとトーマとミラージュガオガモンに助けられた。

「ふう。助かったぜ大。あつ！そうだチョッパーは！」

「ドレークは！」

「安心しろ。すぐに助ける。」

バシャツ

元の姿に戻り、沈んでいたチョッパー達だが、チョッパーは大達に、ドレークはトーマ達に引き上げられた。

「今連絡が入って。ホグバツクを捕まえ、定春も元に戻ったようだ。」

「

「本当か！」

「よし。」

二人は、まだ目が覚まさない。チョッパーとドレークを見る。

「やったぜチョッパー。」

「約束を果たしたぞ。さあ帰るかドレーク。俺達の居場所に。」

ルフィ達は、クロスオーバー学園に向かって飛んでいった。

取り戻す友（襲撃編）（後書き）

作者「今回は襲撃編のラストです」

銀時「あいつら取り戻したけど、まだ終わらないのか？」

作者「まあ少し後日談っぽい事をします。」

第三十四話 後日談と白い花 (襲撃編) (前書き)

作者「今回で、襲撃編のラストです!」

第三十四話 後日談と白い花（襲撃編）

翌日、町の襲撃事件のニュースが報道された。襲撃を計画した張本人ザビーと、十数年前の、拉致監禁事件の犯人で、裏で荷担していたホグバツクの他にも、自らの意志で襲撃に参加した信者も逮捕された。

「何だよこれ、俺達の事全く出てねえじゃん。必死に戦ったのに」そのニュースを見ていた銀時が呟く。銀時はあの後エステル達に治療されたが、まだ完治していない所もあり、その証拠に右腕に包帯が巻かれている。そのニュースではクロスオーバー学園やシスター達の事は『被害に会った民間人』という事以外出ていない。

「しかたがないじゃないですか。まさか強烈な宗教団体とマッドサイエンティストを倒したのが、近くの学校の生徒と教師と、寺のお坊さんと神社の神主とシスターだって言うのなんて普通は考えられないですよ。ダオス理事長もあまり注目されないようにって思ってた秘密にしておいて言われたでしょ？」

新八が言う。ここは、クロスオーバー学園の学生寮だ。実は、先程定春が目覚まして、定春が目覚めるのを寝ずに待っていた神楽も気が緩んだのか、定春にご飯を与えてすぐに、定春の体の上で寝てしまったのだ。

「それにしても、定春後遺症がなくてよかったですね。でもチョッパードレーク先輩はまだ眠ったままだし」

「まっ、すぐに起きるだろ。にしてもあの時はヒヤリとしたぜ。」

「何があっただんだ？」

近くにいたとがめが聞く。

「とがめさんよお。お前の恋人が容赦なく、定春に張り手をくらわせた時はヤバイって思ったぜ。」

「そうですね。虚刀流って全力でやったら、人を斬っちゃう流派ですし。」

実際神楽も、七花の事を邪険で見ている。いくら足止めのためとは言え、何の躊躇もなく、人を斬り殺す流派の技を食らわすのは言う事だ。

「?おかしいな。虚刀流の技で全力でやったら、あの犬は今は血染めだったが。」

「怖いわ。」

「それで、技の名前は聞いたか？」

「えっ?確か飛花落葉って。」

銀時の言葉に、とがめは一瞬驚き、そして微笑んだ。

「何だ。あいつ、少し前ならあの犬でも敵ならば、躊躇なく斬るのだが、変わったのだな。」

「えっ?」

「飛花落葉と言う技は、虚刀流の中で唯一足止めのための技だ。つまり七花は手加減してたのだ。」

「ああ、なるほど。」

とがめの説明に納得した銀時と新八だ。

「くうくよく眠ったね。」

神楽が目覚まし起き上がる。

「くうん。」

定春が、顔を近づける。何故か少し寂しそうだ。

「どうしたネ?ひよつとしてあの事を?」

定春は自分が神楽達を傷つけた事を気にしているのだろう。

「心配いらないネ!このくらいの傷いつもの事アル!」

そう元気に、笑顔で神楽は言う。

「それに。」

神楽は、定春の頭に飛びつく。

「定春が戻ってきてくれて本当に良かったネ!」

「わん!」

定春は嬉しそうに吼えた。

一方、クロスオーバー学園

「ふう。これでいいかな。」

金鎚を持ったボッスンが、先程まで自分達が修理していた倉庫を見る。

「助かったぜスケツト団。悪いな手伝わせちまって。」

長谷川が言う。

「いいつて、いいつて。俺達に出来る事ならやりますから。」

「せやな。」

ボッスンとヒメコが言う。この倉庫は昨日の襲撃で一部が壊れたのだ。

「そういえば、チョッパ達まだ目を覚ましてないのか？」

弦太郎がスイッチに聞く。

『定春は目を覚ましたが、二人はまだ目を覚ましてないらしい。直に目を覚ますと思うが。』

「そういえば、さつき園芸部の皆が花壇に行ったが、何をしにいったんだ？」

ボッスンが言う。

「そりゃ、あれやろ？花や野菜が無事だったか調べるため？」

一方、花壇では

「よかった皆無事で。」

ソフィが花を見つめて言う。

「ありがとな、ソフィ、エステル。花を守ってくれて。」

バアルモンが言う。

「いいえ。私達に出来る事をしただけですから。」

「そういえば、あの花がもうすぐで咲くと言ってなかったか？」

小十郎が言う。

「はい。今夜咲きそうです。」
エステルが言う。

その頃、クロスオーバー学園学生寮では

「あれ？・・・ここって？」

チョッパーが目を覚ました。チョッパーは今自分の部屋のベッドで眠っていたのだ。

「そうだ・・・俺、ルフィ達に・・・。」

チョッパーは気づいているのだ。自分がルフィ達を傷つけてしまった事を。

ガチャッ

パシャン

「えっ？」

チョッパーがドアの方を向くと、ルフィとウソップが立っていた。足元には水が入っていた桶が、転がっている。さっきの音は、桶を落とした音だったのだ。

「チョッ・・・パー？チョッパー！」

「目を覚ましたー！！」

ガシッ

ルフィとウソップは嬉しさのあまりチョッパーに抱きついた。

「あ、ルフィ。ウソップ。」

「良かった！本当に良かった！」

「全くよ！心配かけさせやがって！」

そついう二人の目には、涙がこぼれている。

「ルフィ・・・俺。ルフィ達を。」

「あつ！そうだ！ゾロやサンジにも言わないとな！」

「サンジ！飯作ってくれ！チョッパーが起きた！」

ダッ

そういつて、ルフィとウソップは部屋から出て行った。

「あ。」

「ったく。少しは静かにしてろ。」

次に入ってきたのはゾロだ。腕には包帯が巻かれている。

「ゾロ！その腕！」

「んっ？ああ気にすんな。これくらい。」

「ごめんな。俺のせいで。」

「お前のせいじゃねえ。俺が未熟だったただけだ。」

「でも！」

パスッ

「うわっ」

ゾロは近くにあったチョッパの帽子を、チョッパに被せた。

「謝んなよ。お前が帰ってきた。それでいいじゃねえか。本当に良かった。」

ゾロは静かに言う。

「チョッパ！何が食いたいんだ！？わた飴か？肉か？」

「あつ。ルフィ。」

「んっ？」

「ありがとう。」

チョッパは満面の笑みで言う。

「シシシ。気にすんなって。」

一方

「迷惑をかけたな。官兵衛。」

ここは、ドレークの部屋。ドレークも目を覚まして、近くには官兵衛がいる。

「気にするな。小生はただあの日の約束を果たしただけだ。」

「そつだな。・・・だが、俺はまた同じ過ちを繰り返し。」
スッ

ドレークの頭に官兵衛は手を置く。

「それ以上言うな。小生はお前が戻ってきて本当に良かったと思っている。」

「官兵衛。」

「それじゃあ。小生は少し外に出るからな。」

ガチャ

そう言つて、官兵衛は部屋を出た。

「もう、こんな事が起きないようにしなくてはな。」

ドレークは、ある決心を固めた。そしてドレークは気がつかなかった。官兵衛が部屋の外で泣いていた事を

一方、学生寮の近くでは

「それにしても、まさか手前がお咎め無しとは。」

「別にいいだろ？アンタは、あの計画に反対して、しかも俺達を助けてくれたし。」

「にしても、まさかアンタがウチの学校の教師になるとは」

宗茂と政宗とユーリが喋っている。その後、信長校長の提案で宗茂がクロスオーバー学園の教師になるらしい。

「そつえば、トリコ殿と言う方も復帰するらしいですぞ。あなた方の副担任に。」

「マジかよ。つーか俺らの副担つてマリクじゃねえのか？」

「何でも、マリクは仮の副担だったらしいぜ。」

「それにしても、寮は随分と騒がしいですな。」

「ああ。何でもチョッパー達を助けた事と、ザビーとホグバックに勝った事を祝つてのPartyをするらしいぜ。まっ後で俺とユーリも料理を作るが。」

「サンジや、エミルのような料理が得意な奴や本物のシェフの小松が作るからかなりいい出来に」

そう話していると

「政宗君、ユーリ君、立花さん！」

新八とジーニアスが走っていた。

「どうした新八、ジーニアス？」

「ね、姉さんと妙先輩が、料理を作ってくるって！後ナタリア先輩も！」

ガキン

その言葉に政宗とユーリは固まった。あの三人が作ったらそれこそ化学兵器物体X。ムドオンカレーの何十倍の威力だ。

「やべえよ！あんなん食わせたらチョッパ―達また意識失う！」

「誰かが、アレを処理しねえと！」

二人がそう言っていた時に

「あれ？どうしたんだ二人共？」

現れたのは、陽介とゼロスと近藤だ。

キラッ

二人はある事を思いついた。

「あのよ。お前ら？」

「少しいいか？」

その数分後、学園の調理室で三人の悲鳴が聞こえたのは言うまでもない。

そして、夜。

学生寮食堂

「ええ〜では。チョッパ―、定春、ドレークが無事帰還した事と、あのインチキ宗教とマッドサイエンティストをぶっ飛ばした事を祝して」

『かんぱ〜い！！』

銀時の言葉を合図にパーティーが始まった。テーブルにはサンジ達を作った料理が並べられている。

「うめえ！これうめえぞ！」

「ありがとうございます。まだまだありますから。」

早速料理を食べたルフィに小松が言う。

「うめえな。これ！小松の料理と同じくらいうめえ！」

「ありがとな。まだまだあるぜ。」

トリコとサンジが話す。

「キラー。食べる時くらいマスク外せよ。」

「それは無理な質問だ」

スティック状の野菜を穴に差して食べるキラーにキッドが言う。

「ヨホホ。流石ですね。星さん。アプーさん。」

「へっ。これくらい朝飯前よ！」

「聞いてけおらっち達のミュージック！」

音楽教師のブルックと、星とアプーがデュエットして演奏をする。

「おい！チヨッパ！お前も来いよ！」

「おう！」

チヨッパ！達も向かう。

にぎやかなパーティーが続く中

「あの。皆さん。少ししたら、一緒にある場所に行きませんか？」

エステルが言う。

「ある場所？」

数十分後

エステル達園芸部員に連れられて来たのは学園の花壇の前だ。

「一体何があるんだ？」

「それは見てのお楽しみです。」

花壇には、白い蕾の花が何本かあった。

「それって。月雪花の花だな。」

アスベルが言う。

「うん。今日は満月だから。」

空を見上げると、満月が煌々と照らしていた。

そして

フワァ

「あつ。」

月雪花の蕾がゆっくりと咲く。まるで雪のような花弁だ。そして

コオオオ

まるで光に照らされた新雪のように花が輝いた。そして

コオオオオ

月雪花は白い粒子のようなものを飛ばした。

「スゲエ。」

政宗は思わず呟く。

「そういえば、月雪花の花言葉って『友との強い絆』って言う意味らしい。」

アスベルがそう言う。

「友との強い絆。」

誰かがそう呟いた。月雪花の粒子が飛ぶ中、そこには確かに簡単には切れない強い絆で結ばれている者が何人もいる。

第三十四話 後日談と白い花 （襲撃編）（後書き）

作者「次回からは、いつもどおりのクロスオーバー学園に戻ります
！」

銀時「まあそれで、執筆を遅れんなよ。」

作者「分かってるさ！」

第三十五話 野球部事件（前書き）

作者「今回は幸村達野球部とボッスン達スケット団と仮面ライダー部中心の話です。」

第三十五話 野球部事件

クロスオーバー学園の運動部、部室棟にて。

「ギャアアアア!」

響く悲鳴。声がしたのは野球部の部室だ。

「どうしたんだ!」

駆けつけたのは、野球部の部員、幸村、ロイド、ドレークの三人だ。

「なっ!」

「なんと!」

「これは!」

三人が扉を開き、目に入ったのは自分達と同じ野球部の部員が倒れて、白目をむき、口から泡を吹いた哀れな姿と、

「あら、気絶するほど美味しかったのね」

一人満足そうな女子生徒の姿だった。

翌日、スケット団部室。

「集団食中毒?」

声を挙げたのは、スケット団部長のボツスンだ。部室には、副部長のヒメコと書記のスイッチ。スケット団部員兼非公式の部活、仮面ライダー部部員、如月弦太郎と、弦太郎と同じ二つの部活に入っている女子生徒城島ユウキなど。そして、目の前には、ロイドと幸村がいる。

「ああそうなんだ。」

「あれは、さすがに」

「一体何食ったん?賞味期限一ヶ月過ぎた飴とか?」

「いや、実は」

ロイドが事件について話す。

事件について話す前に、クロスオーバー学園野球部について紹介しよう。野球部はクロスオーバー学園が創立する時からあった部活だ。

しかし数年前までは、あまり強くはなかったのだ。

しかし数年前に別の部活の顧問だった武田信玄が野球部の顧問になつてから野球部は徐々に力をつけ、数ヶ月前にはある強豪校に勝つたのだ。改めて、事件について話そう。事件は野球部の部活が終わり、ロイド達が整備をしていた時に起こった。その時、野球部に一人の来訪者が現れた。

「これ、調理自習の時に作った、卵焼きです。よかつたらどうぞ。」
そう、それはブラックカオス料理人の一人志村妙だった。（他は、リフィル、ナタリアなど）

そして、野球部員達はその卵焼きならぬ、可哀相な卵を食べてしまった。その瞬間部員達は悲鳴を上げ倒れてしまい、ロイド達はその場に駆けつけたのだ。その結果。志村妙作、卵焼きを食べてしまった部員は全員病院送りとなった。

「あの人の料理は確かにな・・・。」

事件のあらましを聞いたボッスンは冷や汗をかきながら言った。

「俺、入学して妙先輩とナタリア達とダチになった時に、あいつらの料理を食べてけど、気を失った。」

弦太郎が言う。

「あの料理には、悪魔達も逃げ出す程の威力があるわ。」

そう言うのは、仮面ライダー部の一人、野座間友子だ。

『実は以前、賢悟の許可を受けてカメラモジュールで調べてみたが、解析不能だった。』

スイッチが言う。

「ルフィと神楽とボニーの大食トリオとトリコ先生が一度食べた事があるんだけど、全員気絶したらしいよ。」

コウキの顔色が青い。

「ほんまあの人の料理はどないなつとんねん。」

ヒメコがため息を言う。

「うん。しかも運が悪い事に、二週間後にある高校と練習試合があ

るんだ。急にやめるなんて言えないし。」

「しかし、無事なのは、某とロイド殿とドレーク先輩だけなので。」

「なるほど、つで俺達が一時期、野球部員になってその練習試合に出ればいいのか。」

「ああ。ドレーク先輩は今、手伝ってくれる人を捜している。頼む、皆。力をかしてくれ。」

ロイドが辛そうに言う。

「いや、当然受けるぜ。なあ？」

「ああ！ダチのピンチだからな！」

弦太郎が力強く言う。

「あ、ありがとう皆！」

「感謝するでござる！」

二人は嬉しそうだ。

「ほんで、対戦相手はどこやねん？」

ヒメコが聞く。

「あ、ああ。球王高校だ。」

『球王高校。確かこの辺りでは最強と言われ、何度か甲子園に出場した程の名門高校だな。』

スイッチが相手の高校についての情報を言う。

「ああ。かなり強いよ。でも負ける気で挑まないさ。」

「その通りでござる！では某達は別の所で協力してくれる方を捜すでござる。」

そう言つて、二人は部室から出た。

「それにしても、間の悪いタイミングで食中毒事件が起きちゃったんだな。」

「そうだな。でも、あの卵焼き食べないと何だか妙先輩にボッコにされそうだしな。」

「せやな、あいつらも嫌々食べたのかもな。」

『いや、そうではないらしい。』

スイッチが異議をとねえる。

『何でも、志村妙の話では、野球部員達は、進んで食べたらしい。まるで卵焼きが部員達の口の中に自分で入ったようだったと。』

『いや、それって志村先輩の思い込みじゃないのか？』

ボッスンが言う。

『まあ確かにその可能性は高い。少しばかり気になる事があつてな。』

『気になる事？』

『ここ最近、野球部に関係する事件が多発しているんだ。』

そう答えたのは、弦太郎達のクラスメイトで仮面ライダー部の一人、歌星賢悟だ。

『四日前、野球部近くの小屋で火事が起きた。火はすぐに消し止められたいたからよかったが、一步遅ければ、野球部の部室にも燃え移り、用具が焼かれた可能性がある。火元はライターで放火と考えられるが、犯人を見たのは誰もいない。三日前には、野球部の練習中に陸上部の鉄球が不可解な動きをして野球部員の一人が当たりかけた。他にも鞆に入つてあつたグローブが焼却炉の近くで発見されるなど、様々な不可解な現象が起きた。』

『ひよつとしてそれって。』

ユウキが言う。

『藤崎。この事は俺達に任せてくれないか？』

『まあ。スケツト団の依頼は野球部の助っ人だ。それはお前ら仮面ライダー部に任せる。』

そして翌日

『皆、忙しい中良く来てくれた。これから二週間我らクロスオーバー学園野球部員として、特訓をする。心してかかるように！』

『はい！』

集まったのは、依頼されたボッスンと弦太郎の他に、政宗、小十郎、新八、ルフィ、佐助だ。

「政宗殿。片倉殿、感謝いたす。」

「HA！気にすんな。」

「俺は政宗様と共にだ。」

「ルフィとロイドもありがとな。」

ロイドが言う。

「いいって、いいって！」

「今回の事件は、僕の姉上が原因ですからね。」

ちなみに、今回の騒動の発端となった、妙は反省の色は全くないらしい。

「つで何で俺も一緒にいるんだ？」

銀時が言う。

「さあ？」

佐助が言う。

そして、野球部の特訓が始まった。しかしそこはクロスオーバー学園。普通では無い。例えばノックでも

「うおりゃああ！」

ブンッ

「お前！ボールが炎を纏って打たれたけど！しかも通りかかった官兵衛に当たってる！」

「官兵衛！！！」

武田信玄が、打つと何故か炎を纏ったり

バキッ

「あつ！すまねえ新八！」

「ああ。こんなに粉々になって。誰か接着剤持ってきて来い！」

「テメエは眼科に行ってきて来い！！誰が眼鏡だ！」

キャッチボールの時ボッスンが誤って、新八の眼鏡にボールを当てたり

「伊達政宗ええええ！！！」

ガキン

「HEY！三成！テメエなんでここに！？」

政宗が三成と勝負したり

どおりやああ！

ブルン

「今度は、ボールで竜巻が出来ちゃったよ！しかもまた通りすがりの官兵衛が」

信玄が投げたボールが小さな竜巻を起こしたり
ビュン

「ゴムゴムの風船！」

「ルフィ！それ跳ね返すんじゃなくて受け止めて投げろ！」

ルフィが、ボールを跳ね返すなど、様々な事があったが、それでも弦太郎達は着々と力を着けていった。

「本日はこれまで！」

『ありがとうございます！』

練習試合が明日となった日の部活終わり。全員整備をした後、各々帰る準備をして行く。

「明日がついに、試合ですね。」

新八が言う。

「ああ。良い試合にしたいよ。」

ロイドが言う。

「今日は速めに切り上げて、明日に備えてゆっくり休めてさ。」
政宗が言う。

そして、弦太郎達はそれぞれ、寮に帰ったり、家に帰ったりして、ボッスンも家に向かってたが

「あっ！いけね。部屋にグローブ忘れてきちゃった。」

ボッスンは急いで、学園に向かい部屋に向かっていったが
ブンツブンツ

「んっ？」

何かを振るような音が聞こえた。あたりは暗く、人の姿は見えない。

「ま、まさか。無念の思いで死んだ野球部員が？」

ボッスンはおそろ、おそろ部室に近づく。そこには

「ふんっ！ふんっ！」

幸村が一人素振りをしていた。近くには少し汚れたボールがあるため、投げ込みもしていたのだろう。

「幸村？」

「むっ？佑助殿ではござらぬか？何故ここに？」

「いや、グローブ忘れてよ。それよりお前帰ったんじゃ？」

「いえ、もう少しばかり練習をしたくて」

そういえば、最近幸村が寮に帰るのが遅いと弦太郎が言っていた事を思い出すボッスン。

「ひよっとして、ここ二週間ずっと？」

「そうで、ござる。少しは皆の役に、お館様の役に立ちたいため。」

「本当に幸村って、武田先生に憧れてるんだな。」

「当たり前で、ござる。」

幸村は素振りをやめる。

「某は、小学生の頃に両親を亡くしていて、そのためお館様が某を育ててくれたでござる。厳しくも優しく、その背は大きくて、某はお館様に憧れを持ったでござる。お館様には感謝しているでござる。だからこそ、某はお館様のために勝ちたい。もちろん野球部のためにも、力をかしてくれた佑介殿達のためにも。」

その目は輝いていた。

「ありがとな。でもよ。今日は早く帰って休んだ方がいいって。明日筋肉痛になって、武田先生に殴られても知らねえぞ。」

「それで、ござるか。では」

幸村は、バットなどを片付ける。ボッスンもそれを手伝い。途中まで一緒に帰った。

「じゃあな。明日頑張ろうな！」

「うむ！」

二人は分かれた。

そして、試合当日。場所はクロスオーバー学園近くの球場。政宗達は試合の準備をしながら、相手の球王高校の選手の様子を見てみると、何やら余裕の笑みを浮かべていた。

「なめられているな。」

政宗が言う。

「俺達は、何やら弱小と言うイメージがあって、前の強豪校に勝った事はまぐれだったと言われている。」

ドレークが説明した。

その後、信玄から集合の合図が出て、政宗達は集合した。

「よいか！この試合勝ちに行くぞ！」

『おお！！』

「銀時！掛け声を！」

「へーい。じゃあ行くぜ。」

政宗達は円陣を組み

『掴むぜ！勝利を！野球部！』

「つて。それ仮面ライダー部のキャッチフレーズだろうが！」

新八の突っ込みが響く。

一方、応援席では

「いつ始まるんですか？」

「今、向かい合って並んでるから、もうすぐだと思うよ。」

こなゆきとしいなが応援に来ていた。球王高校の応援席には少ないが十数名程来ていた。しかしこちらは

「やっちまって下さい！筆頭！」

「真田の兄さん達もやってください！」

政宗の舎弟四人の熱気が始まってないのに高ぶっている。少なくとも球王高校の応援よりは熱い。クロスオーバー学園の応援席にはし

いな達六人の他に

「弦ちゃん頑張れ！」

「行けー！ボッスン！」

『やれ野球部。』

スケツト団の面々と賢悟がいた。しかし賢悟は椅子に静かに座っている。

「俺の読みが正しいなら、この高校に」

そう呟いた直後

「プレイボール！」

試合が始まった。先行はクロスオーバー学園で、出塁はしたが、点
は取れずにチェンジとなり、今は球王高校の攻撃だ。

（クロスオーバー学園だか、何だかしらねえけど。）

球王高校の一番のバッターが心の中で呟く。

（何で俺らが、こんな弱そうな奴らとやらないといけねえんだ？ピ
ッチャーは？伊達？しらねえよ。あんな玉。すぐに場外へやってや
るよ。）

心の中で完全になめている。

一方の政宗は、目を鋭くさせ、構えてボールを投げた。

ドゴオオオン

何と言うか、普通の野球ではありえない音だ。簡単に言うと、政宗
の投げたボールは雷を纏ってバットを焦がし、キャッチャーである
小十郎のグローブに収まったのだ。

「た、タイム！」

審判が慌ててタイムをする。

「ちょ、さっきのボールなに？」

「俺の必殺ThunderBallだ。」

「いや、技名じゃなくて！なに、あれ！？初めて見たよ金属バット
を焦がす玉なんて！」

「世の中には、不思議な事があるんだ。」

「そんな簡単に解決できる問題じゃないから！とにかくそれは禁止だ。」

「チツ」

「あれ、何か舌打ちした今？」

そんな訳で、政宗が二週間の特訓の内に出来たThunder Ballは禁止となったが、球王高校の選手に戦慄が走った。その後秘策のボールが禁止された政宗だが、普通よりも少し速いストレートを使った。しかし3アウトを取れた所で球王高校は三点も得点を取った。

しかし、次のクロスオーバー学園の攻撃で、クロスオーバー学園はいつもの調子を取り戻し、食い下がった。ボッスンは大きなヒットを放ち、佐助は素早い動きで盗塁に成功し、小十郎は、鋭いヒットを放つ。また、防御の面でも、鋭い当たりが来る事もあったが食い下がる。新八は的確に状況を把握しパスをし、ルフィは身軽な動きでボールを受け止めるなどをした。もちろん幸村達、元々野球部の面々も活躍をする。幸村は力強く打ちホームランを放ち、ドレークはホーム目掛けて鋭い返球をし、ロイドは鋭いヒットを打つなどをし、九回表で、15-14。クロスオーバー学園が一点差で勝っている。

一方、球場から少し離れた場所にて

「そこにおるのだろう。」

信玄が野太い声で言う。

「野球部で起きた数々の事件。それはお主のしわざであろう。何が目的だ！」

その瞬間

ヒュン

「ぬう！」

ドガッ

一方、現在九回裏で、球王高校最後の攻撃だ。政宗が素早いストリートを放つ
カキンッ

ボールが打たれ、それは高くは飛ばず

ゴスッ

「ぐあっ!!」

「政宗様!」

政宗の右肩に直撃した。

「くっ!!」

それでも土方はボールを掴み、ファーストにいるルフィに向かって投げた。

バシッ

「アウト!!」

一アウトを取り、クロスオーバー学園の面々は政宗に近づく。応援席にいる舎弟達も叫んでおり、今すぐにでもスタンドに下りて、バスターを殴りそうな勢いだ。

「ぐっ!!」

「ヤバイな。これじゃあ投げねえな。」

銀時が言う。

「誰を交代につて、信玄は?」

銀時は信玄がいない事に気がつく。

「そつえば、見当たりません。」

「マジかよ。」

銀時は頭をかく。

「先生。誰を交代に?」

新八が言う。

「俺が、決めるのか・・・よし。」

銀時はある選手を見る。

「頼むぞ。幸村。」

「なっ」

幸村が代わりに投げる事になった。

しかし、やはり問題があった。

ガキン

「あっ！」

ヒットを打たれ、バッターはファーストにいる。現在満塁のピンチ。もしここで強い当たりがくれば、クロスオーバー学園は逆転負けとなる。

（ど、どうする。）

打たれれば逆転負けと言う強いプレッシャーが幸村を襲う。そして、幸村は再びボールを投げる。

がきんっ

「はっ！！」

力強い当たり、負ける。幸村の頭にはその言葉が重くのしかかった。

「させるかよ！！」

「！！」

ダッ

センターの弦太郎が粘り強くボールを追う。そしてフェンスによじ登り

「青春んんん！！」

高く飛び

「フルスロットル！！」

バシッ

ボールを受け止め、その足を地に着かせた。

「アウト!!」

審判の声が響く。

「幸村!心配しないで投げろよ!何発打たれようが俺達が受け止めるから!」

弦太郎の言葉で、幸村に重くのしかかったプレッシャーが、軽くなつた。

(そうだ・・・)

幸村は、押しつぶされそうなプレッシャーに忘れかけていた。自分には心強い仲間がいる事を

幸村の目に、いつもの炎が現れる。

幸村は、迷い無くボールを投げる。その後幸村は2ストライク、3ボールをし、最後のボールを投げる。

カキン

鋭い音だが、ボールは、キャッチャーの小十郎の真上に上がりパシッ

(終わった・・・)

「よくやったぜ。」

「アウト!ゲームセット!」

試合が終了した。

ザッ

両チームが整列し

「15-14でクロスオーバー学園の勝ち!礼!」

『ありがとうございます!!』

応援席の方では、こなゆきは嬉しそうに両手を上げユウキとヒメコが抱き合い、政宗の舎弟も喜んでいいる。

しかし、その時

ヒュン

「はっ!」

突然、スタンドにあったトンボが幸村目掛けて、飛ぶ。寸での所で幸村はよけたが、
ガッ

応援席にあった、ライトに当たり、ライトがしいな目掛けて落ちる。

「はっ！」

「しいな殿！」

ダッ

幸村は、疲労の溜まった体に鞭を打ち、応援席に走り

「烈火！！」

ドガガ

ライトを吹き飛ばした。

「しいな殿！怪我は！」

「だ、大丈夫だよ。」

「如月！」

賢悟が叫ぶ。

「おう！」

弦太郎は球場から出る。

球場の外では一人の男が立っていた。服装を見るに野球部員しかし球王高校でもクロスオーバー学園でもないが、デザインにあまり変わりはなく、何人もユニフォームを着ている者がいれば隠れてしま
う程だ。

「お前が犯人か！」

弦太郎が叫ぶと、その男子生徒は振り返った。

「君の事は、友子と協力して調べたよ。」

スイッチが言う

「球峰野空。君はある高校の野球部だった。しかしその野球部はクロスオーバー学園の野球部に破れた。今回の事件の原因はその試合
だろう。」

「ああ。その通りだ。俺の高校の野球部はお前らによってメチャク

「チャにされた。」

野空は睨みつける。

「あの日、俺達は油断はしてはいないが、負けないと確信して、試合をした。だが俺達は負けてしまった。あの後、後輩達は負けたショックでやる気を失せ、野球部に来なくなる奴もいた。監督もシヨックで寝込んでしまい、弱小と言われていた野球部に負けた事で、他の部活の奴らからは冷たい視線を注がれた。もちろんやる気を失せて来なくなった奴はそいつの責任だが、こんな事になったのはお前達のせいだ。」

「それで、クロスオーバー学園の野球部に数々の妨害を仕掛けたと。」

「お前の能力は様々な物を操る能力。それで放火をしたり、鉄球を当てようとしたり」

「んで、あの日、志村先輩の料理を無理やりあいつらに食わせたんやな。」

ボッスンと賢悟とヒメコが言う

「ああその通り。これでお前らは不戦敗。寄せ集めの奴らが集まっても負ける事はないと思ったが。」

野空は、アストロスイッチを握る。通常のアストロスイッチと少し形が違う。最後の一回、ラストワンだ。

「やめろ!!!」

弦太郎の制止を聞かず、野空はスイッチを押し、体は灰色で顔は虫で二本の角を持ったゾディアーツに変身した。ゾディアーツの近くで、野空は繭の様な物に体を包まれ倒れている。

「くっ!」

弦太郎はベルトを巻き、スイッチを差し込む。

『3』

『2』

『1』

「変身！」

「宇宙キターー！！」

弦太郎はフォーゼに変身した。

「仮面ライダーフォーゼ！タイマン張らせてもらっぜ！」

ドッ

フォーゼは、パンチを放つが、腕でガードされ、相手は蹴りを入れるが、フォーゼは後ろに下がって避ける。

「なら！」

フォーゼはランチャーモジュールのスイッチを押し、ランチャーを
発射するが

ブンッ

「うお！」

突然ランチャーが方向を変え、フォーゼの方に向かう。フォーゼは
寸での所で避けた。

「そうだ。こいつ物を操れるんだった。なら」

フォーゼは姿を消す事が出来るステレスモジュールのスイッチをさ
そうとするが

『させるか！』

ブンッ

スイッチが動き、ゾディアーツの手の中に入る。

「しまった！」

その時

「はああああ！！！」

「どりゃああああ！！！」

『！！！！』

ドゴッ

ロイドと銀時がいきなり現れ攻撃をした。突然の登場にゾディア

ツはひるんでしまい、攻撃が当たり

ガコッ

操っていた、二本の角が斬られ、奪われたスイッチも落ちて、フォーゼはすぐに回収した

「ロイド！銀さん！」

「助けに来たぜ！」

「武田のオッサンが行方不明なのもお前の仕業か？」

『くっ！』

「助かったぜ！じゃあ！」

ガッ

フォーゼは、エレキスイッチを差し、スイッチを押し、エレキステイツに姿を変える。

『リミットブレイク』

ビリーザロッドが雷を纏い、フォーゼはゾディアーツに向かって走り出し

「ライダー100億ボルトブレイク！」

ドガッ

その攻撃で、ゾディアーツは倒れた。フォーゼがもう一回ゾディアーツのスイッチを押すと、スイッチは破壊された。

その翌日、スケット団の部屋にて

「あの、ゾディアーツは一度破壊された、ゾディアーツのスイッチを元に作った複合版のようだ。」

賢悟が野空の持ってたスイッチの説明をする。

「そついや、前に戦った奴と姿が同じだったな。色は違うけど。」

「だが、本物よりも劣化しているせいか、人間など生物は操れないようだ。」

「でも、何故その力を試合の時に出さなかったんだろう。それなら勝てるはずなのに。」

友子が疑問を口にする。

「確かに。政宗君の腕に当たったのもただの偶然だしね。」

ユウキが言う。その後、ひよっとしたら政宗の腕にボールが当たったのはこいつのせいではないのかと思い、嘘を見抜くことが出来るシスターを連れてきて聞いた所、何もやっていないようだ。

『それと、野空が起こした事件も不可解な所がある。もし部室を焼くつもりなら夜にやった方が消火されるのが遅い。鉄球の場合も、野球部員から少しずれた場所に落としたし、グローブは焼却炉の近くに落としただけで、燃やしてもいない。中途半端な所で終わっている。』

スイッチがいる。

「そりゃ簡単な理由だろ！」

弦太郎が言う。

「あいつは、野球が好きなんだ！だからグローブを燃やす事をやめたり、試合に干渉する事もしなくなかったんじゃねえのか？」

「確かに、あいつは少し歪んではいたが、元はと言えば野球部関係で今回の事件を起こしたんだ。まああいつのした事は確かにヤバイが。」

弦太郎とボツスンが言う。その後、野空と幸村達は和解し、次は正々堂々野球の試合で勝つと言ったのだ。

「そつえば、信玄先生ってどこに行ってたんや？少ししたら帰って来たし。」

ヒメコが言う。

その頃クロスオーバー学園の校舎裏では

「協力してくれた事感謝する。」

「いいって事さ。それよりあんたアイツに襲われたけど、本当は返り撃ちにしたんじゃねえの？」

信玄と銀時が話していた。あの時、信玄は迫ってくる岩などをその拳で破壊した後相手を返り撃ちにしたのだ。

「あの者は姿をくらまし、ワシも球場に戻ろうとしたが」

「その時、政宗が怪我をして、代わりのピッチャーを誰にするか悩んでいた所を見てあんたはわざと姿を隠したんだろ？幸村が代わりのピッチャーになる事を予想して」

「あ奴はワシに依存しておるからな。お主も幸村に代わらせた事感謝するぞ。」

「別に、俺はただアイツの方がいいかなって思ったただけだ。」

「ふつ。そうか。」

信玄は少し笑った。

第三十五話 野球部事件（後書き）

作者「敵のゾディアーツの姿はフォーゼ11話に出ていたピクシスゾディアーツの灰色版と思ってください！」

銀時「まあ性格はあんな変態よりは数十倍まともな奴だけだな。そういうラビットハッチに通じるロッカーって何処にあるんだ？」

作者「ロッカーはスケツト団の部室にあります。それでは今日はこの辺で」

第三十六話 銀さんの相談室（前書き）

作者「今回は新しい作品が出ます！」

第三十六話 銀さんの相談室

朝のホームルーム前にて

「個人相談？」

銀時が気だるそうに言う。ここはクロスオーバー学園の理事長室だ。
「ああ。カウンセラーの先生が風邪で休んじまってね。アンタが代わりに相談を聞いとくれ」

お登勢が言う。

「いいのかよ。俺で」

「いいんだよ。生徒の話を聞いて時にはアドバイスをする。まあ中には、先生もいるけどね。」

「にしても、うちの学園でカウンセリングするほど悩む奴がいたのかよ。」

「まあ。どんな奴でも悩みの一つや二つはあるからね。」

「まっお登勢のババアも悩む事はあるしな。」

「シバくぞ。」

そして放課後、銀時は相談室に入り椅子に座った。

「つーか来ないんじゃないかねえのか相談者なんて。」

そう呟いた時

コンコン

相談室のドアを叩く音が聞こえる。

「おっ早速来たな。どうぞ。」

ガチャ

「失礼するアル。」

入ってきたのは、神楽だ。

「おっ銀ちゃんが相談に乗るアルか。」

「まあ色々あつてな。にしてもお前に悩みがあつたとはな。」

「当然ネ！それにこれは私一人の悩みじゃないネ！色んな人達の悩

みネ！」

神楽の目は真剣だ。

「そうか。でっ何だ悩みって？」

「銀ちゃん。売店の特製パン知ってるアルか？」

「ああ。確か売店のオバちゃん特製のパンだろ？トンカツパンとかイチゴクリームパンとか。」

ちなみに、野菜が入っているパンがあるが、その野菜の原材料は小十郎が作った物だ。

「私が悩みなのは！」

神楽は机を力強く叩く。

「何でその特製パンの中に酢昆布パンが無いかと言う事アル！」

「・・・いや。お前確か色んな人達の悩みって言ってたよな。」

「もちろんネ！全国の酢昆布ファンが思ってる事ネ！」

「いやそんなにいねエだる酢昆布ファン。」

「いるアルよ！現に私の立ち上げた酢昆布愛好会全員同じ思いネ！」

「っで？その酢昆布愛好会ってどんだけいるんだ？」

「私と定春アル！」

「いや、結果的にお前一人だけかよ！っかあの犬酢昆布興味ねえと思うぞ！後その相談は売店のオバちゃん達にでも言ってる！」

銀時がそう伝えたのが納得したのか、神楽は部屋から出る。

コンコン

それから数分後、またドアをノックする音が聞こえた。

「どうぞ。」

ガチャ

「おや。あなたが代わりでしたか。」

入ってきたのは、ジエイドだった。

「あんたかよ。そういや教師も相談に来る事があるって言ってたなにしてもアンタが悩みを持ってるなんてな。」

「まあ、一応私も人間ですから悩みの一つや二つはありますよ。」

「まあいいぜそれよりあんたの悩みってのは一体何なんだよ。」

「ええ、実はですね。」
スッ

ジェイドが懷から取り出したのは、緑色の液体が入ったビンだ。
「何だそれ？」

銀時が眉を潜める。

「私が新しく作り出した薬です。実験体となる人がいないのでどうしようかと思いましたが」

コトツ

そのビンを銀時の前に置く。

「よかったら一口どうぞ。」

「いや飲むかよー!」

銀時はビンをジェイドに着き返す。

「何処の世界に危なそうな薬を出されて、『ハイいいですよ』って言うバカがいるんだ!」

「ご安心下さい。ちょっとだけ体に変化するぐらい。」

「いやお前なに言ってるんだよ! お前この間俺が、お前に騙されて飲まされた事あっただろ! あの時メツチャ焦ったわ!」

「何を言ってるんですか。あなたの好みになるようサラサラヘアーにしたのに。」

「まあ確かにそうだけど! あれは元の状態でやってくれよ!」

「・・・はあ。」

ジェイドはため息をつき、ビンを持ち

「分かりました。この薬は黒牙にでも飲ませます。では」

そう言ってジェイドは立ち去った。

「っーか。まだいたのかよあいつ。」

銀時は呟く

（黒牙については里帰り編を読んでください!）

コンコン

数分後、またノックする音が聞こえる。

「どうぞ。」

ガチャ

入ってきたのは、黒髪で、後ろ髪が一本前に出て、顔に泣き黒子がある美青年だ。

「失礼し」

「はい帰ってもいいですよ。」

「ちよつと。待って下さい！」

入ってきたのは、高等部2-Jのデイルッドこと、ランサーだ。

「まだ、相談も何も始まってないじゃないですか！」

「んだよ。黙れやイケメン。」

実はランサーはある呪いにかかった黒子を持ち、ランサーを見た女性は大抵の場合はランサーに惚れてしまうのだ。クロスオーバー学園の女子生徒や女教師のほとんどはその呪いにかからず、普通に接しているのだが、一部のモテない男には憎悪の目で見られてい

「誰がモテないじゃござらあああ!!」

「先生!どうしたんですか!?!」

「いや、何でもない。っでデメエの悩みは何だ?」

「あつ、はい。実はケイネス様の事です。」

「ああ。あのむかつくあいつね。」

ケイネスとは、クロスオーバー学園から少し離れた、政治家や有名な人などの子供が通うエリート高校の教師で、ランサーはそのケイネスに一度命を救われ、ランサーはケイネスに仕えている。銀時はある交流試合であつた事があるのだが、人を見下す様な態度が気に食わず、毛嫌いしているのだ。

「実は、ケイネス様と仲が悪いのですよ。」

「まさか、あれか?ウチに通ってるだけで嫌ってるだけなら、すぐに縁を切れよ。」

「いえ、そうではないのです。理由が分からないのですが少々かみ合わない所が」

「そつか・・・なら一ついえる事がある。」

「何ですか？」

銀時は、ランサーを見て

「黒子を取れ。もしくは俺によこせ。」

「えっ？いや先生。それとケイネス様との仲どういう関係が」

「よっしゃ！なら俺が引きちぎってやるよ！」

「先生！それただだんに先生がやりたいんじゃないですか！」

数十分の格闘の後、とりあえず原因でも探ってそれを改善しろと言
う結果になった。

それから、相談が続いたのだが

「坂田先生」。あたしの薬ちよつと飲んで」

「いやハロルド！俺の事どう見てんだよ！」

「先生！どうして皆マヨネーズの奥深さが分からないんですか！」

「いやお前のマヨネーズ愛が分からねえよ。マヨ方。」

「先生！土方さんの抹殺計画にちよつと手をかしてくれませんかね
！」

「おっ！何だ？」

「総悟おおおお！！！」

「先生！トンカツパン値下げ出来ねえかな！」

「ルフィ。それは、売店のオバちゃんに言え。」

「先生！私の事を受け取って」

「そおい！」（窓から投げる）

「先生。どうやったらヤツフサを召喚できますか？」

「総司。俺、ワイルドの力もペルソナも持ってないから。」

「先生。長政様には笑っていてほしいんだけど、市はどうすればいいの？」

「分かったから！だから黒い手を出さないで！」

「先生！新しい俺のラップを披露しま」

「相談ないのかよ！」

「坂田先生。あなたの血を少し」

「スンマセン！明智先生！あんたがいったらマジで怖いから！全部持ってかれそうだから！」

「先生！先生は宇宙に興味ありますか！」

「ユウキ。相談じゃないだろそれ。」

などといった相談（中には相談では無いものもあったが）を相手にして

「たくよお。まともな相談ほとんどないじゃねえか。」

銀時が帰ろうとした時

コンコン

ドアを叩く音が響く。

「どうぞ」

こいつで最後にしよう。銀時はそう決めた。ガチャ

「失礼します。」

入ってきたのは、金髪に青い目の凛々しい女子生徒。高等部2ー」
のセイバーだ。彼女は女子剣道部の主将でもある。

「セイバーじゃねえか。どうした？」

「はい。」

セイバーは椅子に座り

「実は、切嗣の事で」

「あいつか。」

セイバーは幼い頃に両親を亡くし、祖父母と一緒にくらしていたが、中学の頃に、祖父母が亡くなり、遠い親戚の衛宮切嗣の家に住むことになったのだ。

「アイリスフィールとは仲が良いのですが、切嗣とは仲が悪いんです。言葉を交わした事はほとんどないです。」

「もう仲が悪いつてレベルじゃないな。」

ランサーも同じような悩みを持っていたが、会話をしたことがほとんどないとは、

「私はどこを正せばいいのですか？」

「……。」

少しの間沈黙が続き

「そうだな。」

銀時が沈黙を破る。「取りあえずよ。切嗣に話しかけまくれ。」

「えっ。ですが無視されましたけど」

「なら、今までより数倍話しかける。このまま、黙っているだけじゃ何も変わらないぜ。」

「……。」

「話ができる事で何かが変わるかもしれないと俺は思っぜ。」

「そう、ですか。ありがとうございます。早速試してみますね。」

その後、セイバーは部屋を出た。

「さて、じゃあ俺も」

コンコン

すると、またノックする音が聞こえる。

「まだいたのかよ。どうぞ」

ガチャ

「先生！」

入ってきたのは、新八だ。しかも、何故か慌てている。

「どうした？」

「あの実は、ジェイド先生とハロルド先生と明智先生が黒牙に新しく作った薬を一気に飲ませて」

ゴゴゴ

「黒牙が暴走しました！」

「何、飲ませたんだあいつら！」

その後、政宗達と協力して、数時間戦い、黒牙を元に戻した。

第三十六話 銀さんの相談室（後書き）

銀時「おい。作者」

作者「何だ？」

銀時「お前確か、FATE/ZEROについてってアニメとピクシブ百科事典で、しかも原作は第一巻しか見てないんじゃない？」

作者「次回もよろしく願います！」

銀時「無視すんな！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8202u/>

クロスオーバー学園

2011年12月16日21時51分発行